

まゐらせ度、主人に辭して亡き双親に仕へ參らせ候得ば、黄金の光りをも何かせむ。恐ろしく思ふらみの夢覺めよかしと誠の道を急ぎ候まゝ、無念の齒がみを露はせし我死骸を、今宵の客に見せ下され、かゝる卑しき浮れ女さへ、日の本の志は慙くぞと知らしめ給はるべく候。露をだにいとふ倭の女郎花ふるあめりかに袖はぬらさじ。」これについて、中里機庵は、神奈川奉行松平石見守康直の『外事抄録』及び代官小林藤之助、名主石井源左衛門の『萬延秘聞』とにより、喜遊は萬延元年七月十七日に死んだが、官憲の命で憤死の事情を秘し、遺骸を久良岐郡吉田新田の常清寺に埋め、俗名を「知恵」としたのは、喜遊の名を憚つたものとし、また、喜遊を見たといふ新内喜知與太夫は、名主の書役要吉の談に、喜遊は旗本の生れで實名は間宮春枝、萬延元年四月岩龜樓へ来て、その年の七月に自殺したとあつたといふ。曾我部一紅氏は、「疑はしき喜遊」において、當時の横濱の細見を調査しても、喜遊、伊留宇須はないといひ、その「ふるあめりか」の歌も、永久二年丹波篠山藩士菱田某の手記『傳聞叢語集』には、東京松葉屋の太夫花園が、北奉行井戸對馬等の前で詠んだ歌として「露をだに厭ふ倭の女郎花ふるあめりかになびけとはなぞ」といふのを載せてをり、更に、蒲生重章の『近世佳人傳』

の中には、吉原の遊女で橋本といふのが、さる米國人が妾にしようとするのを拒み、和歌を詠んで意氣を示したが、その歌は喜遊のそれと同じであつたと記してゐる。明治九年刊行、松村春輔『開花小説春雨文庫』は當時のいはゆる實話小説の類であるが、これには『温古見聞叢纂』と同じ喜遊の事蹟を載せ、その辭世の歌を掲げたる後、米國の公使某が、吉原の娼妓櫻木に眷戀して妾にせんとしたが、櫻木が肯じないところから、閑老某に頼み込み、閑老は公使の前を取繕ひ、樓主を呼んで外人の望みに應ぜよと命じたが、櫻木は依然として應ぜず、「ふるあめりか」の歌を詠んで赤心をのべたといふ話を附加して、喜遊のものと同一なれば、全く同吟か、附會の説なるか、いまだ確證なければ因みにこれを記すと註してゐるのを見れば既に早く疑問とせられてゐたことがわかる。淺倉無聲は、この歌は當時攘夷黨の志氣を鼓舞するため、大橋訥庵が偽作したものと、訥庵から直接聞いた人が語つたといつてゐる。『幕末 岩龜樓烈女喜遊』(大東義人)には、喜遊の父は神田柳原の町醫築作周庵で、攘夷派の浪士を匿つたこと、及び切支丹等の嫌疑を以て所拂ひとなり、品川に移つたが落魄し、遂に娘喜遊を佐吉に賣つた。相手の外人といふのは亞米一(米人ホールの商館)の鐵砲火藥輸入主任アボット

で、文久三年十月十日五更自盡したとしてゐる。その後の研究においては、喜遊なる遊女が居つたことについては、だいたひ認められてゐるが、その自刃及び辭世の歌等についての眞相に至つては、依然不明のままに残されてゐる。(異説日本史、傳記、岩龜樓烈女喜遊)

京極院 きやうごくゐん (一九〇五—一九三二) 龜山天皇の皇后。藤原信子。左大臣洞院實雄の女、御母は、從二位藤原榮子。文

應元年十一月、御年十六にして御禊の女御代となり、同十二月從三位に叙せられ、ついで天皇の宮に入り女御となられた。翌弘長元年二月八日立后宣下があつて中宮と稱し、その八月二十日改めて皇后と稱せられた。親子内親王、知仁親王、世仁親王を生まれたが、知仁親王は文永四年二歳にて亡くなられた。世仁親王はその十二月に誕生、やがて皇太子に立たれた。後の後宇多天皇である。文永九年八月九日病を以て、大炊御門の第に崩あり、御年二十八、同日院號の宣下があつて京極院と號し、實雄の山科の山莊の邊りに奉葬、御前僧三人、護摩師一人を侍せしめられた。いまの陵を蓮華峰寺陵といふ。(女院小傳、後宮略例)

京極局 きやうごくのつばね 藤原壽子
京極局 きやうごくのつばね 壬生院

京極御息所 きやうごくのみよしどころ 藤原褒子
恭子内親王 きやうごくのいしんわう (一一五六—一一五七五) 齋院。醍醐

天皇の皇女。更衣藤原鮮子の御腹で、延喜三年、内親王となり、同二月十九日賀茂齋院に卜定せられた(二歳)。在任十三年にして、更衣の卒去を以て、同十五年七月退下し、葛井宮に還り、その十一月八日薨せられた。(皇胤系圖、日本紀略、齋院記)

恭子女王 きやうごくのひめみち 齋宮。村上天皇の皇孫。爲平親王の女。

一條天皇の寛和二年八月八日伊勢齋宮となり、寛弘八年三月二十七日退下せられた。在任二十六年であつた。(日本紀略、貴女鈔、大百科事典)

鏡尼 かがみ 東福門院の侍女。千宗且に入門し、茶道をよくした。(茶人系傳全錄)

卿局 きやうごくのつばね (一一八一—一一八九) 後鳥羽天皇の御乳母。また、卿二位ともいふ。藤原兼子。刑部卿範兼の女。後鳥羽天皇の乳母として宮に入り、その叔父で義理の兄に當る高倉範季の女修明門院重子の生み奉つた順德天皇が皇太子に立たれた正治元年、年四十五で典侍に任ぜられ、この年權中納言藤原宗頼を夫とした。宗頼は正治元年七月に土佐國を賜はつてゐるが、『明月記』にはこれを「華人宗頼給之、新妻之故也」

と記してゐる。後、また正二位權大納言に至つたが、建仁三年正月病歿した。彼女は更に多くの求婚者中より東宮傳で、院の別當であつた藤原頼實と結婚した。頼實と攝政藤原良經とが、各々その女、麗子(陰明門院)、立子(東一條院)の入内を熱望して、自然競争のかたちをとつた時には、局は後鳥羽上皇と良經との間を斡旋して、麗子を土御門天皇の宮に入れ、立子は皇太弟(順德天皇)の踐祚後に入内させることとして、夫の面目を立てたといふ。三浦周行は『歴史と人物』において、彼女について、「上皇の御幼少より御附添申上げて、其の御本性や御趣味を知りぬいてゐた局は、何かにつけ、上皇の御氣色に適ふべき呼吸を心得てゐたのである。別けても、上皇は頗る御精力に富ませられた丈けに、男女の寵人も少なからずあつたことであるが、局は其の御媒介や御世話をして、又無いものとの觀感に預つてゐたやうである。中にも、修明門院は始終上皇の寵遇を専らにせられ、承明門院の寵衰へて御出家遊ばされた後も御情交は益々濃かになりまさるばかり、度々の御遊幸にも大概御同車であつたが、局は女院と從父姉妹同士であつたから、御心安く出入し何かと御世話申上げ、正治二年に雅成親王降誕の折は、局の京極第で御出産になつてをり、建暦元年女院御入内の折も御車後に伺候してゐる。

る。後に、局は遺産を多く女院に譲り奉ることゝしたのを見ると、嘗て猶子としたのではなからうかと思はれる。坊門信清の女西御方はたしかに局が子として院に宮仕へさせたので、其の腹に生み參らせた冷泉宮頼仁親王をも局が鞠養し奉つてゐたのである。丹波局の前身は白拍子の石といふ女であるが、上皇の拔群の寵をうけて元久二年に皇女を生みおとした。殊の外の難産であつたので、上皇も御軫念あらせられたが、如才ない局は車を立て、見舞つてゐる。其の外にも御氣に入りの白拍子の新宅を二條殿の跡に造られた時も、局は其の造作から裝飾まで引受けたことがある。單に女子ばかりではない、頼實の弟で師經の子の家嗣は上皇第一の寵人と呼ばれた程の美少年であるが、それも局の養子であつた。局はまた其の愛嬌を他の女院にも振播いた。八條院は鳥羽院の皇女で美福門院の御腹であつたから、院の御寵愛は格別で、既に女帝に立てられやうとの思召さへあつたと傳へられ、御領は豊かな上に、御長命で、上皇の御慈の深かつた春華院及び兼實の子良輔を御猶子となさせられ、御氣樂に歳月を送らせられたが、局は屢々八條院に伺候して御機嫌を奉伺し、建暦元年、春華院薨去の時の如きも、何くれとなく御世話申上げてゐた。」と評してゐる。先夫の宗頼は院の執事別當であつた

が、頼實は前相國として、別當の首席に列して、院廳下文に署判した。局は院の申次で、上皇の御沙汰は局によつて申出され、また局の女房奉書として出でた。同時に臣下から院への奏聞も一々局の手を経た。この間、院宣を傳へる場合にせよ、また上奏の取次の場合にも、局は頗る意を用ゐ、上皇の觀感を迎へた。従つてその權勢を院中に傾けるとともに、政務に容喙することも自然の數であつた。定家の如き、己れは勿論、その子の爲家も官途に希望を遂げて、局の斡旋に感涙を流した一人である。實宣はその家屋敷を局に贈つたために四人の上臈を越えて藏人頭に補せられ、參議に任じ檢非違使別當を経て納言に昇り、豊後國さへ賜はつたといふ。公清も、教成もまた同じ方法で、參議に任ぜられたといふ。實官實爵に似た弊の行はれてゐた當時としては、これは普通のことである。かくして局は家に素封の富を積んだ。また、五辻殿の院御所の西北に新第を營んで、頼實と同棲した。また、白河中山の第に、上皇の御祈願所を造り、上皇及び七條院の御幸を請うて、堂供養などを行つたこともある。この時、鎌倉にあつては、禪定二品である尼將軍政子が權勢を張つてゐた。偶然にあらはれたこの公武の二傑の對立は、時人の眼には、如何にも新時代の相の如く映つたのであらうか、『愚管抄』はこれ

を評して、「女人入眼の日本國いよ／＼まことゝなりにけり」と云ふべきにや」といつてゐる。『異説日本史』には兩者の交渉を次の如くいつてゐる。「政子の子、歌人將軍實朝は、早熟で十三歳にして妻撰びをやり、兼てから擬せられてゐた足利義兼の女を排して、京都から坊門信清の女を夫人に迎へたが、この女の出京の行装はなかなか華美に浴中をどよめかせ、中山の卿局の邸から發したのであつた。こゝに幕府に對する局の如才なが見られる。また政子が熊野詣のため上洛した時、局は屢々それを旅館におとなうてお取持ちをしてゐる。そして落飾後の女子に叙位することは餘り先例がないのにも拘らず、自ら斡旋して從三位を賜はるやうに計ひ、なほ破格の拜謁のお許しをうけるまで周旋した。ところが、却て政子の方から田舎の老尼のことであるからとこれを御辭退申上げて、勿々に京を離れてしまつた。それでも間もなく政子は從二位に叙せられた。こゝでは、卿局は政子から軽くあしらはれた形である。もつとも、この時は西園寺公經の勅勘赦免のことの直後で、局は幕府に對して些か面目の悪い立場にあつた。西園寺公經は右大將にならうと望んでゐて、上皇もこれに御諒解を與へられてゐたが、頼實からもその子師經に右大將を奏請してゐる。師經は公經よりも下臈であつたが、

上皇は師經の方をお取上げにならうとなされたので、公經は面目を失つて出家して鎌倉へ走り、實朝に頼つた。そこで院では君をおとして將軍に依る不届者と怒らせられて、公經を勅勤せられた。それを實朝は知つて、その無實のことを奏上し、卿局にも當つて來た。すると局はまた騒ぎ出して、上皇を宥め申して、公經の勅勤赦免をとりなし、また師經より先に大將に任せしめられるやうに計つた。このことの裏には、局の冷泉宮を皇位にお即けしようとの運動もあつたやうであり、とにかくこれは局の一生の不覺であつたのである。さきの政子の上洛はかゝる事情の後とはいひながら、局は政子には一目も二目もおいてゐたやうである。後、政子のために冷泉宮の將軍推薦運動もやつた。これは實朝に子になかつたので、その後繼者のことである。しかしこれは蹉跌した。局は西園寺公經のことより外に、それより前延曆寺の堂衆と僧侶の争ひに就いても不手際をやらかした。この時は山門の衆にその名を書いたものを金毘羅大將の脚に踏ませて呪詛されて、氣も狂はしく狼狽し、起請文を認めて衆に渡して、その名をかいたものを取返したりなどしてゐた。然しながらこれ等とても局を蹉躑のまゝに葬り去るやうなことでもなく、一瑕瑾ともいふべきで、先づその全活動は成功とせねばなるま

い。局の政治的運命は、冷泉宮の將軍推薦運動を以て終つた。この運動の不成功であつたことは、局にとつては淋しい前兆であつたらう。それから數年にわたつて上皇の討幕の御密議があつたが、常の御寵は別として、既に局の出る幕ではなかつたらしい。」後鳥羽上皇の御志も空しく、承久三年、上皇の隱岐遷幸を、涙ながらにお見送りした局は、しかしその身は豊かな財の中に埋れて安らかな晩年を送り、七十一歳の時また頼實とも死別したが、なほ四年を生きながらへ、その夥しい領地は、修明門院を始め、一族縁者に分配し、寛喜元年八月十六日、中山の第に逝つた。〔圖北條政子（歴史と人物、異説日本史）

刑部卿局

後嵯峨天皇の宮人。藤原氏。刑部卿孝時の女。掌侍となり、初め勾當内侍と稱し、後、刑部卿局と稱し、覺助法親王、五條院及び一皇女を生まれた。（尊卑分脈、皇胤系圖、諸門跡譜）

恭禮門院

〔二四〇三―二四五五〕 桃園天皇の女御。御諱は富子（初め佐保子）。太政大臣一條兼香の女。御母は、飛鳥井雅豊の女。寶曆元年七月御年九にて女御の内命あり、二年四月攝政一條道香（兼香の子）の意によつて幕府より毎歲米五百苞を上ることゝなつたが、なほ入内の用途が不足であ

玉韞

畫家。一に玉韞に作る。名は豊子。備後の人。八田古秀に學び、山水、人物、花鳥をよくし、筆力勁秀を以て、三備の間に著はれた。（畫乘要略）

玉瀾

〔二三八七―二四四四〕 畫家。父は江戸の浪士徳山氏。母は歌人百合。池大雅の妻。名は町。玉瀾はその號、ほかに松風、葛覃居なども稱した。母に撫育せられ、長じて貧乏畫家池大雅に嫁した。柳里恭に畫法を學び、里恭の號玉奎の一字を受けて玉瀾と號し、よく大雅風の山水花卉を畫いた。また、和歌を冷泉門に學び、遊可の名を貰つたこともある。資性閑靖飾らず、よく夫の行に配し、終日夫妻ともに紙を展べ、墨を舐り、琴酒自ら娛しみ、釜甌塵を生ずるも意に介することなく、藝苑稀に見る好述であつた。山陽は評して、「先生の配玉蘭之と名を齊うし、人これを伯鸞の孟光に比す」といつた。冷泉家に初めて入門した時、洗晒の木綿を著て、片手に魚籃を提げて行つたので、その名のみを聞いてゐた家人が驚いたといふ話などが傳へられてゐる。天明四年歿、年五十八。〔圖百合（近世畫譜、近世婦人傳、扶桑畫人傳）

潔子内親王

齋宮。高倉天皇の皇女。宮人按察典侍の御所生。後鳥羽天皇の文治元年十一月五日伊勢齋宮に卜

るから、四年十二月にはまた道香の意によつて幕府より御料を上り、五年四月にも再びこれを上つた。六月、幕府は所司代酒井忠用をして女御の本殿、別殿等の修理を監せしめ、十月に至つて成つた。ついで傳奏柳原光綱等の建議によつて、女御湯沐の邑として二千石の進獻があり、後その邑に災ひが起つたので、再び幕府から米銀を進獻することゝなつた。此の年十月從三位に叙せられ、十一月入内、女御となり、九年三月三宮に准せられた。桃園天皇は學問に御勵精あり、清原宣條（竹内式部の門人）を侍講として、國史神書の講説を聞召されたが、關白近衛内前等は幕府を憚り、天皇の國史神書等の御覽を停め奉り、關係者を處罰した。いはゆる寶曆（八年）事件がこれである。寶曆十二年七月天皇は聖算二十二で崩せられ、中宮は御年二十で早くも寡居の御身となり、明和四年九月新殿に遷御、八年五月皇太后と稱せられ、ついで恭禮門院の號を進められ、幕府より御増地千石を加へ、三千石を領せられた。寛政七年十一月三十日五十三歳で崩せられた。泉涌寺に奉葬。嘗て腸の御疾に、朴の葉を煎じて試みられ、遺言にわが墓所に朴を植えて諸人の求めるに任せよとあつたので、この後、泉涌寺に、同病のものが來て朴の葉を求めるときには、御墓の守部がその度にこれを與へたといふ。（歴朝坤

定、同三年伊勢に赴かれ、建長九年一月(後鳥羽天皇讓位)十日退下せられた。在任十四年である。(百鍊鈔、二代要記、類聚大補任)

清子内親王 きよこないしんわう (一二五二—一五三三) 後陽成天皇の皇女。聖興女王の御妹。文祿元年四月誕生、女二宮と稱せられた。慶長六年十一月内親王宣下、九年七月右近衛中納言藤原信尚に降嫁、教平を生まれた。寛永二年十月三宮に准じ、封三千戸を賜はり、延寶二年十二月御年八十三で薨せられた。大鑑院明極文致と號し、二尊院に葬つた。(野史)

淨庭女王 きよにわのひめみこ 齋宮。神王の女。光仁天皇の寶龜六年四月二十九日伊勢齋宮となり、天應元年四月(天皇讓位)退下(神祇辭典)せられた。傳不詳。(神祇辭典、大百科事典)

清元葉 きよもと (一二五六—) 清元節の名家。三世延壽太夫の女で、四世延壽太夫を婿とした。明治三十四年五月二日歿した。(大日本人名辭書)

清原春子 きよはらのはるこ 淳和天皇の宮人。右大臣夏野の女。明子内親王を生まれた。(文德實錄)

清原雪信 きよはらのゆきのぶ (一二三〇—一二三四) 書家。名は雪。狩野探幽の妹が、神足常菴に嫁し、その女が久隅守景の配となつて生んだ女で、清原氏に嫁したといふ。畫法を、探幽に學

んで、専ら唐美人の類を畫き、女流中の名手とせられた。天和二年歿、年四十。その女春信もまた相當の技倆があつた。(畫乘要略、大百科事典)

均子内親王 きよこないしんわう (一二四二—一五六二) 宇多天皇の皇女。女御藤原温子の御腹で、敦慶親王に適し、延喜十年二月薨せられた。御年二十一。(日本紀略、尊卑分脈、後撰集)

我もおもふ人も忘るなありそ海のうら吹く風のやむ時もな
均内親王子

勤子内親王 きんこないしんわう (一一五九—) 醍醐天皇の皇女。更衣源周子の御腹で、延喜八年内親王となり、承平六年四品に叙せられ、右大臣藤原師輔に降嫁、天慶元年十一月薨せられた。『倭名類聚鈔』(源順)は内親王の仰せによつて編纂されたものである。(日本紀略、一代要記)

欣子内親王 きんこないしんわう 後醍醐天皇の皇女。贈三位藤原爲子の御腹で、また和歌をよくせられた。嘗て太宰帥世良親王の一周忌に、嵯峨の臨川寺に詣で、「常ならぬうき世のさかの野邊の露消えにし跡を尋ねてぞとふ」と詠まれた。元弘の騷亂の後であらう、世を厭ひ、佛門に歸依せられたが、作には、みな深い感懐が籠つてゐる。「くもれがし半ばの月の面影もとめて見るべき袂ならねば」また、「我がこゝろ月にた

とへて詠むればいと限なき秋の空かな」また「いとふべき心の雲もなかりけりそむく山路の秋の夜の月」。歌は『風雅集』『新續古今集』『新千載集』『新拾遺集』等にある。(大日本史、風雅集)

觀子内親王 きんしんわう 宣陽門院

く

久我誓圓 くがせいゑん (一二四八—一二五七) 信州善光寺百二十

二代の法嗣。伏見宮邦家親王の三女。文政十一年正月七日誕生、幼稱眞喜宮、久我通明の猶子として佛門に歸し、天保四年二月四日善光寺に入り、三月得度、同七年増上寺明譽大僧正につき宗戒を受け、八年上人號宣下があつて、善光寺主務職に任ぜられた。明治三十三年大僧正に補せられ、四十三年十二月十六日京都得淨明院において薨せられた。享年八十三。明治二十四年六月善光寺炎上の際には最も熱心にこれが再建に當り、三十五年五月に至つて成つた。また二十八年二月

得淨明院を起してこれが開山となつた。持戒堅固、各地を巡化すること前後八十餘回、日數實に四千八百餘であるといふ。歌は父宮の流れを汲み、書は有栖川宮熾仁親王を師とせられもつとも草書に巧であつた。(讀女鑑、大日本人名辭書)

我が身さへあらたまりぬる心地しておきぬれしく住める
新室 久我誓圓

玖賀媛 くがひめが 仁徳天皇の宮人。大和の桑田の人。仁徳紀十六年七月の條に、「天皇、宮人桑田玖賀媛を以て近習舍人等に示せたまひて曰はく、朕是の婦女を愛まむと欲へども、皇后の妬みますによりて合すこと能はず、以て多くの年を経ぬ。何ぞ徒に其の盛なる年を妨げむや。即ち歌を以て問ひて曰はく、水底經、網の處女を、誰養はむ。ここに播磨國造の祖速待、獨り進みて歌よみして曰はく、(みかは) (石)地、播磨速待、岩下す、畏くとも吾養はむ。即日、玖賀媛を以て速待に賜ふ。明日の夕、速待、玖賀媛の家に詣りぬ。然るに、玖賀媛は和はず。乃ち強ちに帷内に近づく。時に玖賀媛曰はく、妾寡婦にして以て年を終へむ。何ぞ能く君の妻と爲らむや。是に天皇聞しめして、速待が志を遂げむと欲して、玖賀媛を以て速待に副へて、桑田に送り遣したまふ。則ち玖賀媛發病して、道の中に死りぬ。かれ今に玖賀媛の墓あり。」とある。(日本書紀)

久具津比賣命

のくぐつひめ

久久都比女命。皇大神宮攝社の一

たる久久都比女神社の祭神。『内宮儀式帳』には、久久津比古とともに大水上命の御子で、倭姫命がその社を祝ひ定め給うた神とある。『倭姫命世記』に、倭姫命が皇大神を奉じて神地を求めて久しく得給はなかつた時、久求都比古がこれを迎へられたとあるによれば、恐らく久具津比賣命は、比古神の耦神で、この邊一帯を領せられた國津神であらうといふ。
(延喜式、倭姫命世記)

玖玖麻毛理比賣

のくぐまほりひめ

日本武尊の妃。足鏡別王の母。

『記』の景行の巻に、「山代の玖玖麻毛理比賣」とあり、玖玖麻は山代の地名かと思はれる。『和名抄』に久世郡栗隈郷がある。『紀』には此姫の名は見えず、たゞ仲哀紀の初めに、次のやうな不敬事件を載せてゐる。「元年冬十一月乙酉朔、群臣に詔して曰はく、朕未だ弱冠に逮らずして、父王既に崩りたまふ。乃ち神靈白鳥に化りて、天に上りたまふ。仰望ひまつる情、一日も息むことなし。是を以て冀はくは白鳥を獲て陵の域の池に養はむ。因りて以て其の鳥を視て、顧ひまつる情を慰めんと欲ふ。即ち諸國に令して白鳥を貢らしむ。閏十一月乙卯朔戊午、越國白鳥四隻を貢る。是に於いて鳥を送る使人、菟道の河の邊に宿る。時に蓬髮蒲見別王其の白鳥を

菊理媛命

のくくりひめ

白山比咩命ともいふ。伊弉諾尊が、伊

弉册尊を追うて黄泉國に到り、同國より逃げ歸り給ふ時、泉平坂にて相争はれた際、その中間に立つて二尊の御言葉を取傳へられた神である。名義、またそれによつて起るといふ説(古史傳)もある。石川縣石川郡國幣中社白山比咩神社はこの神を主祭神とする。(日本書紀、古史傳)

草香幡梭姫皇女

のくさかのほりみめ

雄略天皇の皇后。仁德天皇

の皇女、妃日向髮長媛の御所生。また橘姫とも稱し、大草香皇子の御妹である。『記』には、大日下王(大草香皇子)の妹波多毘能若郎女、別名長日比賣命また若日下部命ともいひ、

仁德天皇は此の皇女のために若日下部を定めたとある。應神天皇の皇女にも幡日若郎女(記)があつて、同名である所から種々の説がある。即ち、履中紀には元年の條に、「次の妃幡梭皇女、中磯皇女を生む」、また六年の條に、「草香幡梭皇女を立て、皇后としたまふ」とあるからである。『歷朝坤德錄』は同名異人で、履中天皇の皇后は應神皇女、雄略天皇の皇后は仁德皇女としてゐるが、『大日本史』は應神皇女は皇后に立たれたことはなく、仁德皇女が初め履中天皇の皇后に立ち、その崩後雄略天皇の皇后に立つたとしてゐる。ここには『歷朝坤德錄』に従つて置く。なほ「幡日若郎女」の項を見よ。安康天皇は、その元年二月、大草香皇子に依つて、その御妹草香幡梭皇女を、大泊瀬皇子(雄略天皇)の妃たらしめんとし、大草香皇子は家寶の押木珠纒を獻つて丹心を示された。然るに天皇の使の根使主が押木珠纒の美麗なを見て竊に私して、天皇には大草香皇子は勅命を奉じないと讒したので、天皇は大草香皇子を殺し、その妃中蒂姫を宮中に納れ、幡梭皇女を大泊瀬皇子の妃とせられた。三年十一月雄略天皇は泊瀬の朝倉宮に即位し、その元年三月皇女は立つて皇后となられた。十四年夏、天皇は根使主をして吳國の使を石上の高拔原に饗せしめられたが、その時舍人が根使主の著けてゐる珠

纒の太だ美麗であることを奏したので、天皇はそれを見んと殿前に召されたところ、皇后は根使主を見て涕泣せられた。天皇怪しんでその故を問ひ給ふや、皇后は、根使主が著けた珠纒は、かつて大草香皇子が、安康天皇の勅を畏んで、皇后を陛下に進めたる時に獻じたものである旨を奏し、ここに根使主の舊惡がはじめて露顯した。根使主は直に誅され、その子孫は二分されて、その半は大草香部の民として、皇后の封戸に宛てられた。皇后は、天皇に奉侍して、よく天皇の荒々しき御所業を諫め給うた。雄略紀五年の條には「春二月、天皇葛城山にかりしたまふ。(略)俄にして逐はるゝ、噴猪、草の中に暴に出て人を逐ふ。かりびと、樹にのほり大に懼る。天皇、舍人に詔して曰はく、猛獸も人に逢ひては則ち止む。宜しく逆射て且た刺し止めよ。舍人、性懦弱、樹に縁りて色を失ひ、五情無主なり。噴猪直に來りて天皇を噬ひまつらむと欲す。天皇弓を用て刺し止めて、脚を擧げて踏み殺したまひつ。是に於いてかり罷みて、舍人を斬らむと欲す。舍人、刑に臨みて歌を作りて曰はく、八隅知し、我大君の遊ばしし、猪のうだき、畏み、我が逃げ昇りし、荒丘の上の、榛が枝吾兄を。皇后聞しめし悲みたまひ、感を興し止めたまふ。詔して曰はく、皇后、天皇に與したまはずして、舍人を顧み

たまふ。對へて曰はく、國人皆いふ、陛下かりしたまひて、獸を好みたまふ。無乃可からざるか。今陛下、嗔猪の故を以て舍人を斬りたまはば、陛下譬へば豺狼に異なることなけむ。天皇乃ち皇后と車に上りて歸りたまふ。萬歳と呼びて曰はく、樂しきかな、人皆禽獸を獵る。朕は善言を獵り得て歸ると。」と見え、『記』には、「また天皇、長谷の百槻の下にまし／＼て、豊築きこしめす時に、伊勢國の三重の採、大御蓋を捧げて獻りき。ここにその百槻の葉落ちて、大御蓋に浮べりき。その採、落葉の御蓋に浮べるを知らず、猶大御酒獻りけるに、天皇その御蓋に浮べる葉を看そなはして、その採を打ち伏せ、御佩刀をその頸に刺し當てて、斬りたまはむとする時に、その採、天皇に白しけらく、吾が身をな殺したまひそ。白すべき事ありとまをして、即ち歌ひけらく、纏向の日代の宮は、朝日の日照る宮、夕日の日隠る宮、竹の根の根足る宮、木の根の根延ぶ宮、やほによしい杵築の宮、眞木さく檜の御門、新嘗屋に生ひ立てる、百足る槻が枝は、上つ枝は天を覆へり、中つ枝は東をおへり、下つ枝は鄙をおへり。上つ枝の枝の末葉は、中つ枝に落ち觸らばへ、中つ枝の枝のうら葉は、下つ枝におちふらばへ、下つ枝の枝のうら葉は、鮮衣の三重の子が、捧がせる瑞玉蓋に、浮きし脂落ちなづさひ、水凝る、

こをろに、是しもあやに畏し、高光る日の御子、言のかたりごととも、こをば。かれこの歌を獻りしかば、その罪赦さえにき。ここに大后(后)歌はしける、その御歌、大和のこの高市に、小高かる市の高處、新嘗屋に生ひ立てる、葉廣ゆつ眞棒、そが葉の廣りいまし、その花の照りいます、高光る日の御子に、豊御酒上らせ、ことのかたりごとともこをば。即ち天皇歌はしけらく、百敷の大宮人は、鶉鳥、領巾とりかけて、鶉鳥、尾行きあへ、庭雀、跪りゐて、今日もかも酒水附くらし、高光る日の宮人、ことの語りごとも是をば。この三歌は天語歌なり。かれこの豊築に、その三重の採を譽めて、物多に給ひき。」とある。『記』には、なほ次の文がある。「初め大后(后)日下にましける時、日下の直越道より、河内に幸でましき。かれ山の上に登りまして、國見しければ、堅魚を上げて屋を作れる家あり。天皇その家を問はしめたまはく、かの堅魚を上げて作れる屋は、誰が家ぞと問はしめたまひしかば、志幾之大縣主が家なりと申しき。ここに天皇詔りたまへるは、奴や、己が家を、天皇の御舎に似て造れりとのりたまひて、即ち人を遣はして、その家を焼かしめたまふ時に、その縣主懼ち畏みて、稽首白さく、奴にあれば、奴ながら覺らずて、過ち作れり。いと畏しとまをしき。かれ稽首の御幣

奇稻田姫命くしなひめのみこと

櫛名田比賣。素盞鳴尊の妃。國神

物を獻る。白き犬に布をかけて、鈴を著けて、己が族、名は腰佩と謂ふ人に、犬の繩を取らしめて獻りき。かれその火著くることを止めしめたまひき。即ちその若日下部王(后)の御許に幸でまして、その犬を賜ひ入れて、詔らしめたまはく、この物は、今日道に得つる奇しき物なり。かれ妻問の物といひて、賜ひ入れき。是に若日下部王、天皇に奏さしめたまはく、日に背きて幸でませる事、いと恐し。かれ己れ直にまゐり上りて仕へまつらむとまをさしめたまひき。是を以て宮に還り上ります時に、その山の坂の上に行き立たして、歌ひたまはく、日下部の、此方の山と、疊席、平群の山の、此方此方の、山の峽に、立ち榮ゆる、葉廣久麻白禱、本には、いくみ竹生ひ、末には、たしみ竹生ひ、いくみ竹、入籠は寝ず、たしみ竹、髓には率宿す、後も組み寝む、その思妻、あはれ。即ちこの御歌を持たしめて、返し使はしき。」皇后は親ら桑を採つて養蠶のわざに勤まれた。天皇は、殖産興業に努められ、多く歸化人の手技を奨励し、此の時にはひとり蠶業のみならず、陶部、鞍部、書部、錦部、譯語部等の發達を見るに至つた。次の清寧天皇の代における經濟的發達も、この代における天皇と皇后との御努力に負ふ所が少くない。(日本書紀、古事記)

櫛名田比賣。素盞鳴尊の妃。國神脚摩乳、手摩乳の女。また、眞髮觸櫛稻田姫ともいふ。素盞鳴尊、天より降り、出雲國簸川上に到り給うた時、川上に啼哭の聲をきき、尋ねられると、翁媪と少女とがあつて、尊の間に對へて、われはこの國神にして脚摩乳といひ、わが妻を手摩乳、少女を奇稻田姫といひ、我兒さきに八人あつたのに、年毎に八岐大蛇に吞まれ、今また、この少女をも吞まれんとするので、故に泣き悲しむのであるといつた。尊はこれを聞かれて、この女汝等が兒ならば我に奉らんやと宣はれ、脚摩乳對へて、恐れれど未だ御名を知らずといへば、われはこれ、天照大御神の皇弟にして、今、天より降れるものなりと告げられ、翁媪畏んで勅に隨ふや、二人に命じて八醞酒を醸し、周圍に垣を廻らし、八の門を作り、門毎に佐受岐を作り、そこに酒槽を置き、八岐大蛇來つてその酒を飲み、酔うて昏睡するを俟つて、遂にこれを斬り、ここに奇稻田姫を娶つて、宮居を須賀の地に造つて棲み給うた。「八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣造るその八重垣を」の尊の御歌はこの時の御製である。『日本書紀』には兒大己貴神を生れますとある。しかし、一書には清之湯山主三名狹瀨彦八嶋篠を生まれ、この神の五世の孫を大國主神であるとし、他の一書に

は、姫の兒の六世の孫大己貴命と見える。『古事記』には八島土奴美神を生まれ、八島土奴美神五世の孫即ち大國主命である見え、その御母を刺國若比賣としてゐる。奇は美稱、稻田は地名で出雲國仁多郡横田村の稻田と關係があるといはれ、高志の八岐大蛇の犠牲となるところを素盞鳴尊に救はれて尊と結婚したのは、山賊若しくは越人こしびとにさらはれんとした事を表示したものと説がある。〔圖〕刺國若比賣（古事記、日本書紀）

九條院

〔二七九三一—一八三六〕 近衛天皇の中宮。藤原

呈子。太政大臣忠通の女。實は太政大臣伊通の女。御母は中納言藤原顯隆の女。初め美福門院に子養せられたが、鳥羽法皇は、天皇をしてこれを納れしめんとし、時の攝政忠通をしてこれを猶子として入内せしめた。久安六年二月十六日從三位に叙せられ、同四月二十八日女御となり、六月二十二日立后宣下があつて中宮と稱せられた。久壽二年七月二十三日天皇の崩御あるや、同八月十五日薙髮、清淨觀と號した。後白河天皇の保元元年十月二十七日皇后と稱し、同三年二月三日皇太后となり、高倉天皇の仁安三年三月十四日院號を九條院と進められた。安元二年九月十九日崩、御年四十四。（女院小傳、大百科事典）

九條武子

〔二五四七—二五八九〕 歌人。京都西本願

寺、大谷光尊の次女。生母は圓明院ふじ。明治二十年十月二十日生れた。兄に光瑞、光明がある。十二歳まで小學校に學び、餘は家庭にあつて諸藝を修めた。麗人として聞え、二十二歳、九條良致（男勳）に嫁し、夫が正金銀行ロンドン支店詰となつたのに従つてイギリスに行き、滞在一年半で單獨歸國、その後、「見渡せば西も東も霞むなり君はかへらずまた春や來し」等の聞怨歌によつて世間の同情を惹き、大正十一年良致の歸朝とともに東京に移住した。佐佐木信綱に和歌を學び、『金鈴』『蕪染』等の歌集及び戯曲『洛北の秋』、隨筆集『無憂華』等の著がある。西本願寺を背景として、西本願寺佛教婦人會、東京眞宗婦人會、六華園等を主宰し、社會慈善事業につくしたが、昭和三年二月七日敗血症のため、青山の磯邊病院で死んだ。年四十二。慈善病院あそか病院（本所區猿江裏町）は、その歿後に完成を見た。（無憂華、蕪染）
わづらはし朝の人はあざみ行きぬゆふべの人はたてへて過ぎぬ
大いなるものちからにひかれゆく我があしあとの覺束なしや
九條武子

楠正成妻

延元元年、正成、足利尊氏を兵庫に拒

がんとする時、櫻井驛において、長子正行（時に十一）を河内に還らしめ、且つ誡めて、「聞く、獅子は子を生みて、三日にして之を絶壑たつとに擠し、その跳超を試みると。今汝十餘歳、能く我が言を記せよ。安危決しぬれば、また汝をみるべからざるなり。我、戰死の後天下は必ず尊氏に歸せん。汝、當に殘兵を收合して金剛山を保ち、死生之を以てすべし。慎みて出でて降り以て家聲を墜すこと勿れ。汝が孝、これに過ぎたるはなし。」（大日本史）といひ、後醍醐天皇より賜はつた、菊作刀を與へて泣談した。正成湊川に戰歿し、尊氏その首を河内に贈るや、正行悲痛の極、佛龕の前に到り、將に父の與へたる刀を以て自殺せんとしたが、母は此の時走り寄つて涙とともにこれを諫止した。『太平記』には「母急ぎ走り寄つて、

正行が小腕に取りつきて涙を流して申しけるは、梅檀は二葉より芳しと云へり。汝をさなくとも父が子ならば、斯程の理に迷ふべしや。小心にもよく、事の様を思ひて見よかし。故判官殿（○正成）が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より返し留めしことは、全く跡を弔はんためにはあらず、腹を切れとて残し置きしにもあらず、我れたとへ運命盡きて戰場に命を失ふとも、君何處にも御座ありと承らば、死残りたらん一族若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起し御敵を滅して、君を御

代にも立て進らせよと云ひ置きし處なり。その遺言具さに聞きて我れにも語りし者が、いつのほどに忘れけるぞや。かく

べしとも覺えずと、泣く／＼諫め留めて、抜きたる刀を奪ひとれば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣き倒れ、母と共にぞ歎きける。」とある。正行これより父の遺言及び母の教訓を肝に銘じて忘れず、遊戯するにも常に搏戰馳逐の状をなし、賊を討ち讐を復するを以て事とせざるはなかつたといふ。（太平記、大日本史）

樟媛

吉備田狹の子弟君の妻。「吉備稚媛」の項を見よ。

藥君娘

老女子

久勢女王

齋宮。元正天皇の靈龜三年四月、伊勢齋宮となり（神祇辭典）、養老五年退下せられた。在任年、不詳。

（齋宮記、大百科事典）

百濟池津媛

雄略紀に、「二年秋七月、百濟の池

津媛、天皇の幸さむとするに違ひて、石河楯に淫けぬ。大伴室屋大連に詔して、來目部をして夫婦の四支を木に張らしめ、假版の上に置きて、火を以て焼き死しつ。（百濟新撰）に云ふ、己巳年、蓋鹵王立つ。天皇阿禮奴跪を遣して、來りて女郎を索はしむ。百濟、慕尼夫人の女を莊飾り、適稽女郎と曰ひ、

天皇に貢進る」とある。(日本書紀)

百濟貴命

倭哲の女。女工に閑ひ、姿質妹麗であつた。女御となり、基

良親王、忠良親王、基子内親王を生まれた。弘仁十年、從五位上に叙せられ、ついで從四位下に進み、文徳天皇の仁壽元年薨せられた。(皇胤紹運録、文徳實録)

百濟教仁

桓武天皇の宮人。從五位上武鏡の女。從五位下に叙せられ、太田親王を生まれた。(一代要記、續日本紀)

百濟教法

に叙せられ、承和七年十一月薨せられた。(續日本後紀)

百濟慶命

軍教後の女。禮則があつて貴重せられ、源定、源鎮を生ま

れ、從三位に進み、淳和天皇の天長七年特に封五十戸を賜はつた。承和の初、嵯峨上皇嵯峨院に遷御の時、これを大院となし、慶命の爲めに別宮を築いて小院といつた。その寵ありしことが知られる。その三年尙侍となり、八年從二位に進み、仁明天皇の嘉祥二年薨去あるや、勅して從一位を贈り、使を遣はして、喪事を監護せしめられた。(一代要記、日本紀略、三代實録、續日本後紀)

百濟貞香

桓武天皇の宮人。從四位下教徳の女。

從五位下に叙せられ、駿河内親王を生まれた。(一代要記、皇胤紹運録)

百濟永繼

桓武天皇の宮人。正五位上飛鳥部奈止丸

の女。初め藤原朝臣内麻呂に適し、眞夏及び冬嗣を生んだ。後、宮に入り、女孀となり、良峰朝臣安世を生まれ、從七位下に叙せられた。(公卿補任、姓氏録)

百濟永慶

仁明天皇の宮人。從五位上教復(教俊に

口比賣

磐姫皇后の侍女。「磐姫皇后」の項を見よ。

宮内卿

鎌倉期の歌人。右京大夫源師光の女。幼時よ

り、歌及び書をよくし、後、後鳥羽院に仕へて寵遇を蒙つた。千五百番歌合の時(建仁二年)、「こたみは、皆世にゆりたる古き道のものどもなり、宮内卿は、まだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆるめればなむ、かまへて、まろがおもておこすばかり、よき歌つかうまつれ」(増鏡)との御詠を承けて、「うすくこき野邊のみどりの若草に跡まで見ゆる雪のむらぎえ」と詠じ、若草の宮内卿と呼ばれて朝野に喧傳せられたが、早死した。その作は『新古今集』(十五首)のほか、諸勅撰集に多く採られてゐる。畫は巨勢の畫風があつた。巨勢宗義(巨勢八代)の外孫に當るといふ。(増鏡、歌仙部類、扶桑畫

人傳)

かきくらし猶ふる星の雪のうちに跡こそ見えね春は來にけ

り

花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎ行く舟のあと見ゆるま

で

宮内卿局

土御門天皇の宮人。藤原

氏。中納言範光の女。宮内卿局と稱し、皇女知子を生まれ、承元元年五月卒した。(二代要記、明月記)

國勝長勝面勝神

天鈿女命の別稱。天孫降

臨に際し、天之八衢に猛神(猿田彦命)あり、衆神皆畏怖して敢て仰ぎ見るものがなかつた時、天孫即ち天鈿女命に勅して、汝はこれ國勝長勝面勝神であるとして、往いてその名を問はしめられた。勝とはものに對し、劣めずして優る意、蓋し優勝の神の義である。天鈿女命(神祇辭典)

邦子内親王

安嘉門院

國造千代妻

元明天皇の項を見よ。

國依媛

磐姫皇后の侍女。「磐姫皇后」の項を見よ。

久野久子

音樂家。明治十七

年生れ、三十五年東京音樂學校を出で、母校の教授となり、また日本女子大學教授となつた。大正十三年文部省海外研究

員としてウイーンにあつてピアノ研究中、翌十四年變死した。年四十二。(大百科事典)

久米女郎

『萬葉集』に、厚見王より「やどにある櫻

の花は今もかも松風いたみ土にちるらむ」の歌を贈られ、世の中も常にしあらねば屋前にある櫻の花の散れる頃かも」の答歌がある。(參照)久米若實(萬葉集)

久米女王

奈良朝の歌人。天平十年橘宿禰奈良麻呂

の宴に詠んだ「黄葉を散らす時雨にぬれて來て君が黄葉をかざしつるかも」の作がある。天平十七年正月、從五位下に叙せられた。(萬葉集、續日本紀)

久米若實

奈良朝の人。贈右大臣從二位

藤原百川の母。天平十一年三月、石上朝臣乙麻呂と關係し、ために乙麻呂は土佐に流され、彼女は下總に流された。十二年六月、大赦によつて還り、慶雲元年從五位下を授けられ、寶龜七年には從四位下に至つた。同十一年六月歿した。『萬葉集』卷八、厚見王との贈答歌をなしてゐる久米女郎は、彼女のことかといはれる(萬葉集古義)。(參照)久米女郎(萬葉集作者履歷)

雲井

吉原、金井三左衛門の妓。櫻田兼房町の菓子屋の

娘であつたが、十九歳で娼樓に投じ、俳諧を素外に學び、ま

た佐々木文山の書風をうけて、楷書をよくした。ある物好きな客が、女の身で四角的の字を書くのは心が矜つてゐるやうで面白くないといひ、彼女の楷書を質として百金を與へたのに、以後はその約を守つて書かなかつたといふ。文化中の人。
(萍華漫筆)

莖立つや只春の日の恵より

雲井

雲井 くもい 吉原、京町二丁目三浦屋孫三郎抱への妓。「池水に夜な／＼月はうつれども水もにこらず我もにこらず」もろともに見てこそ月も月ならめ空だのめにもふけ行くはうき」等の歌がある。もつとも後者は浅尾の作とも、或は雲井は浅尾と同一人ともいふが、なほ定かでない。(遊女の文學)

椋椅部弟女 のくらはしめ

武藏、橘樹郡上丁物部眞根の妻。眞根が旅に出んとして、「家には葦火たけども住みよけを筑紫にいたりて戀しけ思はも」と詠んだのに答へて、「草枕旅の丸寝の紐絶えは吾が手とつけれこれの鍼持し」と詠んだ歌が見える。(萬葉集)

椋椅部刀自賣 のくらはしめ

萬葉の歌人。武藏、荏原郡主帳物部歳徳の妻。天平勝寶中、防人として筑紫にくだる夫を送る「草枕旅行く夫が丸寝せば家なる我は紐解かず寝む」の歌がある。(萬葉集)

倉稚綾姫 くらわらひ

欽明天皇の妃。石姫皇后の御妹。二年三月妃となり、石上皇子を生まれた。『記』には石比賣命(石姫皇后)の妹小石比賣命を納れて上王(石上皇子)を生むとあつて、倉稚綾姫の名はない。(日本書紀)

栗 くり

節婦。甲斐國中村の農女。幼時孤となり、後、安兵衛に嫁した。享保中、一夜、大風暴雨ありて堤防決潰し、家また危険に頻するや、先づ舅六右衛門を導いて逃れしめ、己れは直に引返して、多年病臥し、四肢腐爛して動く能はなかつた夫の側に侍し、水至るとともに死んだ。事、幕府に聞え、六右衛門に金を賜ひ、邑宰、烈婦の碑を建て、事を記した。なほ、『近世崎人傳』には、これとは全く別個の異説を載せてゐる。(事實文編、東洋立志編)

吳織 くれは

「兄媛」(工女)の項を見よ。

黒井繁乃 くろい

賢母。米澤藩士黒井四郎左衛門の女。幼時父を喪ひ、母に育てられ、長じて婿を迎へたが、一子信藏を擧げた年(文政六年)、夫にも死別した。貧しき家計を支へる傍ら、信藏の教育に専念し、信藏が隣家の某氏に四書の素讀を受けた時には、その窓下に立つて講義の要點を假名書きにし、かくしてその子の復習を指導すること二年に及んだ。信藏はその後藩費興讓館に入り、維新

倉橋部女王 くらはしめ 傳不詳。神龜六年二月、左大臣長屋王が、讒によつて自盡の後に詠まれた「天皇の命かしこみ大殯の時にはあらねど雲がくりまます」の歌によつて知られる。(萬葉集)

車持夫人 くるまぢ

中臣鎌子(藤原鎌足)、蘇我氏の專横

の極に達するを見るや、初め、輕皇子(孝徳天皇)に親近し、妃阿倍野媛を賜はつたが、後、中大兄皇子に見え、皇太子より再び車持夫人を賜はり、不比等を擧げた(伴信友孝松の藤原。『大鏡』には、「此の鎌足大臣を、此の天智天皇甚かしこく殊寵し思して、我が女御一人を此の大臣に譲しめ給つ。其の女御只にもあらず孕み給りければ、帝の思さしめ給けるやう、此の女御の孕る子、男ならば大臣が子とせん、女ならば朕が子とせんと思して、彼の大臣に仰せられけるやう、男ならば大臣の子にせよ。女ならば朕が子にせんと契しめ給りけるに、此子男にて生れければ内大臣の御子(此等)とし給ふ。(略中)此の(夫人)御腹に、差續き女二人男二人生れ給ぬ。其の姫君は天武天皇の女御にて二所ながら差續き在しけり。」と見える。なほ『大日本史』は、これらの二つの賜妃をともし否定してゐる。(阿倍野媛) 阿倍野媛 (日本書紀、女性日本史、大日本史、松の藤原)

の際は用ゐられて小參事に至つたが、繁野は我が子の榮達を見ずして嘉永六年、年五十で空しくなつた。信藏は母の假名書きの四書を『國字四書』と題し、序を附して子孫に残した。(婦人美談)

黒澤登幾 くろさわ

〔二四六六一二五〇〕

烈女。常陸國茨城

郡高野村の修験者黒澤光仲の女。初め、黒澤信助に嫁し、三子を生んで寡婦となつた後は、子女を集めて教へた。戊午の難に、水戸の前藩主徳川齊昭再び幕禮を蒙り、關藩の士民憤激動搖するや、彼女は單身起つてその冤を雪がんと志し、母の許を得て、翌安政六年の春江戸に出て形勢を窺ひ、それより身を諸國巡拜者に扮し、善光寺に詣で、戸隠山に登り、以て關吏の目を偷みつゝ關原守山を過ぎて三月京師に入り、北野寺主慶圓坊を主とし、和歌を學ぶに托して謁を東城坊氏に請うたが、彼は當時幕疑に觸れ屏居中なるを以てその臣座田氏により、長歌一篇を上つてその所懐を述べ、微衷は遂に朝廷に達した。歸路、讃岐の金毘羅社に詣で、四月航して大阪に到る時幕吏に捕へられ、齊昭の密旨を受けたのであらうと訊問せられたが毅然として然らざる旨を答へた。ついで京師の獄に移され、更に江戸の獄に檻送され、十月追放となり、江戸を距る十里以内の地、及び山城、常陸に住するを禁ぜら

れ、野州茂末村に住したが、王政復古し百事緒に就くや、明治七年に至つて朝廷より特に終身祿米(十石)を賜はり、餘生を郷里に送つた。明治二十三年五月八日八十五歳で歿し、同四十年十二月從五位を贈られた。(愛國雜談、むかしのおもかげ)

千早振る、神代のむかし、神々の、しづめ給ひし、秋津島、げにも尊き、日の本の、清き光は、古も、今も千とせも、萬代も、末の松山、末かけて、かはらぬ君が、御代なるも、かくとはいさや、白波の、よせ來る毎に、異國の、ことうき船の、夷らが、あらぬねぎごと、つくづくに、うけ引國の、心とて、御國のおもの、はみながら、まめくしくも、おもほえず、まどふ心に、ぬば玉の、黒き間部を、かたらひて、世にたぐひなき、御功をば、さはにあれども、あやまちは、露もおはさぬ、聖なる、かしこき君を退けて、小がね眞玉を、春山の、花ちる如く、まきちらし、晴るゝ雲井を、くもらする、たくみのほどぞ、あさましと、浮世の人の、言葉を、きくもくるしき、老の身は、五十路の、四になりぬれど、七十三の、老の母、あさ夕さらに、仕へつゝ、わかれてふことを、うれしくも、共に心を、そへられて、我國のため、おくれなとりそ、をしくも、老の言葉、を、力草、露も含める朝ぼらけ、日のたちのぼる、衣手の、

常陸の國を、立出で、敷島の、みちある御代を、したひつゝ、行もかへるも、梓弓、はるけき道を、さゝがにの、糸もたゆまず、引そへて、雲の上まで、かけ橋を、渡るおもひは、天の、ひなに生れし、ちりの身の、ちりつもるてふ、山の井の、深き心の、みなもとは、流れて清き、眞清水の、中にすみぬる、魚心、賤しき身をも、わすれつゝ、皇國のためと、朝夕に、心は千々に、くだげども、只一寸ち、行く水の、蟬の小川に、みそぎして、はるるゝ來ぬる、旅衣、曉つぐる、黄鳥の、野末ににほふ、梅が香を、風のたとりに、久かたの、天津空にぞきこえあげ、ゆゝしけれども、九重の、雲井の神に、奉るなり

返歌

玉鉦の道はあれどもすゝみゆく大和心の駒はたゆまじあせ道にかかるけはしき橋たてゝ人わたるとも我はわたらじ敷島の道たどる身はさゝがにの雲井のにはにひかれ出にけり

黑鷲式部くろしよぶ

岩瀬よね。また狂歌をよくしたが、天明八年、十七歳にして死んだ。(大日本人名辭書、狂歌人名辭書)

黒澤登幾

黒媛ひくろ

履中紀に羽田矢代宿禰の女黒媛と、葦田宿禰の女黒媛とを載せてゐる。前者については「八十七年春正月、大鷦鷯天皇(○仁)崩りましぬ。皇太子(○履)諱闌より出でまして、未だ尊位に即きたまはざる間に、羽田矢代宿禰が女黒媛を以て妃と爲むと欲す。納采既に訖りて、住吉仲皇子を遣して吉日を告げしめたまふ。時に仲皇子、太子の名を肩へて以て黒媛を奸しつ。是の夜仲皇子手の鈴を黒媛が家に忘れて歸れり。明日の夜、太子仲皇子の自ら奸せることを知しめさずして到ります。乃ち室に入りて、帳を開けて玉床に居す。時に床頭に鈴の音あり。太子異みたまひ、黒媛に問ひて曰はく、何の鈴ぞ。對へて曰く、昨夜太子の賣ちたまひし鈴に非ざるか。何ぞ更に妾に問ひたまふ。太子自ら仲皇子の名を肩へて以て黒媛を奸すことを知しめし、則ち黙して避りましぬ。」とあり、ここに仲皇子は事有ることを畏れて太子に叛せられたが、誅せられた。後者については、履中天皇の元年七月、「葦田宿禰の女黒媛を立て、皇妃と爲たまふ。妃、磐坂市邊押羽皇子、御馬皇子、青海皇女(一書に飯豊皇女)を生む。」とあり、その五年九月天皇が淡路嶋に狩に行幸中のこと、「大虚に呼びて曰く、劔刀太子王なりと。亦呼びて曰く、鳥かよふ羽田の汝妹は、羽狭に葬り立往ぬ。云々」と空中に聲する

くろひくわし

ものがあつて、間もなく使者來り、皇妃の薨去を傳へ、天皇は即時に駕を廻らし、十月これを葬られ、皇妃の薨去を以て、神の祟となし、其の咎を訪ひ求めて車持君を罰したとある。

『大日本史』は、「蓋し二黒媛は偶々同名ならん。然れども羽田の汝妹は羽田矢代の義に近し。矢代宿禰は武内が子なり。葦田宿禰は葛城襲津彦が子にして武内が孫なれば出自遠からず。且つ水鏡に、仲皇子の姦したる所の黒媛を以て葦田宿禰が女となせり。疑ふらくは、一人ならん。」といつてゐる。

(日本書紀、大日本史)

黒媛ひくろ

天智天皇の宮人。栗隈首德萬の女。水主内親王を生まれた。(日本書紀)

黒日賣ひくろ

仁德天皇の宮人。「兄媛」の項を見よ。

黒比賣ひくろ

廣媛(坂田大跨王の女)

細媛皇后くはひめ

孝靈天皇の皇后。磯城縣主大目(記には十市縣主の祖大目)の女。孝靈天皇は、黒田の厩戸宮に治し、その二年二月立つて皇后となられた。一書には、春日千乳早山香媛といひ、またの一書には、十市縣主等の祖の女眞舌媛といふ。皇后は大日本根子彦國牽尊(孝元天皇)を生まれた。尊、位に即きて、元年正月皇太后と尊稱せられた。(日本書紀)

け

景(けい) 陸奥の太守城泰盛(一に秋田城介義景ともいふ)の女。名は千代能。初め越後守金澤實時に嫁したが、夫に死別して佛門に入り、景愛、無外、無著等と號した。京都に出て、佛光その他の知識に謁し、資壽精舎を構へて行ひすまし、千代能が戴く桶の底抜けて水たまらねば月も宿らずの詠を佛光に與へたといふ。後、上杉氏、二階堂氏等に招かれて、景愛寺を創め、日面和尚と號した。(龍門夜話)

雞冠(けい) 江戸の俳人。淺岡氏。初め吉原の遊女であつた。俳諧を好み、雪堂心祇の門に入り、蕉雨庵、不寝坊、天地庵、宇宙庵、蕉堂等の號があつたといふが、その事蹟は詳でない。(俳諧人物便覽)

慧子内親王(けいし) 〔一五四二〕 齋院。『齋院記』には慧子に作る。文徳天皇の皇女。宮人藤原列子の御腹で、伊勢齋宮晏子内親王の御妹。仁明天皇の嘉祥三年七月、賀茂齋院と

なり、仁壽二年四月紫野齋院に入られた。天安元年二月、故ありて廢せられ、右大臣藤原良相を神社に遣はして其の狀を告げしめられた。事、秘して世に知るものがなかつた(齋院記、文徳實錄)。元慶五年正月薨せられ、廢朝三日であつた。(三代實錄、文徳實錄)

揭子内親王(けいし) 〔一五七四〕 齋宮。文徳天皇の皇女。宮人藤原今子の御腹で、陽成天皇の元慶六年四月七日伊勢齋宮となり、同八年二月陽成天皇遜位十三日退下して京に還り、延喜十四年二月薨せられた。(日本紀略、一代要記)

馨子内親王(けいし) 〔一六八九—一七五三〕 後三條天皇の中宮。齋院。後一條天皇の皇女。中宮威子の御所生。長元二年二月誕生、同四年内親王となり、二品を授けられ、また賀茂齋院となり、三宮に准じ、封千戸を加へ賜はつた。天皇及び中宮に愛重せられ、侍臣の拜謁に際しては、必ず先づ齋院に伺候したか否かを問はれ、若し未だ伺候しないことを答へるものがあれば、ために御不興であつたといふ。長元九年四月天皇の崩によつて齋院を退下し、中宮に従つて鷹司殿にあつたが、中宮もまたその年の九月に崩せられたるを以て、御祖母の上東門の第に徙り、後更に中宮の領であつた小二條殿を造り改めて、そこに住まれた。永承六年、皇太子尊仁親

王の宮に入り、東宮に女御であつた間に、皇子皇女を生まれたが、何れも夭薨せられた。治暦四年後冷泉天皇崩御、皇太子位に即き、翌延久元年七月皇后册立があつて中宮と稱せられた。これより先、康平元年二月内裏の炎上があつたが、延久三年に至り新造の内裏が成つて遷御、中宮は弘徽、登華の兩殿に住まれた。後三條天皇は、才能卓抜、佛道に精通し、藝道に長ぜられ、資性剛毅嚴肅、藤氏權を弄して以來歴代の天皇みな成を攝關に仰ぎ、國家の機務至尊の手を離れるもの多年であつたのを、親ら國務に臨み、勵精治を圖られたので、規模大に振ひ、皇綱漸く張るに至つたが、在位僅に四年にして、延久四年十二月病を以て皇太子貞仁親王に讓位せられ、なほ院中であつて政務を見んとして、遂に翌五年五月崩御(聖壽四十)せられた。大江匡房の如きは、この時を「教化承和延喜の治に比すべし」といつてゐる。崩御に先だち落飾せられたが、中宮もまたその時薨髪せられた。翌承保元年改めて皇后と稱し、常に西院にあつて専ら天皇の冥福を祈願せられたので、世に西院皇后と稱せられた。寛治七年九月崩、御年六十五。(一代要記、日本紀略、繁華物語)

敬子女王(けいし) 齋宮。三條天皇の皇孫。敦平親王の女。後冷泉天皇の永承六年十月七日伊勢齋宮となり、治暦四年(天

皇崩御)八月二十四日退下せられた。在任十八年。(一代要記、貴女鈔、大百科事典)

惠子女王(けいし) 「藤原懷子」の項を見よ。

慶壽院(けいじゆ) 〔一二二五〕 將軍足利義晴の室。義輝の母。關白近衛尚道の女。永祿八年五月十九日三好義繼、松永久秀等叛して、柳營を襲ひ、義輝火を營中に放つて憤死するや、その母慶壽院、左右その逃れ出でんことを乞へども許さず、「鄰里急あるすら尚且赴き救ふ、況んや擧國鬪死するをや」と稱し、自ら炎中に入つて死んだ。(本朝烈女傳、比賣鑑)

桂昌院(けいしや) 〔二二八四—二三六五〕 徳川家光の寵妾。阿玉方、また秋野殿と呼ばれた。本莊宗利の養女、名は宗子。實は八百屋某の女で、その歿後妻が連れ子をして宗利に再嫁したのであるといふ。初め阿萬方(家光の側室)に従つて京都より江戸に行き、春日局に倚つた。家光これを見て寵し、正保三年正月徳松(綱吉)を生み、館林館に徙つた。これを姪んだ時、僧亮賢が卜して生れる子は男で後に將軍となるといつたので、彼女は深く亮賢に歸依するところがあつた。綱吉が將軍職を繼ぐや、亮賢のために一寺を高田薬園の地に建て、與へた。これが護國寺であつて、關東眞言宗の大檀林であり、後に小石川の音羽に移されたものである。阿玉方はまた知足

院の僧隆光を寵したが、隆光は綱吉を惑はして生類憐愍の令を發せしむるに至り、阿玉方また與つて力があつた。而して僧侶の大奥に出入するものこれより繁く、風紀ために亂れた。彼女は亮賢に報いた如く、また將軍に説いて大老酒井忠清を退け、後任に堀田正俊を登用して、彼が綱吉を將軍に擁立した功に報い、正俊またよく綱吉を輔けて政に勵み、幕府の綱紀は大に肅正したが、大老たること四年にして貞享元年稻葉正休に殺され、正俊横死の後綱吉は大老職を置かず、御側御用人の數を増加して老中同様に勤めしめ、これよりして大奥政治を誘引し、彼女はその中心たる觀があつた。貞享元年從三位に叙せられ、元祿十五年從一位に進み、寶永二年六月二十二日八十二歳で歿した。法諡、桂昌院仁譽興國惠光。(徳川時代史、女性日本史、日本女子立志録)

慶實 けいじつ 或は慶法尼。星合左衛門尉の女。十六歳で他に嫁したが、翌年夫に死別した。天正十二年四月、伊勢の松島城を守つてゐた織田信雄の將瀧川雄利が羽柴勢の攻圍に會ひ、既に四旬を過ぎて城中食するものなく、全軍正に餓死の運命に迫られた時、尼は瀧川氏が亡夫の舊主なる縁を以て自ら敵營に至り、その死を免れしめんと、哀訴再三に及び、秀吉も遂にその志を憐み、兵を還さしめたといふ。瀧川氏は後、秀

吉に諫した。(野史、本朝烈女傳)

敬法門院 けいぽうもんゐん (二三一七—二三九二) 靈元天皇の後宮。藤原宗子。内大臣松木宗條の女。御母は從三位河崎秀子。明曆三年十二月誕生、尙侍となり、上臈局と稱し、朝仁親王(東山天皇)、福子内親王、永秀女王、文仁親王、勝子内親王を生まれた。朝仁親王の皇太子に立たれたる天和三年二月從三位に叙せられ、元祿二年正月二十九日准三宮となり、正徳元年十二月二十三日院號宣下があつて敬法門院と號せられた。享保十七年八月三十日薨去、御年七十六。九月、清淨華院に葬つた。(野史、大百科事典)

袈裟 けさ 『長門本平家物語』『源平盛衰記』に見出される悲劇の人であるが、その史實は頗る薄弱とされてゐる。盛衰記によると、名はあとも、母の衣川に因んで異名を袈裟といつた。十四歳で、並の里の源左衛門尉渡に嫁し、十六歳の春、渡邊の橋供養の日に、從兄遠藤武者盛遠(十七歳)に見染められた。九月十三日、盛遠は衣川を訪ね、刀を擬して袈裟を與へよと脅迫した。衣川は驚いて袈裟を呼び、二人は一夜を共にした。翌朝別れに臨み、袈裟は渡に髪を洗はせ酒を飲ませて臥せしめて置くから、濡れ髪を搜つて殺せといひ置いて歸つた。然るにその夜盛遠が掻き取つた首は渡のものではなく、

實に袈裟その人の首であつた。盛遠はあらためて渡を訪ひ、仔細を語つて、謝罪のため己が頸を差しのべたが、渡は「是も然るべき善知識にこそ有りけめ。唯だ御邊も我も、無き人の後世を弔ひ、一に佛土の往生こそあらまほしけれ。」といつて、自ら先髻を切り、盛遠も同時に髪を切つて出家した。盛遠は後の文覺である。袈裟を埋めた家を世に鳥羽戀塚といつた。徳川時代に、永井日向守直清が、長岡を領するに至つた時、領内のこの戀塚のことを聞き、林羅山に囑して銘を撰び、碑を樹てたが、『雅州志』『山城名勝志』によると、下鳥

羽壇の上に戀塚寺があつて、羅山の碑のある上鳥羽は鯉塚であるといふ。羅山の碑銘に「長安大昌里之節女、同日之談乎」とある如く、これとよく似た支那の物語は、『源平盛衰記』にも附載してゐる通りで、『女四書』の女範中にもとられてゐる。『長門本平家物語』には、袈裟、あとも等の名はなく、流布本の『平家物語』には、物語そのものもない。(源平盛衰記、長門本平家物語)

月華門院 げつくわもんゐん (一九〇七—一九二九) 後嵯峨天皇の第一皇女、綜子内親王。御母は中宮藤原信子。寶治元年誕生、その十一月一日内親王となり、弘長三年七月二十日准三宮、同日院號を月華門院と進められた。文永六年三月一日薨去、御

年二十三。『増鏡』には、「三月の朔日、月華門院俄にかくれさせ給ひぬ。法皇(後)も女院(子)も、限りなく思ひ聞えさせ給ひつるに、いとあさまし。さるはまことにやあらむ、又、人たがへにや、とかく聞ゆる御事どもぞいと口をしき。四辻の彦仁の中將(彦仁)も、忍びて参り給ひけるを、基顯の中將(基顯)も、かの御まねをして、又、参り加はりける程に、あさましき御事さへありて、それ故、かくれさせ給へるなど、さよめく人も侍りけり。なほ、さまではあらじと思ひ給ふれど、いかゞありけむ。」とある。(女院小傳、増鏡、大日本史、新後撰集)

消えのこる雪につけてや我がやどを花よりさきに人のとふ
らむ
月光院 げつくわもんゐん 左京方
兼葭 かや 慈音
月花門院

玄輝門院 げんきもんゐん (一九〇六—一九八九) 後深草天皇の後宮。藤原信子。左大臣洞院實雄の女。御母は大納言四條隆房の女臈子。京極院の御妹である。東御方と稱し、伏見天皇、滿仁親王、永陽門院を生まれ、弘安三年正月八日從三位に叙せられ、伏見天皇位に即くや、三宮に准じ、院號宣下(正應元年十二月十六日)があつて玄輝門院と號した。正應四年八

月落飾、自性智と法名し、正安元年二條殿に徙り、元徳元年八月三十日持明院の中園殿に薨せられた。御年八十四。(女院小傳、大日本史)

懐子内親王

小一條院の女。御母は攝政藤原道長の女寛子。三條天皇の御猶子となり、寛仁三年内親王の宣下あり、後、權大納言藤原信家に降嫁せられた。冷泉宮と稱せられた。(皇胤系圖、日本紀略、榮華物語)

娟子内親王

第二皇女。御母は陽明門院。長元九年十一月賀茂齋院となり(五歳、ついで内親王となり、長久中、一品に叙せられ、天皇の崩(寛徳二年正月十八日)によつて退下せられた。在任十年。狂齋院と稱せられた。後、左大臣源俊房に降嫁せられた。(二代要記、今鏡、榮華物語、齋院記)

顯子内親王

皇女。御母は東福門院。寛永六年八月誕生、初め女三宮と稱し、後、新殿を岩倉に建て、徙り、岩倉御所といつた。延寶三年閏四月薨、御年四十七。妙莊嚴院と號し、五月東山光雲寺に葬つた。(野史)

元子女王

宇多天皇の寛平元年二月十六日伊勢齋宮に卜定せられ、同九

年(天皇讓位)三月十九日退下せられた。在任九年。(二代要記、齋宮記、大百科事典)

元秀女王

宮人藤原氏の御所生。元祿九年七月誕生、龜宮と稱した。寶永四年十二月林丘寺に入つて剃髮し、寶曆二年六月五十七歳で薨せられた。普光院と號し、一條院に葬つた。(參閱、光子内親王(野史))

建春門院

御。平滋子。兵部少輔時信の女。御母は、民部卿顯頼の女。初め小辨と稱し、後、東御方と稱して殊寵があつた。仁安元年十月二十一日從三位に叙せられ、二年正月二日女御となつた。高倉天皇はその御所生である。同三年三月二十日高倉天皇の踐祚により皇太后と尊稱せられ、翌嘉應元年四月十二日院號を建春門院と進められた。深く佛法を信じ、最勝光院を創め、安元元年には、宿禰に賽せんため、草鞋をはき徒歩して熊野に詣でられた。都を出て四十日で本宮に到り、親ら胡飲酒を舞はれた。時に大雨俄に至つて衣裳悉く濡れ果てたが、顧みずして舞ひおさめられた。雨中の法樂として、『長門本平家物語』に傳へられる。二年六月遣豫、詔して天下に大赦し、常赦にては免されぬのまで放たれた。自ら立たざるこ

とを知つて、院號、年官年爵、封戸を辭し、薨髮受戒の上、その七月八日法住寺殿に空しくなられた。御年三十五。この時、さきに蓮華王院の側に創められた法華三昧堂が成つたので、これに葬り、勅して哀を擧げ、殺生を禁じ、高倉天皇親しく法華經を寫して、その冥福を修せられた。(女院小傳、長門本平家物語、百鍊鈔、玉海)

見性院

氏、法名を見性院といひ、名は傳はらない。『土佐國群書類從』舊記によれば、近江淺井氏の土喜助友與の女で、弘治三年に生れ、幼くして友與戦死の後、不破市之丞重純(伯母の夫)に母とともに養はれ、成長の後一豊に嫁したとあるが、年月を記さず、同書の一説には、天正の初め頃一豊の母法秀院の侍女として仕へたのを、法秀院勧めて妻室とせしめたとある。頗る内助の功があつたが、その馬代金を夫に與へた話は、『藩翰譜』『松窓漫錄』『常山紀談』等に出てゐる。右の中もつとも舊き出典たる『藩翰譜』には、「昔し、一豊、織田家に出で仕へし初、東國第一の名馬なりとて、安土に牽來て畜ふものあり、織田殿の家人等、之をみるに、誠に無双の名馬なり、されども價あまりにたつとして、買べき人一人もなく、むなしく牽て歸らんとす、其頃、一豊は猪右衛門尉

と申せしが、此馬ほしと思へども、求むることいかにも叶ふべからず、家に歸りて、世の中に身まつしきほど口惜き事なし、一豊、つかへのはじめなり、かゝる馬に乗りて見參に入んには、屋形の御感に預るべきものと、ひとりごとといひしに、妻はつく／＼と聞いて、その馬のあたひいか許ぞやととふ、黄金十兩とこそいひつれとこたふ、妻、さほどおもひ玉はんには、其馬もとめ給へ、あたひをば自らまぬらすべしとて、かゞみの蓋の底より黄金十兩とりいで、まぬらす、一豊おどろき、としごろ身まつしく苦敷ことのみおほきうちに此黄金あるともしらせ玉はず、いかにもこゝろつよく、つゝしみ給ひけむ、されども今此馬得べしとは思ひもよらざりきと、かつは悦び、かつはうらむ、妻、のたまふところことわりにこそ侍れ、さりながらこれはわらはが父、この家に參りし時、このかゞみの下に入玉ひて、あなかしこ、こはよの常のことに用うべからず、汝が夫の一大事あらんときは、參らせよとて給ひき、されば家まつしく、くるしむなどいふことは尋常のならひなり、それはいかにも忍びてもすぎなまし、まことに此度都にて御馬揃へ有べきなど聞ゆ、もしさもあらんには、此事天下の見物なり、君また仕へのはじめなり、かゝる時ならでは屋形にも傍輩にも、みられ給ふべきよしもな

し、よき馬めして見参に入給へと思へばこそ参らすれといふ、一豊頓て其馬もとむ程なく都にて馬揃の有しとき、織田殿、この馬御覽ありて、大におどろき玉ひ、あつばれ馬也、見事なり、何もの馬ぞと仰ありしに、是は東國第一の名馬なりとて、商人引て来りしが、あまりにあたひたつとくして、たれもかふこと叶はず、むなく引て歸るべかりしを、山内買得て候ひしと申す、信長聞し召、價貴き馬なり、當時信長が家ならで買ふべき人なしとて、奥よりたま／＼来りしをむなしく歸したらんには、無念の至りなるべし、其山内は年ごろ久しき浪人ときく、家もさぞまづしからんに、買得たることの神妙さよ、かつは信長が家の恥もすゞぎ、且はものふのたしなみ、いとふかしくかんじ給ふこと大かたならず、是より次第に身を起ししとぞ」とあり、他の諸書も大同小異であるが、前記「舊記」には出てゐない。舊藩士の記録に、織田信長の北國征伐（元龜元年）の前のこととしてあるが、これに従へば、夫人十四歳の出来事であり、これを、天正九年二月の馬揃への時とすれば、當時の一豊の祿高は五百石（寛政重修諸家譜には、天正五年播磨の國のうちにて二千石とさへある）であつて、黄金十兩に差支へはなかつた筈で、また、早く死んでゐる父が結婚の時金を與へるわけもなく、かく所

説に矛盾があるのは、この物語の史的價値を低下せしめてゐる。一豊との間に一女を儲けたが、天正十三年十一月二十九日の地震に六歳で亡つた。彼女はそれを嘆き、城外から捨子を拾つて来て育て、亡兒の菩提のために僧たらしめた。『山内一豊夫人若宮氏傳』（細川潤次郎）には、一説にその捨子は實は一豊の庶子で、彼女が捨子に托して連れて來たのであるともいふ。彼女の内助の功が最も發揮されたのは關ヶ原の役に際してであらう。慶長五年、一豊が家康に従つて會津征伐に赴いてゐる留守中、石田三成等は家康追討の兵を擧げた。此の時、大坂にある諸將の妻子を人質にせんとし、細川忠興の妻は、ために自盡したほどであるが、彼女も求めらるれば直に自殺せんと覺悟を定め（土佐物語、石田擧兵のことを、使を以て遙に一豊に報じたのである。『土佐物語』卷十八に、「去程に家康公七月六日江戸へ御着座、軍御評定ありて同二十一日御出馬、下野國小山に着御まし／＼ける所に、誰いふとなく、石田治部少輔叛逆して、御後より押寄するといひ出し、實否慥ならず、上下ひそめく所に、山内對馬守一豊の北の方より飛脚來りて、一通の文箱を捧げ、大坂の様體を告げられたり。其故を尋ね聞けば、石田三成が諸國の軍勢催促の廻文、對馬守大坂の館に到來す、一豊の北の方、彼廻文に一

通の文を添へて文箱に入れ、田中孫作といふ者を飛脚にして關東へぞ遣しける。一豊、野々村右衛門九郎孔政を使として、彼文箱を封の儘にて小山へ捧げ、上方騒動に就いて大坂妻女方より文箱差越し候、頃日の世上に候へば、嫌疑を憚り、私的の披見を遂げず、封の儘差上候とぞ申されける。則右衛門九郎を御前に召し、直に仰出されけるは、上方騒動の事、沙汰計りにて實否未だ慥ならざる所に、早速注進、殊更婦人の文、いかなる密事かあらん、其儀を顧みず封の儘差出したる心底、信實篤厚の忠義、傳へ聞く資泉を百飲すとも心を變ずべからず、天晴武士の手本なりと大に御感賞あり、則文箱を開かせ御覽あれば、彼廻文に、女の文を添へたり。老中奉行達、俄に反逆を企て、人數催促の廻文來り候程に、田中孫作に持たせ差下し候、常々の御志に候へば、申す迄はなく候へども、上様へよく／＼御忠節遊され候へ、構へて／＼我身事、御心苦しく思召候まじ、叶はぬせんには自害を遂げ、人手にはかゝり候まじなど、一紙の間に千萬の心緒を述べてぞ書かれける。夫といひ女といひ、相叶ひたる心入、諺にいふ鬼の妻には鬼女なりとは、斯様の事をいふべきと後迄も御沙汰ありけるとぞ聞えし。此注進を始として、諸方より早馬を打つて急を告ぐ。」とあるのは、多少事實に相違があつて、『關ヶ原軍

記大成』『關原始末記』等によれば、最初の注進は加賀の前田利長より來り、ついで伏見城代鳥居元忠から齎されたのであるが、『藩翰譜』に「かゝる所に上方又軍起り、國々の飛脚到來して急を告ぐ、されども未だ事の體分明ならず、こゝに來れる大名小名妻子從類悉く大坂にあり、人々の周章斜ならず、一豊が妻、さるさかしき人なれば、しかるべき侍くだせしにぞ、精しき事は知れにける。」とあるごとく、その報知によつて事の真相が一層明白にされたことは事實で、いはゆる彼女の内助の功が尋常一様のものではなかつたことが知られる。役後、一豊は軍忠によつて土佐國二十萬石を賜はつた。夫の歿後、慶長十一年強ひて京都に移住し、元和三年十二月四日、六十一歳で死んだ。（土佐國群書類從、山内一豊夫人若宮氏傳、藩翰譜）

賢章院

けんしや

〔二四五一—二四八四〕

鳥津齊彬の母。名は

周子。幼稱彌姫。受樂亭の號がある。池田治道の三女。母は伊達重村の女生姫。寛政三年十二月二十八日、江戸の因州藩邸に生れ、文化四年六月十七歳で鳥津齊興に嫁し、齊彬、齊敏、祝姫（山内豊熙の室）等四男一女を擧げた。和漢の學に通じ、女訓に深く、佛典に明るかつた。入與の時、多くの書籍のほか、具足があつたので、その故を尋ねると、太守不在

の時の名代たらん用意であると答へたといふ。彼女はまた雅刀をよくしたといふ。齊彬を生むや、人手(乳母)に渡すは女子の本分にあらずといひ、自らこれを乳育した。齊彬は、幼時素讀が出来ないと残念がつて泣き、傳役はこれがために讀後の賞詞を彼女に求めたが、彼女は三國(薩隅日)の主たるべき身が、勉學に苦しむのは當然であるといつて拒けたといふ。文政七年八月十六日歿、年三十四。芝大圓寺に葬り、大正六年鹿兒島に改葬した。(賢章院夫人遺芳録、郷土婦人の輝)

元正天皇

御名、日本根子高瑞淨足姬天皇。初の御名は、氷高内親王(日高皇女)、また飯高皇女、新家皇女とも稱した。文武天皇の皇子草壁皇子の女、御母は元明天皇。文武天皇の御姉である。文武天皇の八年に飛鳥淨御原宮に降誕、ついで内親王となり、二品に叙せられ、封一千戸を賜はり、後一品に進められた。御年三十六歳の時、御母元明天皇は、「今、皇帝の位を内親王に傳ふ。公卿百僚、宜しく悉に祇み奉じて、朕が意に稱ふべし」と詔りして讓位せられ、内親王は和銅八年九月帝位に即かれた。年號を靈龜と改め、大赦を行ひ、京畿諸寺の僧尼、天下諸社の祝部等に物を賜ひ、また鰥寡孤獨の者に賑恤を加へ、天下に今年の租を免ぜられた。天皇は、殖産

興業に意を用ゐたまひ、同年十月「國家の隆泰、要は民を富ますにあり。民を富ますの本は、務めて貨食に従ふ。故に男は耕耘に勤め、女は糸織を脩め、家に衣食の饒有れば、人廉恥の心を生じ、刑錯の化爰に興り、太平の風致す可し。凡そその吏民、豈易めざらんや。諸國の百姓未だ産術を盡さず、唯水澤の種を趣して、陸田の利を知らず、或は滂旱に遭へば更に餘穀なし。秋稼若し罷めば多く饑飢を致す。此れ乃ち唯百姓の懈懶、業を忘るゝのみに非ず、固に國司、教導を存せざるに由れり。」と詔し、百姓をして麥禾を兼ね植ゑて耕種に努め、また綾織に努めしめ、國郡司に命じては、部内の豊儉、農桑の増益を録して奏せしめられた。また教化に意を注ぎ、特に僧尼の墮落を誡め、屢々詔勅を發せられた。養老三年十一月には僧綱に詔して、「能を優るとし智を崇ぶは國を有つ者の先とする所、善を勸め學を奨むるは、君たる者の務むる所なり。」と宣し、同五年正月には、「文人武士は國家の重んずる所、醫卜方術は古今斯れ崇ぶ。宜しく百僚の内、學業に優游し、師範たるに堪ふる者を擢んで、特に賞賜を加へて、後生を勸勵すべし。」と詔して、高僧大德、文武の人々を顯彰せられた。『日本書紀』は實にこの時に成つた(養老四年五月一日)。勅を受けて舍人親王等が撰ばれたもので、國史

の第一をなすものである。また藤原不比等に刊修せしめられた「養老刊修の律令」も、養老二年に成つてゐる。今日傳はる『大寶律令』は即ちこれである。同三年十二月には始めて婦女の服制を定められ、六年十一月には女醫學博士を置かれた。これより先、靈龜三年九月、美濃國に行幸あり、還幸の後、「朕今年九月を以て美濃國不破の行宮に到る。留連まること數日、因つて當耆郡多度山の美泉を覽て、自ら手面を盥ふに、皮膚滑かなる如し。また痛き處を洗ふに除愈せずと云ふことなし。朕が躬にありて甚だ其の驗あり。又就いて之を飲み浴する者は或は、白髮黒に反り、或は類髮更に生じ、或は鬚目明なるが如し。自餘の痼疾咸く皆平愈す云々。」と詔して、養老と改元し、よつて美濃國司、當耆郡司に位を授け、普く孝子順孫、義夫節婦を旌表し、鰥寡孤獨、疾病の者を賑恤せられ、特に八十歳以上の老人には綿、綿、布、粟を賜ひ、百歳以上の者には更に位一階を授けられた。翌二年十二月には太上天皇のために大赦を行ひ、八虐の大罪をも赦された。同四年二月、隼人が叛したので、持節將軍大伴旅人をして討たしめられ、六月次の詔を賜はつた。「寇黨叩頭して争うて敦風に靡けり。然れども將軍、原野に暴露し、久しく旬月に延り、時盛熱に屬す。豈艱苦無からんや。使をして慰問せし

む。宜しく忠勤を念ふべし。」五年九月、天皇は内安殿に出御して、伊勢神宮に使を遣はして幣帛を捧げしめ、井上女王(皇太子の女)を齋宮とせられた。天皇はかく大小の政務に勵精せられたが、災異の起る毎に躬ら御身を責め、天地の譴責を以て、王者の政令の不善なる結果とし、諸臣をして直言の書を上らしめられた。「朕德菲薄にして、民を導くこと明かならず。夙に興きて以て求め、夜に寝ねて以て思ふ。身は紫宮に居て、心は黔首に在り。卿等に委ぬること無くんば、何ぞ天下を化せん。國家の事、萬機に益あらば、必ず奏聞す可し。もし納れざる有らば、重ねて極諫を爲せ。汝面従して、退いて後言あること勿れ。」かくて八年二月、皇太子首親王(聖武天皇)の御成長によつて、位を讓つて太上天皇となられた。天皇には『萬葉集』に六首の御歌がある。「橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常磐の木」の御製は、その母三千代に賜はつた橘宿禰の姓を、子の葛城王(諸兄)が繼がんことを請うて許された時、天皇から特に賜はつたものである。天平二十年四月二十一日崩御、御年六十九。添上郡佐保山陵に火葬し奉り、後、天平勝寶二年奈保山西陵に改葬せられた。(續日本紀、大日本史、歷朝神德錄)

あしびきの山行きしかば山人の我に獲しめし山づとぞこれ

ほととぎすなほも鳴かなむもとつ人懸けつゝもとな吾を哭し泣くも
元正天皇

元昌女王

元昌女王は贈左大臣基任の女京極局。寛永十四年誕生、

滋宮と稱した。慶安二年大聖寺に得度して元昌と號し、寛文二年九月五日二十六歳で薨せられた。芳桂院と號し、大觀苑寺に葬つた。(皇胤紹運録)

顯親門院

顯親門院は伏見天皇の後宮。

藤原季子。左大臣實雄の女、御母は賀茂能直の女、但馬局。

『増鏡』には、「この君(子)をばおしなべてのきはならずおぼすめり。」とあり、天皇の殊寵あつたことが知られる。永仁五年正月二十九日從三位に叙せられ、同七年花園天皇を生まれた。また、寛性法親王、朔平門院、延明門院を生まれた。天皇の崩あるや、文保元年九月九日出家して尼となり、圓常覺と號し、正中三年二月七日三宮に准ぜられ、同日院號宣下があつて顯親門院と進められた。建武三年二月十三日薨去、御年七十二。(増鏡、女院小傳)

元明天皇

元明天皇は、日本根子天津御代豐國成姬天皇。天智天皇の第四皇女阿閉皇女。御母は姪娘。齊明天皇の七年に降誕せられ

宮に行幸して、新京の百姓を鎮撫せられ、三年三月遷御せられた。即ち七代七十餘年間の帝都である。これより先、二年三月陸奥、越後の蝦夷が屢々良民を害したので、遠、駿、甲、信、越前、越中の兵を徴し、巨勢朝臣麻呂を陸奥鎮東將軍とし、佐伯宿禰石湯を征越後蝦夷將軍として遣はされた。出征に先だつて御製があつた。「丈夫の軛の音すなりものふの大ほまへつぎみ楯立つらしも」。天皇は曩に遷都の時、民心が大に動搖したので、その年の調租を免ぜられたほどで、御慈愛の心が深く、或は美濃安八郡の人國造千代の妻や、山背相樂郡の人狛部宿禰奈實が一度に三男を産んだ時、これに多くの稻、乳母一人等を賜ひ、或は孝子順孫、義夫節婦を表彰し、且、鰥寡孤獨の人たちにも屢々賑給せられた。かゝる事は尙多くの史實を傳へてゐる。五年正月の詔には、「諸國の役民、郷に還るの日、食糧絶乏し、多く道路に饑乏、溝壑に轉墮す、其の類少からず。國司等宜しく勤めて撫養を加へ、量りて賑恤すべし。若し死する者あらば、且く埋葬を加へ、其の姓名を録して本屬に報ぜよ。」とある。和銅四年九月、太朝臣安麻呂に勅して、天武天皇朝の舍人稗田阿禮が誦習した『帝王日繼』及び『先代舊辭』を撰述せしめられ、翌五年正月二十八日に至つて成つた。即ち『古事記』であつて、い

た。初め草壁皇子が天武天皇の皇太子に立たれた時その妃となり、氷高内親王(元正天皇)、輕皇子(文武天皇)を生まれたが、太子は位に即かずして薨去し、輕皇子は持統天皇の禪を受けて位に即かれたが、聖壽僅に二十五で崩せられたので、阿閉皇女はその遺詔によつて、慶雲四年七月、御年四十を以て踐祚せられた。踐祚後直に弊政改革の詔を發せられた。凡そ政を爲すの道は禮を以て先となす。禮無くんば言亂れむ。言亂るれば旨を失せむ。往年詔ありて跪伏の禮を停む。今聞く、内外廳前、皆嚴肅ならず。進退禮無く、陳答度を失す。斯れ則ち所在の宮司、其次を恪まず、自ら禮節を忘るゝの致す所なり。宜しく今より以後、嚴かに礼節を加へて、其の弊俗を革め、淳風に靡かしむべし。」その翌年正月、武藏秩父郡より初めて和銅を獻じたので、和銅と改元し、天下に大赦を行ひ、孝子義夫節婦を表彰し、且、百官に祿を賜はつた。同年二月、永久的な遷都の大業を決せられ、「方今、平城の地は四禽圖に叶ひ、三山鎮をなす。龜筮並に従ふ。宜しく都邑を建つべし。」と詔して、同九月、正四位上阿倍朝臣宿禰麻呂、從四位下多治比真人池守の二人を造平城宮司長官に任じ、十月伊勢大神宮に幣帛を捧げて平城宮造營の事を奉告し、ついで十二月平城宮の地を鎮祭せられた。その後、屢々平城

ふまでもなく我國に現存する最古の國史であり、史上に特筆すべき盛業である。更に翌六年には畿内七道諸國に命じて、草木禽獸魚蟲銀銅等の産物について、具さに其の色目を録し、なほ土地の沃瘠、山川原野の名號所由、古老相傳の舊聞異事等を誌して獻らしめられた。『風土記』が即ちこれである。また、殖産興業に意を注ぎ、四年六月には錦綾の織法を諸國に教へしめ、十月には蓄錢叙位の法を制し、六年二月には度量調庸義倉等の制を定められた。八年九月、位を皇女氷高内親王(元正天皇)に譲り、太上天皇と稱せられ、元正天皇の養老五年十月、右大臣長屋王、參議藤原房前を召して、次の遺詔を宣せられた。「朕聞く、萬物の生ずる、死あらずと云ふことなし。此れ則ち天地の理なり。奚ぞ哀悲すべけむ。葬を厚くして業を破り、服を重くして生を傷ることは、朕甚だ取らず。朕崩するの後は、宜しく大和國添上郡藏寶山雅良岑に於いて、窆を造りて火葬し、他處に改むること勿れ。謚號は其國其郡朝廷殿宇天皇と稱して、後世に流傳ふべし。又皇帝萬機を攝斷せんこと、一に平日に同じくし、王侯卿相及び文武百官輒く職掌を離れ、喪車に追從ふことなく、各本司を守り、事を視ること恒の如くせよ云々。」ついで、また「凡そ家に沈痼あれば大小安からず。卒かに事故を發すれば、汝卿

房前まさに内臣と作つて内外を計會し、勅に准じて施行し、帝業を輔翼し、永く國家を寧んずべし云々。」の詔があつた。その十二月七日、平城宮中安殿に崩御。御年六十一。遺詔に従つて奉葬、茶毘地には、常磐樹を植ゑ、たゞ四十五字を刻した石碑を建てられた。古來厚葬の風はこゝに熄んだのである。天皇には、「丈夫の」の御製の外に、天皇がなほ草壁太子の妃であつた頃、持統天皇の紀伊行幸に供奉せられて詠まれた「これやこの大和にしては吾が戀ふる紀路にありとふ名に負ふ勢の山」の御歌があり、ともに『萬葉集』に見えてゐる。(續日本紀、大日本史、原朝雄傳)

元瑤内親王

けんやう

光子女親王

建禮門院 けんれもんゐん (一八七三) 高倉天皇の中宮。平徳子。太政大臣清盛の二女。御母は贈左大臣平時信の女從二位時子。保元二年誕生、後白河法皇の御猶子となり、承安元年十二月二日從三位に叙せられ、同十四日入内、十六日女御(天皇の御年十一、女御十五歳)となり、同二年二月十日中宮に立たれた。治承二年六月、懷妊を以て内大臣重盛の第に遷られたので、月毎に嚴島の社に詣で、皇子の降誕を祈願してゐた清盛は、奏請して宮中に平産の祈禱を行ひ、使を四十一社七十四寺に遣はして奉幣供養し、輕囚流人七十三人を赦免した。

後白河法皇は産期に臨み、親しく産室に臨幸、千手經を親讀せられたが、かくて皇子の降誕あるや、幾くもなく皇太子に立ち、同四年四月、天皇の禪をうけて御年僅に三歳で位に即かれた(安徳天皇)。此の年六月、清盛は奏して都を福原に遷し、安徳天皇は百官を従へて遷御せられた。高倉天皇は、はじめ學を清原頼業に受け、頗る才藻を有せられたが、恰も清盛豪華の極盛時で、後白河法皇すらその掣肘を免れられることが出来なかつたから、天皇はあたら英才を抱かれながら虚位に備はるに過ぎなかつた。治承元年重盛死去の後、法皇は關白藤原基房と謀り、重盛の莊園を公收して、平氏の權を抑へんとせられたが、却て清盛の激怒を買ひ、法皇は鳥羽殿に遷御したので、天皇は深くこれを憂ひ、且、朝威振はずして時勢いよいよ非なるを慨し、遂に安徳天皇に讓位あつたのであるが、踰えて翌五年正月には、實算二十一を以て崩御せられた。然るに、その閏二月清盛もまた薨じ、中宮は八條の第より六波羅に徙り、十一月二十五日建禮門院の號を受けられた。壽永二年七月、安徳天皇は、源義仲の軍を避けて再び福原に遷り、更に西幸せられ、中宮もまた平家の一門とともに徙り徙はれたが、同四年壇の浦の戦が敗れて、悉く西海の波に沈んだのに、中宮のみは獨り助けられて、再び都に上られ

た。『平家物語』には、安徳天皇の御入水の事を叙したる後、「女院は、此有様を見參らせ給ひて、今はかくとや思し召されけん、御視御やき石、左右の御懷に入れて、海に入らせ給ふを、渡邊の源五右馬允呢、小舟をつと漕ぎ寄せて、御くしを熊手にかけて引き上げ奉る。大納言の佐の局、あなあさまし、それは女院にて渡らせ給ふぞ、過仕るなど申されたりければ、判官に申して、急ぎ御所の御舟にうつし奉る。さて大納言の佐の局は、内侍所の御からうどを取りて、海に入らんとし給ひけるが、袴の裾を舐に射つけられて、氣惑ひ仆れ給ひけるを、武士共取り止め奉る。」とある。都に還られてからは、吉田の中納言法橋慶惠(實憲律師)の朽坊に入り、ついで長樂寺において、阿澄坊印誓(阿稱房印西)を戒師として落飾、法名を眞如覺と號し、かくて昔、花山天皇の御所であつた野河の山莊に入り、遂に大原の寂光院に徙り住まれた。師典侍、阿波内侍等も雜髮して、薪こり水くみなどして仕へた。寂光院を比丘尼寺とすることは、此の時から始まつたのである。「岩根ふみ誰かは訪はむ楢の葉にそよくは鹿の渡るなりけり」と詠んだ大納言佐局の歌がよくその寂しい環境を語つてゐる。嘗て、中宮に仕へてゐた右京大夫も訪れて來たが、「今や夢昔やゆめとたどられていかにと思へどうつ」とぞな

き」と詠んだ。後白河法皇が、源頼朝を憚り、補陀洛寺御幸に名を假りて、寂光院を訪ひ終うたのは文治二年四月のことだ。『平家物語』灌頂卷の小原御幸に委しい。三年二月、源頼朝から、平宗盛の舊領、攝津の眞井、島屋の兩莊を獻する等のこともあつたが、順徳天皇の建保元年十二月十三日、寂光院において崩せられた。御年五十七。よつて背後の山陵に葬り、大原西陵と稱した。崩年及び實壽については異説があり、芝葛盛氏は、久壽二年誕生、建保元年崩、五十九歳としてゐる。いま寂光院には、後白河、安徳二天皇の宸影、門院の木像、侍女阿波内侍の張子の像、門院御繡髮の六字名號等を寺寶としてゐるが、その張子の像は實は門院の像で、門院が安徳天皇並に門院自身の反古でこれを造り、粉彩を施して內衣袈裟を著せたものであるといふ。(玉海、山槐記、源平盛衰記、平家物語、女院小傳、歴代皇紀)

建禮門院右京大夫

けんれもんゐん

平安朝末期の歌人。藤原伊行の女。伊經の妹。年若くして建禮門院に仕へた。宮廷生活が極めて華かなものであつたことは、彼女の家集によつてよく知られる。家集『建禮門院右京大夫集』は歌數三百五

かしがまし大原の里のくつわむし手綱ひかへて法のことゑき

十七首、承安四年正月一日中宮の方へ主上が渡御せられた時の歌に始まり、巻初には多く重盛、時忠、成親の妻、知盛、忠度、通盛、維盛、資盛等との交渉や贈答などが見え、殊に資盛との戀愛の歌は、全巻の中心をなしてゐる觀がある。散らすなよ散りなばいかにつらからし忍ぶの山の忍ぶ言の葉。治承の頃の歌には、重盛の死(三年)、成親の配流(元年)、安德天皇降誕(二年)を記し、その頃心ならずも宮仕をやめたとあり、壽永二年七月平家西奔の頃、資盛との別離には悲痛哀切な歌詠を残し、同三年二月十二日、その一族の獄門の折のことを「ちかくみし人々むなしくなりたる、かずおほくて、あらぬすがたにてわたさるゝ。なにかと心うくいはむかたなく云々」「あはれさればこれはまことかなほもたゞ夢にやあらむとこそおほゆれ」と記してゐる。重衡のとらはれ、維盛の入水と追憶、資盛の死を弔うて地蔵六體を描き、建禮門院を大原に訪ひまつる長文の詞書等は、殊に心深きものがある。彼女は建禮門院を訪ひまつた後、修行追善のために都を去つて、比叡、坂本のあたりをさまよつた。後、再び宮仕したと覺しく、なほ後鳥羽天皇が御父に似たまふこと、源通宗との交際、建仁三年十一月俊成九十賀等のことを記してゐる。家集が自選であることは巻頭歌の詞書及び巻尾のそれによつ

て知られる。多くの長文の詞書を有し、平氏の公達との交渉、平氏没落前後の見聞を綴り、哀切の歌調を加へて一卷自ら平家哀史をなしてゐる。この點また史實的價値を有する。歌は殆ど技巧を弄したあとなく、眞情の流露を示し、佳作に乏しくない。『新勅撰集』(二首)『玉葉集』(九首)等に採られてゐる。(建禮門院右京大夫集)

戀ひしのぶ人にあふみの海ならば荒き波にも立ちまじらまし
思ふどち夜半の埋火かきおこし闇の現に圓居をぞする
我がこころ浮き立つまゝに眺むれば何所を雲の果としもなし
右京大夫

二

高敦遠妻

とほのつまつ

〔一七四七—一七九二〕 讃岐守行家の女。

二十歳の頃より佛法に歸し、柔和の質で、婦徳があつた。嘗て、彌陀の像を作り、誓ひを立て、死期を知らんとした。一

夜夢に沙門が現はれて一串の青珠を興へて、汝の命數であるといふので、數へると四十五顆であつた。天承二年四十六歳を迎ふるや、「我已に串珠を盡くす、豈今歳を過ぎんや。聞く太后歡子は丈六の佛像を造りて安養に生ると、妾甚だ之を慕ふ。」といひ、丈六の無量壽の像を作り、七月一日沐浴淨衣して、靜に像を拜したまふ終つた。(元亨釋書)

皇嘉門院

くわがもんいん

〔一七八一—一八四一〕 崇徳天皇の中宮。

藤原聖子。關白忠通の女、御母は大納言藤原宗通の女從三位宗子。大治三年十一月九日從三位に叙せられ、四年正月十六日女御、五年二月二十一日中宮となられた。御冷泉天皇の世から八十餘年間は、攝關の女で、皇后に立つことはなかつたから、これを以て藤氏中興と時人は稱した。しかし御子がなかつたので、鳥羽天皇の皇子體仁親王(近衛天皇)を鞠養せられた。嘗て中宮の御所で、小弓の遊びをせられた時、扇紙を草紙のかたに作つて、それに「これを見ておもひも出でよ濱千鳥あとなきあとを尋ねけりとは」と書きつけられた。中宮の女房と内の御方の女房とが、互に歌合せをしようといども合つた頃、崇徳天皇が、我が方の女房に代つて、「ひさかたの天のかぐ山出づる日も我が方にこそ光さすらめ」と詠んで、中宮の御方に差遣はされたことなどもあつた。體仁親王は保

延五年五月美福門院の御所生で、その八月には皇太子となられたが、永治元年十二月、天皇は鳥羽法皇の御意により、此の時三歳の皇太子に讓位あり、中宮は皇太后となり、久安六年二月二十七日には院號を皇嘉門院と進められた。久壽二年近衛天皇の崩あるや、崇徳上皇はその皇子重仁親王の即位を望まれたが、美福門院等は、雅仁親王を鳥羽法皇にすすめて、遂に後白河天皇の踐祚となつた。ここに上皇は御憤りを發せられ、保元の亂を見るに至つたが、やがて上皇は讃岐國に遷られることとなり、中宮は憂悶の餘、落飾(元年十月十一日)して尼となり、清淨慧と法名せられた。『新古今集』の「何とかや」の御歌は、その頃の詠であらう。安德天皇の養和元年病を發し、僧湛慶を召して受戒、同十二月五日九條殿において崩せられた。御年六十一。最勝金剛院に奉葬。中宮は豫め石の卒塔婆を造り、その銘を親ら書かれてゐたといふ。遺令により、葬儀及び冥福を修するの式を凡て省約に従はしめられた。(大日本史、歷朝坤徳錄)

皇嘉門院

皇嘉門院別當

くわがもんいんべつたう

平安末期の歌人。大宮權亮源俊隆の女。皇嘉門院に仕へた。その作は、『千載集』『新勅撰集』

『玉葉集』『新千載集』『新拾遺集』等にとられてゐる。(千載集)

難波江の蘆のかりねの一夜ゆゑ身をつくしてや戀ひわたる

廣義門院

〔一九五二—二〇一七〕 後伏見天皇の後宮。花園天皇の准母。藤原寧子。左大臣西園寺公衡の女。御母は左馬介光保の女。正安四年伏見天皇の御猶子となり、嘉元四年四月十五日後伏見上皇の宮に入られた。時に御年十五、上皇十九歳であつた。二年を経て延慶二年正月從三位に叙せられ、三宮に准じ、且、院號を廣義門院と進められた。正和二年、量仁親王、元亨二年、豐仁親王を生まれ、また景仁親王、珣子内親王(新室町院)及び一皇女を生まれた。元弘元年(後醍醐天皇笠置遷幸、量仁親王踐祚)の頃からは、天下騷然として人心不安に陥つたのであるが、同三年五月、後醍醐天皇の詔を以て足利尊氏六波羅を攻むるや、上皇は近江の太平護國寺に幸し、留ること十數日、やがて京都に還つて六月持明院に法體となられ、延元元年四月六日には、四十九歳を以て崩御になつた。かかる間に、量仁親王は光嚴院となり、ついで豐仁親王は光明院となり、門院は京師にあつて尊貴を加へられた。夙に佛教を信仰せられ、正和四年十月には今小路

皇嘉門院別當

殿に青蓮院慈道法親王により受戒、延元元年二月には落飾して尼となり、後、伏見に大光明院を建てられた。正平六年十一月、崇光院吉野に入りて京師に主なき時、足利尊氏は政を門院に奏してこれを決した。後光嚴院(光嚴院の第三皇子)の踐祚後も、尊氏は門院の政務を聽かんことを請うたが、辭して聽かれなかつた。正平十二年閏七月二十二日暴に空しくなされた。御年六十六。御一生多事の間に詠まれた歌も多く、『玉葉集』『新千載集』『續千載集』等に見える。(大日本史、歴朝神代録)

契ありて逢ひみむことも知らぬ世にはかなく人を思ひそめぬる

おのづから拂ふ人なきふるさとの庭はあらしに任せてぞみぬる

皇極天皇

齊明天皇

瑣子内親王

章徳門院

孝子内親王

禮成門院

高臺院

豐臣秀吉の室。北政所と稱した。尾張の人、杉原定利の女で、織田信長に仕へた淺野長勝に養はれた。幼名をねねといひ、後に寧子、吉子といつた。長勝が僚友の前田利家から屢々彼女を望まれ、

彼女が肯んじないので困つてゐるのを藤吉郎秀吉が聞いて、詐つて彼女は既に約したものであるから斷念したがよいといひ、それは何人かと追究されて、窮した餘り實は己れであるといつた。そこで利家が仲人となり、彼女も敢てそれを否まなかつたので、柴田勝家から信長にいつて許され、時に甚だ貧困であつた新郎は、新婦を簀子の上に疊を敷いて迎へ、瓦缸敗蓋を以て相獻酬した。仕へて恭敬、よく困難に處した。既にして秀吉海内を統一して、その變するところも多かつたが、みなこれを別殿に置いて、必ず彼女と同じく居つた。彼女も折に觸れては、「藁席敗蓋の時を忘れ給ふこと勿れ」といつて、秀吉を戒めたといふ。三宮に准ぜられ、從一位を賜はり、秀吉の死後は、薙髮して京都三本木に住み、只管その冥福を祈つた。家康も特に厚遇し、元和元年には沐浴の料として河内の地一萬六千石を贈り、かつ高臺寺を建てて、大にその歡心を買つた。寛永元年九月十六日薨去、年七十六(一説に八十三)。高臺寺に葬つたが、幕府はその一萬六千石を收め、三千石を木下利三に與へ、高臺寺には五百石を施入した。(高臺寺過去帳、大日本時代史)

幸田彦右衛門母

織田信孝の乳母。天正十一年三月、柴田勝家に與して信孝が秀吉に叛した時、彼女は信孝

の母とともに人質となつてをり、當然殺されることとなり、書を以て、「凡そ天下の人、君に仕へて忠を盡すは則ち天地の大義なり。父母の先ちて死するは即ち理の常なり。我、國家の爲に命を失ふと雖も悲歎する勿れ。汝、義士孝子の道を守り、善く君に仕へ、老母の故を以て貳心を懐く勿れ。」と彦右衛門兄弟にいひ送つた。秀吉は暫く刑をゆるめ、兄弟を招かした。應ぜざるを以て遂にこれを磔殺した。後、兄弟は秀吉の將、氏家、稻葉と戰つて死んだ。(明良洪範、比賣鑑)

河内女王 萬葉の歌人。高市皇子の女。左大臣橋家に元正天皇が行幸せられて宴を催された時獻つた歌がある。「橘の下照る庭に殿たてゝさかみづきいます吾が大君かも」。

河内百枝娘子 萬葉の歌人。大伴家持に贈つた二首がある。「はつはつに人を相見て如何ならむいづれの日にかまたよそに見む」。

勾當内侍 後二條天皇の宮人。平氏。小納言棟俊の女。掌侍となり、勾當内侍と稱し、壽成門院を生まれた。

勾當内侍 後醍醐天皇の勾當内侍。新田義貞の妻。一條經尹の三女。行房の妹。義貞嘗て禁中に宿衛し、偶々内

侍を見て、私に心動き、「我袖の涙に宿る影ぞとも知らず雲井の月は澄むらん」と詠じたが、天皇、これを察し給ひ、遂に内侍を賜はつた。延元元年、足利尊氏が京師に破れて西奔したる時、義貞は内侍との別を惜んで追撃の機を失つた。同二年、義貞越前金崎に赴くに及び、近江の堅田に匿れたが、その戦死を聞くや、琵琶湖に投じて死んだ。一説には嵯峨の奥に尼になつたともいふ。内侍のことすべて『太平記』の假作とする説がある。(太平記)

江侍従

歌人。赤染衛門の女。父は大江匡衡。藤原道長に仕へ、後、丹波守高階業遠に嫁した。作は『後拾遺集』

(五首、『金葉集』以下の勅撰集にある。「紫のくも」は、陽明門院立后の時に詠んだ歌。(後拾遺集)

紫のくものよそなる身なれどもたつときくこそうれしかりけれ

をぐら山たちども見えぬ夕ざりに妻まどはせるしかぞ鳴く

なる

江侍従

督局 龜山天皇の宮人。姓氏不詳。初め天皇の外祖母。准三宮藤原貞子に仕へた。僧道性(醍醐寺座主)を生まれた。

(皇胤系圖)

高内侍

高階貴子

日に出産した者に布一端、綿二屯、稻二十束を賜ひ、大赦を行はれた。幾くもなく基王は皇太子に立ち、天皇は勅して封一千戸を夫人に賜はつたが、更に天平元年八月十日、夫人は皇后に册立せられた。皇族に非ざる立后の初例とせられる。ために天皇は特に詔勅を下された。皇后は、佛法を篤信せられ、常に慈善救恤に傾心せられた。天平二年四月始めて皇后宮職に施薬院を置き、令して諸國の藥草をあつめて病者に施薬し、また悲田院を併置して飢病者を療養せしめられ、また同年發願があつて、山階寺(興福寺)に五重塔を造營し、六年には先妣の冥福のために山階寺の西金堂を建立し、更に聖武天皇の東大寺(總國分寺)建立に倣つて法華寺を建立して、國分尼寺の總寺に比せられた。天武天皇の時から、一切經律論書寫のことが漸く盛に行はれるやうになり、聖武天皇の朝に至つて益々繁くなつたが、これも皇后が殊に意を用ゐられたのによるので、このことは單に佛教の興隆に資するところにあつたのみならず、一面には大に文運の開發を促すことにもなつた。就中、書道の發達を來し、紙墨の製造、巻帙の裝幀等の進歩を助けたことが、少くなかつた。當時一切經律論は五千餘卷があり、皇后は發願してこれを書寫し流布せしめられたが、これは決して尋常の事業ではない。而も皇后の發願

光範門院

後小松天皇の後宮。藤原資子。贈左大臣日野資國の女。叔父藤原三司資教の養女として、應永七年宮に入り、八年實仁親王(稱光天皇)、十一年龍樹寺宮を生まれた。十九年天皇は實仁親王に讓位せられた。二十四年正月從二位に叙せられ、三十二年七月二十九日、准三宮、同日院號の宣下があつて光範門院と號した。永享五年十月二十日後小松法皇の崩あるや、薙髮してその冥福を祈り、同十二年九月八日薨去、御年五十七。(大日本史、大百科事典)

光明皇后

聖武天皇の皇后。御名、安宿媛。法名、滿福。後に百官及び僧綱が上表して、中臺天平應眞(仁正皇太后)と稱し、體貌妹麗、光耀あるによつて光明皇后の名を得られた。贈太政大臣藤原不比等の三女。御母は贈正一位橘三千代。されば自ら藤原三娘とも書かれてゐる。文武天皇の夫人宮子娘の異母妹に當られる。靈龜二年、聖武天皇がなほ東宮であつた時、御年十六で妃となり、翌々養老二年阿倍内親王(孝謙、稱徳天皇)を生まれ、神龜元年聖武天皇の即位により、夫人となり、且、從三位に叙せられ、ついで正三位に進んだ。同四年閏九月、皇子基王の誕生あるや、天皇は勅して百官に物を賜ひ、また天下の婦女で同

にかゝるものは、筆蹟の精妙優麗を以て知られ、後世これを御願經と稱し、現に正倉院の聖語藏に數百卷を存し、世間に流傳するものも少くない。天平感寶元年七月、天皇は位を皇太子阿倍内親王に讓られた。さきの基皇太子は、立太子の翌年天薨せられ、内親王は天平十年皇太子に立たれてゐたのである。皇后は時に御年四十九で落飾せられ、翌年二月東大寺に詣でて封五千戸を施入し、三寶に供養せられた。天平勝寶八年五月、聖武太上天皇崩御、皇后(仁正皇太后)は大喪に服せられ、六月二十一日の七七日に當り、太上天皇の御遺物を録して東大寺に施入し、親ら御願文を製して、その聖徳を宣揚して冥福を追薦し、また孝謙天皇の幸榮を祈念せられた。正倉院の寶庫に現存する千二百年前の文化の遺産は、實に此の供養施入によるのである。淳仁天皇の天平寶字四年六月七日崩、御年六十。天下に哀を擧ぐること三日、大和添上郡佐保山に奉葬した。奈良朝の燦爛たる人文の發達は、數代以前より隋唐の文物を輸入移植した結果であるが、所謂咲く花の匂ふが如く空前の盛觀を呈したのは、聖武天皇の熱心なる經營に負ふものが多い。佛教の興隆は歷朝繼續の國家的事業であつたが、此の代に至つては大成せられたのである。聖武天皇の經營は素より光明皇后の内助によること著大であつ

て、殊に東大寺、國分寺、國分尼寺の設立は、何れも皇后の御勸發に基いてゐる。皇后は夙に隋唐の文物をわが國に移入することに意を用ゐられた。すでに幼少の頃市に出て、商賈に唐來の稱尺を用ゐることを教へられたので、父の不比等は、「汝國を助け風を宣ふるに當らば、權衡稱尺久しからずして天下に行はれむ」といつたことがある。光明皇后については、『大日本史』を始め、諸書によつて、附會捏造の記事が少からず流布されてゐる。殊に平賀源内の如きは、「后溫室を建て、誓を發して千人の垢を除き、親ら病者の膿を吸ひ玉へり」の『元亨釋書』の記事によつて醜惡なる説をなし、平田篤胤も『俗神道大意』に『日本後紀』を引いて、僧善珠のことに及んでゐるが、『日本後紀』は缺本で、この項を缺いでをり、『日本逸史』がこれを補つて善珠のことを記してゐるが、皇后に關することはない。また、聖武太上天皇は崩御に當り、皇后に政務を委任せられ、朝臣を召して皇后を輔翼すべき遺勅を傳へられたから、以後五年間は孝謙天皇の治世ではあつたが、事實に於いては太后の攝政であつた。この間、政治上の重大事件は、太上天皇の遺詔によつて皇太子に立たれた道祖王の濫行を責められて、早くも翌年これを廢して大炊王（淳仁天皇）に代へ、また藤原仲麻呂を登用せられ、ここに、橋

奈良唐の廢立を目的とする陰謀が企てられたことであり、この陰謀は仲麻呂のために鎮壓せられたが、後、仲麻呂の叛となり、ついで僧道鏡の皇位覬覦等の事件が起つたため、これらに就いても兎角の評をなすものもあるが、三浦周行はこれを辯じて、「光明皇太后の攝政（事實上の）について考ふるものは、先づ女性の政治に對する先天的非難から離脱するを要する。此種の非難は支那的思想であつて、決して固有のものではないことは、神話に傳ふる天照大神の御事蹟を始め、古代に女帝の多くましますことがこれを證してゐる。當時唐には則天武后が出で、新羅にも善德女王や眞德女王が出たけれども、我女帝より時代に於て後れてゐるのである。後世の史家が是等女帝の踐祚を以て、何れも事情已むを得ざるに出でた破格の出來事と看做すは、亦時代思潮を辨へぬ提はれたる史斷と謂つべきである。大體、男尊女卑の甚しきことそれ自身、支那傳來の思想に基くものであつて、我國では中古唐制を模倣して、律令を編纂するに當つても、大に此點に斟酌を加へて唐のそれよりも女權を伸張してゐるが、こゝには説かぬ。既に女流の政治家に同情を有たぬやうになつた後人は、後から／＼と種々の附會捏造の説をなして、難辭を附けやうとする。特に獨身の女性にとつて、一弱點ともいふべき性的缺陷

を附け狙つて執念く追ひ廻さうとする不良史家を少からず見

受けるのは苦々しき事共である。これは獨り史家といはず、

一般日本人の悪い癖である。光明皇后の如きも、堂々たる大

日本史から、内道場にあつた支助と怪しいと睥まれてゐる。

而も歴とした證據があるかといへば、只、今昔物語や、源平

盛衰記、さては興福寺略年代記などいふ如何はしき後世の編

纂物に過ぎないからお話にならぬ。押勝（〇仲麻呂）の失脚はやが

て道鏡の擡頭となつて、我國史上、最も忌まはしき事件の勃

發を見たことも、稱徳天皇以來、永い間、女帝の御跡を我國

史に絶つに至つたことも、皆事實に相違ないが、是等の惡聯

想からして、光明皇太后の政治を盲目的に非難するは、決して

公正の見といはれない。政争は何日の時代にもあるから、

強ち押勝登用の罪に歸すべきではなからう、況んや皇太子廢

立の問題以外に於て、皇太后攝政時代の善政と認むべきもの

少からぬに於てをや。」といつてゐる。皇后の御歌は『萬葉

集』に三首見える。『拾遺集』にある佛足石歌は、誤傳であ

る。（續日本紀、史海、中央史壇、東大寺要録、大日本史）

吾が夫子と二人見ませばいくばくかこの降る雪のうれしか

らまし
香夢（むら） 畫家。句臺嶺の妻。尾張の人、後、江戸に移り、

白描の美人畫をよくした。（鑿定便覽）
紅蘭（らん） 〇梁川景婉
香琳院（りん） 〇阿里衛方
小池池旭（あさひ） 〔二四八四—二五三八〕 畫家。初め、紫雪と號した。加賀の人。江戸に出て大沼枕山の義妹となり、畫を以て諸國を遊歴した。常に男子を嫌ひ、旅宿では室外に注連繩を張つたといふ。京都守護職會津侯邸に逗留中、偶々辰の役に會してそのまゝ若松に隨ひ、童女隊の組織せらるゝや進んでこれに加はり、遂に官軍に捕へられたが、自ら畫家たることを證明して放たれた。その後も遊歴を續け、明治十一年三河豊橋で歿した。年五十五。（古今雅俗石亭畫談）
小一條局（こいちょう） 後光明天皇の後宮。左近衛中將庭田重秀の女。御名は秀子、後に源大典侍と稱した。後光明天皇は、明正天皇の禪を受けて踐祚せられ、近世における英主であつた。幼より學を好み、大義に通ぜられたことは、その御日課を記されたる宸翰に徴しても明かで、程朱の學の開けたのは藤原惺窩の功なりとして、慶安四年九月『惺窩文集』に御製の序を賜はつたこともあり、漢詩の御集を『鳳啼集』といひ、平素和歌及び『伊勢』『源氏』等の物語を斥けられた。後水尾上皇が詠歌を勸められるや、直に和歌十首を獻じ、上皇

の未だ御覽終らざるに更に忽ち十首を獻じて、上皇を驚かせられたといふことなども傳へられてゐるが、承應三年九月二十日寶算僅に二十二で崩御になつた。されば皇妃は間もなく薨髪して、榮雲院と號せられた。孝子内親王(禮成門院)はその御所生である。生薨年未詳。(歷朝地徳録)

小出恵知

〔二四〇九—二四八一〕 賢婦。幕臣淺田共

常の四女。二十一歳で小出大助に嫁した。大助は卑賤より崛起して、郡宰に歴遷し、良吏といはれ、江戸二城留守に至つて終つたが、その間、彼女はよく内助の功を勵み、家事を修め、子弟を教育して倦まなかつた。文政四年、夫に二年おくられて歿した。年七十三。(續近世實語、事實文編)

小馬命婦

平安朝の歌人。駒命婦ともいふ。攝津守

藤原棟世の女。上東門院彰子に仕へた。後一條天皇の時は内侍であつた。その作は『拾遺集』以下の勅撰集に入り、『小馬命婦集』(自撰)には六十三首を収める。(小馬命婦集)

たとへつゝ岸の邊に身を捨て、つながらぬ舟ものどけかりけ

小馬命婦

後閑菊野

〔二五二六—二五九一〕 教育家。東京女子

高等師範學校を出で、明治十七年より大正七年まで同校に教鞭を執つた。大正七年四月久邇宮家に良子女王(今上天皇の

藤原義懐、藤原惟成等を信任して庶政を委決せられたので、紀綱頗る振肅した。殊寵あり、故事に、女御は宮中において修法することを得ないのを、特に桂芳坊においてこれを許したので、後宮みなこれを妬忌して、寵愛此の如きは古より未だ聞かざるところ、福長かるべからずと私語するものもあつたといふ。既にして懐妊せられ、三月に至れば宮を出づる慣例であるのを、天皇はこれを出すに忍びず、五月に及び始めて爲光の第に就かしめた。かくて宮中においても、里第においても、修法の絶ゆるひまがなく、御使は櫛の齒をひくやうであつたが、天皇尙思ひ措かず、召して宮中に入れ、常にその側に臥して、或は膳を御せず、留むること八日、爲光固く請うてこれを出したが、女御の病ますます劇しく、天皇もまたこれがために御起居常ならざるに至つた。寛和元年七月、御分婢に至らずして薨去。されば天皇は全く御悲歎に暮れられ、夜一夜、御殿に籠つて思しなげかれた。折しも雁の空を渡るを聞召し、「なべて世の人よりもを思へばや雁のなみだの袖につゆけき」と御製があつた。特に從四位上を贈り、ために相撲節を停めた。天皇は以後、心を佛法に傾けられ、深く世縁を厭ひ、嬪御の進見するものもまれに、女御の書を藏めて御身を離されなかつたが、偶々藤原氏が權勢を争うて

皇后)に奉仕し、大正十三年致仕、櫻蔭高等女學校の創立とともにその校長となつた。昭和六年六月二十一日歿、年六十六。(昭和六年史)

弘徽殿中宮

〔一六七六—一六九九〕 後朱雀天皇の

中宮。藤原娘。敦康親王の女。關白頼通の養女。長暦元年正月七日宮に入り、同二十九日女御となり、正四位下を授けられ、三月一日皇后の宣下があつて中宮と稱した。弘徽殿にあつたので、弘徽殿中宮の稱がある。寵、後宮を傾け、祐子内親王、祿子内親王を生まれたが、長暦三年八月二十八日、御年二十四で崩せられた。(扶桑略記、榮華物語、今鏡)

弘徽殿女御

〔一五九三—一六〇七〕 村上天皇の女

御。藤原述子。太政大臣實頼の二女。天皇の東宮たりし時、宮に入り、位に即きて女御となり、弘徽殿女御と稱した。天曆元年懷妊せられたが、痲瘡に罹り墮胎のやむなきに至り、遂に東三條の第に卒去せられた。御年十五。葬送に當り、使を遣はし、從四位上を贈られた。(日本紀略、一代要記)

弘徽殿女御

〔一六四五〕 花山天皇の女御。藤

原氏子。太政大臣爲光の女。御母は右近少將敦敏の女。永觀二年十月宮に入り、十一月七日女御となり、弘徽殿に住まれた。花山天皇は永觀二年十月十日御年十七を以て即位、初め

ある折柄、道兼(道長の兄)が強いて勸め奉り、翌二年六月二十三日夜、潜に宮を出て、東山の花山寺に入り、落飾出家せられた。「あはれなる事は、下り在しける夜は藤壺の上の御局の小戸より出させ給けるに、有明の月甚う明かりければ、顯證にこそありけれ如何すべからむと仰せられけるを、然とて止せ給ふべきやう侍らず、神璽寶劍渡り給ぬるにはと粟田殿(○道)の騒し申し給ひけるは、未だ帝出させ給ざりける前(○道)に、神璽寶劍手から取て東宮の御方に渡し奉り給ひければ、歸り入せ給む事は有まじく思して、然申せ給ひけるとぞ。牙き影を眩く思召しつる程に、月の顔に叢雲の破りて些く暗がりゆきければ、「我が出家は成就するなりけり」と仰せられ、歩み出させ給ふ程に、弘徽殿女御の御文の、日來破り殘して御眼も放ず御覽しけるを思し出て、少時とて取りに入せ給ける程ぞかし、粟田殿の如何に斯は思し立ぬるぞ、唯今過なば、自然障得も出で參で來なんと虚泣し給けるは。」と『大鏡』には記してゐる。(日本紀略、大日本史、榮華物語、大鏡)

弘徽殿女御

〔一五九三—一六〇七〕 藤原生子

弘徽殿女御

〔一五九三—一六〇七〕 藤原生子

後京極院

〔一一九三—一二〇三〕 後醍醐天皇の中宮。藤原禧

子。太政大臣西園寺實兼の三女。御母は、從二位隆子。天皇

の東宮たる時入りて妃となり、權子内親王を生まれ、天皇即位の後、文保二年四月二日從三位に叙せられ、七月二十八日女御となり、天應元年八月七日立つて中宮となられた。嘗て清涼殿の觀櫻の時、中宮の方からその花の一枝を折らしめられたのを天皇が召されて、「九重のくもゐの春の櫻花秋の宮人いかで折るらむ」とあつたので、中宮は「手折らずば秋の宮人いかでかは雲居の春の花を見るべき」とお返しがあつた。嘉曆二年御懷妊のことがあつて、常磐井殿に出られ、内外大に法を修して祈つたが、遂にそのことなくして終つた。實はこれによつて北條氏を咀詛せられたものとも傳へる。元弘元年、天皇は俄に神器を持って奈良に幸し、また笠置に遷り、やがてここにも止り難くして、僅に藤房、師賢等を從へたまま、行方も知らず立ち出で給うた。南禪寺の僧、嵩山居中が時事を詠じて、「瓊樓玉殿無明主、兩笠煙霧見至尊」といつたのは、蓋し此の時の實況を語るものであらう。されば中宮も宮にとどまるべくもなく、當時伊勢齋宮に定められ、野宮にあつた權子内親王(時に十七歳)のもとへ御身を寄せられた。幾くもなく、天皇は六波羅に還御し、遂に元弘二年三月都を出て隱岐に遷らるゝこととなつた。中宮は夜に紛れて六波羅の御所へ行啓せられ、中門に車を寄せてお別れを惜しま

れた。「此上の思はあらしつれなさの命よさらばいつをかぎりぞ」。その年五月二十日に、光嚴院より禮成門院の號を進められ、八月三十日落飾あつたが、明けて三年六月天皇隱岐より還り、院號を止め、勅して中宮に復し、髪を貯へしめられた喜びの程も空しく、御病に罹られ、五壇法の薰修も甲斐なく、その十月十二日には崩せられた。謚して、後京極院といふ。中宮の歌は、當時の勅撰集以下に多く採られてゐる。また琵琶をよくせられた。元弘の役に、天皇が暫し兵患を避けて野宮の傍に潜居あつた時、中宮は琵琶を參らすとて、僅かなる物の端に、「思ひやれ塵のみつもる四つの緒にはらひもあへずかかる涙を」の御歌を添へられた。天皇のお返しには、「かきたえしねをたちはてて君戀ふる涙の玉の緒とぞなりける」とあつた。權子内親王は天皇の崩御の翌興國元年五月、御年二十六歳で出家せられた。(女院小傳、瓊鏡、太平記、歴朝御傳、大日本史)

小督局 つがの 高倉天皇の宮人。權中納言成範の女。『長門本平家物語』には、藤原通憲の季女で、三條の小河にあたので、小河殿と稱せられたとある。『平家物語』によれば、禁中第一の美人で、ならびなき琴の上手であつた。初め冷泉少將隆房と契つたが、後、建禮門院より宮に進御せしめたので

ある。そのため隆房は憂悶、病を得るまでになつた。隆房は清盛の女婿であり、寵幸の衰へた建禮門院は清盛の女に當つたために、清盛は小督を召出して失ふべしと沙汰したので、小督は我身はともあれ、主上のおんために心を苦しめ、遂に内裏をぬけ出て、嵯峨野に身を落めた。ここにおいて、天皇は懐々とたのしみ給はぬこととなつたが、時の清盛の權威を憚つて、これを御慰めするものもなかつた。治承三年八月十日の夜といふに、北面の士彈正少弼仲國が、君の仰せを承つて、明月に鞭を上げ、嵯峨野のほとり、片しほり戸したる家といふをたよりに、小督を尋ねて行つた。仲國は日ごろ御前で琴のしらべのある時、笛の役を勤めてゐたので、「此の月のあかさに君の御事思ひ出で參らせて琴弾き給はぬことはよもあらじ」とて求める中、漸く龜山のあたりでその在處をつきとめた。『平家物語』には、「龜山のあたり近く、松のある方に幽に琴を聞えける。峯の風か松風か、尋ぬる人の琴の音か、おぼつかなくは思へども、駒を早めて行く程に、片折戸したる内に、琴をぞ弾きすまされたる。控へて是を聞きければ、少しも混ふべうもなく、小督の殿の爪音なり。樂は何ぞと聞きければ、夫を想ひて戀ふと讀む、想夫戀といふ樂なりけり。」とある。それは局が、ふと明日は大原の奥へ思ひ立

つたその名残の宵であつた。仲國は供に具した馬上吉上などに命じて固くその家を守らせ、翌日、綸旨を承り、局を牛車にて再び内裏へ迎へ入れた。宮では清盛に覺られぬやうにと、局を内裏のいと幽かなるところに忍ばせられ、間もなく局は皇女を擧げた。坊門院(權子内親王)である。果して清盛はこれを知つて憤り、局を捕へて尼にして追放した。時に二十三歳。『長門本平家物語』には、耳と鼻を削つて放つたとさへある。それより嵯峨野の奥に佗び暮らされたといふ。(平家物語、源平盛衰記)

小室相局 うさむら 刑部卿藤原實賢の女。上西門院の女房。年十六といふ安元の春の頃、門院に従つて法勝寺に花を見た時、同じ供奉の人平通盛(越前三位)に見初められ、三年間何彼と消息を受けたが靡かなかつた。ある時女院へ參る車の中に手紙を投げこまれたのを、捨てもならず袴の腰に挟んでおいて落したのを、門院に拾はれた。「我が戀はほそ谷川の丸木橋ふみかへされて濡るゝ袖かな」とあつたので、門院自ら、「たゞたのめ細谷川のまる木橋ふみかへしてはおちざらめや」と返事を書かれて、やがて女房を通盛に賜はつた。平氏はの西に奔るや、彼女もまた従つたが、壽永中、一谷の軍潰え、平氏は倉皇として海に浮んで八島に走つた。その船中、通盛

の家人瀧口時貞から、夫の討死を聞き、哀慕の極、遂に身を投げてその後を追ふに至つた。(平家物語、源平盛衰記)

後櫻町天皇

〔二四〇〇—二四七三〕 第一百七代

天皇。櫻町天皇の第二皇女、智子内親王。御母は、青綺門院舎子。元文五年八月降誕、以茶宮と稱し、延享三年八月緋宮と改稱せられた。寛延三年三月内親王となり、御料三百石を附せられ、寶曆八年正月には、大御乳人の申請によつて、禮成門院(後光明天皇の皇女孝子内親王)の舊領を継ぎ、翌九年二月一品に叙せられた。桃園天皇が寶算二十二で崩御せらるるや、内親王は寶曆十二年七月二十七日踐祚せられた。時に御年二十三。翌十三年十一月二十七日、紫宸殿において即位の禮を擧げられた。時に攝政近衛内前が、萬機を攝行した。天皇は學問を好まれ、式部大輔菅原綱忠を召して講説を聴き、また職仁親王に和歌を學ばれて、屢々、歌會を催された。明和五年二月、桃園天皇の第一皇子英仁親王を立て、皇太子とせられ、後、漸く位を皇太子に譲らんとせられたが、これは専ら幕府の方寸に出たことであるといはれる。同七年の春、禁苑の花を觀て御製があつた。「おほけなくなれし雲井の花ざかりもてはやし見る春もへにけり」(公明卿記)。侍臣等は、これを拜して、位を遣れんと決せられたのであらうとしたが、

果して、この年十一月二十四日に、天皇は御年三十一で、讓位せられ、よつて後桃園天皇は御年十三で踐祚せられた。然るに後桃園天皇は安永八年十月聖算二十二で崩せられ、皇子がなかつたので、閑院宮典仁親王の王子兼仁親王が禁裏に入御して御猶子となり、御年八歳で即位せられた。即ち光格天皇である。後櫻町上皇は、仙洞御所にあつて、靜かな生活を送られ、寛政十一年十一月に六十賀、享和六年十二月には七十の御賀が行はれた。文化十年閏十一月三日崩御、御年七十四。十二月十六日泉涌寺に奉葬した。(歴朝坤德錄)

あふぐぞよ此の日の本の道直に代々まもりませ伊勢のかみがき 後櫻町天皇

小式部内侍

平安朝の歌人。和泉式部の女で、父は和泉守橘道貞。上東門院彰子に仕へた。かたち世にすぐれ、歌もまたよくしたが、これは常に母の式部から詠んで貰ふのであらうといはれてゐた。母の式部が、後の夫藤原保昌に隨つて丹後に行つてゐた時、都に歌合があつたが、申納言藤原定頼といふのが、小式部の局へ來て、丹後へは使をやつたかときいた。そこで詠んだのが、「大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」の歌である。また、その病重き時、枕邊に悲しむ母を見て、「いかにせむいくべき方もおも

ほえず親にさきだつ道を知らねば」と詠んだことも有名である。即詠にたけてゐたが、薄命、遂に母に先立つて死んだ。その作は「後拾遺集」以下の勅撰集にある。(古今著聞集、十訓鈔)

小侍従

鎌倉初期の歌人。石清水別當光清の女、母は小大進。近衛天皇の皇后多子に仕へ、大宮小侍従、太皇太后宮小侍従と稱した。嘗て皇后より、待宵と後朝と何れかあはれまさると問はれて、「待つ宵に更けゆく鐘の聲聞けば歸る朝の鳥はものかは」と詠じて、待宵の小侍従とも呼ばれた。徳大寺實定が、福原の京から、荒れ果てた都に侘び住まれる大宮(多子)を訪ねて、小侍従をも交へて一夜を語り明したことが、『平家物語』に見えるが、別れる時小侍従が名殘惜しげに見えたとして、「ものかはと君がいひけん鳥の音のけさしもなか悲しかるらん」と贈ると、とりあへず、「待たばこそふけゆく鐘もつらからめ歸るあしたの鳥の音ぞうき」と報いたといふ。『源平盛衰記』には、多少傳を異にして、なほ委しく載せてゐる。群書類從所收『小侍従集』には、百二十一首の作を收め、外に勅撰集に入つて家集になつたもの三十三首を附載してある。源頼政、源雅實、平經盛等との交渉を示す數多い作があり、殊に頼政との戀愛生活を語

る一聯の贈答は、頼政の家集にも載つてゐて、對照して見ると興味がある。後、出家して尼となり、晩年は石清水に隱栖したと傳へる。(參照 藤原多子 (小侍従集、平家物語、源平盛衰記) 朝ごとにかはる鏡のかげ見れば思はぬかげのかひもなきかな 石清水清き流れの末々に我のみにごる名をすゝがばや 小侍従

高志内親王

〔一四四九—一四六九〕 贈皇后。桓武天皇の皇女。御母は、皇后藤原乙牟漏。天皇の愛を鍾め、淳和天皇がなほ親王であつた時、その妃となさしめられた。三品に叙せられ、恒世親王及び氏子、有子、貞子三内親王を生まれたが、大同四年五月、二十一歳で薨せられた。使を遣はして喪事を監護せしめ、一品を贈られた。淳和天皇位に即きて、皇后を贈り、墓を改めて石作陵と號し、國忌齋を置かれた。天長四年勅して壱田十町を橋寺に施入し、春秋の梅過料となし、また薬師悔過を東西の二寺に修して冥福を薦められた。(日本紀略、三代實錄、類聚國史)

越部禪尼

〔一一九一—一一九四〕 歌人。藤原隆信の女。隆信の母(美福門院加賀)が、前夫の歿後藤原俊成の後妻となつた縁で俊成の養女となり、後、源通具に嫁して具定を生んだ。

故に、皇后宮大夫俊成女、或は侍従具定母と呼ばれる。越部の禪尼の稱は、播磨國揖保郡越部郷を俊成から譲られ、晩年そこへ隠栖したからであらう。文治三、四年の交、俊成が『千載集』を編んだときには、彼女の助力があつたと傳へられる。またその推舉で八條院に仕へ、八條院三條と號した。この間源通親の子の歌人通具に嫁して、一男一女を儲けたが、通具は他に權勢ある女と婚して、彼女は深く顧みられることはなかつたといふ。歌人としては、建仁元年の千五百番歌合、建仁二年の十首歌合、建仁三年歌合等に作者として列り、同三年俊成九十賀の屏風歌に、「秋をへてやどりし水のこほれるを光にみがく冬の夜の月」の秀詠をなし、夫の通具、俊成の子定家等が編んだ『新古今集』に二十九首を採られて、その地位をゆるぎなきものとした。安貞元年通具に死別し、寛喜中、出家して尼となつた。暫く母の墓所である嵯峨の中野附近にゐたと思はれるのは、嵯峨禪尼、中野禪尼等いはれることから想像せられるところである。かくて後、越部郷に赴き、建長六年歿した。その作は、『新古今集』以下の勅撰集に百餘首が入り、群書類從所收『俊成卿女集』には二百四十餘首があつめられ、他に歌合等にあるものを加へると約五百七十首傳へられてゐる。東常縁はその聞書に、彼女が俊成の養女

となつた次第を叙して、「歌の器用たるによりて、女と契約有也。彼道のたんれん事外なる人也。只女鏡の人にて有難」といつてゐる。『越部禪尼消息』は、『後拾遺集』以下の諸勅撰集を短評したもので、彼女が知遇を得た上皇方に對する思慕の情から、武家方たる定家の撰した『新勅撰集』に對しては、「中納言入道殿ならぬ人のして候はば、とりても見たくだに候はざりしものにて候」と酷評してゐる。(俊成卿女集) 梅の花あかぬ色香もむかしにておなじかたみの春の夜の月

兒島

筑紫の遊行婦。『萬葉集』に、太宰帥大伴旅人が大和に歸る時、筑前水城あたりまで送つて別れを惜しんだ歌等が三首見えてゐる。「大和路は雲隠れたりしかれども吾がふる袖をなめしと思ふな」。(萬葉集)

五條院

後嵯峨天皇の第三皇女。御母は藤原孝時の女刑部卿局。弘長二年誕生、正應二年十二月七日内親王となり、その十日三宮に准ぜられ、同日院號宣下があつて五條院と號した。永仁二年十一月二十五日薨去、御年三十三。龜山天皇の一皇女を生まれた。(一

代要記、増鏡、女院小傳、大日本史)

五條后

仁明天皇の女御。藤原順子。贈太政大臣冬嗣の女。御母は贈正一位藤原美都子。

大同四年誕生、夙にその美を稱せられた。嘗て、未明に起きて手水を使ふ時、虹のごとき氣が降りて、その水盤のほとりに互つたので、占ふ者が貴兆であるといつたが、幾くもなく天皇の東宮たりし時召されて妃となり、やがて天長四年八月道康親王(文德天皇)を生まれ、十年仁明天皇位に即きて從四位下に叙し、女御となられた。承和十一年正月從三位に進められ、嘉祥三年三月天皇崩御、文德天皇登極により皇太夫人となられた。ここにおいて、冬嗣は外戚として、大に權勢を張つた。藤原北家、即ち冬嗣子孫の繁榮は、全くここに源由する。仁壽四年四月二十六日、更に勅して「人の至親は母子より親しきは莫し。故に子尊位に登れば、即ち貴は母に歸す。」といひ、皇太后と尊稱せられた。東五條院に住まれたので、世に五條后といふ。天安二年八月二十七日、文德天皇は寶算三十二で崩ぜられ、清和天皇は九歳で踐祚あつたので、皇太后は群臣の望みを容れて、帝と與を同じくして東宮に遷り、専ら御後見をせられた。貞觀二年四月東五條院に還り、程なく御惱に罹られたので、勅して二十人を度し、また東五

條院に大齋會を設け、法華經を講せしめられた。間もなく癒え、翌三年二月には、太政大臣藤原良房の染殿の第に臨んで雅樂寮の音楽を聴き、また藤氏の氏神大原野神社(いま官幣中社)に參詣せられた。いはゆる大原野行啓は、ここに始まつたのである。その二十九日節をおろして入道せられ、六月東大寺戒壇の諸僧を請じて大乘戒を受け、また延曆寺座主圓仁を屈して菩薩戒を受けられた。六年には太皇太后となり、十三年九月二十八日六十三歳で崩せられた。十月五日山城宇治郡後山階山陵に奉葬、國忌を東寺に置かれた。后は雅性和厚、天禮備はつて、母儀の範と稱せられる。また、釋教を信じ、安祥寺を建て、資財田園を施入し、大乘道を修せられた。(續日本後紀、文德實錄、三代實錄)

巨勢郎女

大伴安麻呂の妻。元曆本『萬葉集』に、

近江朝大納言巨勢人卿之女と見えてゐる。大伴田主の母である。『萬葉集』卷二に安麻呂との唱和の歌がある。「玉葛花のみ咲きてならざるは誰が戀ならめ我は戀ひ思ふを」。(萬葉集)

許勢紗手媛

三十八歌仙の一。春宮左近、東宮女藏人左近、

三條院女藏人左近など呼ばれる。『歌仙傳』等には、三條院が東宮であつた時の女藏人であつたとあるから、寛和二年頃

から宮仕したことになる、もし宣耀殿女御に仕へたのであれば、正暦二年頃からとなる。家集『小大君集』によれば、朝光、實方との交渉が、もつとも深かつたことが知られる。『小大君集』には百四十五首が収められ、自撰と思はれるが、最後の四首は、小野小町の歌が混入せられたものであらう。『拾遺集』以下の勅撰集に入るもの十七首。「いかにねて」の歌は、『後拾遺集』の第一首に採られてゐる作である。(小大君集)

いかにねて起くる朝にいふことぞ昨日を去年と今日を今年と

君住めばにござる水もなかりけり汀のたづも心してゐよ
岩橋の夜の契もたえぬべしあくるわびしき葛城の神

小大君

壺中隠者 いんじや 數學家。醫某氏の女で、名は幸子。初め攝津にゐたが、後、江戸に出て壺中隠者と號した。安永四年、

『算法少女』を著した。(大日本數學史、日本女史)

異浦丹後 ことら 〓宜秋門院丹後

功子内親親 しんわい 齋宮。高倉天皇の皇女。宮人帥局の御腹で、治承元年内親王となり、伊勢齋宮に卜定(十月二十

八日)あつたが、同三年正月十一日、帥局の卒去により、野

宮より退下せられた。(玉海、山槐記、皇帝紀鈔)

許登能麻遲媛命 ひめのまこと 眞知乃神ともいふ。玉主命の

女。興登魂尊に婚して、天兒屋根命を生まれた。式内己等乃

麻知神社に祀られる。(神祕辭典)

後鳥羽院下野 のしもつけ 〓信濃

近衛篤姫 あつひめ 〓天璋院

近衛更衣 かづい 〓源周子

近衛局 このまの 後醍醐天皇の宮人。姓氏不詳。昭訓門院に

仕へたが、天皇の幸を得て一皇子を生まれた(皇胤紹運録)。「大

日本史」には、無文禪師行狀に僧元選(字無文、後醍醐天皇

の皇子)の母を昭慶門院としてゐるが、それはこの昭訓門院

近衛の誤かといつてゐる。因に昭慶門院は龜山天皇の皇女、

昭訓門院は龜山天皇の後宮である。(皇胤紹運録、大日本史)

近衛局 このまの 〓源朝子

碁檀越妻 おちのつま 萬葉集の歌人。「碁檀越の伊勢に往ける

時留れる妻の歌」として、「神風の伊勢の濱荻折り伏せて旅

寝やすらむ荒き濱邊に」の作がある。碁は氏で、團碁に巧で

あつたからいふのであらうといふ。(萬葉集)

木花開耶姫 このはな 木花之佐夜比賣。神阿多都比賣(記)、

吾田鹿葦津姫、豊吾田津姫(紀)ともいふ。瓊瓊杵尊の妃。容

色婉美、よつて此の名があるといふ。天孫、高千穂峯に降臨

し、竟國して吾田長屋笠狭之碕に到り、濱濱を遊幸の際偶々

木花開耶姫を御覽になり、これを妃とせられた。『紀』一書に

「後に海濱に遊幸して一の美人を見そなはず。皇孫問ひて曰

はく、汝は是誰が子ぞ。對へて曰さく、妾はこれ大山祇神の

子、名は神吾田鹿葦津姫、亦の名は木花開耶姫。よりて白さ

く、亦吾が姉警長姫在り。皇孫曰はく、吾汝を以て妻とせむ

と欲ふいかに。對へて曰さく、妾が父大山祇神在り、請ふ以

て垂門ひたまへ。皇孫よりて大山祇神にかたりて曰く、吾汝

が女子を見そなはず、以て妻とせむと欲ふ。是に大山祇神乃

ち二女をして百の机飲食を持たしてたてまつる。時に皇孫姉

は醜しとおぼして御さずして罷けたまふ。妹は有國色とおぼ

して引して幸す、則ち一夜にしてはらみぬ。」とある。ここ

に瓊瓊杵尊疑ひて、わが子にあらずとなし給ふや、姫、忿恨

して無戸室の産宅を作りて、その中に籠り、「吾が娘める、

これ若し他神の子ならば必ず幸なけむ、これ實に天孫の子な

らば必ず當に全く生きたまへ」と誓つて、火を放ち、火中に

あつて恙なく火闌降命、彦火火出見尊、火明命の三皇子を生

まれた。これは、産婦を一の咒禁とした信仰、産屋を穢とし

て焼棄した習俗、若くは産婦を潔め強くするために火を焚い

た習俗、出産が火の神祕的性能によつて確保せられ、聖化せ

られるといふ觀念等を反映してゐるといふ。後世、駿河の富

士の神として、淺間大神が木花開耶姫であると傳へてゐるの

は、その由來明かでない。静岡縣の官幣大社淺間神社、國幣

小社淺間神社、山梨縣の國幣中社淺間神社等に祀られてゐ

る。(參照 警長姫 (日本書紀、古事記)

許乃波奈佐久夜比賣命 このはな 大神の妻。『播磨風

土記』安永郡の條に、「雲箇里、大神の妻許乃波奈佐久夜比

賣命其形うるはし。故れ字留加といふ。」とある。『標註播磨

風土記逸文』に「雲箇、和名抄に闕く。今潤賀村と云ふ由な

り。大神は伊和大神にて即大名持神なり。其御妻にかかる御

名の神坐しけん事めづらし。」とある。(播磨風土記)

木花知流比賣 このはな 大山津見神の女。素盞鳴尊の御子

八嶋土奴美神と婚して、布波能母遲久奴須奴神を生まれた。

名義は明かでないが、或はこの神壯年に身亡せられ、木の花

の如くはかなく散り給うた意であるともいはれる。(古事記)

小橋三四子 こはし (二五四四―二五八二) 新聞記者。日本

女子大學校を出で、操觚界に入り、大正三年四月『讀賣新

聞』婦人附録の主任となり、ついで四年十一月『婦人週報』

を起した。大正八年八月、米國に留學して新聞學及び婦人間

題を研究したが、歸國後幾くもなく、大正十一年五月十一日
心臓麻痺にて急逝した。年三十九。 (婦人界三十五年、大日本人名
辭書)

小林玉潤 こばやしき (一二五四〇) 書家。北總の人小林藏六
の妻。幕臣某氏の女。落魄して、驛中酒家の婢となつてゐた
が、偶々藏六が酒興の傍ら書いた墨竹を見て、それに梅の一
枝を畫き添へたのが縁となつて、その妻となり、以後、形影
相伴ふ生活を送つた。明治十三年玉潤逝き、翌年朔月に至つ
て藏六も死んだといふ。(古今雅俗石亭歌)

小林志知 こばしち (二三〇九—二三七一) 豊後杵築の儒綾部
道弘の妻。小林政次の女。幼時兄三友の書を讀むのをきい
て、稍々詩文を解し、義理に通じた。兄の友道弘に嫁し、既
に父を失つたので、實母を迎へて孝養怠らず、また、夫の兄
の家に不幸が続いたのを何くれとなく世話し、その遺孤を扶
けた。嘗て二人の食客を置いて數年倦色がなかつたので、深
く恩に服したといふ。二女を失ひ、四十八歳の時伊勢に行つ
たが、歸つて半身不随となり、その後は、男安正(綱齋)の日
々膝下に侍して經史を讀むのを聽いて樂しみとし、正徳元年
秋、六十三歳で歿した。(野史)

小林正子 こばしこ 松井須磨子

が、金策に窮して殺人強盜を働くやうになり、浪華で病氣に
なるや觀念して自首し、江戸に護送の途中、逃走して小紫に
袂別し、再び自首して、延寶七年十一月三日品川で磔の上獄
門に處せられ、小紫は彼の跡を追うて、目黒東昌寺の墓前に
自殺した。目黒比翼塚はこれに由來するが、この情話は更に
幡隨院長兵衛と附會せられて、多くの小紫權八劇をなした。
(早引人物故事、大百科事典)

小宅女王 こやけのひめ 齋宮。天武天皇の皇孫三原王(舍人親王
の子)の女。天平勝寶元年九月六日伊勢齋宮となり、同四年
退下(神祇辭典)せられた。内親王に陞り(一代要記、寶龜三年中
務大輔菅生王とのことにより屬籍を削られた(大日本史)。(續日
本紀、神祇辭典、大日本史、齋宮記)

古友 ことも 俳人。橋本泰里(文政二年七十九歳歿)の姉。別に
松承庵の號もある。一たび他家へ嫁したが、夫に死別して橋
本家へ戻つた。姉弟とも、馬場存義門の俳人で、安永八年二
月、相携へて、吉野の花を見て京へ出たが、彼女はこの時亡
夫の七回忌に當るとして卯月の初、髪を落した。蕪村一門の款
待を受け、その秋、木曾路を経て、江戸に戻り、文臺の披露
をした。古友尼には、娘や孫があることが、句の前書によつ
て知られるのみで、歿時、享年ともに明かでない。「そのし

こやけーこんた

兒部女王 こべのひめ 萬葉の歌人。傳不詳。美人尺度娘子が醜
き男と婚したるを嗤ひし歌がある。「美し人いづく飽かじを
尺度らし角の脹れに婚娶ひにけむ」。(萬葉集)

駒命婦 こまのみこと 小馬命婦

狛部宿禰奈實 こまのすくね 「元明天皇」の項を見よ。

小萬 こまね 豊臣秀頼の臣某氏の夫人に仕へた。某氏(攝津國
の某城主といふ)直諫して旨に忤ひ、出奔するや、夫人及び
二子城中に幽せられたが、小萬は一夜水門より出で、淀川を
泳ぎ渡つて小艇を奪ひ來り、夫人及び二子を促してともに逃
れ、某氏のあると聞く京師清水寺を志す中、山崎邊より惡漢
につけられ、六條東に至る頃多くの同類に圍まれた。賊の一
人八歳になる男子を奪ひ去らんとするや、夫人は懷劍を以て、
賊を斬つたが、併せてその兒をも殺し、その身もまた創を負
うて倒れた。小萬は賊數人を斬つてこれを逐ひ、三歳の女子
を負うて、某氏を訪れ、女子を渡したといふ。(野史、日本女子
立志編)

小紫 こむら 吉原三浦屋の娼妓。江戸簞輪の人。平井權八との
情話で知られる。權八は、因州鳥取松平相模守の士平井正左
衛門の子で、寛文十二年秋、父に侮辱を與へたといふ本庄助
太夫を即夜討果して江戸に逐電し、小紫と馴染んだのである

をり(安永八年刊)は、上巻が姉の巻、下巻が弟の巻、「松か
さね」(天明四年刊)は、前半が古友尼が、智月尼等六人の女
流俳人の句を立句として、存義、泰里等と賦した歌仙六卷、
後半が彼女の獨吟歌仙一卷である。(そのしをり、松かさね)

小餘綾磯女 こよろぎ (一二五一二) 狂歌師。紀伊藩士諏訪
兼次郎の妻。名はいそ。天明の交より狂歌を詠み、初めひま
の内子といつたので、智恵の内子、世話の内子とともに、三
内子と稱せられた。嘉永五年八月十一日歿、四谷寺町永心寺
に葬つた。(古今狂歌人物誌)

權左衛門妻 ごんざゑ 常陸多賀郡小中村の農女。夫の江戸
に行ける留守中、同郡折橋村の人某氏に挑まれ、やむなく刀
を以てこれを殺した。徳川光圀聞いて感じ、後、その地を過
ぎる時、夫妻を招いてこれを賞した。(新編常陸國志)

權大納言三位局 ごんたいごんのつばね 後醍醐天皇の宮人。藤原氏。
權大納言爲道の女。初め、中宮宣旨となり、幸を得て法仁法
親王(六勝寺檢校)、懷良親王(征西大將軍)及び一皇女を生ま
れ、權大納言三位局と稱し、天皇の隱岐遷幸により、尼とな
つた。(皇胤紹運録、増鏡、冷泉系圖)

權大納言局 ごんたいごね 龜山天皇の宮人。源氏。左近衛少將
宣通の女。初め、京極院に仕へ、權大納言局と稱した。幸を

得て性覺法親王、性融法親王を生まれた。(皇胤系圖、一代要記 尊卑分脈)

權大納言局 ごんのだいなごん 伏見天皇の宮人。源氏。參議具氏の女。權大納言局と稱し、吉永親王を生まれた。(皇胤系圖、諸門跡譜)

權大納言局 ごんのだいなごん 後二條天皇の宮人。藤原氏。權中納言公泰の女。權大納言局と稱し、祐助法親王(天台座主、聖尊法親王、榮子内親王を生まれた。(皇胤系圖、天台座主記)

權大納言局 ごんのだいなごん 藤原爲子

權大納言典侍 ごんのだいなごん 藤原爲子

權中納言局 ごんちゆうごん 後醍醐天皇の宮人。一皇女を生まれた。『大日本史』に、「國太曆系圖によれば、權大納言藤原公泰が女にして、後醍醐帝の官女となり、後遁世して尼となるは、蓋し此の人ならん」といふ。(皇胤系圖)

た。『大日本史』に、「國太曆系圖によれば、權大納言藤原公泰が女にして、後醍醐帝の官女となり、後遁世して尼となるは、蓋し此の人ならん」といふ。(皇胤系圖)

た

採花 さいか 二五〇四—二五六一 俳人。大蟲の妻。東京の人。佐藤氏、峰庵と稱した。春湖の門である。明治三十四年四月七日歿、年五十八。(大日本人名辭書)

齋宮女御 さいみやのむすめ 村上天皇の女御。齋宮。三十六歌仙の一。また承香殿女御とも稱した。式部卿重明親王の女。承平六年九月十二日伊勢齋宮となり、天慶八年正月二十七日御母の喪によつて退下(在任十年)、天曆元年入内、同三年女御となり、五年正月從四位下を授けられ、應和二年正月從四位上に進められた。貞元元年に御所生の規子内親王が、齋宮の任につかれ、同年十月二十七日野宮で庚申の夜、「松風入夜琴」といふ題で、女御は「琴の音に峯の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけむ」と詠まれた。群行(貞元二年)には、女御もともに下られた。それは家集に「伊勢の後の御くだりのたび昔をおぼしいで」とあり、またそれを『拾遺集』に、「圓融院の御時齋宮下り侍りけるに母の前の齋宮もろともに越え侍りて」として載せてをり、別に『新古今集』に、「むすめの齋宮に具して下り侍りて云々」とも見えてゐる。長岡の別墅に居り、久しく參内せられぬ頃、天皇から御慰問の御製があつたが、御返しに「秋の都の外に住む身は」とあつたので、時の人が、后位を望む意があると沙

探花 さいか 二五〇四—二五六一 俳人。大蟲の妻。東京の人。佐藤氏、峰庵と稱した。春湖の門である。明治三十四年四月七日歿、年五十八。(大日本人名辭書)

浅草海禪寺に墓ありとぞ。甲辰多記」とあるのを信ずれば、彼女は天保初年に歿したものと思はれる。(旗の命毛、女流文學史)

故郷を出しや夢かうつの山うつともなくたどる山路を 三枝斐子

西郷局 さいがう 阿愛方

齊子女王 さいにわらわ 齋院。小一條院の女。御母は下野守源政隆の女。白河天皇の承保元年十二月賀茂齋院となり、春日齋院と稱せられた。寛治三年四月十二日生母の憂によつて退下せられた。在任十六年。(一代要記、帝王編年記、齋院記)

宰相三位 さいしやう 平棟子

宰相局 さいしやう 順徳天皇の宮人。法印公雅の女。一皇子を生まれたことが、『仁和寺日記』(建保五年)に見える。(仁和寺日記)

税所敦子 ぜいじゆん 明治初期の歌人。

林氏。文政八年三月、京都鴨河の東錦織村に生れ、二十歳の時、薩摩藩士税所篤之の後妻となり一男一女を儲けたが、八年にして夫に死別したので、鹿兒島に赴き、姑に孝養を盡くした。藩主島津齊彬これを賞して、安政四年九月哲丸の生るるや、これが守役に登用した。幾くもなく哲丸が夭死したの

汰したので、女御は恥ぢてその歌を御集から除かれたことが、『十訓抄』に見える。家集を『齋宮女御集』といひ、百二首を収めてある。寛和元年五十七歳で薨せられた。參照 規子内親王 (日本紀略、一代要記、大鏡、齋宮女御集)

秋の日のあやしきほどのたそがれに萩ふく風のおとぞきこゆる 微子女王

三枝斐子 さいしやう 土屋紀伊守の妻。字は子章。茅渚、清風と號した。和漢の學に通じ、歌文をよくした。文化三年四月、夫が堺奉行に任官し、江戸から泉州堺に赴くのに従つた道中の紀行を『旅の命毛』といひ、堺在住二年間の日記を『和泉日記』といふ。他に、『曹大家女論語解』『烈女傳拾遺』『枝氏家訓』等がある。『難波江』に、『旅の命毛』を評して、「すべて此日記をくりかへし見るに、女中の郎といふべし。文體清少納言の枕の草子に擬して、其心がまへも清少納言に近し。此女房性質文才有りて稽古の力うすし。」といつてゐるが、勿論『枕草子』と同日に語るべきものではない。帝國圖書館所藏本の奥書に、「土屋紀伊守ぬしの奥方は、女子には珍しく學問ありて、性質猛き人なりしが、十餘年前死去せられて、

で彼女は悲痛して殉死せんとしたが、姑に留められ、後、文久三年藩主久光の養女香蘭院が近衛忠房に嫁するに當つて、これが老女となつた。明治八年、高崎正風の推挙により、權典侍となつて、皇后、皇太后に仕へ、文學、和歌の諸務を掌り、更に掌侍に進み、楓の内侍と稱した。晩年腸を病み、明治三十三年二月四日七十六歳で歿し、その日正五位を授けられた。幼時より和歌を詠み、十一歳の時には、嵯峨の虚空藏尊に參籠して名手たらんことを祈つたほどで、千種有功はこれを聞いて侍女とした。後に八田知紀と交り、高崎正風とは最も親しかつた。また、佛教を信じ、福田行誡について教を聽いた。『心つくし』、『み垣の下草』、『同拾遺』の作がある。墓は青山墓地。(み垣の下草、現代短歌全集、郷土婦人の聲)

雨はれて虹たちわたる夏山の青葉が上になくほととぎす
有明の月しづかなる窓をあけて萩の上葉の露を見るかな

税所敦子

齋藤さち さいとう さち 唐人お吉

齋藤ふく さいとう ふく 春日局

齊明天皇 さいめいてんわう 第三十七代の天皇

皇。第三十五代皇極天皇の重祚。御名は寶皇女。敏達天皇の曾孫で、茅渟王の王女。御母は吉備女王。推古天皇の二年降

誕、初め用明天皇の御孫高向王の妃となり、漢皇子を生まれながら、後、舒明天皇がなほ皇子であつた時、その妃となり、位に即くに及んで、二年正月皇后に立ち、葛城皇子(天智天皇)、間人皇女(孝徳天皇の皇后)、大海人皇子(天武天皇)を生まれた。舒明天皇は、初め飛鳥の岡本宮に天下を知しめし、後、田中の宮に遷り、更に十二年十月百濟宮に遷られ、同十三年十月崩御せられたので、こゝに天豐財重日足姫尊が翌年正月十五日即位せられた。即ち皇極天皇である。時に天皇の御年四十九、葛城皇子十七歳であつた。初め權宮の小墾田宮に遷り、後、飛鳥の板蓋宮に遷られた。天皇の四年六月、大臣蘇我蝦夷、入鹿父子が政權を専らにし、専恣の振舞が甚しいのを憤り、中大兄皇子(葛城皇子)は中臣鎌足等とはかり、入鹿を殿中に斬り、ついで蝦夷を誅した。この時、『天皇記』、『國記』、珍寶を焼いた。『國記』は火中より取り出すものがあつて、これを中大兄皇子に獻つたとあるが、今に傳はるところを知らない。この月十四日天皇は位を皇弟孝徳天皇に譲り、皇祖母尊と稱し、中大兄皇子は皇太子に立たれた。孝徳天皇は太子等の輔佐によつて、劃期的な大化の政新を斷行せられたのであるが、在位十年にして崩御せられ、皇祖母尊が再び踐祚せられた。即ち齊明天皇であつて、重祚の始である。此

の後、飛鳥の板蓋宮の火災によつて、川原宮に遷り、更に兩槻宮に遷つて世を知しめした。元年六月大旱であつたから、八月南淵河上に行幸して、親ら四方を拜して雨を祈られたが、此の年諸穀よく熟り、百姓はともに萬歳を唱へて至徳天皇と稱した。深く神祇を崇敬し、佛教を信じ、嘗て勅して諸僧をして、孟蘭盆經、仁王般若經等を講説せしめられ、また、智通、知達を唐に遣はして、玄奘について、佛教を修學せしめられたこともある。また、勇武の氣象に富まれ、當時北陸、東北及び渡島の蝦夷がなほ皇威に服しなかつたから、阿倍比羅夫を遣はして、これを討伐せしめ、更に遠く肅慎に到り、大に皇化を北方に及ぼされた。六年十二月、百濟が新羅に攻められて援を乞ふや、親ら軍を發して新羅を伐たんとし、先づ難波宮に幸し、勅して駿河國において船を造らしめ、翌七年正月、海路によつて西に下り、備前の大伯海、伊豫の熟田津を経て、筑前の那大津に到り、磐瀬の行宮に入り、ついで朝倉橋の廣庭宮に遷幸せられたが、偶々病を得られ、同年七月遂に崩御せられた。寶算六十八。皇太子は、喪に従ひ、磐瀬宮を経て難波に到り、飛鳥川原に還つて喪を發し、大和越智岡上陵に奉葬せられた。御子天智天皇及び天武天皇の剛毅果斷の御性質も、蓋し此の御母の御氣象を承けられたところ

が多かつたものと思はれる。『萬葉集』に天皇の長歌一首、反歌二首が見える。これには、舒明天皇の御製であるといふ説もあるが、齊明天皇の御製であれば、立后前の御作であらうといはれる。(日本書紀、歷朝神傳錄、萬葉集)

神代より、生れ繼ぎ來れば、人さには、國には満ちて、あお群の、いさとは行けど、わが戀ふる、君にしあらねば、晝は日の暮るゝまで、夜は夜の明くる極、思ひつゝ、寝ねかてにして、明しつらくも、長きこの夜を

反歌

山の端にあぢ群騒ぎ行くなれどわれはさぶしゑ君にしあらねば

近江路の鳥籠の山なるいさや川けのこの頃は戀ひつつもあらむ

齊明天皇

左衛門

甲斐

上杉禪秀の妻。甲斐の武田信滿の女。禪秀は應永の亂の首將で、一時管領足利持氏を逐うて鎌倉に覇を立てたが、忽ちせばめられて二十三年十二月十日自殺した。夫人は甲斐にあつて、夫の計を聞くや、出でて藤戸川に到り、「さなきだに五つのさはり有りときく親さへ報ふ罪いかせむ」と詠じて、懷劍を以て自盡した。信滿は、女の縁を以て禪秀に應じ、兵を率ゐて助けたが、軍敗るゝに及び、國に歸り、

翌年二月上杉憲宗の來攻にあひ、木賊山に入つて自殺した。

(野史)

左衛門督局

後醍醐天皇の宮人。藤原氏。中納言

能保の女。左衛門督局と稱し、圓助法親王を生まれた。(皇

胤系運録、諸門跡譜)

左衛門督局

後醍醐天皇の宮人。姓氏不詳。爲忠

の女。遊義門院に仕へ、幸を得て、一皇女を生まれた。(皇

胤系運録)

左衛門佐局

後醍醐天皇の中宮の女房。元弘の

初、天皇が中宮の北山殿に幸して御賀の舞があつた時、局は

琵琶の役で、青海波を弾じて、藤原藤房に思はれ、遂に一夜

の契を結んだ。然るに、その次の夜には天皇の笠置蒙塵とな

り、藤房は「黒髪を亂れん世まで永へばこれをいまはのかた

みとも見よ」の歌に鬢の髪少し添へて局に贈り、天皇に陪從

して都を落ちた。局、悲泣して、「書きおきし君がたまづさ

身にそへて後の夜までのかぐみとやせん」と詠じ、遂に大井

川に投じた。(太平記)

榊田琴子

鳥羽

坂戸由良津姫

孝元天皇の皇后鬱色謎命の御母。

大矢口宿禰の妻。大矢口宿禰は物部氏系譜中、四世の孫の弟

に當り、孝靈天皇朝に、宿禰として大神を奉齋した。坂戸由

良都姫を妻として、四兒を生んだが、第一は鬱色雄命で、こ

の命は孝元天皇の御世に大臣として大神を奉齋したとある。

第二は鬱色謎命で、孝元天皇の皇后として、大彥命、開化天

皇、倭迹迹姫を生まれた。第三は大綜杵命で、孝元天皇の御

世、大禰として奉仕し、開化天皇朝には大臣として、皇后と

共に大神を奉齋した。この大綜杵命の女に崇神天皇の皇后伊

香色謎命がある。第四は大峯大尼命で、開化天皇の御世大尼

として供奉したが、その大尼はこの時に始まると系譜に記さ

れてゐる。(天孫本紀)

坂上郎女

大伴坂上郎女

坂上大嬢

大伴坂上大嬢

坂上春子

桓武天皇の宮人。大納言田村麻呂の女。

從四位下に叙せられ、葛井親王、春日内親王を生まれた。京

都清水寺の泰産堂(子安觀音)は、葛井親王御誕生による建立

である。(文德實錄、皇胤系運録)

坂上又子

桓武天皇の宮人。或は全子

に作る。左京大夫苅田麻呂の女。天皇の東宮たりし時、選を

以て宮に入り、正五位上を授けられ、高津内親王を生まれ、

延暦九年七月卒せられた。(續日本紀、續日本後紀)

酒人内親王

桓武天皇の

妃。齋宮。光仁天皇の寶龜元年三品に進み、同三年十一月十三

日伊勢齋宮となり、五年九月伊勢に赴き(續日本紀)、六年退下、

後、桓武天皇の宮に入り、朝原内親王を生み、弘仁中二品を

授けられた。天長六年八月薨去、御年七十六(東大寺要録所引日

本後紀)。(大日本史、續日本紀)

佐香保

吉原の娼樓並木某の家妓。正保の交、西國の侍

梅某と契つたが、男は交代で歸國後間もなく病死して、代り

に一首の歌を送つて來た。彼女は悲歎の極、髪を切つて尼と

なつた。樓主その志を憐み、庵を立て、やらうといつたが、

「一物あれば必ず一累あり」といつて、それも斷り、そのまゝ

その家に仕へてゐたといふ。法名を貞閑と號した。(讀海、遊

女の文學)

かりそめの世のわかれ路はなならずたのしき國のながき

契に

貞閑尼

相模

中古三十六歌仙の一。本名乙侍從。父は源賴光と

もいはれるが確證はない。母は前能登守慶滋保章の女。相模

守大江公資の妻であるため、相模と呼ばれた。當時有数の歌

人で、『八雲御抄』には「古に恥ぢぬ歌よみ」とあり、賀陽

院歌合には、「さみだれはみづの御牧のまこも草かりほすひ

まもあらじとぞ思ふ」と詠んで、賞讃の聲が門外にまで溢れ

たと傳へる。生歿年は明かでないが、治暦四年の呂保殿歌合

にその名が見えるから、後一條天皇の頃までは生存してゐた

ことが知られる。「扶桑拾葉集系圖」に修子内親王の侍女と

あり、『中古歌仙傳』に入道一品宮祐子内親王家女房とあるの

は、恐らく前者が正しいと思はれる(日本文學大辭書)。大江公資

が相模守となつて任國に下つた時には共に隨つたが、後離別

した。家集によれば相模在國中、箱根に詣で、百首の歌を奉

納したことがある。公資も歌人で、『袋草紙』には、公資が

大外記を所望した時、僉議の諸卿は異議なく許さうとしたが、

小野宮右大臣は反對して、彼は相模を擁して秀歌を案じてゐ

るから、定めし公務を怠るであらうといつたといふ。その離

別の理由ももとより知られてゐないが、『後拾遺集』に、「公

資朝臣に相具して侍りけるに中納言定頼卿忍びて音づける

を」、また「中納言定頼今は更にこじといひて歸りて音もし

侍らざりければ」及び『金葉集』に、「大貳資通忍びてもの

申しけるを」などあるのを見れば、彼女も伊勢や和泉式部

と異ならぬ戀愛生活を送つたのであらう。その作品は、『後

拾遺集』以下の勅撰集に百八首が入り、家集の『相模集』に

は六百餘首を収めてある。豊富な語彙を驅つて、情熱の單純

な發露をそのまゝに投出してゐるのが特色である。(相模集、後拾遺集、中古歌仙傳、發草紙)

恨みわびほさぬ袖だにあるものを戀に朽ちなん名こそ惜しけれ

日のもとの山となるまで積るとも言の葉見れば誰かいは

左京大夫局さきやうだい 土御門天皇の宮人。源氏。僧都證遍あまのつばねの女。左京大夫局と稱し、諱子内親王(准三宮)を生まれた。

左京大夫局さきやうだい 後光嚴院の宮人。藤原氏。圓滿院大夫法師長快の女。左京大夫局とも、伯耆殿局とも稱し、覺觀法親王(天台座主)、久尊親王(天台座主)を生まれた。後光嚴院の崩御により、落飾して尼となつた。(尊卑分脈、後愚昧記、後深心院開日記)

左京大夫局さきやうだい 後光嚴院の宮人。藤原氏。圓滿院大夫法師長快の女。左京大夫局とも、伯耆殿局とも稱し、覺觀法親王(天台座主)、久尊親王(天台座主)を生まれた。後光嚴院の崩御により、落飾して尼となつた。(尊卑分脈、後愚昧記、後深心院開日記)

左京方さきやうかた 「二三四八―二四一二」 徳川家宣の側室。初め阿喜與方といつた。父は加賀の人佐藤三郎左衛門といひ、漂泊して僧となり、淺草唯念寺塔中の林昇軒に來つて彼女を儲けた。幼名を輝子といひ、京極氏及び戸澤氏に仕へたが、後、矢島次大夫の養女となつて將軍家宣に侍し、喜與と改めた。寶永六年七月家繼を生んだ。また名を左京と改めたが、

見える。(女院小傳、玉葉集) 鳴きつくす野もせの蟲のねのみして人はおとせぬ秋のふるさと 朔平門院 佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

見える。(女院小傳、玉葉集)

鳴きつくす野もせの蟲のねのみして人はおとせぬ秋のふるさと 朔平門院

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

さくまーさき

正徳二年家宣の死するや、二十五歳にして薙髮して月光院と號した。大興疑獄で知られる江島は彼女の侍女であつた。同三年十一月從三位に叙せられ、寶曆二年九月十九日歿した。法名は理譽清玉智天、文政十一年從二位を追贈せられた。讀書を好み、和歌をよくし、『東玉集』の家集がある。(參照江島(野史))

佐久命さくのみこと 眞野氏の祖。大矢田宿禰の女。大矢田宿禰は孝昭天皇皇子天足彦國押人命三世の孫彦國葺命の曾孫で、神功皇后の新羅征伐凱旋の日、留められて鎮守府將軍となり、彼國の王猶揚の女を娶つて二女を生み、兄を佐久命、弟を武義命といつた。その佐久命の九世の孫和珥部臣鶉務、大津忍勝等が、近江國滋賀郡眞野村に居住して、庚寅の年眞野臣の姓を負うたとある。氏は『三代實錄』に眞野臣永徳、道緒等に宿禰姓を賜うたこと等その他二三見えてゐる。(姓氏錄、三代實錄)

朔平門院さくへいもんゐん 「一九四七―一九七〇」 伏見天皇の第一皇女璿子内親王。歌人。御母は藤原季子。後伏見天皇の皇妹。永仁元年内親王となり、延慶二年六月二十七日三宮に准せられ、同日院號宣下、朔平門院と號し、三年十月八日薨せられた。御年二十四。歌は『玉葉集』(八首)『風雅集』(二首)等に

見える。(女院小傳、玉葉集)

鳴きつくす野もせの蟲のねのみして人はおとせぬ秋のふるさと 朔平門院

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

佐久間瑞枝さくまみづえ 「二四九六―二五六八」 佐久間象山の妻。勝安芳の妹。嘉永五年十二月十八歳(?)で、象山に嫁したが、象山が慶應二年京都において暗殺せられた後は、實家に歸つて家政を整理し、兄安芳をして内顧の憂なからしめた。父左衛門太郎(劍客)の氣質を繼いで、豪放豁達であつたが、維新の際、上野戦争の翌日、官軍の一隊が大砲を曳來つて、赤坂氷川町の勝邸を襲ひ、安芳を求むるや、家人等の狼狽するを叱し、自若としてその隊長を説得したといふ。隱居後も香、茶の湯の如きを嫌ひ、好んで讀書した。明治四十一年一月三日歿、年七十三。(大日本人辭書)

二二九

さくまーさき

さくまーさき

さくまーさき

さくまーさき

さくまーさき

さくまーさき

さくまーさき

女。五歳にして歌を詠み、また書をよくし、その名北勢に聞え、短冊を請ふものが多かつたが、文久二年八月、八歳を以て歿した。(大百科事典)

佐々木累

下總古河城主土井利勝の臣佐々木武太夫の女。父に武技を受けてまた勇侠の名が高かつた。武太夫に嗣子なきため屢々婿を迎へたが、その朴訥なるを嫌つてみな去つた。彼女は利勝の夫人に仕へ、その護衛の任に當つたが、既にして武太夫死し、家遂に斷絶するや、致仕して江戸聖天町に町道場を開いた。外出の時には四つ目の紋の羽織を着、雙刀を帯び紺緒の草履を穿いて、異装人目を惹いたが、偶々これを嘲ふものがあれば、容赦なく打ち懲らした。ある日市尹石谷將監、累を役所に呼出し、女裝の帶刀を不可として、以後編笠を用ひ、面部を頭巾にて包み、男裝すべしと申渡した。こゝにおいて彼女は、家を嗣ぐ男子なきを憂ひ、武勇の士を得て再び家名を興さん所存を以て、殊に女裝のまゝ武邊を顯はして往來する旨を述べたが、事やがて土井氏の知るところとなり、遂にその家臣にして武名高き小杉重左衛門の次男九十九を與へて夫となさしめ、佐々木家の本領を復した。(黄布著草、本朝俠客傳)

荳角皇女

齋宮。繼體天皇の皇女。妃麻績娘子の御

には加減して、限るに必ずしも三日とするの要はあるまいと建言したが、夫人は、これをして艱苦せしむるは却て深く愛する所以であることを説いて老職を納得させた。諸藩にあつては、老職が夫人に見えて事をいふことはないが、佐竹藩のみは、これを例としたといふ。(烈婦傳)

貞子内親王

「一四九五」 淳和天皇の皇女。有子内親王の御妹。承和元年五月薨せられた。使を遣はして喪事を監護せしめられた。(日本紀略、續日本後紀)

貞子内親王

「二二六五—二二三五」 後陽成天皇の皇女。清子内親王の御妹。慶長十年九月誕生、齋宮と稱した。元和九年、攝政康道に降嫁せられ、光平を生み、延寶三年六月七十一歳で薨せられた。貞了院と號し、二尊院に葬つた。(野史)

察

白隱の弟子。白隱(二三四五—二四二八)の叔父庄司氏の女。白隱に實參實究して、その印可を受けた。勧められて他に婚し、老いて孫を喪ひ、流涕慟哭した。人々が悟得の人にも似ずといふや、彼女は涕涙こそ孫のために、香華より勝る萬々であると述べ、以て佛道の眞諦を示したといふ。(大百科事典)

佐々槻子

「二四五五—二五二七」 歌人。肥後藩士政次

所生。稚足姫について、伊勢大神を齋きまつり、雄略天皇の三年退下せられた。蓋し、在任三年以内である。(日本書紀、齋宮記)

刺國若比賣

大國主命の御母。『古事記』に「天之冬衣神、この神刺國大神の女、名は刺國若比賣に娶ひて生みませる子、大國主神。」とある。大國主命が八十神にはかれて焼石で絶命せられた時、御祖命は天に上つて神産巢日之命に訴へ、これを蘇生せしめ、山中でまた絶命させられたのを知つて活かし、難を紀伊に避けしめ、ついで、根堅洲國の須佐之男命に頼らしめられた。(古事記)

佐介貞俊妻

元弘の亂に、貞俊は北條氏に従つて金剛山を攻め、亂平ぐや捕へられて刑死した。死に臨みその辭世及び佩刀を僧に托して妻に遺つた。妻はこれを見て、「誰見よとかたみを人の留めけんたへてあるべき命ならぬに」と詠じて自盡した。(太平記)

佐竹義隆妻

義隆は出羽秋田の城主。同族淡路の女で、嫁して義處、義長を生んだ。嗣子義處は鳥越に居り、義長は本所に住んだが、母は命ずるに義長をして三日毎に必ず義處を問はしめ、義處には弟を愛し、兄弟相協力すべきことを以てした。義長多病の故を以て、老職より風雨霜雪の時

の長女。十八歳の時、政壽を入夫とし、一男一女を擧げた。中島廣足に國文、歌學を受け、詠歌一萬首に及んだといふ。資性貞順、従つて學ぶものも多く、藩主からその善行を賞せられたこともある。慶應三年八月十七日、七十三歳にて歿した。(好古集記)

薩妙觀

萬葉の歌人。元正、聖武の朝の命婦。卷二に元正天皇の「郭公なほも鳴かなむ本つ人懸けつゝもとな我をねしなくも」の御製に唱和し奉つた「郭公こゝに近くを來鳴きてよ過ぎなむ後にしるしあらめやも」の歌がある。橘諸兄が、天平元年班田使となつて山背に行き、「茜さす晝はたゞびてぬば玉の夜のいとまに摘める芹これ」の歌を添へて芹を命婦等の許に送つた時、「丈夫と思へるものを太刀はきて樺の田に芹ぞつみける」と報いた歌も見える。(萬葉集)

紗手媛

安閑天皇の妃。大臣許勢男人の女。元年三月妃となり、十月、小墾田屯倉及び諸國の田部を賜はつた。(日本書紀)

佐藤志津子

「二五一一—二五七九」 教育家。醫尙中の女、男爵進の妻。女子美術學校、佐藤高等女學校を經營した。明治二十一年頃より芝青松寺の北野元峯につき參禪し、また生花、長刀、茶道等に通じた。大正四年寶冠章を授けら

れ、同八年三月十七日歿した。年六十九。(大百科事典)

佐藤由里子

ゆりこ「二四八六―二五六八」大垣藩士佐藤只五郎の妻。文政九年三月十四日生れ、只五郎に嫁して六男五女を擧げたが、長男文之助を戊辰の役に亡ひ、ついで夫と死別するや、單身艱苦をしのいで子女を養育した。刀圭界に知られた佐藤三吉はその一人である。明治四十一年八月六日歿、年八十三。(大日本人名辭書)

眞田信之妻

さなだのつば 烈婦。本多忠勝の女。三河國碧海郡の人。徳川家康の養女として信之(初め信幸)に嫁した。慶長五年の會津征伐に、信之は、その父昌幸及び弟信繁(幸村)とともに家康に従ふべく信州上田を發したが、佐野において石田三成の書を受取つた昌幸父子は改めてその去就を議し、信之は家康の恩遇を受くるを理由として東軍につき、幸村(その妻は大谷吉隆の女)は秀吉の知遇を以て西軍に投ぜんことを主張した。昌幸は石田三成の女を妻とし、もとより家康と善くないので、幸村の議を容れて直に軍を返した。初め信之の師を發するや、夫人は昌幸の心測りがたきことを云ひ、時勢は父子兄弟の信をも保ち難きことを警告したといふ。昌幸、沼田(信之の居城)を過ぎる時、城中に使を派して、妻子を見んことを通じたが、信之のともにあらざるを以て疑ひ、固く

これを拒んで、若し強いて城に入らんには、妾、兒を殺し火を縱ちて城を焚き、己れまた自刃せん、然る後入るべしといった。昌幸は聞いて、流石に忠勝の女なりと歎じ、正覺寺に入つたが、夫人はなほ兵士の鬪争を恐れ、侍婢三十餘人をして帕首し、長刀を執つて市中を警めたといふ。既にして信之、秀忠に従つて昌幸を上田城に攻むるや、夫人は父子東西に分れて、家士また異心を抱くものあるを怖れ、諸老以下の妻子を城中に邀へて宴樂し、そのまゝこれを留めて還さなかつた。蓋し、妻子を以て質に擬したのである。時人歎稱して、その智勇は乃父本多氏に譲らずといつた。秀忠は昌幸に遮られて關ヶ原の戦に會するを得ずして家康の不興を蒙り、昌幸には死を賜はらんとしたが、信之己れの功にかへて助命を乞ひ、昌幸、幸村は紀伊の九度山麓に放たれた。信之は屢々徳川氏のために功を樹て、後、松代城十三萬石に至り、萬治元年十月九十三歳で歿し、男信政がその後を繼いだ。夫人の生没年不詳、大蓮源夫人と號した。(野史、明良洪範、續尾三善行録)

讚岐典侍

てんぎの 伊豫守の作者。伊豫三位藤原兼子とも、兼子の妹の藤原長子ともいはれるが、後者とするが眞に近い。玉井幸助氏の「讚岐典侍日記の作者について」によれば、作者は、讚岐入道藤原顯綱の女で、その名を長子と

いつた。姉の兼子は叔父敦家(伊豫守)に嫁し、承暦三年三十歳の時に、男敦兼を生んだ。此の年堀河天皇降誕あり、兼子は選ばれて御乳母の一人となつた。應徳三年十二月十九日、堀河天皇即位の日、兼子は從五位上にて褰帳に奉仕した。當時、兼子は讚岐典侍と呼ばれた。越えて、寛治二年十二月十七日、八十島使に奉仕し、その賞として三位に叙せられ、以後讚岐三位と稱せられた。その後十餘年、康和二年十二月晦日に、長子は堀河天皇の典侍となつた。これより長子を讚岐典侍と呼び、兼子を伊豫三位と呼んだ。伊豫は兼子の夫敦家の任國である。長子は堀河天皇に仕へること前後約八年、特に恩寵に浴した。嘉祥二年七月、天皇の重患に際し、兼子は病のために親しく奉仕するを得ず、長子は姉の命を奉じ、専ら御病床に侍した。天皇の大漸に當り、長子は乳母等とともに素服を賜はつた。然るに院宣辭するに由なく、再び新帝鳥羽天皇の典侍となり、その十二月一日、新帝の即位の禮に當つて、褰帳に奉仕し、それより續いて典侍たること約十年、

讚岐典侍と呼ばれたことは前朝のまゝであつた。役を退いて後、鳥羽帝の信任を受け、時々天機を奉伺した。元永の頃一時精神病に冒されて出仕を禁められ、その後のことは詳でない。兼子は長承二年七月十三日八十四歳で死んだ。長子が

これを拒んで、若し強いて城に入らんには、妾、兒を殺し火を縱ちて城を焚き、己れまた自刃せん、然る後入るべしといった。昌幸は聞いて、流石に忠勝の女なりと歎じ、正覺寺に入つたが、夫人はなほ兵士の鬪争を恐れ、侍婢三十餘人をして帕首し、長刀を執つて市中を警めたといふ。既にして信之、秀忠に従つて昌幸を上田城に攻むるや、夫人は父子東西に分れて、家士また異心を抱くものあるを怖れ、諸老以下の妻子を城中に邀へて宴樂し、そのまゝこれを留めて還さなかつた。蓋し、妻子を以て質に擬したのである。時人歎稱して、その智勇は乃父本多氏に譲らずといつた。秀忠は昌幸に遮られて關ヶ原の戦に會するを得ずして家康の不興を蒙り、昌幸には死を賜はらんとしたが、信之己れの功にかへて助命を乞ひ、昌幸、幸村は紀伊の九度山麓に放たれた。信之は屢々徳川氏のために功を樹て、後、松代城十三萬石に至り、萬治元年十月九十三歳で歿し、男信政がその後を繼いだ。夫人の生没年不詳、大蓮源夫人と號した。(野史、明良洪範、續尾三善行録)

狭野茅上娘子

さののちが 萬葉の代表的歌人。卷十五に、中臣宅守との贈答歌二十三首(宅守四十首)があり、何れも激情の悲歌で、強く人を打つものがある。「萬葉集」の目錄に、「中臣朝臣宅守、娶藏部女、嫂狭野茅上娘子之時、勅斷流罪、配越前國也。是於、夫婦相、嘆易別難會、各々陳情、贈答歌六十三首」とあることから、中臣宅守が茅上娘子と重婚したがゆゑに罪せられたとも思はれるが、當時は單なる重婚であれば常態に過ぎないので、何か他に理由があるべきである。一本には嫂の字が婦とあつて、「藏部女婦狭野茅上娘子を娶りし時」と讀むものもあるが、藏部女婦が如何なるものであるかも不明である。「續日本紀」によれば、宅守は天平十一年六月天下に大赦があつた時にも、「中臣宅守不在赦限」とて、特にその赦にも洩れてゐる。しかし、

天平寶字七年正月には從五位下を授けられた記事があるから、その頃には歸京してゐたことが知られる。宅守の歌も男性にありがちな戀愛の遊戯的氣分等は毫末も認められず、一途に強い眞實性をあらはしてゐるが、殊に娘子の作においては、宅守への愛を中心にして、彼女の命全體が燃えてゐる感さへある。「君がゆく道の長手をくりたゝね焼き亡ぼさむの火もがも」(娘子)、「恐こみと宣らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名宣りつ」(宅守)。蓋し、情熱と技倆とを兼有した萬葉の代表作家たることは否めない。(萬葉集)

吾背子しけだし罷らば白妙のそでを振らさめ見つゝ忍ばむ歸りける人來れりと云ひしかばほとゝ死にき君かと思ひて
茅上娘子

眞子内親王 さいねいしんわう 「一五三〇」 仁明天皇の皇女。更衣紀種子の御所生。貞觀十二年五月薨せられた。天皇事を視給はざること三日であつた。(三代實錄)

佐伯東人妻 さへきのあづま 萬葉の歌人。東人が、西海道節度使判官となつて、彼地に渡つたとき、贈答した歌がある。「間なく戀ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にし見ゆる」(妻)、「草枕たびに久しくなりぬれば汝をこそ思へな戀を吾妹」(東人)。(萬葉集)

三氏は彦坐王(狹穗彦の父)を祖と稱し、二氏は彦坐命子狹穗彦命之後也と稱してゐる。雄略紀十三年の條には、「狹穗彦の玄孫齒田根命、云々。齒田根命、馬八匹、大刀八口を以て罪過を祓除ひ、云々。天皇齒田根命をして、資財を餌香市邊(古河内國)の、橋本の土に露はに置かしめて、云々。」とあり、狹穗彦王の子孫の河内にゐたことがわかる。また『國造本紀』には、「甲斐國造、繼向日代朝御世、狹穗彦王三世孫、臣知津彦公、此子鹽海足尼、定賜國造」と見えてゐる。(參國造本紀)

狹穗姫皇后 さほひめのみくらみ 「一六三六」 垂仁天皇の皇后。開化天皇の皇子彦坐命の女。御母は春日建國勝戸賣の女沙本之大闇見戸賣である。別名佐波邊比賣命。天皇の二年二月立ちて皇后となり、譽津別命を生まれた。天皇は磯城の玉垣宮に世を知しめしたが、五年に至り、皇后の御兄狹穗彦命の叛が起つた。『紀』には、「四年秋九月、皇后の母兄狹穗彦王、謀反、社稷を危めむと欲ふ。よりて皇后の燕居を伺ひて語りて曰はく、汝、兄と夫と孰れか愛しき。是に皇后、問ふ意趣を知しめさずして、すなはち對へて曰はく、兄愛し。則ち皇后を誂へて曰く、それ色を以て人に事ふるは、色衰へて寵やむ。今天下に佳人多なり。各たがひに進みて寵を求む。豈永

沙本大闇見戸賣 さほのみくらみ 垂仁天皇の皇后狹穗姫の御母。彦坐王の妃。『記』に「春日建國勝戸賣が女、名は沙本之大闇見戸賣」とあり、「抑女のために親を云には、父を擧る例なるに、戸賣と云は女の名にて母の如聞ゆるは如何ぞや、水垣宮の段に荒河刀辨之女云々とあるも、此と同例なり。これら殊なる由ありて、父をおきて母を擧るにや。」と『記傳』には云つてゐる。沙本は大和國添上郡の地名、『神名帳』に若狹國三方郡闇見神社がある。この姫を祭つたのであらう。蓋し、この姫の末子室毘古王は若狹之耳別之祖とあるから、この王が祖神として奉齋したものであらう。彦坐王との第一子は狹穗彦命で、垂仁紀に叛亂を起した事が見えてゐる。第二子は袁邪本王、第三子は狹穗姫皇后、次が室毘古王である。何れも彦坐王の居地にはゐないで、母沙本大闇見戸賣の本居に居り、沙本といふその氏の名を嗣いでゐるのは、當時としては常例であつて、則ち母系制の名残を色濃く物語るものである。狹穗彦の叛亂後一族は若狹、近江、甲斐等へ四散したらしく、それらの諸國に闇見戸賣の裔がその後繁延した。然し、近地にも猶ほ残つてゐて、日下部連氏が河内に、葛野之別氏が山城にゐた。日下部氏は九氏(姓氏錄)の中、七氏が皇別氏、二氏が神別氏である。その皇別氏中、一氏は大彦命、

に色を恃むことを得むや。是を以て冀はくは、吾あまつひつぎしらせば、必ず汝と天下に照臨みて、則ち枕を高くして永に百年を終む。亦快からざらむや。願はくは我がために天皇を弑せまつれ。よりて七首を執りて皇后に授けて曰はく、是の七首をはころもの中に佩びて、天皇の寢ますに當り、すなはち頸を刺して弑せまつれ。皇后是に於いて、心の裏にふるひわたきてせむすべ知らず。然れども兄王の志を視るに、すなはち諫むること得まじ。故れ其の七首を受けりて、えかくすまみみて、以て衣の中に著けり。五年冬十月、天皇來目に幸して高宮に居ます。時に天皇皇后の膝を枕にして晝寢ませり。是に皇后既に成けたまふ事なく、空しく思はく、兄王の謀る所はただいまなり。即ち眼涙流りて帝面に落つ。天皇則ちさめて皇后に語りて曰はく、朕今日夢むらく、錦色なる小蛇、朕が頸に繞る。また大雨、狹穗よりふりて來て面を濡らすとみつる。是何の祥ならむ。皇后即ち謀を得匿たまふまじきことを知りて、悚ち恐みて地に伏して、つまびらかに兄王の反狀を上したまふ。よりて以て奏して曰はく、妾、兄王の志に違ふこと能はず、また天皇の恩に背くことを得ず。まをさば則ち兄王を亡はむ、言さずば即ち社稷を傾けてむ。是を以て一たびは則ち以て懼れ、一たびは則ち以て悲ぶ。俯し仰ぎて

むせび、進退ひて血泣ち、日夜懐惚りてえまをすまじ、ただ今日、天皇妾が膝に枕して寝ませり。是に於いて妾一はし思へらく、若し狂へる婦ありて、兄の志を成すものならば、ただいま是の時に勞かずして以て功を成げむ。この意未だ竟らず、眼清自ら流る。則ち袖を擧げて涕を拭ふに、袖よりもりて帝面を沾しつ。故れ今日の夢は必ず是の事の應ならむ。錦色の小蛇は妾に授けし七首なり。大雨の忽にふるは則ち妾が眼涙なり。天皇皇后にかたりて曰はく、是汝の罪に非るなり。即ち近縣の卒を發して、上毛野君の遠祖八綱田に命せて、狹穂彦を撃たしめたまふ。時に狹穂彦師を興してふせぐ。忽に稻を積みて城に作る。其の堅きこと破る可からず。これを稻城と謂ふ。月を陰ゆるまで降はず。是に於いて皇后悲びて曰はく、吾皇后なりと雖も、兄王を亡ひては、何の面目ありてか天下に莅まむやといひて、則ち王子譽津別命を抱きて、兄王の稻城に入りましぬ。天皇更に軍衆をまして、悉に其の城を圍み、即ち城の中に勅して曰はく、すみやかに皇后と皇子とを出せと。然るに出でまゐらせず。即ち將軍八綱田火を放けて其の城を焚く。こゝに皇后皇子を懷抱かしめて、城の上を踰えて出でたまへり。よりにて奏請して曰はく、妾始め兄の城に逃入りし所以は、若し妾と子によりて兄の罪を免

るゝこと有らむか。今免るゝことを得ずば、乃ち妾が罪有ることを知りぬ。何ぞみづからとらはるゝことを得む。自經ぎて死らるのみ。唯妾死ると雖も、敢て天皇の恩を忘れじ。願はくは、妾が掌りし后宮の事は、宜べきをむなどにも授へ。丹波國に五婦人あり、志並に貞潔し。これ丹波道主王の女なり。當に掖庭に納れて、以て后宮の數につかひたまへ。天皇聽したまふ。時に火興り城崩れて、軍衆悉に走る。狹穂彦妹と共に城の中に死りぬ。天皇是に將軍八綱田の功を美めたまひて、其の名を號けて倭日向武日向彦八綱田といふ。」とあり、『記』には、皇后が御兄の稻城の中に入られた時は御懷妊中であつたとし、その後のことを次のごとく記してゐる。「こゝに天皇、その後の、愛しみ重みしたまふことも、三年になりぬるに、姪ましてさへあることを、いと哀しと思ほしき。かれその軍を休はしめつゝ、急やけくも攻めたまはざりき。かく逗留れる間に、その姪ませりし御子産れましぬ。かれその御子を出して、稻城の外に置きまつりて、天皇に白さしめたまはく、若しこの御子をば、天皇の御子と思ほしめさば、治めたまへとまをさしめたまひき。こゝに天皇、その兄をこそ怨ひたまへれ。猶后をばいと愛しとおもほせりければ、これ得たまはむの心ましき。是を以て軍士の中に力士の

捷きを選び聚へて、宣りたまひつらくは、かの御子を取らむ時、その母王をも掠ひ取りてよ。御髪にまれ、御手にまれ、取り獲むまに、拵みて控き出でまつれとのりたまひき。こゝにその後豫めその御心を知りたまひて、悉にその髪を剃りて、その御髪もて御頭を覆ひ、また玉緒を腐して、御手に三重まかし、また酒もて御衣を腐して、全き衣のごと服せり。かく設け備へて、その御子を抱きて、城の外に刺し出でたまひき。かれその力士ども、その御子を取りまつりて、即ちその御祖を握りまつらむと、その御髪を握れば、御髪自ら落ち、その御手を握れば、玉緒また絶え、その御衣を握れば、御衣すなはち破れつ。是を以てその御子を取り獲まつりて、その御祖をば得とりまつらざりき。かれその軍士ども、還りまゐ來て、奏しつらく、御髪自ら落ち、御衣また破れ、御手にまさせる玉緒も絶えにしかば、御祖をば獲まつらず、御子を取り得まつりつとまをす。こゝに天皇悔い恨みたまひて、玉作りし人どもを惡まして、その地を皆奪りたまひき。かれ諺に、地得ぬ玉作とぞいふなる。また天皇、その後に詔らしめたまはく、すべて子の名は、必ず母なもつくるを。この御子の御名をば、何とかつけむと詔らしめたまひき。かれ御答白したまはく、今稻城を焼くをりしも、火中に生れませれば、そ

の御名は、本牟智和氣御子とぞつけまつるべきとまをさしめたまひき。また如何にして養しまつらむと詔らしめたまへるに、御母を取り、大湯坐若湯坐を定めて、養しまつるべしとまをさしたまひき。かれその後のまをさしたまひのまに、養しまつりき。またその後に、汝の堅めし美豆の小佩は、誰かも解かむと問はしめたまへば、且波比古多多須美智能宇斯王の女、名は兄比賣弟比賣、この二柱の女王ぞ、淨き公民にませば、使ひたまふべしとまをさしめたまひき。然ありて遂にその沙本比古王を殺りたまへるに、その同母妹も従ひたまひき。」後、十五年二月、天皇は、皇后の言の如く、丹波の五女を後宮に召された。〔圖〕日葉酢媛皇后 (日本書紀、古事記)

佐見都日女命 サミツヒメノミコト 倭姫命が皇大神を奉じて伊勢に遷幸の時、奉迎せられた神。堅鹽を獻じて御饗し、倭姫命より嘉賞せられ、神宮攝社堅田神社に祀られる。(倭姫命世記)

沙彌女王 サミメノクニ 萬葉の歌人。傳不詳。「倉橋の山を高みか夜隠りに出で来る月の片待ちがたき」。(萬葉集)

寒川比古命 サマカハヒコノミコト 寒川比古命とともに、相模の寒川神社の祭神。事蹟不明であるが、恐らく、國神で、當國に勢力を布かれたものであらうといふ。『延喜式』には讚岐寒川郡大養彦神社、下總千葉郡寒川神社があり、皇大神宮末社牟彌

乃神社もこの神を祀つてゐる。(神祇辭典)

さよ

節婦。水戸吉沼村の農女。伊平太に嫁し、二兒を擧げた。伊平太の病むや田を賣りて療資にあて、伊平太を車にのせ、一兒を負ひ、一兒の手を引きつゝ車を挽いて奥州岩城の温泉に入湯せしめた。享保十九年七月、事藩に聞え、賣る所の田を贖ひ與へてこれを賞した。(新編常陸國誌)

贊用都比賣命

のまこと 『播磨風土記』讚容郡の條に「讚容と云ふ所以は、大神妹妹二柱、各競うて國を占むる時、妹玉津日女命生ける鹿を捕へ臥せて、其腹を割いて稻を其血に種う。仍つて一夜の間に苗生ず。即ち取つて殖多しむ。こゝに大神勅して云、汝妹は五月の夜殖うるや。即ち彼處を云つて五月夜郡と號ふ。神を贊用都比賣命と名づく。今も讚用町田有り。」とある。『和名抄』佐用郷、『式』作用郡佐用都比賣神社。按ずるに市杵島姫の一名狹依毘賣命である。同神か。『古事記傳』に「田植る農業を、凡て佐と云ふ。その苗を佐苗(早苗としては早の意かなはず)、植る女を佐少女、植始むるを佐開、植終るを佐登など云が如し。さて又其業する月を佐月と云ひ(さなへ月と心得るは、本末違へり)其頃の雨を佐亂と云ふなり。かゝれば狹蠅も、田植るころの蠅と云意の稱なり。」とあり、この姫が農業を經營された女神であ

ることは、文中にも見えてゐる通りである。(播磨風土記)

佐用姫

ひめ 松浦佐用姫

狹依毘賣命

のまこと 市杵島姫命

澤田さち

その著に『女今川』がある。『女今川』は今川了俊がその弟仲秋を訓誡した『今川狀』にならひ、婦女子日常の教訓たるべき條々を繪入假名文に綴つたもので、元祿十三年の刊行である。(女今川)

三條局

のつばね 「一七九八」鳥羽天皇の宮人。藤原氏。參議家政の女。待賢門院に仕へて、三條局と稱した。幸を得て妍子内親王を生まれた。保延四年、河内守俊賢の子成賢のために、普賢堂に害められ、俊賢は事に坐して京外に擯けられた。(二代要記、皇胤紹運録、百鍊鈔、今鏡)

三條局

のつばね 龜山天皇の宮人。藤原氏。正三位實平の女。典侍となり、大納言典侍とも三條局とも稱し、良助法親王、聖雲法親王、覺雲法親王及び一皇女(攝政藤原師教に降嫁)を生まれた。(皇胤紹運録、増鏡)

三條局

のつばね 藤原氏。權大納言實明の長女。宣光門院の異母姉。陽徳門院に仕へた。三條局と稱し、また東御方ともいひ、從三位に叙せられ、伏見天皇の幸を得て道照法親王、

進子内親王を生まれた。後、後伏見天皇に侍して、長助法親王、寛胤法親王、承胤法親王、亮性法親王、章徳門院を生まれた。宮を出で、後、左大臣藤原公賢に嫁した。(歴代皇紀、女院小傳、尊卑分脈、圓太歷系圖、大日本史)

三位局

のつばね 後陽成天皇の宮人。清原氏。播磨守清原胤榮の女。道見法親王及び二皇女を生まれた。(野史)

し

鹽竈命婦

のまこと 『童蒙抄』に、「昔みちのくにのかみ、しほかまの明神にちかひ申すことありて、ひとりむすめを、あてまゐりて、かの神の寶殿のうちに、おしいれてかへりにけり。このむすめかなしみて、神殿よりさし出たり。父これをみけるに心まどひにけり。それよりこの神の命婦は、みやづかさのかざらむかぎりは、おやこたがひに、みゆまじとちかへり。年にひとたびのまつりのひならぬかぎりは、ひとにあひみえず。彼女の子孫今にすぎてその命婦たり。委は見陸

さんみーしきけ

奥國風俗」とある。(童蒙抄)

慈音

のつばね 心學者。近江堅田在吉田村の人、八歳で母を亡つて世を厭ふ心を生じ、十四歳、自ら髪を斷ち、十六歳、家を出で、京都藥師山に自秀尼の徒弟となり、兼葭慈音尼と稱した。ついで彦根正法寺に赴き、桃谷尼に師事し、専ら悟道を得んことをとめ、石山寺に斷食して參籠したり、水垢離を取り、茶を斷ち、三千佛を三日三夜拜して刻苦したりしたが得るところなく、最後に心學者石田梅巖について頓悟した。安永の初年、江戸に下つて心學の普及に従ひ、世人の誹謗誤解を受くるも意とせず、同二年十月『道得問答』四卷を著し、翌三年一月これを公けにした。梅巖は心學の開祖であるが、慈音尼は江戸で心學を説いた最初の人である。『道得問答』は、梅巖の教訓を憶記したもの、尼が人に答へたことの覺え書等から成り、心學書として、優秀な作の一に數へられる。(道得問答)

式乾門院

のつばね 「一八五七—一九一一」尊稱皇后。齋宮。後高倉院の女利子内親王。御母は北白河院陳子。建久八年誕生、後堀河天皇の嘉祿二年十一月内親王となり、同時に、伊勢齋宮に卜定せられ、安貞二年九月伊勢に赴き、寛喜元年四月、三宮に准ぜられ、貞永元年十月十四日、天皇の讓位によ

り齋宮を退下(在任七年)して歸洛、天福元年六月二十日、四條天皇の母儀に准ぜられ、尊稱して皇后とられた。延應元年十一月十二日病により落飾、法名を眞性智と稱し、同日院號を式乾門院と進められ、建長三年正月二日崩せられた。御年五十五。(女院小傳、大百科事典)

式子内親王 しきしのみちのぎみ 「一一八六一」 齋院。歌人。後白河天皇の皇女。從三位藤原成子の御腹で、殷富門院の御妹。また、大炊御門齋院、萱齋院、高倉宮とも稱せられた。母系はすべて文雅の道にすぐれ、公實、實行、公教、實房の如き有数の勅撰集の作者であるが、内親王も當時女流の第一に擧げられる。二條天皇(御兄)の平治元年十月賀茂齋院となり、在任一年、高倉天皇の嘉應元年七月病を以て退下せられた。十餘歳で三宮に准ぜられたが、源平争亂による世相の推移、殊に血縁の間に、崇徳院(御叔父)、以仁王(兄)、圓惠法親王(兄)、安徳天皇(御甥)といふ如く、次々に時運に殉ぜられた方々を見られ、その二三十歳に互る頃の消息は生々しく『千載集』或は家集の中に見られる。ついで、頼朝が鎌倉に幕府を開いた建久三年には、後白河法皇の崩御があり、内親王はその遺領大炊御門院を受けて移り住まれたが、こゝは當時歌人として時めく良經の曾ての邸宅であつたので、「古里の春を忘れて

ぬ八重櫻これやみし世にかはらざるらむ」と述懐せられてゐる。殷富門院の出家も此の年で、建久八年には藏人橋兼仲、僧觀心の陰謀が露顯して、内親王もそれに關係あるが如き疑惑を受けられ、遂にまた自らも出家の身となり、承如法と號した。正治二年、高倉院(御弟)の孫皇子、後の順徳天皇(時に四歳)を御猶子とせられたが、その前年頃より病が重つて、翌三年正月二十五日薨せられた。その病狀の委曲は、内親王に親交あつた藤原定家の『明月記』につくされてゐる。假に仁平元年を御生年に當てれば、享壽五十一歳である。正治二年には『正治百首』の詠があり、最後まで歌道に志されたことが知られる。作は、『千載集』以下の勅撰集に入り、特に『新古今集』には四十九首が選ばれてゐる。『式子内親王家集』には、三百六十九首を収めてある。後鳥羽院の時は、宮廷には文雅の士が多かつたが、女流においては内親王をもつて第一とする。題材の廣汎さ、詠み口の自由さ、哀切な情緒の表現、何れの點より見るも一代の歌人であつた。(皇胤編連録、皇帝紀鈔、齋院記、式子内親王家集)

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする
残りゆく有明の月のもる影にはほの落つる葉隠れの花

夢のうちも移らふ花に風ふけばしづごゝるなき春のうたゝ
淑景舍女御 しゆけいしやのみちのぎみ 「一一六六二」 三條天皇の女御。關白藤原道隆の女。一條天皇の皇后定子の御妹。長徳元年、三條天皇の東宮たりし時入り、尙侍となり、寵せられて女御となり、淑景舍女御と稱した。長保四年八月、吐血して暴に薨せられた。(日本紀略、繁華物語、大鏡裏書、續古今集)

禮子内親王 れいしのみちのぎみ 「〇永安門院」 藤原茂子
滋野井女御 しげのいのめ 藤原茂子
滋野奥子 しげのおくこ 文徳天皇の宮人。參議貞主の女。頗る風儀あり、閨訓よく修めた。惟彦親王、濃子内親王、勝子内親王を生まれた。(文徳實錄)

秋ぎりのたえまゝをながむれば空にうきたる月ぞながる
繁子内親王 しげこのみちのぎみ 「一一五一二」 嵯峨天皇の皇女。橘皇后の御所生。承和中、河内、山城の空間地若干頃を賜はつた。容姿麗麗、進止度があつた。病を以て出家して尼となり、仁壽元年十二月薨せられた。(文徳實錄)

滋野繩子 しげのつなこ 仁明天皇の女御。參議貞主の女。心を兼ること順、進退規に中り、殊に恩幸があつた。本康親王、時子内親王、柔子内親王を生まれた。承和三年正五位下に叙せられ、從四位上に至つた。(文徳實錄、三代實錄、源氏系圖)

重子内親王 しげこのみちのぎみ 「一一五二五」 仁明天皇の皇女。宮人藤原小童子の御所生。貞觀七年七月薨せられた。廢朝三日、その素志により葬司を置かれなかつた。(三代實錄、皇胤系圖)

滋野岑子 しげのねこ 文徳天皇の宮人。攝津守貞雄の女。從五位上に叙せられ、源本有、源載有、源淵子を生まれた。(三代實錄)

繁子内親王 しげこのみちのぎみ 「一一五七六」 齋宮。光孝天皇の皇女。元慶八年三月二十二日伊勢齋宮となり、三品に叙せられ、仁和二年伊勢に赴かれた。同三年(天皇崩御)十月十一日退下し、延喜十六年五月薨せられた。(三代實錄、日本紀略)

重之女 しげのむすめ 「〇源重之女」 梅津氏。如意山中で賊に捉へられ、賣られたものであるといふ。現世の不幸は前世の戒行拙きによるとして、自ら地獄と呼び、衣に地獄變相圖を繻うて著たといふ。嘗て一休と唱和の歌をなしたといふことが知られてゐる。(大日本人名辭書、遊女の文藝)

色夫古娘 いろこむすめ 天智天皇の宮人。忍海造小龍の女。大江皇女、川島皇子、泉内親王を生まれた。(日本書紀)

資子内親王 ししなひ 「一六一五—一六七五」 村上天皇の皇女。皇后安子の御所生。安和二年三品を授けられた。天皇の鍾愛あり、また御兄圓融天皇にも愛せられ給うた。天祿三年内親王が昭陽舎に宴を張つて、藤花を賞せられた時、圓融天皇もこれに臨御あり、一品に進め、ついで三宮に准じ、年官年爵を賜はり、本封の外に千戸を加へられた。寛和二年尼となり、入道一品宮と稱し、長和四年四月、六十一歳で薨せられた。(日本紀略、榮華物語、一代要記、小右記)

夢路にはなこそその關もなしといふに戀しき人のなか見え
こぬ
資子内親王

侍従 じじ 遠江池田驛の遊女。『平家物語』三位中將平重衡の海道下りの條に「池田の宿にもつき給ひぬ。かの宿の長者熊野が女侍従が許に、その夜は宿せられけり。侍従三位の中將殿を見奉りて、日比はつてにだに思し召し寄り給はぬ人の、今日かゝる所へ入らせ給ふことの不思議さよとて、一首の歌を奉る。旅の空はにふの小屋のいぶせきに故郷いかにこひしかるらん。中將の返事に、故郷もこひしくもなし旅のそら都もつひのすみかならねば。やゝありて、中將梶原を召して、さても只今の歌の主はいかなるものぞ。やさしくも仕りたるものかなとの給へば、景時畏りて申しけるは、君は未知し召

され候はずや。あれこそ屋島の大巨殿(○券)の、未當國の守にて渡らせ給ひし時、召され参らせて、御最愛候ひしに、老母をこれに止め置き、常は暇を申しゝかども、たまはざりければ、頃は三月の始にてもや候ひけん、いかにせむ都の春は惜しけれど馴れしあづまの花や散るらん、といふ名歌仕り、暇賜りて下り候ひし、海道一の名人にて候ふとぞ申しける。」とあり、『源平盛衰記』内大臣關東下向付池田の宿遊君の事には、「池田の宿の長庚に今夜は是に宿を取り、侍従といふ遊君あり、情深き女にて、終夜旅をぞ慰め奉る。内大臣(○券)は憂身の旅の空なれば目にも懸け給はねども、女は疊に副ひ臥して明しけり。侍従暇申して歸るとて、東路のはにふのこやのいぶせきに故郷いかに戀ひしかるらん。内大臣優しく思し召して、故郷も戀ひしくはなし旅の空都もつひの栖すまならねば。侍従といふ遊君はこの宿の長者湯谷が女なり。」とある。因みに宗盛の遠江守任官は平治元年(公卿補任)で、十三歳の時である。(平家物語、源平盛衰記、白拍子)

侍従具定母 じじゆうち 越部禪尼

自證院 じじゆうち 阿振方

四條后 しじゆうち 藤原寛子

四條中宮 しじゆうち 藤原蓮子

四條局 しじゆうち 逢春門院

四條宮下野 しじゆうち 歌人。下野守源政隆の女。時の太皇太后(四條宮)に仕へた。生歿年不明。家集に『四條宮下野集』(寫本)があり、『後拾遺集』以下の勅撰集に數首の歌が採られてゐる。(後拾遺集)

さらでだに岩間の水はもるものを氷とけなば名こそながれ
め
四條宮下野

四條宮筑前 しじゆうち 歌人。神祇伯康資王(寛治四年九月卒)の母であるため、また、康資王母とも、伯母ともいふ。

筑前守高階成順の女。母は伊勢大輔。花山院の皇孫延信王の室。妹の筑前乳母、源兼俊母ともに『後拾遺集』の歌人である。母が上東門院に仕へた關係からか、彼女は四條宮皇后に仕へ、四條宮筑前と呼ばれた。四條宮(藤原頼通の女寛子)は永承五年の入内であるから、その頃若年にて宮廷生活に入り、歌人として時めき、頼通、師實等からも愛せられたのであらう、その作には、宮中の生活を享樂してゐるかの如きものや、現在の幸福に満足してゐるやうなものが多い。彼女は常陸に下つたことがあり、經信は京から文を贈つてゐる。通俊は『後拾遺集』を撰するに當つて彼女の歌を乞ひ、歌を贈ると、「此を光として」と追従をいつた。基俊の家に説教を

聴きに行つたり、また基俊と最も親しかつた雲居寺瞻西とも歌を贈答してゐる。長治三年大江匡房が再び太宰権帥となつて任地に行くのを祝つてゐるのは、永承五年頃の宮仕へが餘程若年であつたとしてもこの頃は六十歳以上となり、後冷泉、後三條、白河、堀河の四代に互つて生存したことになり、周防内侍と同時代の人となる。また、康資王の外に、一人の女があつたこと、自分が横河の聖の弟子となつたこと等が傳へられてゐる。『伯母集』(また康資王母集)には百五十四首を収めてあり、勅撰集には『後拾遺集』の九首をはじめ、三十九首が採られてゐる。(伯母集、後拾遺集)

梅ちらす風もこえてや吹きつらむかをれる雪のそでに亂る
る
康資王母

靜 しづか 白拍子。源義經の妾。母は磯禪師といひ、讃岐國大川郡小磯の人、永萬元年淡路の志賀津で、靜を生んだといはれるが確かでない。母とともに白拍子であつたが、義經の寵を得るに至つた年代も、或は壽永元年、或は元暦元年などいふがこれも明かでない。文治元年十月、頼朝から義經を討つべき命を受けた土佐房昌俊が上洛した時、靜は義經の館に侍してゐた。『源平盛衰記』『平家物語』『吾妻鏡』等によれば、昌俊が至つた時、義經はこれを召して己れを圖らんとするか

と詰つたが、昌俊が種々辨疎して起請文まで出したので、漸く疑を解いた。然るにその夕、義經が何となく胸騒ぎするといふので、靜は童子二人を昌俊の客舎に見せにやつた。それが時がたつても歸らないので、再び婢をやらせ、さきの童子二人は門外に斃され、鞍を置いた馬數十頭が出動の準備をしてゐると報じた。俄に昌俊勢が寄せて來ると、寢てゐた義經は、無雜作に刀を執つて立たんとしたので、靜は、小敵と思つて侮つてはならぬといつて、甲冑弓矢を進めた。義經が京都を落ちる時、靜も從つて吉野山に遁れたが、義經はこゝで彼女とも別れて、奥州の地を志すこととなり、靜には護送の雑色をつけて都に歸らせるやうにしたところ、雑色どもは、義經が靜に與へた金銀財寶をかすめて、逃げ去つた。靜は山僧に捕へられ、京都に送致された。時に十一月十七日。北條時政の具狀によつて更に母の禪師とともに鎌倉に下されることになつた。文治二年二月十四日京を出て、三月一日鎌倉についた。靜訊問のことは、『吾妻鏡』三月六日と、同二十二日の條に出てゐる。「靜女を俊兼盛時等を以て豫州(經)の事を問はる。先日吉野山に逗留するの由之を申す太だ以て信用せられず。靜申して云はく、山中にはあらず當山の僧房なり。而るに大衆蜂起の事を聞くに依て其所より山伏の姿に似

せ、大峰に入るべきの由を稱して山に入る。件の僧之を送る。我れ又慕うて一の鳥居の邊に至るところ、女人は峰に入れざるの由を彼の僧相語るに依り東の方に趣くの時、供に在るの雑色等財寶を取りて逐電するの後、藏王堂に迷ひ行くと。重ねて坊主の僧の名を尋ねらる。忘却の由を申す。京都に於いて申す旨と、今日の口狀と頗る違ふに依つて、なほ法に任せ召問ふべきの旨仰出さる。」といふのと、「靜女が事仔細を尋ね問はると雖も、豫州の在所を知らざるの由申し切り畢んぬ。當時懷妊する所は彼の子息なり。産生の後は返し(○京師に)遣はさるゝ由沙汰あり」といふのがそれである。頼朝の室政子から、靜の舞を見たいと、屢々その由を傳へても、一たび義經の後房に入つた身としては、衆人環視の中に恥を示すことは堪へがたいとて、病氣を名として斷つてゐたが、四月八日、頼朝は政子とともに鶴岡八幡宮に詣で、彼女に此處で舞ふべきことを命じた。かくて彼女は辭するに由なく、立つて舞ひ、工藤祐經は鼓を打ち、畠山重忠は銅拍子をとつてこれに和した。靜は先づ「君が代」を詠つたが、ついで、「芳野山峰の白雪ふみわけて入りにし人のあとぞ戀しき、つゞけて、「しづやしづ賤のをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」と詠つた。蓋し、古歌に托して胸中の鬱懷を洩らし

たのである。その聲、その姿、並居るものを感動せしめ、『吾妻鏡』には、「聲態絶妙、衆皆感愴」と記してゐる。然るに頼朝は、今日神前にあつて歌舞を奏するに、關東の萬歳をこそ頌すべきに、謀叛人を慕つて離別の曲を歌ふは奇怪であるといつたが、政子は己れが嘗つて時政から頼朝との間を堰かれ、一夜雨を衝いて彼の許へ奔つた當時のことをいつて、今もし靜が義經の恩を忘れ、戀ひ慕はなかつたなら、女の操を忘れたものといはれようといつて宥めたので、頼朝も著てゐた衣を脱いで贈物したといふ。或時、工藤祐經、梶原景茂の二人が、靜の寓居を訪れ、景茂が醉に乗じて、挑みかけると、彼女は涙を流し、容を改めて、「豫州者、鎌倉殿御連枝、吾者彼妾也。爲御家人身、爭存普通女、哉。豫州不牢籠者、對面干和主、猶不可有事也。況於今儀哉」と辱めた。既にして彼女は、月満ちて男兒を生み落した。男兒出生の報を聞かば、頼朝は直に安達清經を遣はして、これを由井ヶ濱に棄て去るべきことを命じた。かくて靜は漸く鎌倉を放たれ、都に歸り、洛外嵯峨の片山里に隠れ、幾くもなく歿した(吾妻鏡)。『義經記』には、「あけ暮れ持佛堂に引籠り、經を讀み、佛の御名を唱へてありけるが、母にも知らせず、髪を切りて剃りこぼし、天龍寺の麓に草の庵を引きむすび、母のせ

んじ諸共に、行ひすましてぞ有りける。姿も心も人にすぐれたり。惜しかるべき年ぞかし。十九にて様をかへ、次の年の秋の暮には、思ひや胸に積りけむ、念佛申し、往生をぞ遂げにける。」とあり、『靜御前の生涯』には、彼女は鎌倉を立退いてから、奥州に下り、途中義經戦歿と聞いて、遂に武州栗橋在に亡くなつた。その墓は高柳村の松永にあり、享和二年關東郡代中川飛騨守が靜女の墓を立てたとも云はれ、今、近くの光了寺には、靜が雨乞の時、後鳥羽天皇より賜はつた舞衣を寺寶としてゐるといつてゐるが、なほ彼女に關する傳説は各地に多くあつて信じ難い。(吾妻鏡、義經記、靜御前、靜御前の生涯)

新齊都媛 しせつ 百濟直支王の妹。應神紀三十九年條に「春二月、百濟の直支王、その妹新齊都媛を遣して以て仕へしむ。爰に新齊都媛、七の婦女を率ゐて來歸けり。」と見える。(日本書紀)

下照姫命 めしたて 下光比賣命。またの名を高比賣命とも、稚國玉命ともいふ。大國主命が多紀理毘賣命と婚して生まれた御女。名義は、容姿美麗にして下土に照りわたる意とせられ、別名の稚國玉といふは、父神を輔け國土經營に功をたてられた義であらうといふ。天若日子(天稚彦)と婚せられた

が、天若日子が矢に當つて死するや（天佐具賣、雉名鳴女參照）、姫の號泣は天に達した。若日子の父天國玉はよつて疾風を遣はしてその屍を天に運ばしめた。姫の兄味耜高彥根神は、天に登つて弔問せられたが、若日子の妻子等がその姿が若日子に似てゐると思ひあやまり、その體に觸れたので、高彥根神は如何ぞ死人を我に誤つやと怒つて、劍を以て喪屋を斫り倒したのが、落ちて美濃國の喪山となつた。時に高彥根神は二丘二谷の間にてりかやいた。御妹下照姬命は「天なるや、弟棚機うぶかの、嬰うぶかせる、玉の御統みすま、御統に、穴玉はや、眞谷、二互らす、阿遲志貴、高日子根の、神ぞや」と歌つて、その兄の名を顯はされた。これを以てまた素盞鳴尊とともに歌の祖神とせられる。（日本書紀、古事記）

下照比賣命

阿加留姬命

七條院

高倉天皇の後宮。藤原殖子。贈左大臣信隆の女。御母は贈正一位藤原休子。初め建禮門院に仕へて兵衛督君と稱した。後、典侍となり、後高倉院及び後鳥羽天皇を生まれた。後鳥羽天皇の建久元年四月十九日、從三位を授けられ、三宮に准じ、同月二十二日院號の宣下があつて七條院と進められ、元久二年薨髪して、眞如智と號せられた。承久の亂に、京師が陥り、後鳥羽上皇は鳥

羽殿に遷御せられたが、御薨髪に臨み、藤原信實に命じて御姿を寫さしめ、これを七條院に贈られた。女院は上皇の後宮修明門院とともに鳥羽殿に赴き謁せられたが、遂に宮に入ることを得ずして還り、上皇は隱岐に遷られた。安貞二年九月十六日薨去、御年七十二。七條院附屬の領は頗る多かつたが、その大部分は修明門院に傳はり、更に順德天皇の皇子善統親王の四辻親王家の領及び後宇多院領となつた。（吾妻鏡、最久記、女院小傳、大百科事典）

七條院權大夫

左京權大夫光綱の女。高倉天皇の典侍、また七條院の女房であつた。歌は『新古今集』

『續古今集』に見える。（新古今集、續古今集）
秋來ぬと松吹く風も知らせけりかならず萩のらは葉ならね

七條院權大夫

七條院大納言

歌人。中納言實綱の女。七條院の女房。歌は『新古今集』『新勅撰集』に見える。（新古今集、新勅撰集）

こと問はむ野鳥が崎のあまごころも波と月とにいかかしをる

七條后

藤原温子

芳原松葉屋の妓。奈良の醫師大森通仙（右膳）の

女。本名たか。奈良奉行組の與力玉井氏の奴源八に懸想せられ、これを拒絶するや、源八は春日の神鹿を殺して通仙の門前に棄て、ために通仙一家は追放せられて大坂に移り、通仙の歿後彼女は鯛屋貞柳の媒介により城代内藤藤前守の家士小野田久之進に母を伴うて嫁した。享保三年内藤氏が任滿ちて江戸に出づるに従つて、久之進一家も移つたが、間もなく久之進は豊前守大坂在勤中の跡勘定取片附として、主命を帯び、四百五十兩の用金を齎し下坂の途次、江尻驛において金を奪はれるとともにその身も殺され、小野田家は關所となり、彼女は、止むなく、新吉原に投じて、江戸町松葉屋の娼妓となり、瀬川と名乗つた。享保七年四月、偶々登樓客中に亡夫の印鑑、佩刀を所持するものあるを知り、源八が三人連れで遊興してゐるのを見届けてこれを傷けた。よつて三賊を捕へてこれを鈴森に梟し、瀬川は特に娼を免ぜられた。薨髪して尼となり自貞尼と稱し、草廬を淺草に設け、再法庵と號し、専ら先考亡夫の追福を事とした。（翁草、續齋雨話）

持統天皇

第四十一代の天皇

高天原廣野姬天皇。天武天皇の皇后。天智天皇の第二皇女鸕野讚良皇女。御母は遠智娘。齊明天皇の三年、天武天皇がなほ皇子である時、その妃となり、草壁皇子を生まれ、そ

の後二代を経て天皇が飛鳥の淨御原宮に即位せらるゝに及び皇后に立たれた。初め、天智天皇は大漸に際し、當時皇太弟であつた天皇に後事を委ねようとせられたが、天皇は固辭して、法衣を着けて吉野宮に入れられ、天智天皇崩御の後には弘文天皇が立たれた。然るに幾くもなく、近江朝廷との戦端が開かれ、天皇は吉野宮を出て、伊賀の中山を経て伊勢の鈴鹿、桑名に入り、諸郡を徇へて美濃の不破に進み、更に近江に向つて、途々大に戦ひ、行々武威を高めた。此の間皇后は常に軍中にあつて、險路を越え、艱難を共にせられ、與に謀を定め、軍の終るまで終始天皇を輔けて天下を定められた。天武天皇は、在位十五年、國粹の保存と文化の發展に努め、大に治績を擧げられた。その九年三月には、川島皇子、忍壁皇子、廣瀨王、竹田王、桑田王、三野王、大錦下上毛野君三千、小錦中忌部連子首、小錦下阿曇連稻敷、難波連大形、大山上中臣連大嶋、大山下平群臣子首に詔して、『帝紀』及び上古の諸事を記し定めしめられたが、この詔は後『日本書紀』成立の基本となつたのである。婦人のために男子同様の乗馬法を制せられたのも十年十二月である。これより先、天皇は七年五月吉野宮に行幸せられ、皇后、草壁皇子及び異腹の諸皇子等を召されて、庭に盟ひ、同心一體となつて相扶けて違ふこ

となきを約せしめられ、朱鳥元年崩に當り、「天下の事は、大小を問はず、悉く皇后及び皇太子に啓せ。」と詔せられた。九月天皇の正宮に崩せらるゝや、皇后は悲痛に堪へかねて、かく歌はれた。「やすみし、我が大君の、夕されば、見し給ふらし、明けくれば、問ひ給ふらし、神丘の、山の紅葉を、今日もかも、問ひ給はまし、明日もかも、見し給はまし、その山を、振りさけ見つゝ、夕されば、あやに悲しみ、明け来れば、うらさび暮らし、荒妙の、衣の袖は、干るときもなし。」恰も晩秋にあたり、飛鳥の神丘の山の紅葉はかゞやいても、再び行幸を仰ぐよしもなく、朝夕、神丘の山に對して悲涙に咽ばれたのであらう。やがて、親ら朝に臨んで政を乗り、大津皇子が異謀を企つるや、即ち英斷を下して皇子に死を賜ひ、三年二月草壁太子が二十八歳で薨せらるゝや、遂に自ら天日嗣の位に即き、四年正月その大禮を擧げられた。持統天皇は深沈大度、母儀の徳を具へられた。八年十二月には藤原宮に遷り、また、常に好んで諸方に行幸せられ、殊に吉野には一年數度に及ばれることもあつた。柿本人麻呂は、その行幸を壽いで、「八隅し、吾が大君の、開召す、天の下に、國はしも、多にあれども、山川の、清き河内と、みこころを、吉野の國の、花散らふ、秋津の野邊に、宮柱、太しきませば、

百敷の、大宮人は、船並めて、朝川わたり、船競ひ、夕川わたる、この川の、絶ゆることなく、この山の、いや高からし、いはばしる、瀧の都は、見れど飽かぬかも。反歌、見れどあかぬ吉野の川の常滑のたゆることなく復かへり見る」と詠じた。吉野の山川風光は、極めて明媚であつて、而も天武天皇の思ひ出深い舊地である。いまその皇后であつた天皇が屢々行幸せられるのは、たゞに山水の行樂のみではなかつたと思はれる。六年三月天皇は伊勢に行幸せられたが、その際中納言大三輪朝臣高市麻呂が上表して、農作の時節であるからとて御中止を奏請したが、天皇は聽かずして車駕を發し、御巡幸の諸國の國造等に冠位を賜ひ、且、一年の調役を免じ、なほ志摩の百姓男女の八十歳以上の者には、それぞれ稻五十束を賜はつた。これ等の諸國は皆往年、天武天皇が兵を募られた遺蹟である。やがて、大和に還幸の後、天武天皇の冥福のために齋會を行ひ、その夜御夢のうちに次の御製があつた。「飛鳥の、淨御原の宮に、天の下、しろしめし、やすみし、わが大君、高光る、日の御子、いかさまに、思ほしめせか、神風の、伊勢の國は、沖つ藻も、なびきし波に、潮氣のみ、響れる國に、美織の、綾にともしき、高ひかる日の御子」。十年七月太政大臣高市皇子が薨せられたので、翌十一年皇孫

日並知皇子(草壁太子の皇子)を立て、皇太子となし、その八月位を讓つて、太上天皇と稱せられた。太上天皇號の始である。天皇は、在位十一年、よく天武天皇の偉業を繼承し、内外の政務を視、内は民草を愛育し、外は高麗、新羅、耽羅等を緩撫して、皇徳を光被せられた。また、神祇を崇敬し、佛教を信仰せられ、大寶二年十二月二十二日寶算五十八で崩せられたが、遺詔して、安古岡に火葬せしめられた。いま陵を檜隈大内陵といふ。御歌は『萬葉集』に前記の長歌二首と、外に短歌四首が見える。(日本書紀、歷朝神德錄、萬葉集) 春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山

持統天皇

慈徳院

「一二四七七」 徳川家齊の生母。阿富方といつた。岩本内膳正正利の女。一橋治済の側室となり、家齊を生み、文化十四年五月歿した。慈徳院と號し、上野凌雲院に葬つた。(野史)

師長姫

饒速日命の子可美眞手命の妃。活目邑五十吳桃の女で、味饒田命、彦湯支命の二兒を生んだ。活目は不詳である。『伊勢風土記』に「逆黨膽駒の長髓云々」とあり、膽駒と同名か。蓋し可美眞手命は、母の居地長髓にゐたからである。この姫の名の科長は、龍田山の風神志那津比古・比

賣、河内石川郡の科長などと同名である。生駒からは龍田も河内も程近い。其他事蹟の傳はるものはない。(天孫本紀) 級長津姫命のしなつひめ 志那津比賣命。風の神、級長津彦命と相並ぶ神。この姫神のことが『記』『紀』に記載がないのは偶々漏れたもので、『延喜式』には二柱相並んでその名が見えてゐる。(延喜式、神祇辭苑) 信濃のしな 歌人。祝部允仲(日吉禰宜)の女。後鳥羽院に仕へ、また、後鳥羽院下野とも稱した。作は、『新古今集』以下の諸勅撰集に入る。(新古今集、大百科事典) 時雨つゝ袖もほしあへずあしびきの山の木の葉に風吹くころ

信濃

篠田雲鳳

「一二四七〇—一二五四三」 漢詩人。伊豆下田の人、醫化齋の女。名は儀。經書を朝川善庵に學び、書の中井董齋に受け、大沼枕山、小野湖山等の間に周旋して、文名があつた。藤室侯夫人に招かれて教授し、維新後、開拓使女醫教授となつたが、後、職を辭し、私塾を芝愛宕山下に開き、子女教育に餘生を送り、厚俸を以て誘ふものがあつても出なかつた。明治十六年五月二十日、七十四歳で歿した。墓は築地本願寺子院常念寺。(墓誌銘)

信夫

姉の宮城野とともに、父の敵討で知られるが、こ

これは狂言作中の名で、實名は姉がすみ、妹の信夫がたかといつた。「宮城野」の項を見よ。

紫白 ししは 俳人。肥前基肄郡田代、寺崎平八(一)の妻。俳諧撰集『菊の道』(元禄十三年刊)を編んだ。『菊の道』は、當時の全国各地の知名なる蕉門俳人を殆ど網羅し、邊陲の地にあつて成されたものとしては驚異に値するといはれる。集中に、彼女の「ばせを翁の御墓にて、薬ともならでや花のかれ芒」がある(この年芭蕉七回忌に當る)。(菊の道、間秀排家全集)

我が宿は殿御かまはず菊の花

紫白女

柴田勝家妻 しばたかつか 小谷方

志斐姫 しひの 萬葉の歌人。持統天皇から「いなといへど強ふる志斐のが強語しひがたり」この頃聞かずて朕戀ひにけり」の御歌を賜はつて、「いなといへど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強語とのる」とお和へした歌がある。志斐は氏の名であらう。(萬葉集)

四比信紗 しひの 大倭有智郡の人、果安の妻。夫の歿後積年志を守り、妾の所生を合せて八子を撫養するに別なく、舅姑に事へて婦禮を竭し、元明天皇の和銅七年、その孝義を旌表せられ、終身事なからしめられた。(續日本紀)

治部卿局 ちぶさやう 土御門天皇の宮人。藤原氏。法印定勝の

女。治部卿局と稱し、道圓法親王及び皇女信子を生まれた。(二代要記、尊卑分脈、諸門跡譜)

治部卿局 ちぶさやう 伏見天皇の宮人。法印仁快の女。治部卿局、また春日局と稱し、慧助法親王(園城寺長吏)を生まれた。(皇胤紹運録、諸門跡譜)

治部卿局 ちぶさやう 後伏見天皇の宮人。姓氏不詳。治部卿局と稱し、尊胤法親王(天台座主)を生まれた。(皇胤紹運録、諸門跡譜)

島津淡路守妻 しまづあはち 烈婦。鹿兒島藩主島津吉貴の妹。

又四郎忠藏(但馬守)の母。夫の鹿兒島隱居後も江戸に留まり、常に軍書を好み、女中に至るまで武藝を勵ました。嘗て家老伊集院熊之助を呼び、女の身なりとも武道を修むべき理由を説き、自著『女軍立武事習集』『女武者百千鳥』の二巻を與へ、家中妻女の心得としてこれを廣めしめた。(黃面書集、日本女子立志編)

島津龜壽 かめじゆ (一二三一一二二九〇) 島津義久の三女。

天正十五年島津氏、豊臣秀吉に屈服するや、母妹及び義久の弟義弘の男等とともに質となつて上洛した。ついで義久も上洛したが、翌年八月義久のみ歸國するに當り、義久、龜壽と別離するを悲しみ、「二世とはちぎらぬものを親と子のわか

生まれた。(皇胤紹運録)

清水正令妻 しみづたま 大力者。北條氏政の臣清水太郎左衛門の母。嘗て山上社參の途上、米を積んだ牛が、後跟を斷崖

に踏み外して危険に瀕せるを見るや、直に轡より下りて、これを路の中程に引き上げた。積荷をその儘の力業には、人々、膽を奪はれたといふ。しかも心掛けある婦人にて、その子も大力であつたが、母は常にその濫用を誡め、以て智謀武略ある勇士となさしめたといふ。(野史、本朝古今聞媛略傳)

釋妙 めつ (一一一六五二) 高僧睿桓の母。落飾後は、同じく

戒律を堅持した。『元亨釋書』には、「汗手に瓶を執らず、臥足西を踏まず、大小便事皆西を避く。未だ嘗て衣なくして佛前に出でず、法華經を讀みて彌陀を唱ふ。嘗て夢に、木佛語りて曰く、我は是れ彌陀なり、汝を護念すと。正暦三年端居して滅す。」とあり、一生の間に、法華經を讀むこと三千餘部であつた。(元亨釋書)

舍利 せり 尼僧。勝實三年の交、肥後八代郡の一婦人が、怪しき一個の肉團を生み、これを山に捨てたが、七日後に至り、その中より女子の生れたるを見て、これを取りて育くむ中、八月にして俄に成長して三尺五寸となつた。美貌にして女根なく、纔に尿道を見るのみであつたが、自然に智慧を具へ、

れむ袖のあはれをも知れ」と詠じて、秀吉の侍臣細川幽齋に

送り、秀吉その心を哀れんで龜壽を伴うて歸るを許した。義久に所生の男子なきを以て義弘の男忠恒を婿とし、徳川氏の世となるや江戸櫻田の藩邸に住み、後、大隅國分に隱居し、寛永七年十月五日歿した。年六十。法諱、持明彰窓庵主。所生なく、妾腹の子を養ひ、よくこれを教育したといふ。(郷土婦人の群)

島田淺野 しまだ (二四七七一二五二二) 烈婦。美作國勝山の

士高山氏の女。幼にして孤となり院之庄の土豪島田茂内に養はれ、その支族島田馬之丞に嫁し、女敏乃を生んだ。馬之丞多病のため母子は晝夜農耕に努めたが、馬之丞は家計の窮乏を見るに忍びず、人の酒粕を盗み、その金を借りたるもの、如く装うて妻に與へた。事顯はれて獄に繋られるや、母子二人は郡役人に向ひ、ともに夫及び父に代らんことを哀願し、その聽かれざるや、役人及び馬之丞に遺書して自害した。時に文久元年、淺野四十五歳、敏乃二十八歳であつた。これにより、馬之丞は釋されたが、前非を悔いて出家したといふ。

(備作人物傳)

島千歳 しまの 白拍子。「和歌」の項を見よ。

島姫 しまひめ 光仁天皇の宮人。縣主毛人の女。彌努摩内親王を

七歳の時、すでに法華、華嚴の二經を誦した。出家して比丘尼となるや、誦經の音聲清く、忽ち聖者と稱せられた。嘗て肥前の佐賀氏が安居會を設け、大安寺の高僧戒明を招いて華嚴を講じた時、彼女も預り聴いたが、一日問を發して戒明をして答釋に躓かせ、講筵の諸德各々深義を出して舍利を試みたのに、彼女は一々分析して礙らなかつたといふ。肥後國分寺の沙門並に豐州宇佐神宮寺の僧二人、舍利を誹謗するや、時に空中より長臂を垂れて身を見はさず、二僧の顔面を掴き裂くものがあつて、二人幾くならずして俱に命を失つたといふ。(元亨釋書)

秋色 しき 「一二三八五」 俳人。大目氏、名はあき。秋色、菊后亭等と號した。江戸小網町(一に堀江町とも)の菓子屋の娘で、寒玉(其角の門)に嫁し、初め古著屋であつたが、後、蕎麥屋に轉業した。十三歳の時、上野の花見に、清水堂の後の井の端の大般若といふ櫻を見て、「井戸端の櫻あふなし酒の酔」と吟じて、寛永寺の宮の感賞に預り、秋色の號をつけられ、その後、件の櫻を誰いふとなく秋色櫻と呼んで來たといふが(江戸ゆず)、柳亭種彦は、「恐らくは後人この句をつくりて附會説をまうけしなるべし」(遺稿紙料)と否定してゐる。しかし、秋色櫻の名は、『富士拾遺』寶曆四年刊にも見えてゐる。

三年内親王となつた。「うへ(天)渡らせ給ひて、若宮見奉らせ給ふ。えも云はず美しくしうおはしまして、たゞ笑ひに笑ひ物語せさせ給ふ。うへの御前、今まで見ざりけるよと思し召すに、まづ御涙もつかせ給ふべし。まして男におはしまさましかばとぞ、人知れず思し召されける」と『榮華物語』に見える。然るに間もなく皇后は崩せられたので、天皇は一しほ慈育せられ、寛弘二年三品に叙し、ついで二品に進められた。同四年、「二品修子内親王は朕が長女なり。長宮の月早く隔たりて已に偏雲となり、中殿の風漸く養ひて、自ら襪李あり。天性の愛一時に施し難く、爰に權制を立て、更に寵章を驚す」と詔して、一品に叙し、三宮に准じ、封千戸を増せられた。漸く十三四歳となられた頃、御妹姝子内親王薨じ、やがて天皇も崩御せられ、今は外戚に頼むほどの後見もなく、御弟の敦康親王とともに、世の味氣なさを嘆く身となられた。「一品の宮は十四五ばかりにぞおはしませば、萬に今はおぼし知りはて、哀れにおぼしめし歎く。帥の宮(親王)はまだいと若うおはしませど、大方のどやかに心はつかしう、よろづ思し知りたる御有様なれば、いたく沈みおぼし歎くさまことわりなりと見えたり。一方のみならず、おのづからおぼし結ほほるゝ事なきにしもあらじか」と、様々心苦しうな

るゆゑ、尙ほ一考すべきであらう。秋色は其角の愛弟子で、その點式を附囑せられた(秋色からは湖中に譲つた)程である。其角の遺稿『類柑子』の跋にも名を連ね、兩度に互つて追善集をも出した。『近世奇跡考』所引の秋色追善集「兩三聲」によれば、多くの子女があつて、長男は俳號を林鳥、次男は紫萬、孫女を富といつたとある。何れも母の趣味を受繼いだものらしい。彼女には逸話が中々多い。ある時、某侯の山莊に招かれたが、彼女の父がその庭園を見たいとて從僕に扮して連立つたところ、折悪しく雨が降出したゆゑ、娘は駕で送られることゝなつたが、駕舁をだまして、巧に父と入れかはつたといふ話もある。またある時、さる武家へ召され、酒興のたはむれを怒つて、「武士の紅葉にこりず女とは」の句を詠んだといふことなども傳へられてゐる。捨女、園女、智月尼と共に元祿四伴女といはれ、その著には、『其角一周忌集』(寶永五年刊)、『石なとり』(正徳三年刊)がある。享保十年四月十九日歿。享年、一説に五十七。辭世の句、「見し夢のさめても色の杜若」。墓は大川端東江寺にある。(江戸ゆず、俳家奇人談、女流文學全集)

修子内親王 しゆしの内親王

「一六五六―一七〇九」 一條天皇の皇女。皇后藤原定子の御所生。長徳二年十二月二十日誕生、翌

む。かくて日比の御讀經の聲哀れにて過させ給ふ程に、御葬送は七月八日(寛弘八年)と定めさせ給へり。(榮華物語)。これより、三條院に遷り、天皇の冥福を祈られるのみであつたが、かゝる中に、敦康親王は、位にも即かれず、寛仁二年十二月といふに空しくなり給うた。「式部卿宮(親王)うせさせ給ひぬとのゝしる。あなあさまし。こは如何なることぞ、日ごろ惱ませ給ふなど云ふこともなかりつるをとて、殿の御前(長)まづはしり參らせ給へれど、むげにかぎりになりはてさせ給ひぬとあれば、あさましういみじうて歸らせ給ひぬ(略)一品の宮も明け暮れの御對面こそなかりつれど、萬にたのもしきものに思ひきこえさせ給へるに、心うくあさましき事をおもほし惑はせ給ひて、我御身もありと頼ませ給ふべうもあらず。御涙のみひまなくおぼしなげかせ給ふ。(同)。かくて内親王は僧正院源について受戒、一身を佛門に委ねられた。時に後一條天皇の萬壽元年三月、御年二十九、以後、入道一品宮と稱し、後冷泉天皇の永承四年二月七日御年五十四(一に五十五とも)で薨せられた。天皇はために廢朝三日、釋奠に講論、宴を停めた。(藤原原定子 (一代要記、園太曆、榮華物語、法成寺攝政記))

秋子内親王 あきしの内親王

「二三六〇―二四一六」 東山天皇の皇

女。御母は承秋門院。元祿十三年正月誕生、姫宮或は猶宮と稱し、寶永四年五月内親王となり、享保四年二月兵部卿貞建親王に適し、寛保三年正月二品に叙せられ、寶曆六年二月薨せられた。光順院と號し、相國寺に葬つた。(野史)

柔子内親王 じゆしなわら 「一五二九」 仁明天皇の皇女。時子内親王の御妹。貞觀十一年二月薨せられた。廢朝三日。(文德實錄、三代實錄)

柔子内親王 じゆしなわら 「一六一九」 齋宮。宇多天皇の皇女。贈皇后藤原胤子の御腹で、醍醐天皇の寛平九年八月十三日伊勢齋宮となり、昌泰二年伊勢に赴かれた。延長八年(醍醐天皇崩御)十二月退下(在任三十四年)し、天德三年正月薨せられた。六條齋宮と稱せられた。(一代要記、日本紀略、帝王編年記)

壽榮 えい 名古屋、神谷元邦の母。夫元等の歿後尼となり、壽榮と稱し、春日井郡安井村の草庵に住した。本居宣長に歌道を學び、宣長の『古今集遠鏡』出版に資金を投じ、また植松有信のために學資を給して名をなさしめた。その子元邦、孫元平ともに學問に志深く、藏書は世に神谷本として珍重せられる。(續尾三善行錄)

肅子内親王 しゆしくしな 齋宮。後鳥羽天皇の皇女。御母は宮人藤原氏。土御門天皇の正治元年十二月二十四日、伊勢齋宮

となり、建仁元年伊勢に下り、元久元年三宮に准ぜられ、在任十二年、高辻齋宮と稱し、承元四年(土御門天皇讓位)十一月退下せられた。次の歌は、京に歸るときの惜別歌である。(大日本史、新編古今集)

植多おきて花のみやこにかへりなばこひしかるべき女郎花かな
祝子内親王 しゆしくしな 歌人。花園天皇の第五皇女で、儀子内親王と同じく、和歌をよくし、天皇勅撰の『風雅集』に九首の作が選ばれた。(皇胤系連録、風雅集)

憂しとてもいくほどの世とおもふくなほそのうちも物ぞわびしき
祝子内親王

壽子内親王 じゆしなわら 徽安門院

壽成門院 じゆせいもんゐん 「一九六二」 後二條天皇の第一皇女。子内親王。御母は勾當内侍(少納言平棟俊)の女。元應二年、後二條天皇の崩後十三年に際し、御追善願主に當り、八月二十二日内親王宣下、翌日三宮に准ぜられ、院號を壽成門院と進められた。ついで二十五日出家して尼となり、法名を清淨圓と號せられた。時に御年十九であつた。薨年未詳。(女院小傳、風雅集、大百科事典)

今朝はなほ咲きそふ庭の花ざかり移るはぬ間を問ふ人もが

な

壽成門院

壽貞 じゆ 「一二四三六」 人形彫刻師。奈良の人、五代岡野松壽の妻。夫は茶商山田家から入夫し、繪物及び彫刻を襲職したが、繪物をよくし、人形彫刻には拙劣であつたので、累代の家聲を墜さんことを憂ひ、代つて自ら人形を彫刻し、壽貞尼と號し、妙手と稱せられた。安永五年四月八日歿した。(岡野系圖、大百科事典)

修明門院 しゆめいもんゐん 「一八四二—一九二四」 後鳥羽天皇の後宮。藤原重子。初め範子と稱し、また親子とも稱した。贈左大臣範季の女。御母は中納言平教盛の女教子。壽永元年誕生、天皇の宮に入り、二條君と稱し、順德天皇及び雅成親王、寛成親王を生まれた。建久九年十二月從三位に叙せられ、ついで從二位に進み、建永二年六月七日准三宮となり、院號宣下があつて修明門院と進められた。承久三年北條泰時等のために京師陥り、後鳥羽上皇は薙髮せられたが、門院もまた尼となつて法性覺と號し、上皇の隱岐遷幸後は、院號、年官年爵、封戸、諸司、例給等を辭して(十一月)、岡崎に屏居せられた。嘗て後鳥羽院が、若き殿上人どもを水無瀬殿に集めて賭射せしめ、その賭物を門院に使を以て乞はしめた時の挿話が、『増鏡』に見える。「とりあへず、小さき唐櫃の金物したるが、

いと重らかなるを參らせられたり。この御使のうへ人、何ならむと、いといぶかしくて片端ほのあけて見るに錢なり。いと心得ずなりて、さと面うちあかみてあさましと思へる氣色しるきを院(初後鳥羽)御覽じおこせて、朝臣こそむげに口惜しくはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。いにしへより殿上の賭弓といふことには、これをこそ賭物にはせしか。されば、今賭物と聞えたるに、これをしも出だされたるならむ、いにしへのこと知り給へるこそ、いたきわざなれと、ほほ多みてのたまふに、さは悪しく思ひけりと心ち騒ぎておぼゆべし。」文永元年八月二十九日、八十三歳で薨せられた。(參圖七條院、女院小傳、平戸記、増鏡)

春華門院 しゆんかもんゐん 「一八五五—一八七一」 後鳥羽天皇の皇女昇子内親王。宜秋門院の御所生であるが、八條院の御猶子となられた。姿色殊にすぐれ、光鬘人を動かすものがあつた。建久六年誕生、その十月十六日内親王となり、七年一品に叙せられ、三宮に准じ、承元二年八月八日順德天皇の准母として皇后と尊稱せられ、三年四月二十五日院號宣下があつて、春華門院と進められた。建曆元年十一月八日權中納言藤原隆衡の第に崩せられた。御年十七。ために廢朝三日であつた。(愚管抄、女院小傳、仲資王記)

しめて—しゆん

恂子内親王

宮。白河天皇の皇女。宮人藤原氏(木工權頭季實の女)の御腹で、鳥羽天皇の天仁元年十月二十八日伊勢齋宮となり、天永元年伊勢に下り、樋口齋宮と稱せられた。在任十六年にして、保安四年一月二十八日(鳥羽天皇讓位)退下し、長承元年十月薨せられた。(中右記、一代要記)

洵子内親王

齋宮。三條天皇の皇曾孫。敦明親王の子

淳子女王

敦賢親王の女。白河天皇の延久五年二月二十六日伊勢齋宮に卜定せられ、承暦元年(御父薨去)十月二十三日退下せられた。在任五年。(一代要記、貴女鈔、大百科事典)

順性院

阿夏方

聖安女王

御母は宮人藤原氏。寛文八年六月誕生、館宮と稱した。同一年八月曇華院に入り、延寶二年十月喝食となり、六年十一月薨髪、寶永二年紫衣を聴され、ついで慈愛院を兼領せられた。正徳二年十二月薨去、御年四十五。興通玄大成和尚と號し、大徳寺中養徳院に葬つた。(野史)

淨圓院

伊國巨勢の人、巨勢利清の女。紀伊侯徳川光貞に仕へて寵せ

承香殿女御

源和子

昭訓門院

藤原瑛子。太政大臣實兼の女。御母は内大臣源通成の子。正安三年正月十六日龜山法皇の仙洞に入り、同年三月十六日從三位に叙せられ、同十九日三宮に准じ、院號の宣下があつて昭訓門院と號した。恒明親王を生まれ、法皇の崩御により嘉元三年九月二十一日尼となり、眞性覺と稱し、延元元年六月二十六日、六十四歳で薨せられた。(女院小傳)

昭訓門院春日

歌人。藤原爲世の女。妹の贈從三位爲子とともに二條派の歌人である。歌は昭訓門院春日、或は公宗(權中納言)母の名で、『續千載集』(六首)、『續後拾遺集』(五首)、『風雅集』(五首)、『新千載集』(七首)、『新續古今集』(八首)等がある。(續後拾遺集、國歌大系)

昭慶門院

子内親王。典侍藤原雅子の御腹で、永仁元年十二月内親王となり、四年八月十一日三宮に准ぜられ、院號宣下があつて昭慶門院と號した。龜山法皇崩後、嘉元四年九月十五日尼となり、清淨源と稱し、元亨四年三月十二日薨せられた。御年五

られ、阿由里方と稱し、貞享元年十月吉宗を和歌山城に生んだ。吉宗江戸城に入るや、淨圓院と號して、二の丸に住んだ。その弟二人、それぞれ丹波守、伊豆守に任じ、祿五千石を與へられたが、彼女は嘗て吉宗に遺言して、歴世側室の家の如くに高祿を以てして禍を子孫に貽すなかれと戒めたといふ。享保十一年六月、七十二歳で歿し、東叡山に葬り、從三位を追贈せられた。(江戸政記、日本女子立志編、孝子と貞女)

淨觀院

喬子女王

章義門院

親王。御母は中納言公宗の女藤原英子。永仁三年八月十五日内親王となり、同日三宮に准ぜられた。徳治二年六月二十二日院號を章義門院と進められ、正和二年尼となり、解脱心と法名し、延元元年十月十日薨せられた。『玉葉集』(八首)『風雅集』(三首)に御歌がある。(一代要記、女院小傳)

思へ

承香殿女御

齊宮女御

承香殿女御

藤原元子

承香殿女御

藤原茂子

昭憲皇太后

十二。天皇、殊に門院を寵し、離宮を大井川の上に賜はつて第となし、資給甚だ厚かつた。世に川端殿女院とも、また土御門女院とも稱せられた。(女院小傳、帝王編年記)

に學び、書道は初め倉橋泰聰、後に有栖川宮職仁親王の風を受け、入内の後は、和歌を八田知紀、高崎正風、漢籍を大中臣成郷、老女鶴岡等に問ひ、また、大中臣成子、貫名海屋の子正郎等を召され、また税所敦子、小池道子等も奉仕した。慶應三年六月二十八日女御に治定せられ、明治元年十二月二十八日入内、皇后の宣下があつた。曩に女御の詮議があつた時、若江薫子は毅然として、皇后を關白に推したと傳へられる。入内の儀は、維新草創の際とて極めて簡素に行はれ、天皇は翌二年三月東京に行幸、皇后はその十月發興せられた。皇后は夙に上下の人情風俗にも通じ、よく時勢を察し、常に質素儉約を旨とせられ、入内後自ら内儀の刷新を思ひ立たれた。木戸孝允、大久保利通、西郷隆盛等がある時大奥の事々改められたい旨を奏したが、その後數日を経て皇后は親しく彼等を召して、親らこれを斷行しようと思ふ由を傳へられた。明治六年皇居が炎上して、天皇、皇后は赤坂離宮にこれを避け、英照皇太后の御所に遷御せられたが、手狭のことゝて、女官等が密につぶやくものがあつたが、皇后は日夜讀書に耽り、「こゝに我が占めし住居は狭くとも廣くたづねむ文のはやしを」と詠せられた。皇后一代の歌は、實に三萬數千首の多きに上る。『女四書』を愛讀し、常にその内訓篇等を玩

味せられたといふが、フランクリンの十二徳を詠せられた歌の如きは、最も皇后の御修養をうかがふべき資料であらう。「節制、花の春もみぢの秋のさかづきも程々にこそくまゝほしけれ。清潔、しろたへの衣の塵は拂へども憂きは心の曇りなりけり。勤勞、磨かずば玉の光はいでざらむ人の心もかくこそあるらし。沈黙、過ぎたるは及ばざりけり荷且の言葉もあだに散らさざらなむ。確志、人ごゝろ斯からましかば白玉の眞玉は火にも焼かれざりけり。誠實、とりんぐに著くるかざしの花もあれど匂ふこゝろの美はしきかな。温和、亂るべき折をばおきて花ざくら先づ笑むほどを習ひてしがな。謙遜、高山のかげを映して行く水の低きに就くを心ともがな。順序、奥ふかき道も究めむ物ごとの本末をだにたがへざりせば。節儉、吳竹のほどよき節を違へずば末葉の露も亂れざらまし。寧靜、いかさまに身は碎くとも群肝の心はゆたにあるべかりけり。公義、國民を救はむ道も近きよりおし及ぼさむ遠きさかひに。」九年、天皇は東北を巡幸せられ、皇后は千住驛まで奉送せられたが、その後、月次御會に「年々郭公」の題に、「みちのくに鳴きてや行きし郭公今年は聲のすくなかりけり」と詠まれ、十一年また天皇の北越行幸には、「大宮の中にありても暑き日をいかなる山か君は越ゆるむ、初雁を待つとは

なしにこの秋は越路のそらの眺められつゝ」と詠せられた。恰も此の折の事であるが、一夜雷雨が烈しく、風が痛く吹き荒れた。その夜のことを「禁庭の野分」と題して書きしるされた。「朝露のひるまはさしもなかりしそらの、俄にか曇り、夕づゝの光もみえず。とかくするほどに雨いたく降りいでゝ、ほとり近く語りあふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。闌に入る頃はなほ雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、雷さへ鳴りはたゞきて、夢現とも思ひ定むるひまなく、稻妻のきらめきわたる、いとけうとし。あかつきがたには雨はをやみぬれど、風はげしう吹き出でゝ、宮のうちもゆるぐばかりなるに、いとゞ目も合はず。上には民のためとて、かしくも遠き境にいでましたるほどなれば、いかなる行宮にましまして、此風の音に御心をなやまし給らむ。皇太后の宮にはいかにおはしますにか、幼き宮たちも驚きやしたまふらむと思ひつゞくるほどに、夜も明けぬれど、未だ風靜まらで、いづこも下し込めたる、いとものむづかし。軒近き栗の枝の結べる實ながら吹き折らるゝおといと烈しく、御階の下の芭蕉も、筒井のかたはらなる柳も皆折れふしぬ。今を盛りと見えし眞萩も名残なく散り亂れたる、いとさびしく見ゆ。宮の中だにかく荒れぬるを、ましてあやしげなる賤が家居な

どは倒れぬるも多からむなど思ひやれば、すゞろに悲し。おしなべてみのりよしと聞きつる千町田の稻も吹きそこなはれつらむやなど、心にかゝりて、國のため科戸の神も心して稲葉の上はよきて吹かなむ。なほとやかくと胸をいたむるほどに、いつとなく靜まりて、日影まばゆく雲間にさしいでぬるに、おのづから人の心もおちるにけり。」皇后は、女性の教育興隆に意を注ぎ、明治八年二月、東京女子師範學校（後の東京女子高等師範學校）設立の議があつた時、金五千圓を賜はり、十一月の開校式には親しく行啓、翌九年二月には、「磨かずば玉も鏡も何かせむ學びの道もかくこそありけれ」の御歌を賜はつた。十八年、華族女學校（今の學習院女子部）の設立を思立たれ、その開校式には行啓の上、女子教育に關する令旨を賜ひ、二十年三月には「金剛石」「水は器」の御歌を賜はつた。「金剛石もみがかずば、玉の光は添はざらむ。人も學びて後にこそ、まことの徳はあらはるれ。時計の針の斷え間なく、廻るが如く時の間の、日影をしまて勵みなば、如何なる業か成らざらむ。」（金剛石）。「水はうつはに従ひて、その様々に成りぬなり。人は交る友により、善きに悪しきに遷るなり。おのれにまさる善き友を、選び求めてもるともに、心の駒にむちうちて、學びの道に進めかし。」（水は器）。二十

三年の春、天皇は陸海軍大演習のため、尾張、三河の地方へ行幸、皇后は四月の初め名古屋に行啓、叡慮を奉伺せられ、後、京都、奈良へ行啓して、二十一日に親しく神武天皇の畝傍山東北陵に詣でられた。廣前にたまぐしとりて畝傍山高きみいづを仰ぐ今日かな。それより、吉野なる後醍醐天皇の塔の尾陵に向はれ、歸途、檀原神宮に詣で、更に法隆寺に行啓せられた。皇后は社會事業にも留意せられ、明治十年博愛社の創立せらるゝや、屢々、令旨を賜ひ、年々五千圓を下賜せられたが、博愛社は後に日本赤十字社となり、令旨によつて社則の中に天災救護施行の一項を加へることとなつた。四十年、萬國赤十字社總會がロンドンに開かれた時には、皇后は親しく英國皇后に同事業の發展を望む旨の御傳言があつて、英國皇后よりも親密なる答詞があつた。また第九回總會がワシントンに開かれた時には平時救護事業奨励金として金十萬圓を寄附せられた。二十七八年戦役の勃發を見るや、女官等を督して消毒繻帶等の製作に従はれ、それぞれ各病院に下賜せられたが、二十八年二月には東京、陸軍豫備病院に行啓、慰問し、幾くもなく廣島に行啓、大本營に天機を奉伺せられた後、各病院へ行啓慰問せられ、また、天皇の御意を體して嚴島に行啓、戦捷を祈願せられた。明治三十三年五月、皇太

子嘉仁親王の御慶事があつた。曩に皇太子妃は、九條、一條兩家の中、何れより立つべきか衆議が決しなかつた際、皇后は我は一條家の出なれば、今また同一の家より立つるは宜しからずと仰せられたと傳へられる。三十七年二月、ロシアに對する國交斷絶の詔が下つたが、一夜、御慶慮の皇后の御夢に、坂本龍馬が入つて、日本の海軍は必ず大勝すべしと奏したので叡聞に達すると、天皇も一入深く御感あつたといふ。ロシアとの開戦は、當時我が國民の上下を擧げて、空前の國難と感じた大事件であつて、國際關係を顧慮してアメリカに使用する金子堅太郎郎に行啓あつたのも此の時である。ある日、皇后は供奉長大庭少佐を召し、軍國多事の折柄、有爲の將校を陛下に留め置くのは本意でないから、速に師團に歸るべき御詔を賜はつた。少佐は直に退下、第二聯隊大隊長として出征したが、分水嶺の戦に戦死した。皇后はその葬儀には特に幣帛料を賜はつた。また繻帶等の製作に努められ、義眼義足等の下賜もあつた。四十五年七月天皇遠豫、皇后はその二十日掌典宮地嚴夫を伊勢大神宮に遣はして御平癒の祈願を籠めしめられたが、遂に三十日崩御、皇太子嘉仁親王(大正天皇)の踐祚により、皇太后の尊稱を受け、翌大正二年七月青山御所に遷り、御餘生を信仰の道に送られた。大正三年三月、沼

津御用邸において病を發せられ、病勢漸く重つた時、特に三島館庭内に勸請の皇太神宮の小祠に代拜せしめられ、四月十一日崩せられた。御年、六十五。その五月九日、昭憲皇太后と謚せられ、伏見桃山東陵に奉葬。後、その御神靈は、明治天皇の御神靈とともに、官幣大社明治神宮に合祀せられた。
(歷朝神德錄、昭憲皇太后)

常光院

じやうくわう じやうくわう (二二四四—二二九五) 徳川秀忠の妾。名は靜。父を、神尾直光(野史)とも、竹村氏(參松傳、竹村工匠(柳營婦女傳系)ともいひ、その生地、生歿年等にも異説があつて詳でないが、『野史』によれば、武藏板橋の産で、寛永十二年九月十七日、信州高遠城で、五十二歳で死んでゐる。初め家が貧しかつたので、徳川秀忠の乳母大婆に頼り(一に井上正就の母とも)、秀忠に幸せられて姪み、崇源院の妬忌を避けて、慶長十六年五月七日、保科正之を父の家で生んだ。『保科頼母覺書』には神田白銀街裏の僦居に住むといひ、『柳營婦女傳系』には武藏足立郡大間木村とある。法名、常(淨)光院法紹日慧。後、正之はその任國會津に、淨光院を建て、冥福を修した。(野史、柳營婦女傳系)

淨光院

じやうくわう じやうくわう (二三一八一—二三六九) 徳川綱吉の御臺所。藤原信子。關白左大臣房輔の女。寛文四年十一月神田館に入

興、延寶八年七月本城に徙り、寶永六年正月綱吉の薨するに當り薙髮し、二月九日また薨じた。年五十二。淨光院圓嚴心珠と法謚し、寛永寺に葬り、從一位を追贈せられた。(野史)

上西門院

じやうさいもんいん じやうさいもんいん (一七八六—一八四九) 尊稱皇后。齋院。鳥羽天皇の皇女統子内親王。初め恂子。御母は待賢門院璋子。

崇徳天皇の大治元年七月誕生、その八月内親王となり、二年四月三宮に准ぜられ、賀茂齋院に卜定二歳、四年四月齋院に入り、在任六年、長承元年六月病によつて退下せられた。保元三年二月三日後白河天皇の准母として皇后と尊稱せられ、平治元年二月十三日院號宣下、上西門院と號し、永曆元年二月、法金剛院に薙髮して眞如理と法名、文治五年七月二十日崩せられた。御年六十四。陵を花園東陵といふ。後鳥羽天皇ために廢朝三日、後白河法皇は喪服を著て句を踰ゆるもとかれなかつたが、攝政兼實が諫めたので始めて從はれた。
(女院小傳、玉海、後宮略傳、大日本史)

上西門院兵衛

じやうさいもんいん べいゑいん じやうさいもんいん べいゑいん 鎌倉期の歌人。神祇伯顯仲の女。上西門院の女房であつた。作は『千載集』に九首を採られてゐる外、『新古今集』以下の諸勅撰集に入る。(千載集)

花のいろに光さしそふ春の夜ぞ木の間の月は見るべかりける
上西門院兵衛

聖珊女王 しやうざん にやわらう (二三八一—二四一五) 中御門天皇の皇女。御母は町局。享保六年九月誕生、姫宮と稱した。その十一月曇華院を繼ぎ、十三年入寺して喝食となり、十六年九月薨髪、二十年二品に叙せられ、寶曆五年十一月薨じた。玉江と號し、養徳院に葬つた。(野史)

頌子内親王 しやうしな いしんわらう (一八〇五—一八六八) 齋院。鳥羽天皇の皇女。久安元年、宮人春日局に生れ、春日姫宮と稱した。高倉天皇の承安元年六月賀茂齋院(二十七歳)となり、五辻齋院と稱せられた。禊齋三月にしてその八月、御母の病によつてこれを辭し、土御門天皇の承元二年九月薨せられた。御年六十四。鳥羽天皇は嘗て紀州高野山に行幸せられたことがあつたが、内親王は發願して、同山に蓮華乘院を建立し、鳥羽天皇の冥福を薦修せられ、安元元年六月には御領たる紀州南部、莊内山村、田十町を寄進して、佛餉、僧供等の料となし、後、建久五年四月及び承元元年九月に、内親王廳より蓮華乘院御供事用途を詳に記して同院に下し、鳥羽天皇忌日、守子内親王忌日、御母忌日及び内親王薨去後の忌日等の佛事などを仔細に定めてその料とせられた。(台記、皇帝紀鈔、百鍊鈔、歷朝坤徳錄)

祥子内親王 しやうしな いしんわらう 齋宮。後醍醐天皇の皇女。新待賢門

院藤原康子の御腹で、元弘三年十二月二十八日、伊勢齋宮に卜定められ、野宮に入られた。専ら潔齋の間に、夢に靈告を得て百首の歌を詠じて大神宮に上つた。「五十鈴川のむ心は濁らぬをなど渡る瀬のなほ淀むらむ」はその一で『新葉集』に見えるものである。當時、天下が亂れて人々更に安い心の無いのを歎かれたのであらう。その後、群行を遂げずして野宮より退下せられ、雪を眺めてかく詠せられた。「忘れめや神のいがきの榊葉に木綿かけそへし雪の曙」。延元四年、後醍醐天皇は吉野宮に崩御せられ、皇兄後村上天皇の踐祚があつたが、内親王は遙に吉野の宮を望んで「名にしおふ花の便にことよせて尋ねやせましよしのの山」と詠せられ、正平七年二月の頃には、吉野の後醍醐天皇の塔の尾陵に詣で、「咲く花のちる別れにはあはじとてまだしきほどを尋ねてぞ見る」と詠せられた。その後落飾して保安寺に入り、専ら佛門に歸せられた。内親王の歌は多く『新葉集』『新千載集』に見える。淋しい御生涯であつたからか、いづれも感懐を漏らされたものでないものはない。(歷朝坤徳錄、歷代皇紀、新葉集) たちのぼる煙の末をよそに見ばさびしかるべき柴の庵かな 何をして過ぎつるかたの月日ぞとさらにおどろく年のくれ かな

祥子内親王

昇子内親王 しやうしな いしんわらう 春華門院

獎子内親王 いしんわらう 達智門院

章子内親王 いしんわらう 二條院

聖秀女王 しやうしな いしんわらう 後奈良天皇の第四皇女。御母は、從三位藤原國子(内大臣兼秀の女)。曇華院を相續し、法名を聖秀と稱せられたが、薨年不明。(皇胤紹運錄)

承秋門院 しやうしな いしんわらう (二三四〇—二三八〇) 東山天皇の中宮。兵部卿有栖川宮幸仁親王の女幸子女王。御母は家の女房某氏。

延寶八年九月有栖川の第に誕生、英宮と稱し、元祿九年十一月宣下があつて女御に定められた。幸仁親王は此の事が將軍家綱等の斡旋に所由するので、使を遣はして、銀馬代及び紗綾五卷を賜はつた。翌年二月入内、幕府は中務大輔本多忠國、豊前守品川伊氏を遣はして賀辭を奏し、朝廷では勅使權大納言中御門資烈、女御使外山光顯を江戸に遣はして、幕府に答禮せしめられた。女御は、攝家、清華から出づることが久しい慣例で、曩に高松宮好仁親王の女明子女王が後水尾天皇の第六皇子秀宮良仁親王の妃となり、親王が位に即いて後西天皇となるに當り、女王が女御となられたのも、別に宣下を蒙つたのではないので、當時、關白近衛基綱は醍醐天皇以後、後水尾天皇までの女御の例を引いて「累代此の如し。但、宇

多天皇の御母は仲野親王の女なり。光孝天皇踐祚以前の御子なり。例と爲すに足らざるか。齋宮女御徽子はれ亦例となすに足らざるか」といつてゐる。蓋し、幕府の斡旋を快からず思つたのであらう。同十三年正月秋子内親王、十四年十二月慶仁親王を生まれ、寶永四年五月三宮に准せられた。翌五年二月、慶仁親王は皇太子に立ち、ついで女御は中宮に立たれ、中宮大夫に權大納言久我通誠、同權大夫に權中納言大炊御門經音が任ぜられた。六年六月天皇は位を皇太子に譲り(中御門天皇)、太上天皇となられたので、將軍家宣は下總守畠山茂寧を遣はして供御料七千石を進獻した。ついで太上天皇は新殿に遷御、その十二月聖壽三十五で崩御せられた。中宮は翌年女院に入つて、承秋門院と號し、ついで落飾せられ、享保五年二月十日崩せられた。御年四十一。廢朝七日、並に鳴物を停止し、三月五日遺令により、任葬司、素服、擧哀を停め、泉涌寺に奉葬した。(歷朝坤徳錄)

松壽院 しやうじ いしんわらう (二四五七—二五二五) 政治家。薩摩藩主島津重豪の女。寛政九年三月十八日生れ、島津氏の屬領種子島々主久遠に嫁し、久遠歿後、自ら島政を執ること五十餘年、大浦川流域の變更、鹽田の擴張、諸子瀬の波戸の三工事を起して、大に領内の福利を進めた。慶應元年八月二十日歿、享

年六十九。(薩瀧女性史)

聖祝女王

御母は、菅原氏。寶永六年六月誕生、高宮と稱した。同七年十一月曇華院の附弟となり、正徳三年十二月入寺、五年十一月喝食となり、享保三年二月薨髪、六年四月薨せられた。御年十三。崇峰と號し、大徳寺中養徳院に葬つた。(野史)

少將

復仇の前日別れに来て、偶々梶原景季があたので逢はれず、「逢ふと見る夢路にとまる宿もがなつらき別れにまたも歸らん」と詠み置いて歸つたのを後で見大に悔い、十六歳といふのに髪を下して尼となり、虎が庵に行つて往生したといふ。尼になるとき、「數ならぬ心のやまの高ければ奥のふかさをたづねこそすれ、捨つる身になほ思ひ出となるものは問ふに問はれぬ情なりけり」の二首の歌を詠んだ。『曾我物語』に名はないが、俗に少將と傳へる。(曾我物語、遊女の文學)

少將内侍

歌人。左京權大夫藤原信實の女。和歌を父に學び、妹の藻壁門院少將、辨内侍とともに知られた。作は、『續古今集』(八首)、『續拾遺集』(八首)等にある。(藤原辨内侍 (續古今集、今物語))

秋來ぬといはぬを知るは吹く風の身にしむ時のころなり

は和泉式部、伊勢大輔、紫式部、赤染衛門等の才媛が仕へた。道長を中心とする藤氏の全盛期で、儀式典禮、文藝美術等の大に興隆した時代である。寛弘五年九月には、中宮は土御門の第に出で、天皇の第二皇子敦成親王を生まれた。親王は後の後一條天皇である。ついで翌年十一月には第三皇子敦良親王(後の後朱雀天皇)を生まれた。中宮は定子皇后崩後、その御所生の第一皇子敦康親王及び修子内親王、嬖子内親王をも、御心にかけて慈くしました。「今上の一宮(敦康親王)をば帥の宮とぞきこえける。御才深くおはしますにつけても、上(○一修)はあはれに、人知れぬわたくしものに思ひきこえさせ給ひて、萬に飽かずあはれなるわざかな、かうやは思ひし、とのみぞ、打ちまもり聞えさせ給へる。御志のあるまゝにとて、一品にぞなし奉らせ給ひける。萬を次第のまゝに思召しながら、はかしくしき御後見もなければ、其の方にもむげにおぼし絶えはてゐるにつけても、返すく口惜しき宿世にもありけるかなとのみぞ、悲しう思し召しける。中宮は御氣色を見奉らせ給ひて、ともかくも世におはしますまむ折は、猶いかでかこの宮の御事を、さもあらせ奉らばやとのみぞ、心苦しう思しめしける。」(榮華物語)。然るに寛弘八年六月十三日に至り天皇は遂に位を三條天皇に譲り、皇太子には四歳の第二

けり

少將内侍

少將内侍

高倉天皇の宮人。宮内少輔平義範の女。掌侍となり、少將内侍と稱した。天皇の第三皇子惟明親王を生まれた。(皇胤系運録、一代要記)

少將内侍

後醍醐天皇の宮人。菅原氏。正三位在仲の女。少將内侍と稱し、聖助法親王を生まれた。(皇胤系運録、諸門跡譜)

章善門院

後深草天皇の皇女永子内親王。御母は内大臣公親の女從二位藤原房子。正徳四年十二月十五日内親王となり、永仁五年十二月三宮に准ぜられ、延慶二年二月三日院號を章善門院と進められた。正和五年八月尼となり、眞性寂と稱し、延元三年三月薨せられた。(女院小傳、後宮略傳)

上東門院

一條天皇の中宮。藤原彰子。攝政太政大臣道長の女。御母は左大臣一條雅信の女從一位源倫子。長保元年二月十一日從三位に叙せられ、十一月一日入内、六日女御となり、翌二年二月二十五日立后宣下があつて中宮と稱し、中宮職を附せられた。時に御年十三。此の時天皇には前關白道隆の女定子皇后があり、こゝに二后併立の始をなした。皇后に清少納言があつたごとく、中宮に

皇子敦成親王が立たれることになつた。中宮は敦康親王を立てんことを道長に勧められたのであるが、道長は従はなかつたのである。天皇はその十九日薨髪せられ、「秋風の露のやどりに君をおきて塵を出でぬることぞ悲しき」の御製を中宮に賜はつたが、二十二日には聖壽三十二で崩せられた。三條天皇は在位數年にして早くも讓位あり、長和五年二月皇太子敦成親王が御年九歳を以て踐祚せられ、道長が攝政となつた。皇太子には三條天皇の皇子敦明親王が立たれたが、また幾くもなくその位を去つて小一條院と稱せられた。この時、式部卿敦康親王が賢明の聞え高かつたので、中宮は道長を説いて、親王を東宮に立てんと圖られたが、それも空しく敦良親王が儲位に立たれた。『榮華物語』には、「大宮(○中)げにそれはさることに侍れど、式部卿の宮のさておはしますまむこそよく侍らめ。それこそ帝にもすゑ奉らまほしかりしかど、故院のせさせ給ひし事なれば、さてやみにき。此の度は彼の宮の居させ給はむは、故院の御心のうちに思しけむ本意もあり、宮の御爲にもよくなむあるべき。若宮は御宿世にまかせてもあらばやとなむ思ひ侍る、と聞えさせ給へば、大殿、げにいとありがたう、哀れに仰せらるゝことに侍れど、故院もこと事ならず、たゞ御後見なきにより、思しめし絶えにし事なり。」

かしこうおはすれど、かやうの御有様はたゞ御後見がらなり、帥中納言(皇子皇弟)だに京になきこそ、など猶あるまじきことと思し定めつ。」とある。ついで寛仁二年十二月敦康親王の薨するや、中宮は先帝が世の常ならず愛せられたことを思ひ出されて、その世に會はなかつた御一生を悼み、御妹修子内親王が世を厭うて遂に落飾せられたのを聞かれて、先帝の御調度を其の料として受戒の用意などについて親ら心を碎かれた。これより先、中宮は、長和元年二月皇太后(大宮)となり、寛仁二年十月太皇太后となられ、いまは道長は、中宮を始め、妍子、威子の三后つぎつぎに入内、その父として三朝に互つて外戚を以て官位は人臣を極め、權勢は天下を壓するものがあつた。「此の世をば我世とぞおもふ望月のかけたることもなしとおもへば」の一首は、その満足と誇りとの偽らぬ告白である。されば治安二年七月十四日の法成寺供養は、もとより道長一人の發願ではあつたが、後一條天皇、太皇太后(中宮)、妍子、威子も皆行幸啓になり、その盛儀は天下の耳目を驚かした。萬壽三年正月十九日御年三十九で落飾、同日院號の宣下があつて上東門院と稱せられた。長元四年九月二十五日、石清水、住吉、天王寺等の參籠を思ひ立たれたが、關白以下朝臣從行し、儀衛車服、華美を極めた。また無量壽

院の傍に御堂を建立して莊嚴を盡くされた。長元九年四月後一條天皇崩御、後朱雀天皇が踐祚せられたが、後朱雀天皇もまた在位十年ならずして寛德二年正月十六日皇子親仁親王に讓位、その十八日崩ぜられ、門院は白河殿に入御せられた。天喜六年には内裏の炎上がり、續いて法成寺が焼けた。當時、門院は法成寺の東北に一堂を構へて住まれたので、時人は東北院とも、また大女院とも稱した。承保元年十月三日、法成寺阿彌陀堂において崩ぜられた。御年八十七。門院の御歌は『後拾遺集』『千載集』『新古今集』『玉葉集』等に見える。(日本紀略、榮華物語、大鏡、歷朝坤德錄、女院小傳)

らむ
上東門院中將

平安朝の歌人。左京大夫源道雅の女。上東門院の女房。作は、『後拾遺集』に五首があり、その才氣がうかゞはれる。(後拾遺集)

にほふらむ花の都のこひしくてをるにも愛きやま櫻かな
思ひやれとふ人もなきやま里のかけひの水のこゝろばそさ
を
上東門院中將

稱徳天皇てんとうく「一三七八一—一四三〇」第四十八代の天皇。第四十六代孝謙天皇の重祚。實字稱徳孝謙皇帝。聖武天

皇の第一皇女阿倍内親王(阿閉皇女)。御母は光明皇后。元正天皇の養老二年誕生、やがて内親王となり、封一千戸を賜はり、聖武天皇即位の後、天平十年正月皇太子となられた。天平十五年五月、天皇が御宴を群臣に賜はつた時、皇太子をして五節を舞はしめられたが、元正上皇は「そらみつ大和の國は神からし貴くあるらしこの舞見れば」の御製を賜はつた。天平勝寶元年七月、聖武天皇の禪位により、御年三十五で踐祚せられた。即ち孝謙天皇である。天皇は聖武天皇と齊しく、佛教の興隆に努められた。天平勝寶四年四月、聖武天皇發願の東大寺の盧舍那大佛像の鑄鑄が竣功して、開眼の盛儀を擧げ、天皇は親ら文武百官を率ゐて行幸、僧一萬人を請じて供養せしめられた。この俗稱奈良の大佛は、結跏趺座の像で、高さ五丈三尺五寸、大佛殿を建立してこれを安置せられたが、その高さは十五丈六尺で、東西に高塔があり、その東塔は七重三十三丈八尺七寸、西塔は同じく三十三丈六尺七寸、實に東方の大寺であつて、東大寺と號せられたのである。また諸國の國分寺に丈六の佛像を造立せしめ、天平勝寶八年六月には、使を遣はしてその催檢をなし、且、國毎に『金剛般若經』三十卷を寫して、國分僧寺に二十卷、國分尼寺に十卷を安置し、『金光明最勝玉經』に添へて轉經せしめられた。佛教の興

隆が、やがて繪畫彫刻建築等、あらゆる藝術の發達を促進したことは云ふまでもない。當時大陸との交通が年と共に開けて、唐代の文物が盛に輸入せられたので、天皇は殊にその交通上に意を注がれた。嘗て遣唐大使藤原清河等が、その途に上らんとした時、次の御製を賜はつた。「そらみつ、やまとの國は、水の上は、地行く如く、船の上は、床に座ること、大神の鎮へる國ぞ、四の船、船軸ならべ、平らけく、早渡り來て、復命、奏さむ日に、相飲まむ酒ぞ、この豐酒は。反歌、四の船はや還り來と白がつけわが裳の裾に鎮ひて待たむ」。新羅、渤海等の諸國が入貢するに當つて、天皇は使を遣はしてその入貢使の勞を慰さめしめ、長く撫存の由を告げ、また位を進め、且、物を賜はつた。また慈善救恤に努められ、天平寶字二年には、八道に使を遣はして庶民の疾苦を慰問し、飢寒の者を救恤せられた。これより先、京中の孤兒を集め衣食を給してこれを養はしめられたが、天平勝寶八年十二月、男九人一人が既に成人したので、これらに葛木連の姓を賜ひ、紫微少忠葛木連戸主の戸に編附して、親子の縁を結ばしめられた。天平寶字元年四月には、天下に令して家毎に『孝經』一本を藏して、精勤講習せしめ、孝道を獎勵せられた。この時に當り、皇太子道祖王が廢せられた。王は天平勝寶八

年聖武法皇の崩御に際し、その遺詔により太子に立たれたのであるが、諒闇中に禮を缺ぎ、孝道に悖ることがあつて、こゝに及んだのである。ついで舍人親王の第七王子大炊王が皇太子となられた。大炊王は、かつて藤原仲麻呂の第に居られたことがあり、また粟田諸姉を召されてゐたので、既にこの時光明皇太后の信重を受けてゐた仲麻呂の勢力はこれより著しく伸び、自ら諸臣の反目をも見るに至り、遂に橘奈良麻呂（諸兄の子）は廢立を謀つたが、却て仲麻呂のために滅された。翌二年八月位を皇太子（淳仁天皇）に譲り、上臺寶字稱徳孝謙皇帝の尊號を受け、また後に高野天皇と稱せられた。藤原仲麻呂は内亂を未發に鎮壓した功により惠美押勝の名を賜はり、淳仁天皇の天平勝寶四年には、大師（舊太政大臣）となつた。上皇は六年出家、法華寺に入つて法名を法基と號せられたが、またこの年大事親決を詔して、國家の大事はすべてこれを聽かれた。八年九月押勝叛して誅せられ、上皇の信任を得たる僧道鏡は大臣禪師となり、その十月九日淳仁天皇の廢位を見ることとなり、上皇は再び位に登られた。即ち稱徳天皇である。翌年閏十月道鏡を更に太政大臣禪師、翌々年十月には法王に任ぜられたが、こゝに神護景雲三年九月、太宰府の主神習宜阿曾麻呂が、八幡神の託宣であると稱して、道鏡

をして天皇の位に即かしめば天下は太平であらうと奏した。天皇は和氣清麻呂を召し、御夢に八幡神使が来て、大神は清麻呂の姉法均尼によつて事を奏せしめたいと請はれたが、尼は高齢であるから、姉に代つて神意を請ふべく命ぜられた。清麻呂は西國に下り、やがて宇佐八幡宮の神託を復奏した。神託は、わが國家は君臣の分が定つてゐる、天日嗣は必ず皇儲を續かしめよといふのであつた。ために清麻呂、法均は、道鏡の怒に會ひ、ともに流罪に處せられたが、これがためわが國史上由々しき大事件とされることも、事なく終り、後、道鏡は失脚した。天皇は、その翌寶龜元年三月、河内國由氣宮（西京）に行幸して、博多川に遊宴し、百官、文人及び學生等が、各々曲水の詩を作つて上つた。また、歌垣を催し、葛井、船、津、文、武生、藏の六氏の男女二百三十人が、みな青擗の細布衣を著し、紅の長紐を垂れ、相並んで行を分けて、徐に進みつゝ、「乙女等に男たちそひ踏みならず西のみやこはよろづの世の宮」と歌つた。還幸後、八月四日聖壽五十三を以て崩御、大和國添下郡佐貴郷高野の山陵に奉葬した。天武天皇の皇統はこゝに至つて絶えたのであるが、なほ、田口鼎軒の「孝謙天皇」は、天皇に關する舊史論を訂して、その坤徳について記すところが多い。〔參照〕光明皇后（續日本紀、

大日本史、異時日本史、歷朝神德錄、史海）

章德門院

しやうとくもんゐん

後伏見天皇の皇女璜子内親王。御母は大納言實明の女藤原守子。延元元年四月一日内親王となり、同日三宮に准ぜられ、院號の宣下があつて章德門院と稱し、同日尼となられたが、生歿年ともに詳でない。（女院小傳、後宮略傳、大百科事典）

少納言局

せうなごんぎやう

靈元天皇の宮人。肥後守松室重仲の女。少納言局と稱し、榮貞女王を生まれた。薙髮して聚光院と號した。（野史）

少納言典侍

せうなごんてんじ

後鳥羽天皇の宮人。姓氏不詳。少納言典侍と稱し、僧道守を生まれた。（二代聖記、皇胤紹運錄）

少納言内侍

せうなごんないし

後醍醐天皇の宮人。藤原氏。大納言隆資の女。少納言内侍と稱し、僧尊眞（醍醐宮）を生まれた。（古今後醍醐帝系、皇胤紹運錄）

少納言内侍

せうなごんないし

後光嚴院の宮人。橘氏。從三位以繁の女。少納言内侍と稱し、明承法親王（天台座主）を生まれ、後光嚴院の崩後は尼となられた。『天台座主記』には、明承法親王の母を伯耆殿局としてゐる。（後愚昧記、後愚昧記別記、梧氏系圖）

梢風

せうふう

蕉門の俳人。伊賀上野の人、小川風麥の女。同藩

の土友田夏品に嫁し、夫に死別後は薙髮して俳諧に遊んだ。嘗て、芭蕉の深川の庵へ俳諧袖といふのを贈つた。これは文臺さばきよきやうにと利せし物數奇で、右の行一寸ばかり短い服であつたと『俳家奇人談』に傳へる。『木葉集』の作がある。（俳林小傳）

梢風尼

證明院

しやうめいゐん

徳川家重の室。中務卿邦良親王の女。享保十六年、西の丸に入興、同十八年十月薨じ、證明院と諡し、從二位を贈られた。（日本女子立志稿）

承明門院

じやうめいもんゐん

後鳥羽天皇の後宮。源在子。内大臣通親の女。御母は刑部卿範兼の女藤原範子。承安元年誕生、後鳥羽天皇に入侍して宰相君と稱し、土御門天皇及び一皇女を生まれた。土御門天皇位に即くに及び、正治元年十二月十三日從三位に叙せられ、三宮に准じ、建仁二年正月十五日承明門院と號せられた。建曆元年十二月四日尼となり、正嘉元年七月五日薨せられた。御年八十七。『大日本史』には、『尊卑分脈』『五代帝王物語』『増鏡』等によりて、父を法勝寺執行能圓とし、壽永の亂に能圓が西奔したる時、その妻藤原氏が通親に適したるため、在子はその姓を冒すに至つたとなし、なほ『愚管鈔』を加へて、門院につき

記すところが多い。(女院小傳、大百科事典、大日本史)

諸九しよ

〔二三七四—二四四一〕 俳人。湖白庵と號した。筑

紫直方の人、夫の浮風とともに、難波無名庵の後を守り、夫の歿後は西は長崎、東は陸奥まで杖を曳き、年耳順を越えて舊里直方に歸住した。天明元年九月十日歿、年六十八。『諸九尼句集』がある。(諸九尼句集)

識子内親王しよくしな

〔一五三四—一五六六〕 齋宮。清和天

皇の皇女。更衣藤原氏(神祇伯良近の女)の御腹で、貞觀十八年内親王、陽成天皇の元慶元年二月十七日伊勢齋宮となり、三年伊勢に群行せられた。同五年一月二十八日退下し、延喜六年十二月薨せられた。御年三十三。ために明年の元會に、醍醐天皇は、南殿に御せられなかつた。(一代要記、三代實錄、日本紀略)

素木しづ子しづこ

〔二五五五—二五七八〕 大正期の小説家。

明治四十五年三月札幌女學校を出ると同時に、結核性關節炎に罹り、療養のため上京したが、その多右足を切断して松葉杖に頼る身となり、これにより文學を志望、森田草平に師事し、大正二年十一月處女作「松葉杖をつく女」を發表した。四年、大島に轉地療養中、畫家上野山清貢と相知り、結婚して一子を儲け、なほ制作を續けてゐたが、大正七年一月、芝

傳染病研究所において急逝した。年二十四。短篇十五篇、特異な點はないが、繊細な筆致である。『悲しみの日より』(大正五年刊)『青白き夢』(大正七年刊)に纏められてゐる。(『悲しみの日より、青白き夢』)

白しろ

遊女。大江音人の孫。同玉淵の女。その事蹟は『古今集』『後撰集』『大和物語』『大鏡』『古今著聞集』『十訓鈔』に見える。『古今集』には「源のさねが筑紫へ湯あみにとてま

かりけるとき、山崎にて別を惜しみける所によめる、白女、命だに心にかなふものならば何かわかれのかなしからまし。」とあり、『後撰集』には、「女ともたちのもとに筑紫よりさし櫛をこころざすとて、大江玉淵朝臣女、難波潟何にもあらずみをつくしふかきこころのしるしばかりぞ。」とある。『大和物語』には、「亭子の帝(天皇)、河尻におはしましにけり、うかれめにしるといふものありけり、めしにつかはしたりければ、参りてさふらふ、上達殿上人皇子たちのあまたさふらひ給うければ、しもにとほしさふらふ、かうはるかにさふらふよし、歌つかうまつれと仰せられければ、すなはちよみて奉りける。濱千鳥とびゆくかぎりありければ雲たつ山をあはとこそ見れ。とよみたりければ、いとかしこくめで給ふて、かづけもの給ふ。」とあり、上述の「命だに」の歌を「この

白がよめるうたなりけり。」と加へてゐる。また「亭子のみかど鳥飼の院におはしましけり、例のごと御遊びあり、このわたりのうかれ女どもあまた参りてさふらふ中に、聲おもしろくよしあるものは侍りやとほせ給ふに、うかれ女ばらの申すやう、大江の玉淵がむすめといふものなん珍らしう参りて侍ると申しければ、見させ給ふに、さまかたちも清げなりければ、あはれがり給ふて、うへにめしあげ給ふ、そもくまことかなとはせ給ふに、鳥飼といふ歌を人々によませたまひけり、おほせ給ふやう、玉淵はいとらうありて歌などよくよみき、この鳥かひといふ題をよくつかうまつりたらんにしたがひて、まことのおほさんとおほせ給ひけり、うけたまはりて、すなはち、淺みどりかひある春にあひぬれば霞ならねどたちのぼりけり。とよむ時に、帝のしりあはれがり給うて御しほたれ給ふ、人々もよく多ひたるほどに酔なきいとなくす、帝御うちぎひとかさねはかまたまふ、ありとある上達部四位五位これに物ぬぎて取らざらんものは座よりたちねとのたまうければ、かたはしよりかみしも皆かづけたれば、かつきあまりてふたまばかりつみてぞおきたりける、かくて南院の七郎ぎみ(親王)といふ人ありけり、それなんこのうかれ女の住むあたりに家作りして住むときこしめし

て、それになんのたまひあつけゝる、彼が申さんこと院に奏せよ、院よりたまはせん物もかの七郎ぎみより遣はさん、すべてかれにわびしきめな見せそと仰せられければ、つひになんとふらひかへり見ける。」この白と大江玉淵女とを別人と見ること可能であるが、『古今著聞集』や『十訓鈔』には同人としてゐる。(大和物語、大鏡、日本奴隷史)

銀王ぎんわ

景行天皇の皇女。母氏不詳。大枝王の妃となられた。(古事記)

心觀院しんくわん

〔二三九八—二四三一〕 徳川家治の室。名は

倫子。閑院宮直仁親王の女。五十宮と稱した。寛延二年三月江戸に下り、寶曆四年十二月婚を修め、同十年九月二日、從三位に叙せられ、明和八年八月薨じた。年三十四。寛永寺に葬り、心觀院淨池蓮生と號し、九月二十三日從二位、天明三年八月十二日從一位を追贈せられた。千代姫、萬壽姫を生まされたが、ともに早世した。(野史)

新皇嘉門院しんくわん

〔二四五八—二四八三〕 仁孝天皇の女

御。尊稱皇后。藤原鑿子。關白鷹司政熙の女。御母は權中納言豐岡尙資の養女斐子。寛政十年二月誕生、文化十年十月仁孝天皇の東宮たる時、その御息所となり、即位の後、十四年十二月從三位に叙せられ、同十二月十二日女御となられた。

文政三年安仁親王を生まれ、准三宮の宣下があつたが、翌四年親王薨じ、ついで六年四月三日、皇女御誕生の時、その御惱を以て遂に薨ぜられた。御年二十六。その六日院號を進めて新皇嘉門院と號し、七年七月十日更に皇后を追贈せられた。陵は京都泉涌寺、後月輪陵。(野史、歴朝坤徳錄)

新廣義門院

後水尾天皇の(二二八四—二三三七) 後水尾天皇の

後宮。藤原基子。贈左大臣園基善の女。御母は谷衡長の女。寛永元年誕生、後水尾天皇の宮に入り、典侍となり、從三位を授けられ、靈元天皇及び四皇子三皇女を生まれた。延寶五年七月五日三宮に准ぜられ、院號宣下があつて新廣義門院と號し、同日、薨ぜられた。御年五十四。京都泉涌寺に奉葬。

(大百科事典)

神功皇后

くわんこうこうごう (八三〇—九二九) 仲哀天皇の皇后。氣

長足姫尊。氣長宿禰王の女。御母は葛城高嶺媛。「幼くして聰明叡智い、容貌壯麗し、父の王異みたふ」と『紀』にはある。天皇の二年正月立つて皇后となられた。天皇は初め成務天皇と同じく、景行天皇御晩年の行宮であつた近江國志賀の高穴穗宮に即位せられたが、二年二月越前の角鹿に幸して筒飯の行宮を興し、此處に皇后及び百寮を留め、更に紀伊國に巡幸して徳勒津宮に居られた。時に筑紫において、熊

襲が叛亂して朝貢せざるため、天皇は親らこれを征討せんとして、使を角鹿に遣はして皇后の來會を促し、直に穴門(長門)に向はれ、皇后は安藝淳田門を経て、その七月穴門の豊浦津に赴き、九月豊浦宮に入られた。八年、天皇は筑紫の磯縣に幸して櫛日宮に入り、大臣武内宿禰等を召して、熊襲征討の事を議せしめられた。此の時、皇后は神意を奉じて新羅の征討を勧められたが、天皇はこれを納れず、直に進んで熊襲を攻め、軍却て利あらずして還り、九年二月御痛疾を發して、崩せられた。『紀』の一書には、賊矢に中りて崩御とある。こゝにおいて、皇后は大喪を祕し、齋宮を筑前の小山田邑に營んで神祇を祭り、同年三月、吉備臣鴨別を遣はして熊襲を撃たしめ、また親らは、松峽宮に遷つて諸賊を平げ、松浦を経て櫛日浦に還り、更に海を渡つて新羅を征服しようと思召され、また懇に神祇を祭られた。蓋し新羅は熊襲等の勢力の根據地であり、且、經濟上最も留意すべき地方であるからである。皇后は事につき、必ず神教を請ひ、神意に従つてなすを常とせられた。四月、櫛日浦に到り、御髪を解き、海に臨んで、「吾れ神祇の教を被け、皇祖の靈を頼り、滄海を浮涉りて、躬ら西を征たむと欲ふ。是を以て今頭を海水に滌ぐ。若し驗あらば、髪自ら分れて兩つに爲れ。」といひ、海に入

れて洗がれると、髪は自ら分れて二つとなつた。こゝに皇后は髪を左右に結うて髻となし、よつて群臣に向つて、「夫れ師を興し衆を動すことは國の大事なり。(略中)上は神祇の靈を蒙り、下は群臣の助を藉り、兵甲を振して、嶮き浪を渡り、艱難を整へて、以て財土を求む。若し事成らば群臣共に功有り、事就らずば吾れ獨り罪有らむ。」と宣せられた。時に、諸方の軍兵が容易に集まらないので、皇后はこれを以て神意かと、その地に大三輪社を立て、刀矛を獻げられた。既にして軍衆が自らに聚つたので、親ら全軍に令せられた。また神意により、其の和魂を玉體の御守となし、荒魂を軍の先鋒となし、吉日を下して船を出された。十月、對馬の和珥津を出づるや、順風帆に孕み、軍船快駛して、忽ち新羅に著いた。新羅の國王はこれを見て畏れ降り、「今より以後、長く乾坤とともに、伏ひて飼部とならむ。それ船柁を乾さずして春秋に馬梳及び馬鞭を獻らむ。また海の遠きに煩かずして、以て年毎に男女の調を貢らむ。」と誓つた。皇后は御杖の矛を新羅王の門に樹て、また、表筒男、中筒男、底筒男の三柱の神の荒魂を國守神として鎮め祭り、和珥臣大矢宿禰を留めて鎮將とせられた。凱旋して更に穴門の山田邑にも前記の三神の荒魂を祭られたが、それが今の官幣中社住吉神社である。皇后

は發船の時既に御懷妊であつたが、こゝに至つて十二月筑紫の蚊田(宇美)の地で皇子譽田別尊を生まれた。後の應神天皇で、世に胎中天皇と稱する。翌年二月、皇后は穴門の豊浦宮に入つて、始めて仲哀天皇の大喪を發し、海路を東に還られた。偶々此の時天皇の皇子(大中姫の御所生)、廢坂、忍熊の二皇子が叛亂を企てられたが、幾くもなく廢坂皇子は、攝津の菟野で、赤猪の害に遭つて薨じ、忍熊皇子が獨り住吉に屯してをつた。よつて武内宿禰をして皇子譽田別尊を奉じて、南海より紀伊の水門に入らしめ、親らは海路難波に向はれた。攝津の務古(武庫)に至る比、天照大御神の荒魂を始め、稚日女尊、事代主神及び表筒男、中筒男、底筒男三神の和魂を祭られたが、それがそれぞれ今の官幣大社廣田神社、官幣中社生田神社、同長田神社、官幣大社住吉神社の起原である。かくて難波に出で、更に南の方紀伊に赴いて譽田別尊御一行と日高に會せられた。これより先、忍熊皇子の軍は退いて山城の菟道に屯したので、皇后は日高において軍議し、後、小竹宮に遷つて攻勢を示し、武内宿禰、和珥臣の祖武振熊を遣はし、大軍を以て忍熊皇子を撃たしめた。忍熊皇子はこれを邀へ戦つて一敗し、近江に奔つて瀬田濟に投じて歿せられた。その十月皇太后として、政を攝せられ、二年十一月

天皇を河内國の長野陵に奉葬、三年正月譽田別尊を立て、皇太子となし、都を大和國磐余の稚櫻宮に奠められた。後、十三年二月、皇太子が角鹿に行啓して、筒飯大神を拜して還られた時、皇后は宴を張つて皇太子を壽ぎ、「この酒は、我酒ならず、くしの神、當世にいます、石立たず、少御神の、豊壽ぎ、壽廻ほし、神ほぎ、壽轉ほし、獻り來し酒ぞ、酒さず飲せ、ささ。」と詠まれた。武内宿禰は皇太子に代つて、「此の酒を、醸みけむ人は、その鼓、白に立て、歌ひつゝ、醸みけめかも、此の酒の、奇に轉樂し、ささ。」と答歌を上つた。四十六年、斯摩宿禰を卓淳國に遣はした。この時、卓淳國王が、百濟王も日本を慕つて、朝貢せんとしても、海路不明のために、未だ果さない旨を宿禰に告げたので、宿禰は從者をして百濟王を勞はらしめた。百濟王省古は五色の綵絹、角の弓箭等を獻つた。此の後一年、百濟新羅の使者が、ともに貢物を獻つたが、新羅の貢物は極めて厚いのに、百濟の貢物は甚だ薄かつた。これ實は新羅のものが、百濟の貢物を奪つてこれを獻じ、新羅の貢物を以て百濟の貢物としたからであるが、遂に百濟の使者の訴へによつて露顯し、皇太后は、千熊長彦を新羅に遣はして、その罪を責めしめた。新羅が百濟を侵すや、四十九年三月、荒田別、鹿我別を將として百濟、

卓淳兩國の兵とともに新羅を撃ち、比自炊、南加羅、喙、安羅、多羅、卓淳、加羅の七國を平定せしめられた。かくて攝政六十九年にして、その四月稚櫻宮に崩せられた。御年百歳。狹城盾列陵に奉葬、後にその御功のごとく神功皇后と諡せられた。陵は大和國添下郡に在つて、平安朝時代には、天智天皇、桓武天皇の山陵とともに、極めて厚い崇敬を受けられた。その御靈は夙く、筑前の香椎廟に奉祠せられ、且、諸國の著名な八幡宮にはすべて祀られてゐる。神功皇后は、皇祖天照大御神につぐ偉大な女性として、古來多くの史論がある。『異說日本史』「みかどといふ説」には、「神功皇后は、みかどに在したので、神功天皇と申すべきであるとの説がある。海東諸國記に、『神功天皇、開化五世孫、息長宿禰女、仲哀納爲』后、仲哀没遂主國事。』水鏡に『つぎのみかどを神功皇后と申しき。開化天皇の御ひいご也。仲哀の后にておはせしなり。』常陸風土記に、『茨城國造初祖多祈許呂命、仕息長帶比賣天皇之朝。』かやうに、この三書には、天皇若しくはみかどといふ名稱が用ゐられてゐる。なほ日本書紀にも、御歴代の天皇と同じやうに一本紀を別に立て、また、『六十九年夏四月辛酉朔、丁丑、皇太后崩於稚櫻宮。』時年一多十月戊午朔、壬甲、葬狹城盾列陵、是日追尊太后、曰氣長足姬

尊。』とある。崩、陵、尊といふ字は、天皇にのみ使用する例であるから、これ等を見ると正當の至尊の如くにうけとられるので、古來、第十五代の天皇と仰ぎ申して異論はなかつたのであるが、大日本史に始めて本紀に列せず、后妃傳に編入してから、殆ど二百年の間議論の種となつた。明治になつても、重野安禪氏、小中村清矩氏の如きは、御歴代に入るべきであるといふ説であつた。しかし、日本紀には神功皇后と記し、皇太后といひ、元年の終りに、『群臣尊皇后曰皇太后、是年也太歳辛巳、即爲攝政元年。』とあり、且つこの紀の最終にも、皇太后を追尊して、氣長足姫尊といふとある。假令攝政といふことは、今日の攝政とは違ふにしても、やはり正當の天皇でないことは明かであり、追尊して尊としたとあるからは、これ又、御生前正當の尊でも天皇でもないから、大日本史の史筆を正統と見なければならぬ。』とある。(日本書紀、古事記、歷朝神德錄、大日本史、日本古代史、異說日本史)

新朔平門院

仁孝天皇の女

御。藤原禊子。關白鷹司政漉の女。御母は、豐岡斐子、御養母徳川清子。贈皇后鑿子の御妹である。文化八年二月誕生、初め清君と稱した。文政七年十一月關白政通(兄)の養女となり、天皇の女御に治定、八年八月從三位に叙せられ、同月二

十三日女御となられた。十三年五月二十二日三宮に准じ、弘化四年三月皇太后と尊稱せられ、その十月十三日院號の宣下があつて新朔平門院と進められ、同日崩せられた。御年三十七。十一月十二日、京都泉涌寺に奉葬。いま後月輪陵といふ。

禊子内親王

齋院。白河天皇の第四皇女。御母は中宮藤原賢子。禊子内親王(齋宮)の御妹である。永保二年内親王となり、慶徳二年に別封三百戸を受け、承德元年三宮に准せられ、堀河天皇の康和元年十月(十九歳)賀茂齋院となり、土御門齋院とも稱せられた。嘉承二年七月病により退下せられた(在任九年)。屢々法筵を開き、歌會などを催されたことが『今鏡』に見えてゐる。保元元年正月、法住寺殿において薨去。御年、七十六。

進子内親王

歌人。伏見天皇の皇女、御母は三條局(大納言藤原實明)の女。永福門院内侍藤原氏のために鞠養せられ、遠く播磨の賀茂莊で成長し、後、髪を下して尼となられた。早く和歌をよくし、花園上皇が『風雅集』を撰ばれるとき、その作歌を收めんとて京に迎へられ、光明院の詔によつて内親王となり、また今の名を賜はつた。歌は、『風雅

集』に最も多く、なほその後の『新千載集』『新拾遺集』『新後拾遺集』等の勅撰集に採られた。(作者部類、園、大日本史)

雲しづむ谷の軒端の雨のくれ聞きなれぬ鳥の聲もさびしくあはれさらば忘れて見ば生憎に我が慕へばぞ人はおもはぬ

進子内親王

仁子内親王 しんしなわい (一一五四九) 齋宮。嵯峨天皇の皇女。

女御大原淨子の御腹で、大同四年八月十一日伊勢齋宮となり、弘仁二年伊勢に下り、同十四年(嵯峨天皇讓位)六月三日退下せられた。在任十五年。仁和五年正月薨せられた。(類聚國史)

日本紀略、一代要記

信證院

しんじょう 武田松

新上西門院

しんじやうもんいん (二三三三二二) 靈元天皇の

中宮。藤原房子。左大臣鷹司教平の二女。御母は權大納言冷泉爲滿の女。承應二年八月二十一日誕生、兄に關白房輔、左大臣九條兼晴、姉に德川綱吉の室信子がある。寛文九年御年十七で女御となり、十一月二十一日入内。將軍家綱は松平定房、品川高如を遣はして慶賀を奏し、物を獻じ、また侍従以上の諸大名、公卿、門跡等も、みな慶賀を奏した。延寶元年八月榮子内親王、同三年九月初仁親王を生まれ、天和二年三月親王は皇太子となり、女御はその十二月三宮に准せられ、

更に三年二月宣下があつて中宮となられた。宣命使は權中納言正親町公通が奉仕し、中宮大夫には權大納言三條實道、權大夫には權中納言西園寺實輔が任ぜられた。貞享四年三月、天皇は位を皇太子に讓つて太上天皇となり、中宮は三月二十五日御上西門院と稱せられ、新院、女院は新御所に徙られた。此の新御所は後水尾天皇が入御の後、東宮御所とせられたものを修理せられたのである。左大臣近衛基熙は、この遷御のことが、幕府の専斷にかゝるを憤り、「抑今日御移徙事不_レ甘心。今日後陽成院御月忌也。院御即位之事、被_レ續_レ後光明院皇統_二之由、先年有_レ沙汰。而後水尾崩御、既有_レ諒闇。祖父帝御月忌日、何有_レ疑。尤可_レ爲_レ辟事_二歟。」と記してゐる。幕府の使者高家民部大輔崑山基玄が江戸より到り、御讓位、御即位の御儀を慶賀し、仙洞の供御料七千石を奉獻した。正徳二年四月十四日崩、御年六十。五月十二日泉涌寺に奉葬。いま月輪陵といふ。(歷朝通鑑、大百科事典)

新上東門院

しんじやうとうもんいん (二二〇五一二二八〇) 陽光院の御

息所。藤原晴子。贈左大臣勸修寺晴右の女。御母は從三位栗屋元子。天文十四年誕生、陽光太上天皇の親王たる時入侍し、初め阿茶局と稱し、後陽成天皇、空性親王、良恕親王、興意親王、智仁親王、永邵女王等を生まれた。天正十四年十一月

三宮に准せられ、慶長五年十二月二十九日院號宣下を蒙り、新上東門院と號した。元和六年二月十八日薨去、御年七十六。京都泉涌寺に葬つた。(野史、大百科事典)

深心院

しんしんいん 阿久方

新崇賢門院

しんすけいもんいん (二三三三三三三三) 東山天皇の典

侍。藤原賀子。初め、慶子。内大臣櫛笥隆實の女。御母は權大納言西洞院時成の女。延寶三年誕生、天皇の後宮に入り、掌侍となり、ついで典侍となり、從三位に叙せられ、中御門天皇、直仁親王及び三皇子、一皇女を生まれた。寶永六年十二月二十九日薨去、御年三十五。京都廬山寺に葬送。寶永七年三月二十六日准三宮を贈り、また、新崇賢門院の院號を追贈せられた。(野史)

新助方

しんすけがた (一一二三九九) 德川綱吉の側室。御部屋と呼

ばれた。豊岡有尙の女。天文四年十一月歿、清心院と號した。(野史)

新清和院

しんせいわいん (二四三三九一二五〇六) 光格天皇の中宮。

後桃園天皇の皇女欣子内親王。御母は盛化門院。安永八年正月誕生、女一宮と稱した。その十一月九日後桃園天皇崩御(聖壽二十二)この年、盛化門院は閑院宮典仁親王の御子兼仁親王を御猶子とせられたが、十一月二十五日親王が踐祚、

しんしーしんせ

翌九年十二月即位せられた。即ち光格天皇である(御年十歳)。安永九年十二月内親王となり、天明二年三百石を受け、寛政三年六月の頃、後桃園天皇の遺詔によつて中宮に御内定あり、ついで五年十二月三宮に准せられ、六年三月一日入内、同月七日中宮となられた(御年十六)。寛政十一年御懷妊、天皇の御悦びは、後櫻町上皇への次の御消息にも知られる。「誠に中宮事、いよ／＼めで度き様子、扱々年來の宿願成就、大悦の事にて候。此に付ても、何事も滿ればかくなるならひに候へば、只々大悦ばかりにては相すまず、か様に大めで度事有_レ之候も、ひとへに神々の御加護と存じ候。猶又萬事をつつしみ候事、十分なれば必かくること有_レ之と申事を心中に不_レ忘、敬神正直仁慈を第一にいたし候へば、何事も安穩の道理に候へば、右の心え第一とのみ存じ參らせ候事にて候。」(御曆文書)。翌十二年正月温仁親王(その四月薨去、文化十三年正月高貴宮悦仁親王を生まれた。これより先、中宮は文化四年七月寛宮惠仁親王(天皇の第四皇子)を御猶子とせられたが、十四年三月天皇は位を惠仁親王に讓り(仁孝天皇、太上天皇となり、中宮は文政三年三月皇太后となられた。天保十一年十一月光格上皇崩御、皇太后は十二年正月薨去、それより新清和院と號し、弘化三年六月二十日崩せられた。御年六十八。七月二

十三日京都泉涌寺に奉葬。光格天皇は和漢の學に達し、舊儀の復興を望まれたが、偶々天明八年京都大火により、禁裏、仙洞ともに烏有に歸し、その計畫空しく焦土に化したのは惜しまれる。即位後、御父典仁親王に太上天皇の尊號を上らんと意あり、旨を幕府に通ずるや、老中松平定信は、太上天皇の先例みな不祥なりと號してこれを拒んだことは尊號事件として近代史に著筆せらるるところである。中宮は歌をよくせられ、毎年の御會始、七夕等の御會に詠まれた歌が多い。
(歴朝坤德錄、大百科事典)

佐保姫の霞のころもかさねてぞ春とは見ゆれやまの端のそら
新清和院

神仙門院 しんせんもんいん 〔一八九一—一九六一〕 後堀河天皇の皇女體子内親王。御母は中納言家行の女。寛喜三年誕生、後深草天皇の建長八年二月六日内親王となり、同七日三宮に准ぜられ、同日院號を神仙門院と進められた。弘長元年十二月二十八日尼となり、妙智覺と稱し、正安三年十二月二十七日薨せられた。御年七十一。(女院小傳)

新宣陽門院 しんせんやうもんいん 後村上天皇の皇女。『新葉集』に、後村上天皇の崩御の時に當り、新宣陽門院と嘉喜門院(天皇の後宮)との唱和の御歌があり、後醍醐天皇の宮人が同じく哀

悼歌を門院に上つてゐること等から推して、門院は天皇の皇女であるとせられてゐる。しかし、門院を以て源顯子とし、天皇の女御であるとすると説もあつて、何れも確證はないのである。『新葉集』『嘉喜門院集』によれば、一品に叙せられ、新宣陽門院と號せられた。(參照 嘉喜門院 (新葉集、嘉喜門院集、大百科事典))

今はまたあやめの草にひきかへてうきねのかかる椎柴の袖一聲はそれかあらぬかほととぎすおなじ寝ざめの人に問はばや
新宣陽門院

新待賢門院 しんたいけんもんいん 〔一九六一—二〇一九〕 後醍醐天皇の後宮。藤原康子。太政大臣洞院公賢の養女。實は左近衛中将阿野公廉の女。正安三年誕生、元應元年八月後京極院禧子に從つて中宮に入侍し、後、召されて天皇の内女房となり、恒良親王(皇太子)、後村上天皇、成良親王、祥子内親王(齋宮)、准子内親王を生まれた。元徳三年從三位に叙せられ、元弘二年には天皇の隱岐遷幸に供奉し、還幸後、大佛貞直の采地を湯沐邑に賜はり、建武二年正月三宮に准ぜられ、ついで從二位に進められた。才色があつて時寵を専らにせられ、ために賂謁を通じ、賞刑の紊れたことも少くなかつた。足利尊氏はこれによつて護良親王(征夷大將軍)を讒したのである。

新中和門院 しんちゅうもんいん 〔二三六二—二三八〇〕 中御門天皇の女御。贈皇太后。藤原尙子。關白近衛家熙の女。御母は權

中納言町尻兼量の女量子。將軍家宣の室とは御姉妹である。元祿十五年三月九日誕生、正徳二年十月御年十一で女御に治定、享保元年十月幕府は御領二千石を進獻した。その十一月十三日入内。家熙の父基熙は、「予に於いては諸事を忘れ、安穩を祈る外、他事なし」と恐悦してゐる。享保五年元且櫻町天皇を生まれたが、産後遺豫、同二十日三宮に准ぜられ、院號を新中和門院と進められ、その日、御年十九で薨せられた。廢朝五日、鳴物停止を布告し、二月六日泉涌寺に奉葬。後、享保十三年六月二十六日皇太后を追贈せられ、その墓を月輪陵と稱せられた。(野史、歴朝坤德錄)

進藤茂子 しんとうもくし 歌人。進藤正幹の養女。幕士土岐頼意に嫁したが、夫に死別した。賀茂眞淵に學び、「筑波山は山しげ山」の古歌に因み、筑波子とつけられたといふ。『筑波子家集』が、清水濱臣によつて、編まれてをり、その序によれば、眞淵は彼女の歌調を天曆の女房の口つきであるといつてゐるが、さまで傑出したものを見出されない。家集には短歌百六十八首、長歌二首、文一篇を収めてゐる。(縣門遺稿) 何となく心ぞ春になりける霞みもあへぬ空を見つとも

後村上天皇即位の後、皇太后と尊稱せられ、正平六年十二月二十八日院號の宣下があつて、新待賢門院と號し、御年五十九を以て、同十四年四月二十九日吉野において崩せられた。天皇はために喪服すること三年であつた。(皇胤紹運錄、神皇正統記、女院小傳、圓太曆、太平記、新葉集)

祈りおくところの闇もいつはれて雲井に澄まむ月を見るべき
新待賢門院

新待賢門院 しんたいけんもんいん 〔二四六三—二五一六〕 仁孝天皇の後宮。藤原雅子。贈左大臣正親町實光の女。御母は權大納言四辻公享の女千榮子。享和三年十一月誕生、文政三年天皇の後宮に入り、典侍となり、孝明天皇及び二皇子一皇女を生まれた。弘化四年十月從三位に叙せられ、藤大納言局と號し、嘉永三年二月准三宮となり、院號の宣下(二月二十七日)があつて新待賢門院と進められた。安政三年七月六日薨去、御年五十四。京都泉涌寺に葬つた。(大百科事典)

新大納言局 しんのだいなごんきょ 後二條天皇の宮人。法眼良珍の女。珉子内親王を生まれた。(皇胤紹運錄)

新大納言局 しんのだいなごんきょ 靈元天皇の宮人。權中納言藤原爲條の女。剃髮して智徳院と號した。(野史)

吾背子がとき洗ひ衣もぬはなくに萩の葉そよぎあき風の吹

筑波子

深徳院 くみんと 阿須摩方

新室町院 ましんぢやう 〔一九九七〕 後醍醐天皇の中宮。後伏見天皇の第一皇女珣子内親王。御母は女御藤原寧子。應長元年六月内親王となり、文保二年二月一品に叙せられ、元弘三年十月中宮禧子の崩あるや、その十二月立ちて中宮となつた。御年は蓋し二十三四であつた。一皇女(名不詳)を生まれ、延元二年正月十六日、院號を新室町院と稱し、同五月十二日吉野の後宮に崩せられた。(女院小傳、大日本史、歷朝神德錄)

新陽明門院 しんやうめい 龜山天皇の女

御。藤原位子。關白基平の女。御母は源通能の女。弘長二年誕生、文永十一年龜山天皇の讓位後、その六月宮に入り、十二年二月二十六日女御となり、從三位に叙せられ、ついで三宮に准じ、同三月二十八日院號宣下があつて新陽明門院と稱せられた。啓仁親王、繼仁親王はその御所生である。正應三年四月尼となり、法名を覺隆と號し、上皇の薙髮後に出でて禪林寺殿の側に住まれた。後、一女を擧げられたことが『増鏡』に見えてゐる。永仁四年正月二十二日、三十五歳で薨せられた。(女院小傳、大日本史、増鏡)

す

崇源院 すうげん 〔二二三三—二二八六〕

徳川秀忠の御臺所。淺井長政の女。母は小谷方。幼名を小督御料人と呼ばれ、後、徳子といつた。淀君の妹。初め、豊臣秀勝に嫁し、後、徳川秀忠に再離した。家光、忠長、和子(東福門院)等を生んだ。寛永三年九月薨去、年五十四。増上寺に葬り、崇源院と諡し、十二月特に從一位を追贈せられた。(圖 小谷方、大日本人名辭書、歷朝神德錄)

崇賢門院 すうけん 〔一九九五—二〇八七〕

後光嚴院の後宮。藤原仲子。贈左大臣兼綱の猶子。實は石清水八幡宮祠官法印通清の女。建武二年誕生、宮に入つて典侍となり、中納言典侍と稱し、延文三年十二月後圓融院を生まれ、ついで熙永親王、堯仁法親王を生まれた。天授六年正月三宮に准せられ、後小松天皇 後圓融院の皇長子に即きて、弘和三年四月二十五日院號を崇賢門院と進められ、本封の外に特に邑五百戸

推古天皇 すいこ 〔二二一四—二二八八〕

第三十三代の天皇。豐御食炊屋姫天皇。敏達天皇の皇后。欽明天皇の皇女額田部皇女。妃堅鹽媛(蘇我稻目の女の御所生で、初め敏達天皇の五年三月十日、その皇后に立たれ、菟道具餽皇女(聖徳太子の妃)、竹田皇子、小墾田皇女、葛城王、鸕鷀守皇女(一名、輕守皇女、尾張皇子、田原皇女、櫻井弓張皇女を生まれた。立后の時を、『紀』には十八歳とあるが、崩御の年等から逆算すれば、蓋し二十三歳であらう。姿色端麗、且、態度嚴正であられた。嘗て和泉國の海上に靈材漂流し、大部屋栖野古連公は、これを朝廷に奏したが、天皇が直に其の言を用ゐられないので、連公は更にこれを皇后に奏し、皇后はその靈材を拾收して、佛菩薩の像三體を彫刻造立せしめられた(日本書紀)。これより先、欽明天皇の時、百濟が佛像經論を獻じて佛法の徳を頌したのであるが、蘇我、物部の兩氏等は、その取捨を争つて決しなかつた。かゝる時皇后が斯くせられたことは、夙に佛教に傾意せられたことが知られるのである。十四年八月天皇崩御、皇弟用明天皇が即位せられたが、僅に二年餘にして崩せられ、ついで皇弟崇峻天皇の踐祚を見たが、また幾程もなく弑逆に遭ひ、ここに皇后は、その蘇我氏の出たる故を以て馬子に擁せられて、壬子歲十二月天日嗣の高御

を加へられた。應永三十四年五月御年九十三で薨せられ、京都華開院に奉葬。門院は梅町に住まれたので、世に梅町殿と稱した。(尊卑分脈、貴女鈔、大百科事典、新後拾遺集)

有明のかけをしるるべに誘はれて夜ふかくいづる須磨のうらら 舟 崇賢門院

崇明門院 すうめい 後宇多天皇の皇女祿子内親王。御母は准

三宮掬子女王。後醍醐天皇の皇太子邦良親王の妃となり、嘉暦元年皇太子の薨去により落飾して入道宮と稱した。御子がなかつたので、側室の諸子を視ること己が所生の如くであつた。元弘元年、光嚴院は皇孫康仁親王(邦良親王の長子)を立て、太子となさんとし、十月二十五日三宮に准じ、院號を崇明門院と進められた。元弘三年後醍醐天皇隱岐より還幸あるや、五月十七日院號を止められたが、ついで延元三年四月二十八日光明院により再び院號を復せられた。薨年は詳でない。(女院小傳、増鏡、大日本史、大百科事典)

瑞光女王 すいこう 〔二二三三—二二六六〕

後西天皇の皇女。宮人藤原氏の御所生。延寶二年正月誕生、多嘉宮と稱した。天和七年四月慈愛院に入り薙髮、寶永元年四月圓照寺を兼領し、同三年九月薨せられた。通玄大圓禪師と號し、大徳寺中龍光院に葬つた。(野史、大日本人辭書)

座に登られた。即ち推古天皇、女帝の始である。天皇は大和國高市郡の豐浦宮において即位の禮を擧げ、後、小墾田宮に遷られた。天皇は皇姪厩戸皇子を立てて皇太子となし、萬機を攝行せしめられたが、馬子の大臣たることはもとの如くで政權は全くその手中にあつた。間もなく大詔を發して佛教を興隆せしめられた。時に諸臣連たちが、各々君親の恩のため、佛寺を建立し、此の後、法興寺（後の元興寺）、四天王寺、法隆寺等が相次いで落成し、互に輪奐の美を競ふこととなつた。また、聖德太子が、全力を傾倒して經營の衝に當られたことはいふまでもない。かくて太子の憲法十七條制定の翌十三年四月、詔して皇太子とともに發願、鞍作鳥に命じて、一丈六尺の銅佛像、繡佛像各一體を造らしめられ、高麗の大興王は遙にこれを聞いて黄金三百兩を獻じた。十四年には、皇太子をして勝鬘經、法華經を講說せしめ、天皇も親しくこれを聽かれた。しかし、翌十五年二月には、神祇の祭祀につき次の詔があつた。「朕聞く、曩者我が皇祖天皇等の世を宰め給へるや、天に踞り、地に躋して、敦く神祇を禮ひ、周く山川を祠りて、幽に乾坤に通はず。是を以て陰陽開和ぎ、造化共に調ふ。今朕が世に當りて、神祇を祭祀ふこと、豈怠ることあらんや。故れ群臣共に爲に心を竭して、宜しく神祇を

拜むべし。」當時、韓半島の諸國には斷えず騷亂があつた。これより先、八年二月、新羅と任那とが互に相攻略した。ここに詔して境部臣、穗積臣等を遣はし、大軍を率ゐて新羅を伐ち、任那を救はしめた。兩國王は共に上表して「天上に神あり、地に天皇あり。この二神を除きては、また何ぞ畏きことあらむや。今より以後、相攻むることあらず。且船棺乾さず、每歲必ず朝貢せむ。」と奏し、半島の諸國は我が勢威に服し、交々使を送つて貢獻し、學僧等も相踵いで來朝した。後、三十一年に至り、新羅がまた叛き、任那を伐つてこれを從へた。天皇はこれを知り、新羅を討たんとして大臣（馬子）及び群卿に諮つたが、此の時皇太子はすでに二十九年二月薨去してなく、田中臣、中臣連等の議が合はず、容易に決しなかつたので、天皇は英斷を下して、吉士磐金、吉士倉下を新羅、任那に遣はして問責せしめ、ついで大德境部臣雄摩侶、小德中臣連國を大將軍となし、小德河邊臣禰受、物部依網連乙等、波多臣廣庭、近江脚身臣飯蓋、平群臣宇志、大伴連、大宅臣軍を副將軍として、數萬の衆を率ゐて出征せしめられた。船師半島に到るや、新羅、任那は忽ち出でて降つた。これより先、十五年七月、皇太子は天皇に奏して小野妹子を隨の國に遣はすに當り、その國書に、「日出處の天子、書を日

没處の天子に致す」と認められた。日出處の天子は即ち推古天皇であり、日没處の天皇は隋の煬帝を指してゐる。天皇は國初以來初めてこの權威ある國書に鈐せられたのである。翌年四月、妹子は隋から還つて、煬帝の書を歸朝の途中、百濟で奪れたことを奏した。群臣は相議して妹子を流刑に處せんとしたが、天皇は、「妹子書を失ふ罪ありと雖も、輒く罪すべからず。大國隋の客等の聞かむことも亦不良し」と勅して、妹子の罪を宥された。この時、隋使の斐世清もまた妹子を送つて來朝し、難波の浦から豐浦に入つて朝見した。同年九月、再び妹子を大使とし、吉子雄成を小使として隋に遣はし、高向玄理、僧旻、南淵請安等の學生學問僧等八人を附せられた。その國書に「東天皇敬みて西皇帝に白す」とある。かく此の時代に、内政外交の發展を見たことは、注目すべき事實である。天皇はまた皇太子をして冠位を定め、憲法を頒ち、朝禮を制し、わが國の典章は少からず備はつた。二十八年皇太子は馬子と議し、天皇記、及び國記、臣連伴造國造百八十部、并せて公民等の本記を撰録せられたが、これは後、蘇我氏の滅亡の際に燒失したといふ。三十二年十月、馬子は

大和の葛城縣を蘇我氏の本居であるといふ理由から、その地を獲て己れの封建したいと請うたが、天皇は「今朕は蘇我氏より出でたり。大臣も亦朕のために舅なり。故れ、大臣の言、何の辭か用ゐざらむ。然はあれど今朕の世に當りて、頓に其の縣を亡ふこと、豈獨り朕の不賢のみならむや。大臣も亦不忠ならむ。是れ後葉の惡名ならむ。」と詔して、許さなかつた。三十六年三月、大漸に際し、押坂彥人大兄皇子（敏達天皇の皇子）の御子田村皇子及び、厩戸皇太子の御子山背大兄王を召して遺詔し、幾くもなく御年七十五で崩御せられた。「比年五穀登らず、百姓大に飢う。それ朕の爲に陵を興して厚く葬ること勿れ、便ち宜しく竹田皇子の陵に葬むべし。」との遺詔に従ひ、御子竹田皇子の陵に奉葬した。嘗て酒宴を諸臣に賜うた時に、大臣蘇我馬子が壽いで上つた歌がある。「やすみし、我が大君の、かくります、天八十蔭、出で立たす、御空を見れば、萬世に、此くしもがも、千世にも、此くしもがも、畏みて、仕へまつらむ、拜みて、仕へまつらむ、宴杯奉る。」天皇はこれに和して御製を賜はつた。「眞蘇我よ、蘇我の子等は、馬ならば、日向の駒、太刀ならば、吳の眞鋤、宜しかも、蘇我の子等を、大君の、使はすらしき。」（紀。日本書紀、歷朝地德錄、大日本史）

瑞春院 ずるしゆ んふん 阿傳方
瑞龍院 ずるり うれん 豐臣秀次の母。秀吉の姉。名は、智子。法名

日秀。初め三好常閉に嫁して、秀次、秀勝、辰千代丸を生んだ。文祿四年七月十五日、秀次高野に自盡するや、同五年洛北村雲の地に一字を建て、居つた。故に村雲尼ともいふ。後陽成天皇より瑞龍寺の號を賜はつた。(野史)

周防内侍

すはらの

歌人。周防守平繼仲の女。本名仲子。大和守義忠の妻となつたともいふ。後冷泉、後三條、白河、堀河の四朝に互つて宮廷に仕へ、掌侍であつた。治暦四年四月後冷泉天皇が崩御になつたので、一旦里に出たが、再び奉仕した。『新古今集』卷十八にある「權中納言通俊後拾遺えらび侍りける頃、まづかたはしもゆかしくなど申して侍りければ、申し合せてこそとてまだ清書もせぬ本をつかはし侍りけるをみて返しつかはすとて」とあるのは、通俊が『後拾遺集』を撰するに當り、その草案を彼女に示し、撰修に就いて何等かの打合せをしたことを語つてゐる。嘗て、二條院に人々あまた圓居をして物語をした春の一夜、彼女が枕もがなと小聲でいふと、大納言忠家が、これを枕にといつて自分の腕を簾の下から差出したので、「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ」と詠んだ歌は「百人一首」に採られてゐる。堀河天皇の代の末には宮中を出たが、その前後に、春日祭に女使となつて奈良に行つたことがある。『金葉

集』に、「家を人に放ちてたつとて柱にかきつけ侍りける、住み侘びて我さへ軒の忍ぶ草しのぶかたくしげき宿かな」とある彼女の家は、冷泉堀川の北西の隅にあつたが、その後もしく残り、『今昔物語』には建久の頃その家と柱の歌とを見たときあり、『山家集』には、「周防内侍我さへ軒のと書きつけける古郷にて人々おもひをのべける」とある。内侍の歌は、『後拾遺集』以下の勅撰集に三十餘首見えてゐる。「さみだれに」は三條院の崩御を悼み奉つた作。(百人一首一々話、後集紙)

さみだれにあらぬ今日さへ晴れせぬは空も悲しき事や知る
らむ
周防内侍

酢香手姫

すかて

用明天皇の皇女。宮人廣子の御所生。天皇の詔により、伊勢大神宮に奉仕すること三代、推古天皇の時に至つて、葛城に屏居して薨せられた。(日本書紀)

菅原和子

すがはら

式部大輔益長の女。寛政八年十月新掌侍と稱した。盛仁親王及び皇女を生まれ、文化八年四月三十歳で薨じ、普照光院と謚された。(野史)

菅原孝標女

すがはらのむすめ

者。寛弘五年生れ、歿年未詳。但、康平元年夫に死別した時

は五十一歳であつた。遠祖に道眞があり、祖父資忠、兄定義はともに文章博士、大學頭であつた。母は藤原倫寧の女、母の姉の道綱母は『蜻蛉日記』の作者、兄の長能は歌人である。繼母の上總大輔も歌人。父の孝標は上總介、常陸介等になつたが、不遇な人であつた。彼女の異常な才能は、かかる環境の中で成長したのである。彼女は、幼時を京で暮し、十歳の時父に従ひ、繼母、兄姉とともに上總に赴いた。そこでは、等身の佛像を作り、その前に額づいて早く京に上り、くさぐさの物語を読みたいとて祈願した。寛仁四年の秋の末、彼女十三歳の年、歸京の途に上り、十二月二日京に著いた。一品修子内親王のゐます三條の宮の西に住んだが、それは寂びしい家で、間もなく繼母も離縁してその家を去つた。十四歳の時には、疫病が流行して乳母が死に、侍従大納言行成の姫君が亡くなれる等のこともあつたが、さうした数々の悲しみは物語を読むことでわづかに慰めてゐた。十六歳の時火災にあつて家が焼け、姫君の身代りとして愛してゐた猫も死んだ。二十五歳の時、父は六十の老齡で常陸介となり任地に下り、やがてまた歸つて來たが、家庭はうらさびて、泌々と現實を凝視する機會が與へられた。三十二歳の頃、家庭の事情でやむなく祐子内親王に仕へたが、幾くもなく退つて、西山のほ

とりに老親にかしづき、姉の遺児を養育した。四十歳近くなつて、但馬守爲義の四男橋俊通に嫁し、仲俊及び一女を生んだ。後冷泉天皇即位の大嘗會の御禮の日、一人京を後に初瀬に思ひ立つたのをはじめとして、其後は石山に、初瀬に、太秦に、屢々參詣を怠らなかつた。物語をあこがれる心は、結婚、母性愛等の現實的洗禮を受けて、更に神佛と夢とを追求するやうになつた。天喜五年七月三十日に夫の俊通は信濃守に任じ、ほどなく仲俊とともに任國に下つた。然るに、翌年四月には、夫は任國から歸つて來て、九月二十五日發病、十月五日五十七歳でこの世を去つた。彼女はただ一つの夢を、せめてもの希望としての淋しい生活を送つた。『更級日記』その他によつて知ることのできる孝標女の事蹟はこれで盡されてゐる。『更級日記』一卷は、浪漫的な精神と、夢幻的な美とが渾然たる融合を示し、頗る高い價値を呼ぶ作品である。また、『濱松中納言物語』五卷、『夜半の寢覺』五卷も、彼女の作とせられる。それは、『更級日記』の奥書に、「常陸守菅原孝標の女の日記なり。母は倫寧朝臣の女、傳の殿の母上の姪なり。夜半の寢覺、みつの濱松、自ら悔ゆる、朝倉などは、この日記の人の作られたるとぞ」とあり、それらの諸作中に、夢物語が多いことや、その夢の特色が日記のそれと類似して

あること、描寫筆致の特徴等によつて動かぬところである。彼女の作は『源氏物語』等に比すれば、更に浪漫的な色彩が深まり、その内容から云つて甚だ宗教的であり、而も現實界に必然性を持つてゐる點で、平安朝浪漫文學の一つの極致を示してゐる。なほ作歌は、勅撰集に十四首入つてゐる。(『更級日記、清松中納言物語、夜半の覺覺』)

何事をわれ歎くらむかげるふのほのめくよりも常ならぬ世に
菅原孝標女

菅原庸子 のながほ 靈元天皇の宮人。内侍。權大納言爲庸の女。初め菅中納言局と稱した。因慶親王、寛敦親王、文喜女王、元秀女王等を生まれ、後、薙髮して、寶樹院と號した。(野史)

菅原衍子 のながほ 宇多天皇の女御。右大臣道長の長女、寛平八年女御となり、從四位下を授けられた。(一代要記、尊皇分脈)

菅原寛子 のながほ 中御門天皇の宮人。典侍。權大納言爲範の女。別當典侍と稱し、寛全親王を生まれ、薙髮後、景光院と號した。(野史)

杉浦眞崎 まさき (二三五〇—二四一四) 歌人。羽倉駿河守信元の女。初名政子。荷田蒼生子の従妹。元祿三年、京都に

生れ、十五歳にして杉浦國頭に嫁し、三男一女を儲けた。三男みな夭折したので、縁家渡邊氏より國滿を入れて嗣子とした。彼女は夙に淑父荷田春滿に歌學を受け、屢々夫とともに歌會に列し出詠が少くない。歌集に『宿の梅』がある。寶曆四年二月二十九日六十五歳で歿した。(近世和歌史、大百科事典)

杉瀧子 たきこ (二四六七—二五五〇) 吉田松陰の母。長門藩士村田右中の三女。文化四年正月二十四日生れ、兒玉太兵衛に養はれ、文政九年藩士杉百合之助に嫁し、民治、松陰、千代子、壽子、文子(久阪玄瑞の妻等三男四女を生んだ。性仁愛、恪勤、自ら農耕に従つて家計を助け、子女を愛撫哺導し、賢母の稱があつた。次男寅次郎藩獄を出でて松下村塾を開くや、これを輔けて事を誤らしめず、松陰の刑死するや、面に悲しみを見せずして常にこれを憐んだ。ついで萩の亂起り、孫小太郎及び一族のこれに死するもの相次いだ、また毅然としてこれを處理した。深く佛門に歸依し、晩年その名聲次第に聞え、これを慰問するものが多かつたが、明治二十三年八月二十九日八十四歳で歿し、皇后は特旨を以て金壹百圓を賜はつた。(大日本人名辭書、近世名媛傳)

杉本兼子 かねこ (二三九〇—二五七五) 看護婦の率先者。江戸の人富岡小八の女。十六歳の時杉本仙太郎に嫁して二子

を擧げ、二十七歳にして夫に死別した。明治元年大學東校の看護婦となり、佐藤尙中、佐々木東洋について看護法を習得し、同六年、尙中の順天堂を開くに當り、院長助手に擧げられた。十年の役に尙中が戦地に赴くや、これに代つて院務を處理し、後、看護婦長となり、二十四年老を以て罷めた。俠氣あり、人のために周旋すること多く、その援助により身を立たしたものも少くないといふ。退職後は佐藤家より優遇せられて餘生を送り、大正四年十一月二十五日七十八歳で歿した。墓は淀橋常圓寺。(大日本人名辭書)

宿禰 ね 「葵前」の項を見よ。

資子 すけ 龜山天皇の宮人。姓氏不詳。從三位に叙せられ、尊珍法親王(准三宮)を生まれた。(皇胤系圖、諸門跡譜)

鈴木宇右衛門妻 うすけ 出羽鶴岡の人、夫妻仁慈の心深く、天明八年の飢饉に際し、家資を傾けて人に施した。妻が僅に残つた晴著を賣らんとする時、宇右衛門は女は男と違ひ、著替の用意がなくては外にも出られぬであらうと云つて止めたが、彼女は、外に出づる念がある限り、著物のみならずまた櫛簪等も必要なれば、今それに心づき、それらをも拂はんために賣るのであると答へたといふ。また翌春、ある雪の日に、單衣を著た物乞の少女を見て、今年十二歳になる我が娘

を呼び、娘の著たる二枚の綿入の一を與へしめたが、娘もよく父母の感化を受けて、直に、そのよき方を脱ぎ與へたといふ。(婦女鑑)

須勢理毘賣命 すせりひめ 大國主命の嫡妻。須佐之男命の女。大國主命が根國に赴き給うた時、自ら進みて婚し給うた。よつてこの御名があるといふ。かくて須佐之男命が大國主命を種々なる手段を以て試された時、常に大國主命を援けられ、遂に大國主命とともに、父命より生太刀、生弓矢、天詔琴を得て、根國を去り、この國土に還つて出雲の宇迦能山本に宮居を造つて、内助の功があつた。『記』には、大國主命が、八十神に追究せられて御命が危いので、御祖神は大國主命に、根國に赴いて須佐之男命に頼れと教へられ、「かれ詔命のまに、須佐之男命の御所にまゐりたりしかば、その女須勢理毘賣出でて見て、目合して婚ひまして、還り入りてその父に、いと麗しき神まる來ましつとまをしたまひき。かれその大神出でて見て、こは葦原色許男といふ神ぞとのりたまひて、やがて喚び入れて、その蛇の室に寝しめたまひき。ここにその妻須勢理毘賣命、蛇のひれをその夫に授けてのりたまはく、その蛇咋はむとせば、このひれを三たび擧りて打ち撥ひたまへとのりたまふ。かれ教のごとしたりまひしかば、蛇自ら靜りし

故に、平く寢て出でたまひき。また来る日の夜は吳公と蜂との室に入れたまひしを、吳公蜂のひれを授けて、先のごと教へたまひし故に、平く出でたまひき。また鳴鏑を大野の中に射入れて、その矢を探らしめたまふ。かれその野に入ります時に、即ち火もてその野を焼き廻らしつ。ここに出でむ所を知らざる間に、鼠来ていひけるは、内はほらほら、外はすぶすぶ。かく言ふ故に、其處を踏みしかば、落ち入り隠りし間に、火は焼け過ぎぬ。ここにその鼠かの鳴鏑を咋ひ持ち出で来て奉りき。その矢の羽はその鼠の子ども皆喫ひたりき。ここにその妻須世理毘賣は、喪具を持ちて哭きつつ來まし、その父の大神は、己に死せぬと思ほして、その野に出でたせば、すなはちかの矢を持ちて奉る時に、家に率て入りて、八田間の大室に喚び入れて、その頭の虱を取らせたまひき。かれその頭を見れば、吳公多かり、ここにその妻椋の木實と赤土とをその夫に授けたまへば、その木實を咋ひ破り、赤土を含みて唾出だしたまへば、その大神吳公を咋ひ破りて唾出だすとおもほして、心に愛しく思ほして寢ましき。ここにその大神の髪を握りて、その室の椋毎に結び著けて、五百引石をその室の戸に取り塞へて、その妻須世理毘賣を負ひて、その大神の生大刀生弓矢またその天沼琴を取り持たして、逃げ

出でます時に、その天沼琴樹にふれて地動鳴きき。かれその寢ませる大神聞き驚かして、その室を引き付したまひき。然れども椋に結べる髪を解かする間に、遠く逃げたまひき。かれここに黄泉比良坂まで追ひいでまして、遙に望けて、大穴牽神を呼ばひてのりたまはく、その汝が持たる生大刀生弓矢をもちて、汝が庶兄弟をば、坂の御尾に追伏せ、河の瀬に追ひ撥ひて、おれ大國主神となり、また宇都志國玉神となりて、その我が女須世理毘賣を嫡妻として、宇迦能山の山本に、底津石根に宮柱太しり、高天原に冰椋高しりて居れ、是奴よとのりたまひき。かれその大刀弓を持ちて、かの八十神を追ひ避くる時に、坂の御尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に追ひ撥ひて、國作り始めたまひき。」とある。須勢理毘賣命は、殊に歌を能くせられた。『記』に「嫡后須勢理毘賣命、甚く嫉り妬みしたまひき。かれその日子遲神佗びて、出雲より倭國に上りまさむとして、裝束し立たす時に、片御手は御馬の鞍に繫け、片御足はその御鐙に踏み入れて、歌ひたまはく、野羽玉の、黒き御衣を、眞具に、取り装ひ、奥鳥、胸見る時、鱈揚ぎも、これは宜はず、邊浪、礎に脱ぎ棄て、鳩鳥の、青き御衣を、眞具に、取り装ひ、奥鳥、胸見る時、鱈揚ぎも、こも宜はず、邊浪、礎に脱ぎ棄て、山縣に、求ぎし、茜春ぎ、

染木が汁に、染衣を、眞具に、取り装ひ、奥鳥、胸見る時、鱈揚ぎも、此し宜し、いとこやの、妹命、群鳥の、吾が群れ往なば、引け鳥の、吾が引け往なば、泣かじとは、汝は言ふとも、山處の、一本薄、項傾し、汝が泣かさまく、朝雨の、狭霧に、起たむぞ、若草の、妻の命、事の、語り言も、こをば。ここにその后大御酒杯を取らして、立ち依り指擧げて、歌ひたまはく、八千矛の、神の命や、吾が大國主、汝こそは、君にいませば、打ち見る、鳥の崎崎、擧ぎ見る、磯の崎落ちず、若草の、妻持たせらめ、吾はもよ、女にしあれば、汝除きて、夫は無し、汝除きて、夫は無し、文垣の、ふはやが下に、蒸被、柔が下に、袴被、さやぐが下に、沫雪の、弱る胸を、袴綱の、白き腕、そ叩き、叩きまながり、眞玉手、玉手差し纏き、股長に、寐をしなせ、豊御酒、獻らせ。かく歌ひて、即ち蓋結ひして、項懸けりて、今に至るまで鎮ります。」とある。出雲國式社大神大后神社、和加須西利比賣神社はこの命を祀る。(古事記)

捨すて [二二九四―二三五八] 俳人。嶺雲と號した。田季繁の女、寛永十一年丹波氷上郡柏原に生れた。季繁は初め柏原藩主織田信則及びその嗣信勝に仕へ、信勝の嗣絶えて幕府直轄となるや、郡の代官となつた。すてには、兄季聽があつたが、

すて

父はすての夫季成(父の後妻の連子)を後嗣として、代官職を襲がせた。捨の句作については、六歳の時、「雪の朝二の字／＼の下駄の跡」の句が既にあつたなども傳へられるが確證はない。この句が都まで聞え、「茅原に惜しや捨て置く露の玉」といはれたともいふ。後、北村季吟、同湖春、宮川松堅等に歌俳を學ぶこととなつた。十八歳で季成と結婚し、五男一女を儲けた。捨女の句は、寛文二年(二十九歳)の松堅の『俳集良材』に入句あるのが初見と思はれ、その後の湖春の『續山の井』、季吟の『續連珠』等に多く採られてゐる。延寶二年夫に死別し、七年剃髮して京都千本に庵を結び、淨土門に歸して妙融といひ、貞享二年播州網干に行き、龍門寺の盤珪に參禪して貞閑と改めた。元祿元年、龍門寺の傍に不徹庵を建て、同九年貞閑寮を附設し、翌十年十五條より成る、「不徹庵定規」を定めて、庵中尼衆の律則とした。十一年八月十日病歿、年六十五。歿後、本山妙心寺から、首座號を追授されたが、尼衆に首座の追授は貞閑を以て嚆矢とする。不徹庵は弟子の榮感尼が嗣いだ。版行の著作はないが、『田捨女』(森繁夫)に、遺稿遺文が輯録せられてゐる。貞門の女六俳仙、元祿の四俳女の一に數へられる。(田捨女、野史)

いざ摘まむ若葉もらすな籠の内

拜みたしなみだくもらで涅槃像

捨女

栖長比女命すながひめ 大水土命の女。皇大神宮攝社津長神社の祭神。すでに『延暦儀式帳』に見える。(神祇辭典)

須沼毘神すぬまび 神活須毘神

沙土煮尊すぢこ 須比智邇神。神代七代の神の一。涅土煮尊と相並ぶ神で、涅土は浮脂の如く漂へる物の潮と土と混淆して未だ分れざるをいひ、沙土とは、その潮と土と漸く分れたのをいふ。煮は一に根ともあつて尊稱である。(日本書紀、古事記、古事記傳)

純子内親王すみこ 嵯峨天皇の皇女。宮人

文屋文子の御腹で、貞觀五年正月薨去、天皇事を視給はざる

こと三日であつた。(三代實錄)

清江娘子すけのね 萬葉の歌人。慶雲中の人。持統天皇が難

波の都に行幸のとき、從駕した長皇子に詠進した歌がある。(萬葉集)

草枕旅行く君と知らませば岸の埴生に匂はさましを

清江娘子

駿河姪女すまがねめ 萬葉の歌人。傳不詳。二首の短歌がある。(萬葉集)

しきたへの枕ゆくぐるなみだにぞ浮寝をしける戀のしげき

駿河姪女

駿河内親王すまがね 桓武天皇の

皇女。宮人百濟貞香の御所生。弘仁十一年六月二十歳で薨ぜ

らるゝや、使を遣はして喪事を監護せしめられた。(二代要記、日本紀略)

諏訪いそいそ 小餘綾磯女

諏訪部某の後妻。二人の繼子を遇すること周到であつたが、

家が貧しいので操作して繼に給した。夫某間借人田上某の机

上に置きし金二十圓を私して拘引さるゝや、その金を盗みた

る者は己れである旨を遺書し、罪を田上に謝し、且つ夫及び

二子の幸福を祈つて自殺した。時に明治十一年三月三日、年

三十三。ために夫は釋放せられて家に歸つた。(近世名家傳)

せ

西華門院さいかもん 後宇多天皇の後

料の増地を納れて二千石を領し、三年十月十二日に至つて、

盛化門院と號し、落飾せられたが、同日御年二十五で崩せら

れた。同十一月十三日泉涌寺に奉葬、月輪陵といふ。(野史、

歴朝神德錄)

静寛院しずかん 仁孝天皇の第八皇女

親子内親王。徳川家茂の御臺所。御母は大納言橋本實久の女

經子。弘化三年閏五月十日、即ち天皇の崩(正月六日)後に

誕生、和宮と稱せられ、嘉永四年六歳の時には、有栖川宮熾

仁親王と婚約せられたが、文久元年十六歳の時これを解き、

將軍家茂に降嫁のこととなつた。當時わが國は内外ともに多

事であつて、米使提督ヘルリの來航以來、三百年の太平は破

られ、外には諸外國が長崎、浦賀に迫り來つて頻りに通商を

求め、内には諸方の浪士が奮起して尊王攘夷を唱へ、ために

天下は騷擾を極めた。安政五年井伊直弼は出でて大老職とな

り、果斷を以て、米、露、英、佛、蘭等の假條約に調印し、

他方には大獄を起して浪士等を嚴刑に處したが、遂に櫻田門

外の變を惹起した。これより先き直弼は公武合體の實を擧げ

て人心を鎮めんと圖り、密に内親王の降嫁を請はんとしてそ

の議を進めてゐたのであるが、直弼仆るゝや後繼者たる老中

安藤信正(信睦)これを承け、關白九條尙忠を通じて猛烈に降

宮。源基子。内大臣具守の女。祖父太政大臣基具に養はれた。

御母は平親繼の女。初め新陽明門院に仕へて、東御方と稱し、

後、天皇の後宮に入り、二條局と稱し、後二條天皇を生まれ

た。徳治三年八月二十五日、後二條天皇の崩あるや、その翌

日出家して尼となり、法諱を清淨法と號した。ついで、花園

天皇位に即きて、十一月二十七日從三位に叙せられ、十二月

二日三宮に准じ、同日、院號の宣下があつて西華門院と進め

られた。後村上天皇の正平十年八月二十六日薨去、御年八十

七。(女院小傳、攝關、國太曆)

盛化門院せいけもん 後桃園天皇の女

御。藤原維子。關白近衛内前の女。御母は正二位吉田良俱の

養女。實曆九年十二月九日誕生、初め倫君と稱した。明和五

年十一月二十五日、天皇の東宮たりし時妃に選ばれ、天皇の

登極ありて、八年四月女御の内命あり、安永元年十一月二十

八日從三位に叙せられ、その十二月四日入内、五日女御の宣

下を受けられた。時に御年十四。安永八年正月欣子内親王(光

格天皇の中宮)を生まれ、六月三日三宮に准せられたが、十

一月後桃園天皇の崩御ありて仙院に入り、兼仁親王(光格天

皇)の御養母となられた。同九年十二月光格天皇位に即き、

十年三月五日尊んで皇太后と稱せられ、天明二年九月には御

嫁のことを請願して勅許を仰ぐに至つた。皇女の徳川氏降嫁のことは、曩に靈元天皇の皇女八十宮を將軍家繼の御臺所に勅許せられた例があるが(家繼薨去によりその事は止んだ)、今次の内親王降嫁は、國家非常の際であり、孝明天皇は初め容易に勅許せられず、幕府の猛運動、岩倉具視の奏言等により、漸く決定を見るに至つたものである。よつて有栖川宮家よりは御入興の辭退があり、和宮は一旦は降嫁を否されたが、天皇の御苦衷、即ち皇女壽萬宮の僅か二歳になられるのを内親王に代つて降嫁せしめようとせられたり、畏くも御親らは責に任じて皇位を遜れんと思召し立たれたりするのを拜し奉るや、遂に初一念を翻へし從容御決定を受けさせ給うたのである。「惜しまじな君と民との爲ならば身は武藏野の露ときゆとも」。かくて文久元年四月十九日内親王の宣下があつて、名を親子と賜はり、踰えて十月十七日には特に扈從の重役、岩倉具視、千種有文に對して次の如き勅語を賜うた。「先朝の皇胤は朕と敏宮和宮の三人あるのみ。朕は一人の皇妹を庇蔭すること能はず、降して武將の婦となし、先朝所在の土地を離れて、遠く東海の濱に居住せしめ、常に兄妹と相見ゆることを得ざらしむるは、骨肉の情に於て忍びざる所なり。然れども朕は骨肉の愛情を以て國家を棄つること能はず、已む

を得ずして關東の請願を許容せんと欲し、親しく大樹に降嫁のことを和宮に諭したるに、和宮は之を辭するに、妾は先朝異腹の女にして、一回も先朝の天顔を拜することを得ざりしは終身の遺憾なり。因りて黒御所に入り、髪を剃り、歳時山陵に謁し、香花を奉じて以て追孝の念を伸べんことを願ふのみ、關東の請願の如きは之を卻けんことを請ふの旨を以てす。朕再三親諭するに及んで、和宮は一女子の身を以て、國難を匡濟するの用に供することを得ば、水火の中に投ずるも辭せずと上答して之を承諾せり。朕益々其衷情を憐れみ、山河萬里を隔絶すと雖、朕は和宮が杖とも爲り扶くべしと誓約す。和宮大に之を悦べり。今や上途し、將に關東に行かんとす、朕之を念へば離別の情に堪へざるなり。卿等扈從して關東に到着せば、和宮が曾て内願の事情は奉承實行せんことを猶老中に面諭すべし。」ここにおいて内親王のお歌、「この度は得こそかへらね行く水の清きころは汲みて知りてよ」。十月二十日、桂御所を發興、十一月十五日江戸清水邸に著興、翌二年二月十一日御婚儀滞りなく終了。然るに當時幕府の大奥には、前將軍家定の夫人天璋院があつて、早くも内親王との反目が沙汰され、これが京にきこゆるや、幕府は百方陳辯して事済みになつたなどのこともあるが、家茂との御間は極め

て圓滿であつた。然るに、時勢は一刻も止まることなく、天下の志士は、幕府の外國に對する處置の優柔なるを攻撃し、諸藩を遊説して人心を動かし、薩摩の島津久光は公武合體を主張して人心を鎮靜しようとしたが、却て益、これを激せしむる結果となり、勢の趨くところ、遂に伏見の騒動となり、岩倉具視、千種有文等の蟄居となり、一轉して三條實美等七卿の西奔となり、また蛤御門の變となつた。元治元年正月大將軍家茂は京都に上つて右大臣に任せられ、從一位に叙せられ、なほ公武一和を以て時局の收拾を謀つたのであるが、長州征伐を決行するに至つて、慶應二年七月二日軍中に病を得、大坂城中にて薨じた(享年二十一)。將軍の御土産として持參あるべき筈であつた西陣の織物が、形見となつて届けられたのに、宮、「空蟬の唐織衣何かせむ綾も錦も君ありてこそ」。かくて和宮は漸く二十一歳の身を以て落飾して、靜寛院と號せられたが、踰えて十二月二十五日には、孝明天皇の崩御が傳へられ、明治天皇の踐祚となり、更に家茂薨去の後を承けて、十五代の征夷大將軍となつた一橋慶喜は、最早時局收拾の途なく、慶應三年十月太政奉還を決行して、大將軍の重職を拜辭した。ここに天下の形勢は全く一變し、明治元年一月、鳥羽伏見において、薩摩、長門の藩兵等に阻止せられて敗戦

した慶喜が、江戸城に歸つて謹慎中、朝廷では有栖川宮熾仁親王を征東大總督として大軍を東下せしめられることとなつた。こゝにおいて二月二十一日、靜寛院宮は徳川氏救解の上奏書を認めて、老女土御門藤を京都に急行せしめ、御近親なる少將橋本實梁によつて執奏せしめんとせられた。次の文は橋本實梁に送られたものである。「觀慮之程も伺不申願出候も恐入候へども、心痛に堪へ兼、願こゝろみ參らせ候。去る三日召により慶喜上洛之處、不慮の戰爭に相成り、朝敵の汚名を蒙り候間、一先歸府之處、徳川征伐の爲め、官軍差向られ候やに承り、當家の浮沈此時と心痛致し參らせ候。慶喜より承り候趣は委細藤より申入候通りに候。何分双方を承り不申候はでは是非分り兼ね候。此度の一件は兎も角も慶喜是迄重々不行届之事故、慶喜一身は如何様にも仰付られ、何卒家名立行様幾重にも願度候。後世に當家朝敵の汚名を殘し候事、私方に取候ては實に殘念に存じ參らせ候。何卒私への御憐愍と思し召され、汚名を雪ぎ、家名相立候様、私身にかへ願上參らせ候。是非々々官軍差向られ御取つぶしに相成候はゞ、私事も當家滅亡を見つゝながらへ居候も殘念に候まゝ、急度覺悟致し候所存に候。私一命は惜不申候へども、朝敵と共に身命を捨候事は、朝廷へ恐入候事と誠に心痛致し居候。

心中御憐察有らせられ、願之通、家名の處御憐愍あらせられ候はゞ、私は無き申途も、一門家僕の者共深く朝恩を仰候事と存参らせ候。何卒々々此處よく御申入御頼申入参らせ候。尙同役衆へも宜く御申傳へ御取計の事御頼申入参らせ候。以上。土御門藤は、伊勢桑名において、進軍中の橋本實梁に見え、三通の御書状を呈したが、更にその添書を得て京都に上つて萬里小路博房に内親王の苦衷を傳へ、博房は直に岩倉具視等に謀つた。藤子は二月十八日京都を立ち、三十日正親町三條實愛の内勅の覺書を携へて歸東した。「此度の事は實に容易ならざる儀に御座候へ共、條理明白、謝罪の道も相立候上は、徳川家血食の事は厚く思召もあらせられ候やに伺候間、右の所は宮様はじめ厚く御含みあらせられ候やう存候事。」なほ内親王は、三月には輪王寺宮公現法親王によつて大總督宮の下に御手書を贈り、老女藤子及び玉島をして、それぞれ軍中なる橋本實梁及び岩倉具視に何れも御手書を賜はり、以て大軍の進發を止めんことを請はれた。時に江戸城にあつては、勝安芳、山岡鐵太郎、大久保一翁等があつて、此の危機に際して肝膽を碎き、三月九日山岡鐵太郎は單身、大總督の軍中に到り、大參謀西郷隆盛に面接し、幕府の内意を訴へ、ついで勝安芳は品川の薩摩藩邸に赴いて隆盛と會し、

三月十三日、十四日の兩日に互り、慶喜恭順の意を表して江戸城の開渡をなすことを議定した結果、爰に大命降下して、江戸城の進撃が中止せられることとなつた。かくて徳川家名永續の事も定まり、その時六歳の田安龜之助(家達)を以て家名相續の事が勅許せられた。この後、明治天皇は内親王に京都に歸つて休養すべき勅諭を賜はつたが、龜之助の駿河(七十萬石)移轉、家茂の靈屋造營等のためになほ暫く止りたき旨を以て拜辭された。十月、天皇東幸して千代田城に入御あるや、江戸は東京と改まり、内親王は翌二年一月東京發興、二月三日京都聖護院に退かれたが、後、明治五年六月には東京麻布、南部信順の上屋敷を改めて御殿となし、六年二月二品に叙せられ、同十年九月二日病を以て箱根の客舎に薨去せられた。御年三十二。法號好譽和順貞恭大姉。遺志により芝増上寺、徳川廟所に葬つた。明治十六年八月二十七日、更に一品を追贈せられた。(靜宮院日記、靜宮院宮御事蹟、歴朝神徳録)

青綺門院 せいしもんゐん (二三七六—二四五〇) 櫻町天皇の女御。藤原舍子。關白二條吉忠の女。御母は加賀藩主前田綱紀の女利子。享保元年八月二十四日誕生、同十八年九月二十八日天皇の東宮たりし時、入りて妃となり(十八歳、二十年十一月天皇の即位の後女御となり、翌元文元年十一月十五日改めて

入内、同五年二月從三位に叙せられ、ついで三宮に准せられた。盛子内親王、智子内親王(後櫻町天皇)を生まれ、また、桃園天皇の御養母となられた。延享四年五月、天皇が、皇太子遐仁親王(桃園天皇)に讓位あつて、上皇となり、櫻町殿に幸するに及び、尊んで皇太后と稱せられ、櫻町北殿に入つて大宮と稱せられた。寛延三年三月上皇の崩御により、落飾して青綺門院と號した(六月二十六日)。この時女官の落飾するもの十八人であつた。攝政一條道香は遺詔により、侍從の定員、地下官人の叙位加級等の條規を改め、石清水以下諸國神社々家の任官等を停めんとしたが、門院は諫關中に行ふも如何であり、今上も幼冲にあますから御成長の後を待つて議定しても晚くはあるまいと仰せられ、道香も旨を拜して深く感悟したと傳へられる。天明八年正月東山附近の社寺邸宅が多く焼亡し、餘災禁裏に及び、御所もまたその災に罹つたので、白川の照高院に遷り、ついで智恩院を假御所とせられたが、寛政二年正月二十九日病を以てここに崩せられた。御年七十五。泉涌寺に奉葬。門院は佛法に歸依深く、『大般若經』書寫の御願あり、天皇もまたその志を助けられ、特に硯、料紙等を賜はつたので、その登遐の後、晝夜これに努め、前後二十年を通じて六百卷書寫の功を畢り、圓滿院門主に送つ

て校合せしめられた。その道心、精進、ともに時人を驚かし、光明、檀林の二皇后に比せられた。(歴朝神徳録、大百科事典)

靖子内親王 せいしの内親王 (一五七五—一六一〇) 醍醐天皇の皇女。更衣源封子の御所生。延長八年内親王となり、大納言藤原師氏に降嫁せられ、天曆四年十月薨せられた。御年三十六。(日本紀略、一代要記)

濟子女王 せいじの女王 齋宮。醍醐天皇の皇孫。章明親王の女。隆子女王(齋宮)の御姉。花山天皇の永觀二年十一月四日伊勢齋宮となり、寛和二年六月(天皇讓位)、野宮より退下せられた。(日本紀略、神祇辭典)

清順 せいじゆん 伊勢宇治の慶光院の尼僧。慶光院は熊野の尼僧守悦が宇治に來つて、永正二年宇治橋の造營を成したことに起り、清順はその三代に當り、守悦の志を繼いで、神宮の復興に盡し、大に諸國に勸進し、天文二十年、御裳濯川架橋の功により、後奈良天皇より慶光院上人の號を賜はつた。これより歴代相承けて上人號を稱し、紫衣を聽され、世に伊勢上人、伊勢内宮上人、宇治上人、遷宮上人といひ、熱田の誓願寺、信濃の善光寺とともに日本三上人と稱せられた。その後、織田氏、豊臣氏、徳川氏より寺領を受け、毎遷宮御造營料の朱印狀は慶光院上人へ下附される定めとなり、神宮の大宮司も、

長官もこの權勢に服する外なかつたが、八代周貞の時神官との間に爭論を生じ、その結果、正遷宮の事務に預かるを止めらるゝに至つて、神宮に對する關係は漸く遠くなつた。しかし明治二年廢寺に至るまで、その寺勢は衰へることがなかつた。(年山紀聞、大百科事典)

清昇院 せいしんいん 阿屋知方

清少納言 せいしょうなごん 『枕草子』の作者。清原元輔の女。伊勢貞丈の『枕草紙抄』に諸子とあるが、信ぜられない。生致年とも不詳。清原氏は舍人親王から出で、代々文筆の才に恵ぐまれてゐた。曾祖父深養父は『古今集』『後撰集』の作者として著名な人であり、父元輔は村上天皇の時和歌所に出仕し『萬葉集』訓點の事業に關係し、同時に『後撰集』の撰者に從事し、いはゆる梨壺五人の一人である。しかしその官途は甚だ進まず、深養父は内藏大允、從五位下、元輔は肥後守、從五位上で終つた。彼女の才藻がかゝる家庭に育つたことは偶然でないが、歌人としての元輔の聲望が高かつただけに、清少納言は父祖の名を辱しめざらんことを期してゐたと覺しく、かつて中宮定子が、元輔が後と云はるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる」とあつたのに、「その人の後と云はれぬ身なりせばこよひの歌は先づよままし」と詠んでゐる。

清少納言の事蹟は、『枕草子』をほかにしては有力な資料はない。『女房作者部類』に、「清少納言七歳にして手をよく書き、十三歳にして令義解を講じ、廿歳にして歌人の間となれり。」とあるのも確實とは認められない。彼女は正暦元年父(八十三歳を失くした。この年、藤原定子は入内され、十月に中宮に立たれ、彼女は翌二年、或は三年に出仕したも)のと思はれる。それは『枕草子』に「宮にはじめてまゐりたるころ」といふ段に、伊周を大納言といつてをり、『公卿補任』によれば伊周の權大納言は正暦三年八月から五年八月までであるのによつて類推せられるのであるが、また、「鳥は」といふ段に、「十とせばかりさぶらひてききに」とあるのをそのまゝ受取つても、同じく正暦三年頃となるのである。この宮仕の年齢を三十歳頃、二十六七歳頃とする説などがある。時に關白道隆の威權ひとり高く、一條天皇の後宮また中宮に及ぶものなく、中宮の左右には宰相の君、中納言の君など、新時代の教育を受けた名家の才媛を集め、彼女はこれが中心となつて、滿廷の聲譽を高めた。彼女は宮仕のはじめから、中宮の絶対の信任と愛顧を受け、彼女もまた誠實を盡してこれに仕へ奉つた。『枕草子』には單なる主從關係を超えて、卓れた女性間の高い友愛を示すものが、多くの挿話として殘

されてゐる。彼女はやがて奏して内侍にもなされんとしたが、それは道隆一家の没落によつて實現せられなかつた。長徳元年道隆薨じ、道長廟堂に立つてその女彰子の入内を見るや、中宮の勢は全く傾き、最早宮に參るものすらなくなつたが、たゞ彼女のみは心をつくして仕へた。長保二年皇后(定子)が御産を以て御不例の事があつたのに、少納言が節を改めず、懇に宮の御ためにつくしたことは『榮華物語』鳥邊野の巻に委しい。かくて皇后の崩あるや、彼女はそのまま里に退居して敢て他に仕せんとしなかつた。『扶桑拾葉集作者系圖』に「清少納言初仕皇后定子後爲上東門院侍女云々」、また畧本『枕草子』奥書に「深養父孫元輔の御娘にて上東門院に候せしとぞ云々」とあるのは、ともに誤であるとせられる。『春曙抄』に「榮華物語に三條院の女御淑景舍道隆公女の御もとに宮仕せしよし見えたり」といふのも、鳥邊野の巻の淑景舍の頓死を記した條に「少納言の乳母などやいかがありけん」と見えてゐるのを思ひ誤つたので、『榮華物語』には他に所見がない。道隆、道長兩家の反目は正史に見えてゐる疑ふべからざることであるが、清少納言が道長の妻倫子と交りのあつたことは『清少納言集』にも見えて事實である。この事實が朋輩の讒言の種となり、宮の御疑念の材料ともなつたが、草

子の中に彰子中宮のことに一つも觸れてゐない點から考へても、道長方に歎を通じたなどいふことの無かつたことは確かである。致仕後の彼女の消息は一切不明である。『古事談』に、清少納言零落の後に、尼となつて住んでゐる家の前を若い殿上人が過ぐる時、その家の破れ果てたるを見て、少納言の零落を嘲つたところ、少納言箒を掻き上げて、駿馬の骨を買ひし例あるを知らずやといつたといふ話は、勿論信用されるものではないが、『無名草子』に「はかばかしきよすがなどもなかりけるにや、めのとの子なりける者にぐして、はるかなる田舎にまかりて」とある、そのはるかなる田舎といふのは、文の修飾で、京近いといふほどの意味(武藤元信、池田龜鑑)、『續千載集』の「老の後こもりて侍りけるを、人の尋ねまうできたりければ」、『新古今集』の「元輔がむかし住みける家のかたはらに、清少納言すみけるころ」などあるのを考へ合せて、晩年は出家して、都近いところに住んだのであらうと思はれる。その歿所について、讃岐象頭山の鐘樓の傍に古墳がある(關田麟憲)、また、近江にある(話一言)、阿波の撫養郡に五輪塔がある(和漢三才圖會)などいはれてゐるが、史實とするには疑はしい。『續作者部類』に「清少納言が女新拾一首」とある、その父の何人であるかも、未だ

究明されてゐない。清少納言は、學問叡知の婦人であつた。『史記』『漢書』『蒙求』『文選』『白氏文集』等、當時舶來の支那の文學書を悉く讀破してゐたことは、或は千定國の故事を引き、或は孟嘗君の故事を含ませ、或は九品蓮臺云々と法華經の詞を用ゐ、また香爐峰の雪、廬山の夜雨等、『白氏文集』の詞章をきかせたるが如きにかがはれるが、しかもそれらはたとひ本文を誦誦してゐても、凡庸の人には、ふと思ひつくことの出来ないものである。『今鏡』にも「ことになさけある人に侍りし云々」と見えてゐる。彼女が四納言といはれた源俊賢、藤原公任、同行成、同齊信等を初めとして、當時の著名なる文壇の諸家と交り、縦横の才學を發揮してゐることは、『枕草子』の隨所に見られるが、『悦目抄』『公任集』『實方朝臣集』『和泉式部集』『赤染衛門集』等につけ交友の歌が見えてゐる。彼女が驕慢の振舞多く、細行をつゝしまなかつたといふことは、紫式部の婦徳と常に對照していはれる。「昔し紫式部は幼きより其才秀で、父もをのこならざるをうらみける程なりしかど、文よむことを召しつかはすものにもつゝみて一といふ文字をだに知らぬものゝ様にて過し、上東門院に史記を參らすなども、いたく忍びける趣其日記に見えたり。同じ世に清少納言が才がり口がしくこくと、男をも

のともせず大進生昌といへる博士をさいなみけるなどは、今おもふにも憎さげにて、後に落ぶれたるなどきくにも親しむ人もなかりけるにやとさへはかられぬ。」(伴蒿蹊)。しかし『紫式部日記』が、自己吹聴と、同輩の誹謗とに満ちてをり、『枕草子』に單なる自己吹聴がなく、また同輩を誹謗する等のことがないことは、この種の評價が必ずしも正鵠を得てゐるものとはいへない。その著『枕草子』は、「源氏の文は刻苦勵精すれば或は出来るかも知れぬ。が枕草子のそれは學んでも得られないものであらう。」(尾上柴舟)と評され、假名文で表現せられた當時の物語或は日記類と全然異つた他に類例を絶した作品で、特殊な氣品と風格とを具へた點において、王朝文學の光輝たるのみでなく、後世日本文學の諸作品に著しい影響を與へた。家集『清少納言集』には三十首の歌が收められ、勅撰集には『後拾遺集』以下に十九首入つてゐる。作歌は自らも認めてゐたごとく、その散文に比すれば遙に劣るものとせられる。(參照)藤原定子(枕草子、清少納言集、日本文學大辭典、國語と國文學)

夜をこめてとりのそらねをはかるともよに逢坂の關はゆる
 清少納言
 さじ

清心院せいしんいん 新助方

瀬織津比咩神

被所神四柱の一。禍津日神の別稱

といふ。世の罪穢を清め、凶事を除き去る神。名義、瀬織津せおり瀬下の義で、瀬を下りた處に坐す神といふ。伊弉諾尊が御禊の時、「上つ瀬は速し、下つ瀬は瀬弱し」とて、始めて中つ瀬に降つて滌いだ時に成れる神が禍津日神で、これ瀬織津比咩神に他ならぬといふのが通説である。祝詞によれば、この神は落湍つ速川の瀬にゐて、もろもろの罪穢を大海原に持出すといふ。『倭姫命世記』に「荒祭宮一座、皇大神宮荒魂、伊弉那伎大神生神、名八十柱津日神也」とあり、本居宣長は「此の書、凡ては信がたき事のみ多けれども、古書によれりとおぼしき事も多し。禍津日神を瀬織津姫と申すは、かの伊弉諾神はじめて中瀬に降りかづきたまふ時に、生出る故にて、こゝによくかなへり」といつてゐる。(古事記傳、神祇辭典、大百科事典)

星布

俳人。また、採桑婦、絲明

窓等と號した。武藏八王寺本宿、榎本氏の女で、十六歳の時母に死別し、また夫との間に一子があつたが生別して寡居した。初め嶋立庵鳥醉の門に入り、點者の列に入り、絲明窓の號を貰つたが、三十八歳の明和六年、鳥醉が死んだので、その後は同門の先輩なる白雄に批を乞うた。四十七歳安永七年

せおりーせかわ

には、父の死に遭ひ、八年繼母も亡くなつた。五十七歳天明八年八月、白雄の後援により、松原庵第二世(八王子の熊澤元雨も同時に二世を稱した)となり、六十歳寛政三年八月四日剃髮、翌月白雄を江戸に見舞つたが、この時白雄はすでに死んで野邊送りから今歸つたといふ所であつた。寛政五年男喚之によつて、『星布尼句集』が編まれた。九年白雄追善集『なとせの秋』を出し、十二年芭蕉句碑を八王寺の東端に建て、その記念集『蝶の日かげ』を翌年出した。星布の句才は、白雄の壘を摩するものありとされ、鎌倉建長寺の爾拙に參禪し、書、畫もよくした。喚之の一女に井之を入聲として、松原庵を嗣がせた。編著には、前記の外、『都鳥』(寛政九年刊)、『松の花』(寛政十一年刊)、『美登利能松』(寛政十一年刊)、『不ぐるま』(寛政十二年刊)等がある。文化十一年十二月二十八日、八十三歳で歿した。墓は八王子大義寺。(星布尼句集、蝶の日かげ)

願あるうき世か花に番ぶくる

星布尼

栖鳳

畫家。堺の人、墨竹を寫して風神清幽と稱せられた。傳を詳にしないが、僧大宅の妻となつたともいふ。(畫乘要略)

瀬川

新吉原江戸町一丁目松葉屋半右衛門抱への遊女。

この名を名乗つたものは、享保から天明に至る間に九人あつたが、四代目の瀬川がもつとも知られてゐる。彼女は下總國小見川村の農家に生れたが、才色雙絶で、三味線、淨瑠璃、笛太鼓、舞踊等の遊藝から、茶の湯、和歌俳諧、碁、雙六、蹴鞠の技にも達し、晝は池大雅に師事し、また文徵明風の手迹を善くし、平澤左内に學んで易學の造詣もあつた。寶曆五年の春、日頃親交のあつた丁子屋の雛鶴が落籍される時、瀬川の送つた文に「きゝまゐらせ候處、此里の火宅をけふしはなれられて、涼しき都へ御根引の花、めづらしき御新枕御浦山敷事はものかは、殊に殿は木、そもじ様は土、一陰陽を起し陽は養にして御一生やしなふといふ字の卦、萬人を養育し萬人にかしづかるると、頼母敷もめでたき御仲と、ちよつとうらなゐまゐらせ候、穴賢」とあるが、その文藻のゆたかであつたことも知られる。嘗て常磐文字太夫は瀬川の才色を聞いて、一度これが客たらんことを願つた。然るに藝人を客としないことは大見世の掟である上、瀬川は豊後節を鄙み、新造、禿に至るまでこれを聴くことを禁じてゐた位であるから、容易でなかつたが、仲に立つものがあつて、これを瀬川に告げると、彼女は快よく承諾した。その夜に至るや、瀬川は文字太夫の淨瑠璃を所望し、これを靜に聴き終るや、禿を呼ん

で金千疋と書いた祝儀を太夫の前に置き、丁寧に禮を述べてそのまゝ己れの部屋へ引取つた。後、江市屋宗助といふ御用達商人に落籍されて、兩國薬研堀邊に住んだが、實はある大名の家老が江市屋の名を藉りたものと噂せられた。なほ、安永四年に五代目の瀬川が鳥山檢校に落籍された時は、江戸中の評判となつて、幾種かの戯作さへ出来たほどで、代々の瀬川が高金で落籍せられたために、松葉屋は産をなしたといはれてゐる。(武野俗談、江戸實業記)

瀬川 はせが 自貞

瀬川菊 はせが 肥前の士瀬川采女の妻。薩摩の士小野攝津の女。采女に嫁して琴瑟よく相和した。文祿二年、采女は征明の軍に従ひ、彼女は眷戀の情に堪へず、手書を小函に緘して便船に托した。偶々その船が風のために沈んで、小函は博多に漂著し、行營に送られた。秀吉、これを一讀して、菊女の眞率の情に感じ、龍造寺政家に命じて采女を國に歸らしめた。(野史、本朝烈女傳、女流文學全集)

關淑子 せき

津田英學塾在學中より共產黨運動に入り、昭和三年六月全協關東金屬労働本部書記、五年青バス分會委員となり、黨員佐藤と婚し、同年夫の檢擧後、全協の川崎、鶴見のキヤ

ップとして活動したが、七年十月檢擧され、八年秋保釋となるや、再び地下に潜り、缺席裁判にて三年の刑を受けた。昭和十年一月二十七日、野呂せい子と稱し、淺草の撞球場廣林のゲーム取りとなつて潜伏中、火事に遭ひ焼死した。年二十八。(東京朝日新聞、婦女新聞)

關媛 せき

繼體天皇の妃。茨田連小望の女(或は妹とも)。天皇の元年三月妃となり、茨田大娘皇女、白坂活日媛皇女、小野稚娘皇女を生まれた。(日本書紀)

勢夜陀多良比賣 せやだたらひひめ

三島淳咋の女。大物主神と婚して比賣多多良伊須氣余理比賣(神武天皇の皇后)を生まれた(媛陪輔五十鈴媛皇后參照)。「紀」神代卷には大物主神の御子五十鈴媛とあり、「或は曰く、事代主神八尋の能饒になり、三島濤織姫に通ひたまひ、或は玉櫛姫と云ふ。兒姫踏輔五十鈴姫命を生む。」とある。また、同書神武紀には玉櫛媛として事代主命(大物主神の御子)と婚して五十鈴媛を生まれたとある。(參照)玉櫛媛 (古事記)

世家間かね せまの

藤間勘十郎

仙華門院 せんくわ

尊稱皇后。齋宮。土御門天皇の皇女曦子内親王。御母は源有雅の女。元仁元年誕生、後嵯峨天皇の寛仁二年十二月十六日内親王となり、同

日伊勢齋宮となり、三年九月十七日野宮に入ったが、四年正月二十九日天皇の讓位によつて退下せられ、後深草天皇の寶治二年八月八日、後嵯峨天皇の准母として尊んで皇后と稱せられた。建長三年三月二十七日院號を賜はり、仙華門院と號し、弘長二年八月二十一日薨去せられた。御年三十九。(女院小傳、類聚大補任)

千吟 せんぎん

茶人千宗易(利休)の女。萬代屋宗安(或は鴨野某ともいふ)に嫁し、後、寡婦となつた。天正十八年、大閤秀吉、黒谷山徑に逍遙して、吟子を見、その美貌を愛してこれを召さんとしたが、宗易は既に他に婚約ある故を以て固く辭して應じなかつた。利休が翌十九年二月死を秀吉に賜はつたのは、これに因由することが多いといはれる。(野史、茶人系傳 全巻)

宣光門院 せんくわ

藤原實子。權大納言實明の女。御母は權大納言藤原公貫の女。永任五年誕生、祖父太政大臣公守の猶子として花園天皇の後宮に入り、芳譽があつた。直仁親王、業永親王、壽子内親王(徽安門院)、儀子内親王等を生まれた。元弘二年正月八日光嚴院從三位を授け、同三年十二月十三日三宮に准ぜられた。延元三年四月二十八日光明院、號を進めて宣光門院と稱し、

正平三年十一月花園法皇の崩により落飾して遍照智と稱せられた。花園天皇は、文保二年二月後醍醐天皇に讓位あり、元弘三年三月には後伏見帝に從つて六波羅に徙り、五月には近江の太平護國寺にも從ひ、やがて歸洛ありて薙髮の上、萩原殿に入られた。深く學問を愛し、詩歌をよくし、自ら『風雅集』を撰ばれ、また禪法を好まれたので、門院もその感化を受けられた。正平十五年九月薨去、御年六十四。(女院小傳、大日本史、歴朝坤德錄)

仙石左京女

せんごくさき

仙石騷動で知られる左京は、但馬

出石藩主仙石政美の族で、千五百石を食んでゐたが、主家横領を企て、果さず、天保六年十一月二十二日罪に伏して梟せられた。その三人の男はそれぞれ遠島に遣つたが、その女は母とともに追はれて京都に私娼たるに至つた。ある時、浪花の絲商人の息子が、番頭をつれて京都に行き、私娼の家に遊んで、誤つて二百兩を忘れて還つた。後氣がついたが、油も無駄とのみ思つて打捨て、置いたのを、その翌年前の番頭が京に出た序でに訪れて、二人の會遊の話をすると、女は遺留品を出して返した。浪花の絲商人はこれを聞いて感じ、その女を贖ひ、母とともに大坂に迎へて給養した。一夜その家に賊が押入つた時、女が薙刀を揮つて二人を斬り、三人を追拂

つたことから、官の糾問を受けて、始めてその身分が知れ、絲商人は彼女を息子の正室たらしめたといふ。安政四年のことと傳へる。(名女傳)

選子内親王

せんしなひ

村上天

皇の第十皇女。皇后藤原安子の御所生。康保元年四月二十四日誕生、その八月二十一日内親王となり、圓融天皇の天延二年十一月十三日三品に叙せられ、翌三年六月二十五日賀茂齋院となられた(十二歳)。貞元二年紫野院に入り、圓融、花山、一條、三條、後一條の五朝に互り、在任五十七年、この間後一條天皇の治安四年一月十三日には一品に進み、長元四年九月二十二日老病の故を以て退下せられた(六十九歳)。世に大齋院と稱する。凡そ齋院にあつては、忌詞といふのがあつて、佛の名などは口にしない習ひであるが、内親王は朝夕神に奉仕しつゝ、尚且、佛を尊崇せられた。初め齋院に定まつた時、西に向つて次の歌を詠まれた。「思へども思むとて言はぬことなれば其方に向きて音をのみぞ泣く」。嘗て女院(圓融天皇の皇后東三條院詮子)の御方に御入講があつた時、金を以て龜の形を作つて捧物とし、法華經に見える盲龜の浮木に會ふといふ喩を詠んで上られた。「業盡す御手洗川の龜なれば法の浮木にあはぬなりけり」。蓋し、齋院は佛事を忌むので、

嬪子女王

せんし

村上天皇の皇子具平親王の女。資

子内親王に鞠養せられ、長和五年(後一條天皇踐祚)二月十九日伊勢齋宮となり、長元九年(後一條天皇崩御)八月十一日退下せられた。在任二十一年。(二代要記、貴女鈔)

千手

せん

手越の長者の女。源頼朝の侍女。壽永三年、工藤

宗茂に預けられた平家の虜人平重衡に侍した。頼朝は千手をして重衡の望みを尋ねしめ、重衡は佛門に入らんことを望んだが、それは許されなかつた。頼朝、更に藤原邦通、工藤祐經に酒肴を持たしめて重衡を慰問せしめ、千手は琵琶を弾き、祐經は鼓を打つて今様を歌ひ、重衡も笛を吹いて打ち興し、宴終りてなほ千手を留めて酒を酌み、「燭暗數行處氏涙、夜深四面楚歌聲」と詠じた。翌年、重衡斬らるゝや、やがて様をかへてその菩提を弔うたといふ。『源平盛衰記』には重衡三年の遠忌に年二十三で尼となつたとある。(菩提鏡、平家物語、源平盛衰記)

善信

ぜんしん

我國の最初の出家。敏達天皇の十

三年九月、百濟から鹿深臣が、彌勒の石の像一軀、佐伯連が佛像一軀を齎らしたのを、大臣蘇我馬子が請ひ受けて祀り、司馬達等(南梁の歸化人で最初の崇佛家等に命じて修行者を求め、播磨國に僧還俗者、高麗惠便を得て、達等の女嶋を得

此の法華八講にも會はず、前世の業が拙くて、その業を終る間は御手洗川に親しんでゐる龜であればと、身の上を歎かれたのである。また、萬壽三年正月太皇太后(一條天皇の中宮彰子)が落飾された時、次の歌を上られた。「君はしもまことの道に入りぬなりひとりや長きやみに惑はむ」。されば、毎朝の念誦はこれを怠らず、雲林院の菩提講の布施も缺くところなく贈られた。内親王の歌は、『拾遺集』『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』『新古今集』『新勅撰集』『續後撰集』『玉葉集』『續千載集』『續後拾遺集』『風雅集』等の勅撰集に見える。自撰の集に、『發心和歌集』(寛弘九年)があり、すべて五十五首、その内容は四弘誓願、普賢十願、諸經の章句、偈文の題詠から成り、和歌によつて、佛道との結縁を志したものである。齋院退下の後は、落飾して全く佛門に歸依し、長元八年六月二十二日薨去せられた。御年七十二。蓮臺野に火葬し、御骨を三井寺に葬つた。(日本紀略、齋院記、榮華物語、歴朝坤德錄、左經記)

とりくの別れのほども悲しきにすべてこの世はまたはかへらじ

あみだ佛といふなる聲に夢さめて西にかたむく月をこそ見れ

選子内親王

度せしめた。これが善信尼である。時に十一歳。續いて善信尼の弟子として漢人夜善の女豊(禪藏尼)、錦織壺の女石(惠善尼)を得度せしめた。馬子は精舎を建て、石像を安置し、三尼を請じて供養を行つた。翌十四年、物部守屋、中臣勝海等の排佛家にはかられて、佛殿は焼かれ、焼け残りの佛像は難波の堀江に棄てられ、彼女等は佐伯連御室に捕へられ、三衣をはがれて、海石榴市の亭に引出して鞭打たれたが、後、馬子の再び拜佛を許さるゝや、また精舎を建てて三尼を迎へ、篤くこれを供養した。用明天皇の二年六月、善信尼等は、大臣に向つて、「出家の途は戒を以て本と爲す、願くは百濟に向りて戒法を學び受けむ」と請うた。これを以て馬子は、この月百濟の調使が來たのに渡海の斡旋を依頼したが、國王に達してからでないと專斷は許されぬと斷られた。しかし崇峻天皇の元年に至つて彼女等の宿志は協つて、これまた海外求法の魁をなして、百濟國使恩率首信等に從つて渡航した。かくて二年を彼地において送り、三年三月歸朝した。『紀』には、「三年春三月、學問尼善信等、百濟より還りて櫻井寺に住む。冬十月、山に入りて寺の材を取る。是の歳、度せる尼、大伴狹手彦連の女善徳、大伴狹手人、新羅媛善妙、百濟媛妙光、又漢人善聰、善通、妙徳、法定照、善智聰、善智慧、善

光等なり。鞍部司馬達等の子多須奈、同時に出家す、名を徳齊法師といふ。」とある。もつて歸朝後の活動をうかがひ知ることが出来る。(日本書紀)

宣政門院 せんせいもんいん (一九七五—二〇二二) 光嚴院の後宮。齋宮。後醍醐天皇の第一皇女權子内親王。中宮藤原禧子の御所生。正和四年十月十六日誕生、元應元年六月二十六日内親王となり、その十月二十八日一品に叙せられ、元徳二年十二月十九日伊勢齋宮となり、翌年正月十二日三宮に准せられた。ついで、群行を遂げずして野宮より退下せられ、元弘三年十二月光嚴院の後宮に入り、建武二年二月二日院號の宣下があつて宣政門院と稱せられた。興國元年五月二十九日宮を出で、保安寺に入つて尼となり(二十六歳)、正平十七年五月七日四十八歳で薨せられた。(女院小傳、歷代皇紀、大日本史)

すみぞめの袖の涙のたまたまも思ひ出づるはうきむかしかな
宣政門院

禪藏 ぜんざう 初期の尼僧。「善信」の項を見よ。

仙田雪 せんたゆき (二四九—二五三二) 烈婦。福岡藩の小身仙田榮助の女。維新の志士市郎、淡三郎の妹である。姿色あり、また氣節を藏した。一たび嫁したが故あつて歸家し、再嫁を拒んで縫織を以て生計をたてた。二兄國事に死するや、赤貧

洗ふが如くであつたが、志士の窮厄に遇ふものあれば、必ず恵み、これが潜匿に盡したことも一再でなかつた。後、官より二人口を給して、世を終らしめた。明治四年歿、年四十一。(尚難稿)

善徳 ぜんとく 大伴狹手彦の女。崇峻天皇の三年、出家して尼となつた。善信をはじめ、すでに尼となつたものはあるが、歸化人の子女ならぬ著名なる家の女で出家したのは彼女が最初である。(日本書紀)

宣仁門院 せんにんもんいん (一八九三—一九二二) 四條天皇の女御。藤原彦子。攝政九條教實の女。御母は太政大臣公經の女。仁

治二年十二月入内、ついで従三位に叙せられた(御年九歳)。天皇は貞永元年御年二歳を以て位に即かれ、この時十一歳であつたが、翌三年正月九日には早くも崩御せられた。此の時、女御は無心に童遊びをせられてゐたので、更に深く哀れを添へ奉つたと傳へられる。後嵯峨天皇即位ありて、十二月十七日三宮に准せられ、翌四年二月二十三日、院號を宣仁門院と進められ、寛元四年十月二日落飾(十四歳)して、清淨阿と稱せられた。龜山天皇の弘長二年正月五日薨去、御年三十。天皇の陵のほとりに奉葬。後、建治二年の交、式乾門院(四條天皇の准母)は、女御の菩提の料として、河内國石川莊、日

向國平群莊を泉涌寺の新御堂に寄せられた。なほ、『女院小傳』『大百科事典』等には、入内の時を以て十五歳、薨年を三十六歳としてゐる。(歷朝神徳録、繪鏡)

宣耀殿女御 せんやうでんぬいみ 藤原芳子

宣陽門院 せんやうもんいん (一八四一—一九二二) 後白河天皇の皇女

觀子内親王。丹後局高階榮子の御所生。養和元年十月五日誕生、後白河法皇の寵愛深く、文治三年八月三日著袴、五年十二月五日内親王となり、同日三宮に准せられ、建久二年六月二十六日院號の宣下があつて宣陽門院と號せられた(十二歳)。當時、丹後局、源通親等の廟堂の一團から敬重せられ、建久の初めには後鳥羽天皇の后に擬せられたりして、時の攝政九條兼實、また鎌倉幕府から、侮り難い勢力とされてゐた。三年三月法皇は崩御の際に、門院の將來について篤く後鳥羽天皇に依囑あつた外、法皇の御領の中の最も重要な六條殿長講堂領を譲與せられた。法皇の崩により、一時勢力を失はれたが、建久六年に源頼朝の上洛の折に、その奉伺を受け、院司源通親はその翌年、政變を起して政敵たる兼實の一派を排撃することに成功した。元久二年三月十一日、二十五歳で落飾あり、性圓智と稱し、その後永く長講堂領を始め、多くの御領を領有せられたが、建長三年二月、長講堂領を、後深草天

皇に御譲與の御考へで、とりあへず當時院政をとられた天皇の御父後嵯峨上皇の管領とし、翌四年六月八日、七十二歳で薨せられた。〔參照〕丹後局（中央史壇、玉葉集、大百科事典）

うかりける此の世の夢のさめぬまを見るもうつゝの心地やはせし
宣陽門院

そ

宗榮女王 そうちょう（二二二一八一—二二三八一）後西天皇の皇女。

御母は宮人藤原氏。萬治元年十月誕生、巽宮と稱せられた。延寶七年八月靈鑑寺に入り、薙髮して光山と號し、享保六年三月六十四歳で薨せられた。普賢院と號し、廬山寺に葬つた。（野史）

相應内所 さうおん 阿龜方

初め某侯の奥女中であつたが、後、初代大文字屋文樓の後妻となつた。山崎麓氏によれば、二代文樓（加保茶元成）の後妻

で、夫に狂歌を學び、吉原連の女狂歌師として、ゑい夫人等とともに聞えたといふ。〔參照〕秋風女房（大日本人辭書、大百科事典）

宗恭女王 そきょう（二二四二九—二二四八一）閑院宮一品典仁

親王の女。御母は中御門天皇の皇女成善提院宮。明和六年十二月十八日誕生、出家して關山宗恭と稱し、文政四年十一月十九日、五十三歳で薨せられた。成等覺院と號した。（彙誌）

聰子内親王 そうし（二七一〇—二七九一）後三條天皇の

第一皇女。御母は贈皇太后茂子。治曆四年内親王となり、延久元年一品に叙せられ、封戸、年官年爵等を受け、三宮に准ぜられた。天皇鍾愛あり、三年その新造の内裏に遷られた時には、藤壺に居らしめられた。然るに天皇は在位僅に四年で、位を皇太子に譲り、太上天皇となり、延久五年に石清水、住吉、天王寺等に參詣を思ひ立ち給うたが、その折内親王も駕に從はれた。二月二十日、天王寺にまうでさせ給ふ。この院をば一院とぞ人々申しける。後三條院とも申すめり。女院（陽明）も一品宮（内親王）もまうでさせ給ふ。されど上達部、殿上人多くも參らせ給はず、むつまじく思召す人々、さては遊びの方の人々をぞ率ておはしませ給ふ。まづ女院の御車、次に一院、その後一品宮おはします。女房二つづゝ女院の

は櫻どもに蘇芳のうちたる、一院のは櫻に山吹、一品のは山吹のほひ、一の車は濃く、二の車は薄く匂ひたり。」（祭華初

語。此の後、天皇の御惱重つて、五月には崩御あつたので、その日飾を落して仁和寺に入り、それより仁和寺一品宮と稱せられた。『千載集』に、御兄輔仁親王との贈答歌がある。「山ざとの寛の水の氷れるは音きくよりもさびしかりけり」

（親王）、「山ざとのさびしき宿の住かにも寛の水のとくるをぞまづ」（内親王）。崇徳天皇の天承元年九月、仁和寺大教院において、御年八十二で薨せられた。（一代要記、扶桑略記、長秋記）

惊子内親王 おどし（二一七五八一—一八二一）齋院。堀河天皇

皇の皇女。宮人王氏（神祇伯康實王の女の御所生。崇徳天皇の保安四年八月賀茂齋院となり、大治元年七月御母の喪によつて罷め、應保二年十一月三日薨せられた。御年六十四。大宮齋院と稱せられた。（歴代皇紀、皇胤紹運録、一代要記）

惊子内親王 おどし 月華門院

并子内親王 なむし 達智門院

宗澄女王 そうじやう（二二九九—二三三八）後水尾天皇の皇

女。御母は壬生院。寛永十六年二月誕生、谷宮と稱した。承應三年五月靈鑑寺に入り薙髮、延寶六年二月薨去、御年四十。

淨法身院月光と號し、廬山寺に葬つた。（野史）

藻壁門院 そうへき（二一八六九—一八九三）後堀河天皇の中

宮。藤原嬪子。關白道家の女。御母は太政大臣西園寺公經の女准三宮倫子。承元三年誕生、寛喜元年十一月三日入内、同月二十二日女御となり、二年二月十六日皇后の宣下があつて中宮と稱せられ、四條天皇及び暁子内親王を生まれた。四條天皇即位後、貞永二年四月三日院號を藻壁門院と進められた。初め後鳥羽帝の中宮に院號の詮議があつた時、藻壁門を以て擬したものがあつたが、兼實はそれを不吉として改めて宜秋門を當てたことがあつた。いまこの院號あるに至り、宜秋門院は左右に語つて、前日不吉となしたるものが今は即ち吉なるかといつたが、これは道家が、その祖父兼實が嘗て議せしことを知らないのを諷されたのである。然るに、院號を議するに方り、藻壁門が倒れたので、世以て不祥となしたが、その年九月皇子を生まれ、皇子孺して中宮もまた崩せられた。御年二十五。中宮は容貌殊絶、寵遇比ひなかつた。ここに至つて天皇の御悲嘆止まず、天皇もその翌年八月遂に崩御せられた。「御契の程のあはれさも、いとありがたくなむ。」と、「増鏡』は記してゐる。（女院小傳、明月記、増鏡）

藻壁門院少將 そうへき 歌人。藤原信實の女。姉の少

將内侍、妹の辨内侍とともに信實三女として知られる。作は『續古今集』十二首、『續拾遺集』十二首などにある。〔參〕辨内侍（續古今集、水蛭眼目）

鳴く蟲のこゑの色香はみえねどもうきは身にしむ秋のゆふぐれ 藻壁門院少將

蘇我馬子妻 そがのうま 物部守屋の妹。蘇我、物部兩氏争闘に際し、夫に勧めて兄を計らしめたといはれる。崇峻紀に、守屋の敗死を記した後、「是の役に、大連（守）の兒息と眷屬と、或は蘆原に逃げ匿れて、姓を改め名を換ふる者あり、或は逃げ亡せていにけむ所を知らざるものあり。時の人相語りて曰はく、蘇我大臣の妻は、是れ物部守屋大連の妹なり。大臣妄りに妻の計を用ゐて大連を殺す。」と見え、皇極紀に、「蘇我大臣蝦夷、病によりて朝らず、私に紫冠を子入鹿に授けて、大臣の位に擬ふ。また其の弟を呼びて物部大臣と曰ふ。大臣の祖母は物部弓削大連の妹なり。故れ母が財によりて、威を世に取れり。」とある。〔參〕物部鎌足姫大刀自（日本書紀）

蘇我小姉君 そがのこねぎみ 小姉君

蘇我遠智娘 そがののちのいらつめ 遠智娘

蘇我堅鹽媛 そがのたしひめ 堅鹽媛

座長に向ひ「娘子を奉らん」といふのが禮であつたのを、皇后は此の時天皇の御意中を知つてゐられるので、此の禮事を申されなかつた。すると天皇は何ぞ常禮を失へるやと問ひ給うたので、皇后はまた起つて儼ひ、「娘子を奉らん」といはれたが、天皇は娘子とは誰かと仰せられたので、皇后は今已むを得ず、妾の妹弟姫と答へられた。天皇は明日使を以て弟姫を召された。時に弟姫は御母とともに近江の坂田に在つたが、大中姫の情を思ひ、召命七度に及ぶも參向せられなかつた。天皇は舍人中臣烏賊津使主に命じて「弟姫を召し來らば厚く賞せん」と勅せられた。烏賊使主は糲飯を懐にかくして行き、密にそれを食して、勅命を果さずして罪死せんよりは、寧ろここにて死なるといひ、庭に伏すこと七日であつたので、姫も遂に折れて、烏賊使主に従つて京に上り、天皇はこれを藤原に宮を建て、居らしめられた。〔紀〕には、「八年春二月、藤原に幸し、密に衣通郎姫の消息をみたもふ。是の夕、衣通郎姫、天皇を戀ひたてまつりて獨り居り。其の天皇のいでませるを知らずして歌よみて曰はく、我がせこが來べき宵なり笹蟹の蜘蛛の行ひ今宵驗しも。天皇この歌をきこしめして、則ちめでたまふみこころおはしまして、歌よみて曰はく、さらがた錦の紐を解開けて數多は癡ずに唯一夜のみ。明且に

蘇我倉山田石川麻呂妻 そがのくらやまだのいしかはまるのつま 「一三〇九」孝徳天皇の大化五年三月、石川麻呂、その異母弟蘇我日向の讒により、山田寺に籠りて自殺するや、妻及び三男一女、同じくこれに殉じた。（日本書紀）

蘇我造媛 そがのみや 遠智娘

蘇我姪娘 そがのめいめ 姪娘

帥局 すし 「一八三九」高倉天皇の宮人。右近衛少將公重の女。帥局と稱し、功子内親王（齋宮）を生まれ、治承三年正月薨せられた。（玉海、山樵記、皇統系圖）

帥典侍 すし 龜山天皇の宮人。平氏。兵部卿時仲の女。典侍となり、帥典侍と稱し、順助法親王、慈道法親王、行圓法親王を生まれた。（皇統系圖、諸門諸譜）

帥典侍 すし 藤原今子

衣通郎姫 いとらつめ 允恭天皇の皇后忍坂大中姫の御妹。容姿すぐれ、その艶色が衣を通つて光るので、かく呼ばれた。またの名は弟姫。〔記〕には忍坂大中姫の皇女輕大娘の一名を、同じ理由から衣通郎女と稱したとあつて、この御妹の記事はない。允恭天皇はその美を聞き、これを納れんと思召された。天皇の七年十二月、新宮の宴に、天皇は親ら琴を弾じ、皇后は起つて儼はれたが、時の俗として、宴會ごとに儼ひ竟ると

天皇井の傍の櫻の華を見て歌よみて曰はく、花ぐはし、櫻の愛で、こと愛でば、早くは愛でず我が愛づる子等。皇后聞きて且た大いに恨みたまふ。是に衣通郎姫奏して言さく、妾常に王宮に近くて、晝夜相續ぎて陛下の威儀を視むと欲す。然れども皇后は則ち妾の姉なり。妾に因りて以て恆に陛下を恨み、亦妾が爲に苦みたまふ。是を以て冀くは王居を離れて遠く居らむと欲す。若しくは皇后の嫉む意少しく息まむかと。天皇即ち更に宮室を河内の茅渟につくりて、衣通郎姫を居らしむ。此に因りて以て屢日根野に遊獵したまふ。九年春二月、茅渟宮に幸す。秋八月、茅渟に幸す。冬十月、茅渟に幸す。十年春正月、茅渟に幸す。是に皇后奏して言さく、妾毛のすゑばかりも弟姫を嫉むに非ず。然れども、恐らくは、陛下屢茅渟にいませること、是れ百姓の苦ならむか。仰ぎ願はくは宜しく車駕の數をやめたまへ。是の後まれにいでます。十一年春三月癸卯朔丙午、茅渟宮に幸す。衣通郎姫歌よみて曰はく、常へに君も遇へやも漁取り海の濱藻の寄る時々を。時に天皇衣通郎姫にのりて曰はく、是の歌他人にきかすべからず。皇后聞きたまは必ず大に恨みたまはむ。故に時人、濱藻をなづけて奈能利會毛と謂ふ。是より先に衣通郎姫藤原宮に居ます。時に天皇大伴室屋連に詔して曰はく、朕このころ

美麗孌子を得つ。是れ皇后の母弟なり。朕心に異に愛しとおもへり。冀はくは其の名を後の葉に傳へむと欲ふ、如何に。室屋連勅に依りて奏すに可されぬ。則ち諸國の造等に科せて、衣通郎姫の爲に藤原部を定む。」とある。『和訓栞』には、柿本人麿、山部赤人とともに和歌三神とされてゐる。〔參照〕忍坂大中姫皇后（日本書紀）

衣通郎女

〔日本書紀〕

輕大娘

園 〔二二二四—二三八六〕 俳人。醫師。度會氏。園女、智鏡等と號した。伊勢山田の神官奏師貞の女で、同地の醫師斯波一有（滑川）に嫁した。一有も俳人で、『明鳥』はその撰であらうといふ。『菊の塵』の自序によれば、元祿二年俳道に入り、翌年芭蕉に就いた。元祿五年八月夫とともに大阪に移り、六年歳旦に、「難波女に何から問はむ事はじめ」と吟じた。西鶴からその筆蹟を賞せられて、「濱萩や當風こもる女文字」の句を贈られた。七年、芭蕉は園女亭を訪ねて、「白菊の目にたてゝ見る塵もなし」といひ、夫の滑川や大阪の蕉門俳人で歌仙が卷かれた。その時、芭蕉は園女亭で發病し、それが死因となつた。十五、六年の交、夫に死別したので、寶永二年其角をたよつて江戸に出て、深川富ヶ岡に居を定め、間もなく『菊の塵』を出した。江戸では眼科醫を業とし、安

藤冠里の知遇を得た。享保三年剃髮して智鏡といつたが、もと唯一神道の家の出であることを憚つて、頭の眞中に十筋ばかり剃殘したといふ。雲居和尚に答へた書に、「來書の趣拜見申候。不求心不求忘は大道の根元、誰も存ずる處なり。憚りながら珍しからず。一心源頭に上りての所作柳は緑、花は紅る、唯そのまゝにして常に句をいひ、歌を綴りて遊申候事に候、無益の口業なれば、一切經も無益の業に候。法莫き事は嫌ひにて、我が平日の行ひは念佛と句と歌と也、極樂へ行くはよし、地獄へ落つるは目出度し。和玉韻、自己念其不覺心、清燈已播一燈心、市中點々有明鏡、全識人間清淨心。誰か見ん誰か知るべき有るにあらずなきにもあらぬ法のともし火」といふのがある。彼女の志操をうかがふに足るであらう。享保八年自ら六十の賀を行ひ、その時人々から贈られた賀章に、剃髮の折に送られた句などを輯めて『鶴の杖』を撰したが、十一年四月二十日六十三歳で歿した。辭世の歌「秋の月春の曙見し空は夢か現かなむあみだ佛」。墓は深川靈巖寺中雄松院。元祿四俳女に選ばれてゐるが、俳諧の外、前句附の點者ともなり、また和歌、詩、書に巧であつた。富ヶ岡八幡宮に三十六株の櫻を奉納し、歌仙櫻と稱したが、世に園女櫻とも呼ばれた。因に、初め美津女を師としたとの舊説は

年齢の上からあはず、また夫を岡西惟中とするのも、享年を七十四歳とするのも誤である。（菊の塵、鶴の杖、江戸砂子、俳諧温故集）

小原女や野分にむかふ抱へ帯

園女

襲武媛 景行天皇の妃。國乳別皇子（水沼別の始祖）、國背別皇子（二書に宮道別皇子）、豐戸別皇子（火國別の始祖）を生まれた。（日本書紀）

園田悠機子

〔二四五二—二五〇一〕 歌人。伊勢髓柄

の人、向井氏。伊勢内宮祠官園田守良に嫁し、夫とともに和歌を善くした。『西園示兒草』二卷の著がある。天保十二年九月二十一日歿、年五十。（大百科事典）

園臣生羽女

萬葉の歌人。三方沙彌の妻。結婚後

間もなく夫が病氣して妻を訪れることが出来ず、「束けばぬれ束かねば長き妹が髪この頃見ぬにかゝげつらむか」と贈つたのに、「人皆は今長しと束けといへど君が見し髪亂れたりとも」と答へた歌がある。（萬葉集）

染殿后

藤原明子

曾與 孝女。尾張國海西郡島地村の農善六の女。その出生の翌年母の離別により、善六の手一つにて育てられた。善六は酒を嗜み、一錢を得るもこれに易へ、ために農具を得る能

はず、他に備はれ、魚を取るなどして家計を營んだが、そよ女長じて質朴温和、綿を打ち、苧を績ぎ、機を織つてこれを助けた。性至孝、専ら父を慰むることを以て樂み、自らの食を減じて父の酒資にあてた。善六が酔うて路傍に倒れ、往々池溝に臥すを危ぶみ、常に看護尾行を怠らなかつた。ある時は醉臥して動かぬ父のために、蚊帳をもち來り、一夜を家と父のために往來して警戒に明かしたこともある。善六その至孝に感泣し、人々またその孝心に感動せざるはなかつたが、安永二年領主志水氏に聞え、屋敷地年貢を免ぜられ、ついで藩主より厚くこれを賞せられ、同九年よりは二人扶持を給せられた。（孝女曾與傳、高等小學修身書、續尾三善行錄）

尊皇女

〔二二三三—二三七九〕 後西天皇の皇女。

御母は宮人藤原氏。延寶三年六月誕生、壽宮と稱した。天和二年九月光照院に入り、貞享三年四月薨髪、戒を支龍に受け、初め尊慶また尊秀と號し、後、今の名に改められた。享保四年十月薨、年四十五。大槻と號し、花關院に葬つた。（野史）

尊秀女王

〔二二三八—二二八二〕 後西天皇の第四皇女。樂宮

と稱した。中宮寺に入り、享保七年薨せられた。年六十二。（野史）

尊勝女王

〔二二三三—二二六三〕 後西天皇の皇女。

御母は宮人藤原氏。延寶四年八月誕生、貞宮と稱した。天和三年十一月三日知恩院に入り喝食となり、貞亨元年六月薨髪して戒を知恩院の感榮に受け、元祿十六年三月二十八歳で薨ぜられた。知生院等譽香周と號し、知恩院に葬つた。(野史)

尊照女王 にょんしやう (二四五二—二五〇五) 有栖川宮織仁親

王の第八女。母は家の女房。寛政四年十二月誕生、千鶴宮と稱した。十一年深曾木、享和元年十一月中宮寺空室を相續、二年四月和州下向、文化三年四月戒を僧叡辨に受け、名を榮暉と改め、尊照と號せられた。弘化二年五十四歳で薨じ、慈宿院と諡した。(野史)

尊乘女王 にょんじやう (二三九〇—二四四九) 中御門天皇の皇

女。典侍藤原氏の御腹で、享保十五年二月誕生、龜宮と稱した。十六年十月光照院を繼ぎ、元文五年九月入寺薨髪、寶曆六年色衣を聽され、天明元年十月二品に叙せられた。寛政元年三月薨、年六十。天融と號し、花關院に葬り、同二年三月淨明心院と追號せられた。(野史)

尊清女王 にょんせい (二二七三—二二九九) 後陽成天皇の皇

女。目目内侍の御所生。慶長十八年誕生、寛永十九年四月光照院に入り薨髪、尊嚴と稱し、後、今の名に改められた。寛文九年三月薨去、御年、五十七。崇山玉譽と號し、花關院に

踐祚、その天治元年十一月二十四日、院號の宣下があつて、待賢門院と號せられた。保延七年三月、鳥羽上皇落飾、この年十二月崇徳天皇讓位、近衛天皇踐祚等があつて、中宮は翌年二月遂に飾を落し、法名を眞如法と稱し、三條高倉殿に居り、久安元年八月二十二日四十五歳で崩せられた。鳥羽天皇は、堀河天皇崩御の後を承けて踐祚、時に白河法皇院中に入りて庶政を綜覽、ために空しく天位にあること十六年、保安四年正月には位を皇子崇徳天皇に讓られたのであるが、後、大治四年七月法皇崩御、よつてその先蹤に倣ひ、萬機を院中に視ること二十八年、保元元年七月に崩御せられた。菅原在良について帝道を修め、また天文に通曉せられたが、また催馬樂をよくし、音律のことに精しく、吹笛の妙を極められ、或は容儀を尊び修飾を重んぜられたので、ために一時の風をなすに至つた。天皇には、前後三女院(待賢門院、高陽院、美福門院)あり、中に美福門院最も寵幸せられ、崇徳天皇の後に近衛天皇即位し、ついで後白河天皇の登極を見たのは、主として美福門院の欲するところに従はれたので、これが後日保元の變亂をなす因となつたのである。中宮の侍女津守鳥子の兄盛行や、乳母の子僧信朝等が、美福門院を呪詛したとの廉で處刑せられたことが『台記』等に見える。待賢門院は

葬つた。(野史)

た

待賢門院 たいけん (二七六一—一八〇五) 鳥羽天皇の中宮。

藤原璋子。大納言公實の女。御母は從二位藤原光子。早くから白河天皇の御養子となつて、宮中に住まれた。初め堀河天皇即位の時、白河法皇は關白忠實に勅して、その女泰子を東宮(鳥羽天皇)妃たらしめんとしたが、忠實が固く辭し奉つたので、法皇は御養子璋子を東宮妃たらしめた。嘉承二年七月鳥羽天皇位に即きて、永久五年十二月從三位に叙せられ、女御となり、翌年正月二十六日中宮に立たれた。宇多天皇の寛平以後、大納言の女で、后となつた例は、中宮のほかには唯、三條天皇の皇后城子(大納言藤原濟時の女)があるのみである。元永二年五月顯仁親王(崇徳天皇)を生まれ、また、禧子内親王、雅仁親王(後白河天皇)、道仁親王、君仁親王、本仁親王を生まれた。保安四年正月天皇讓位、皇太子顯仁親王

深く佛法を信仰せられ、法金剛院、圓勝寺等を創立し、佛堂を興福寺に造營し、塔を圓徳院、泉殿、賀茂等の數箇所に建立し、且、金泥一切經を法金剛院に寄進し、また屢々鳥羽、崇徳天皇に従つて熊野に參詣せられた。參園高陽院・祇園女御 (女院小傳、源平盛衰記、今鏡、台記)

待賢門院安藝 たいけんあま 歌人。皇太后宮少進橘俊宗の女。

待賢門院に仕へた。『詞花集』以下の勅撰集に六首の作がある。(詞花集)

人しれず物思ふをりもありしかどこの事ばかり戀しきはなし
待賢門院安藝

待賢門院加賀 たいけんかが 歌人。嘗て秀歌一首を得、これを

よき機會に發表せんことを期した。偶々源有仁との契情衰ふるや、即ちこれを贈り、世に、伏柴加賀と嘆稱せられた。(桑華集、千載集)

かねてより思ひしことぞふし柴のこるばかりなる歎きせむ
待賢門院加賀

待賢門院新少將 たいけんしんせうしやう 歌人。右少將源俊賴の女。

俊惠法師の妹。母は、藤原敦隆の女。待賢門院の女房。その作は、『新古今集』『新拾遺集』『續詞花集』等に入る。(新古今集)

うつりけむ昔の影やのこるとて見るに思ひのますかゞみか
な 新少將

待賢門院堀河

たけけんもんいん
ほりかは

中古六歌仙の一。六條宮具平親

王の四代の孫神祇伯藤原顯仲の女。父も歌人として名がある。初め前齋院六條と呼ばれてゐたが、後、待賢門院の女房となつて、待賢門院堀河といつた。夫には死別した。作歌は、『千載集』の十五首をはじめ、諸勅撰集に入り、家集の『待賢門院堀河集』には、百三十五首を収めてある。(待賢門院堀河集) 長からむ心も知らず黒髪のみだれてけさは物をこそ思へ

待賢門院堀河

體子内親王

たいしんわう
しんわう

待賢門院

大知女王

たいちわう
にやわう

後水尾天皇の皇

女。典侍藤原氏の御所生。元和五年六月誕生、初め梅宮と稱し、また澤宮と改めた。寛永八年七月權大納言藤原教平に適し、十一年復歸せられた。ついで薙髮して尼となり、大通と號し、大和山村に圓照寺を創めて住せられた。元祿十年正月薨、御年七十九。深如海院と號し山村に葬つた。(野史) 大納言三位局 後醍醐天皇の宮人。藤原氏。太政大臣公經の女。從三位に叙せられ、太納言三位局と稱し、慈助法親王及び延政門院を生まれた。(歷代皇紀、諸門跡譜)

大納言局

たいごんごう
のつばね

後堀河天皇の宮人。藤原氏。權大納言兼良の女。典侍となり、大納言局と稱し、昱子内親王(齋宮)を生まれた。(明月記、皇胤系圖)

大納言局

たいごんごう
のつばね

後醍醐天皇の宮人。一皇女を生まれた。『大日本史』には、「園大曆系圖に、權大納言公敏の女、後醍醐院大納言局と稱すとあるは、蓋し此の人ならん」とある。(皇胤系圖)

大納言典侍

たいごんごう
のつばね

大納言二位局

たいごんごう
のつばね

大日お竹

たいにちけ
おたけ

江戸大傳馬町佐久間勘解由の炊女。性仁慈、常に己れの食を乞食に施し、自らは水盤の隅に網を張つて、洗ひ流しを受けて食とした。佛道に歸依して精進怠らず、遂に大往生を遂げた。大日といふのは、件の水盤から光明を發したといふ俗傳からである。水盤は増上寺の別院心光院にあるといふ。(實事記、大百科事典)

大貳三位

たいに
のつばね

歌人。紫式部の女で、父は藤原宣孝。賢子といひ、後冷泉天皇の乳母となつて越後辨と稱したが、後、正三位太宰大貳高階成章の妻となつて、大貳三位と稱した。藤原兼房、定頼等と交りがあつた。『河海抄』序及び『狭衣下紐』に『狭衣物語』の作者といつてあるが、『僻案抄』の

平時子

ときら
のつばね

平清盛の妻。兵部權大輔平時信の長女。權大納言時忠の妹。次妹滋子は、後白河天皇の后建春門院。建春門院及び重盛宗盛を生み治承四年三宮に准せられた。養和元年清盛の薨後、薙髮して二位に叙せられ、二位尼と稱した。壽永二年宗盛が安徳天皇を奉じて西狩せし時天皇に侍し、同四年平氏壇浦に大敗するや、天皇を抱き奉つて海中に投じた。『源平盛衰記』には、「二位殿今は限と見はて給ひにければ、緑色の二衣引纏ひ、白粉のそは高く括みて、先帝を懷き奉り、帯にて我身に結び合せ進らせ、寶劍を腰にさし、神璽を脇に括みて、襖に臨み給ふ。先帝は八にぞ成らせ給ひける。御年の程よりはねびと、のほらせ給て、御形あでにうつくしく、御髮黒くふさやかにして、御背に懸け給へる御籠袴なくぞ見えさせ給ける。御心迷ひたる御氣色にて、こはいづこへ行くべきぞと仰せられけるこそ悲しけれ。二位殿は、兵共が御船に矢を進らせ候へば、別の御舟へ行幸なし進らせ候て、今ぞしる御裳洞河の流には浪の下にも都ありとは、と宣ひもはせず、海に入り給ひければ、八條殿同くつどきて入り給ひにけり。」とある。(源平盛衰記、平家物語)

平徳子

たいとく
のつばね

光孝天皇の女御。天皇位に即きて、元慶八

(216F 20)

謀子内親王宣旨の作とする説とともに、未だ確證がなく、疑問とせられてゐる。同物語は、狭衣大將の戀愛生活を中心とする長篇で、平安後期の傑作の一である。彼女の家集を『大貳三位集』といひ、それには、他人の贈答歌をも含めて百九首を収めてある。勅撰集に入るもの三十七首。(勅撰作部類、大貳三位集)

吹く風ぞ思へばつらさくら花ところと散れる春しなけれ
ば ありま山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする

大貳三位

對御方

たいご
かた

後伏見天皇の宮人。藤原氏。

權大納言實明の女。對御方と稱し、從三位に叙せられ、尊實法親王、尊省親王(天台座主)及び一皇女を生まれた。文中元年二月薨せられた。(園大曆系圖、皇胤系圖、後醍醐院開元記)

平滋子

たいし
のつばね

建春門院

花山法皇の宮人。若狭守祐忠の女。御母は中務。昭登親王及び二皇女を生まれた。(皇胤系圖、皇胤系圖)

平親清女

たいしん
のつばね

歌人。その傳を詳にしない。父を喪つて詠んだ「今日までもながらふべしと思ひきや別れしまゝの心なりせば」(皇胤系圖)の歌が知られてゐる。(比叢)

年女御となり、仁和二年正五位下を授けられ、後、從三位に進められた。(三代實錄、一代記)

平寛子 ひらのこ 清和天皇の女御。貞觀六年女御となり、同年正五位下を授けられ、十一年從四位下に進められた。(三代實錄)

平棟子 たいらこの 後醍醐天皇の宮人。木玉頭棟基の女。初め四條天皇に仕へ、掌侍となり、從五位上に叙せられ、兵衛内侍と稱し、宮にあつて劍璽を守つた。後醍醐天皇の皇子たる時侍して宗尊親王を生まれた。位に即きて寵幸あつく、寛元三年二月典侍となり、後、三位に叙せられて宰相三位と稱せられた。宗尊親王が征夷大將軍となりて從二位に進み、大納言二位局と稱し、ついで從一位に進み、三宮に准せられた。(皇統通記、帝王編年記、吾妻鏡、一代聖記)

妙 たかお 江口の遊女。江口君

高天原廣野姫天皇 たかあまのほらのみかど 持統天皇

高尾 たかお (二二〇—一二三—一九) 萬治高尾。江戸、新吉原京町一丁目三浦屋四郎左衛門抱への遊女。高尾を稱したものは『高尾考』によれば十一人、『洞房語園』によれば七人ある。もつとも山東京傳の『近世奇跡考』には寛永二十年刊の『吾妻物語』を引いて、元吉原時代にすでに高尾を名乗つた端女

庄左衛門に落籍された高尾、五代が淺野因幡守に落籍された高尾、六代が駄染高尾、七代が榊原高尾とある。萬治高尾は『高尾考』によれば、萬治二年十二月五日十九歳で三浦屋の別荘で病死し、轉葬妙身と號し、淺草橋場正光院中に葬られ、その塚に楓を植ゑてしるしとしたといふ。前記『高尾系譜』によれば、後に尼となり(年齡不明)、妙心と稱し、日本堤の西方寺中に庵を結んで念佛三昧に入り、萬治三年「寒風」と吟じて死んだとあり、淺草山谷西方寺の高尾の墓には萬治三年十二月二十五日と刻してある。楓を植ゑたといふ挿話は西條高尾にもあるので注意を要する。(高尾考、高尾風くだ物語)

高尾 たかお (二二九九—二二七六) 仙臺高尾。野州鹽原の農、長助の女。承應中、三浦屋の妓となり、萬治三年高尾を名乗つた。後、仙臺侯伊達綱宗に落籍せられ、専幕府に聞え、綱宗は萬治三年七月品川の別邸に隱遁した。高尾はこれに仕へてお相の方といつた。所生なく、熊谷齋宮の二男を養子とし、食祿千石を賜はり、榊原氏を稱せしめた。享保元年、七十八歳で死んだ。仙臺荒町佛眼寺に高尾の墓があり、墓表に「妙法淨林院法諡日晴大姉、享保元年十一月二十五日」に「お相原常之助源範清義母道修年七十七歳にて之を營む、時に正徳

郎が四人あつたことが記されてゐるが、寛永中のものは未だその名知られず、有名になつたのは萬治高尾からである。而もその十一人といひ、七人とする高尾は、各々事蹟が相混錯してゐて、容易に考證し難い。原武大夫の手記によれば、初代は情人に操を立てて權貴に屈せず、遂に仙臺侯に斬られ、二代は紀伊家の士最上吉右衛門に落籍され、三代は水戸藩爲替御用達水谷文兵衛に落籍され、後、轉々として三河町元結賣の女房となり、四代は淺野壹岐守に、五代は紺屋九郎兵衛に、六代は榊原式部大輔に落籍され、七代は不明とあるが、『三浦屋四郎左衛門抱遊女高尾系譜』には、初代は仙臺侯に斬られた高尾と同じ法名であるが、これは後、尼となり、萬治三年西方寺の庵において「寒風にもろくも落つる紅葉かな」と吟じて死んでをり、二代は彦根藩士石井吉兵衛元政と契り、節を持って自殺し、三代は御用達西條吉兵衛の妻となり、四代は島田重三郎に義理を立てて綱村(初代を斬つたといふ綱宗の子)の誘ひを拒絶したために、綱村は薄雲を身請けしたといひ、五代は駄染屋の妻となり、六代は子持高尾といひ、七代は六指高尾、八代九代を経て十代が榊原高尾、十一代に至つて三浦屋斷絶としてゐる。更に『洞房語園』には、初代が妙心高尾、二代が仙臺高尾、三代が西條高尾、四代が水谷

五年二月二十九日」とある。正徳五年は享保元年の前年であるから、歿前自らその墓を建てたものであらう。「君はいま駒形あたりほととぎす」書初やはぶかしながら虚はじめ」等人口に膾炙した句がある。只野真葛の隨筆に「昔、國主、高尾といふ遊女を黄金にかへて廓を出し玉ひて、御館までも召入れられず、中州川にて切りはらはせ玉ふと世の人思へるは、あらぬことなり。これは噴淨瑠璃に面白く事そへて作りなせしがやがて眞の如くなりしものなり。高尾は矢張り御館にめし遣はされて、後、老女となりて老後あとを立て下されしは、藩士杉原重太夫又新太夫と代々かはるゝ名のりて(祿玄米六百石)今、日附役をつとむゝ六へ即ち夫れなり。」とある。然るに大槻文彦は『伊達騒動實錄』において、萬治年間の高尾は同二年十二月五日病死し、次の高尾は寛文の三四年頃に出たから、萬治三年六七月の交、綱宗の遊興の時には高尾なるものはをらず、それは高尾ではなく山本屋の蕙であつたらうと考證してゐる(三澤初子の項参照)。(高尾考、俳林小傳、伊達騒動實錄、異説日本史)

高尾 たかお 石井高尾。才色雙絶、高尾數代中、もつとも全盛を以て當時聞えた。近江彦根藩士石井吉兵衛(高僧元政)と深く契つたが、榊原これを他家に致さんとするや、節を持って

遂に自盡した。正保の頃であらうといふ。一説に、承應の頃有名な高尾があつて、それを石井高尾といふものがあり、これも、仙臺高尾、西條高尾と混淆するところが少くない。(高尾考)

高尾 たかお 西條高尾。本郷四丁目の蟬燭問屋西條吉兵衛に落簾されたので此の名がある。嘗て人から贈られた鏡の蓋を持つてゐた。或る年の中秋、月を賞してこの蓋によつて飲み、直に使を馳せて京都島原の吉野に獻じたが、吉野飲んで大坂の高尾に贈り、高尾飲んで吉野に返し、吉野また飲んで遂に再び高尾に至り、都還りの盃と稱した。後、吉兵衛偽印の事に坐して罪を得、高尾は剃髪して遠草山谷の西方寺に庵を結び、紅葉を植ゑ、八十餘歳にして終つたといふ。寶永間の寫本「吉原つれづれ草」には「西條高尾の行方儘かならず」とあり、一説のごとく剃髪後行脚に出たか、また再醮したか明かでない。西方寺に禿る高尾の墓は萬治三年十二月五日と刻してあるからこれは恐らく初代高尾高尾であらう。通例、西條高尾を以て三代とするが、三九高尾を三代とする説もある。(高尾考、洞房語園、有田つれづれ草)

高尾 たかお 三九高尾。また、はね宇高尾、水谷高尾ともいふ。幕府の御用達水谷庄左衛門(一説に六郎兵衛)に落簾せられ、

淺野高尾と子持高尾を同一人として、西國の土某を淺野因幡守とする説もある。(高尾考、在見草、洞房語園)

高尾 たかお 六本高尾。享保元文の間にその名を擯にした。その足指六本あり、常に襪を穿つてこれを隠した。通例これを七代とするが、榊原高尾を七代に擬する説もある。(高尾考)

高尾 たかお (二三七六一二四五九) 榊原高尾。姫路藩主(十五萬石)、榊原式部大輔政岑に落簾された。政岑はそれがために寛保元年十月隠居押込となり、榊原家は越後高田に因替となつた。この榊原高尾は、十代とするが通説である。「高尾考」にこの事蹟を六代、十代、十一代にかけてゐるのは誤であらう。「近代公實嚴秘録」に「元文中の榊原式部大輔は大活氣の人にて、平生酒宴遊興のみに心をかたむけ、忠孝の道すこしかけたり。急義子として十五萬石をつぎ、播州姫路の城主となさる。(○榊原の同族伊藤治の長子であつたが式部。大輔政柄男子なくして死し、本家を襲いだす)。いつしかこの人、新吉原三浦屋が抱への女郎、高雄と云ふ遊女に馴染み通ひける。その頃江戸太鼓持ち第一と呼ばれたる大傳馬町の桑名屋彌吉、中村吉兵衛、二朱判とて名代なりしを召連れ、毎夜のさわきなり。誠に時ならぬ山吹の瀬の如く小判を山につき、唐の倭の珍物を集めて、酒宴おびたゞしく、家の忠臣これを愁へて、諍争するといへども曾て用ひたまはず。

後、水谷故ありて刑死するや、手代九平(一説、平右衛門)の妻となつた。元禄末年の頃といふ。書をよくし、殊に「九」の字に特徴があつたので、はね宇高尾と呼ばれた。落魄して、大善寺前の鎌倉屋の前で行倒れたといふ高尾であらう。「高尾考」には三九高尾の名はないが、これを以て三代また四代に擬するものがある。(吉原呼子島、吉原捕獲、洞房語園)

高尾 たかお 淺野高尾。淺野壹岐守(三萬石)に落簾せられたので、この名がある。通例四代とせられるが、また五代とする説もある。(高尾考)

高尾 たかお 駄染高尾。紺屋高尾。元禄寶永の交、全盛であつた。後、神田於玉ヶ池の紺屋某の妻となり、駄染高尾といはれた。蓋上下等品の染物をなす家を駄染屋といふところからつけたのである。通例これを五代とするが、淺野高尾を五代とし、これを六代とする説もある。(高尾考)

高尾 たかお 子持高尾。西國の土某によつて子をなした。これを手許に養ひ、容の前に伴つて出づるを常とし、以て「容に對する情の薄からざるを證すべし、敢て飛づるに足らず」といつたといふ(高尾考)。「洞房語園」によれば、この盃は、江戸町一丁目大上總屋の總角のことである。「高尾考」はこの子持高尾を六代とするが、一説には初代と同一人である。或は

その後大金(○洞房語園には千)を出して彼の遊女高雄を請ひだし、妾にせんとするに、終に身請して高雄を屋敷へ引取りたまひけり。この高尾は本所猿江と云ふ所に、重願寺と云ふ浄土寺の門前の花賣り六兵衛と云ふ者の娘なり。(○少)かく榊原殿不身持ち不行跡につき、以ての外公儀の御首尾よろしからず、御書付を以て御叱り急度仰付られ、且丸の内の屋敷もめし上げられ、小笠原右近將監へ下されけり。されば式部大輔は押込、倅小平太家督して越後へ赴かれけり。この時松平左近將監(○中)榊原家の留守居役を招かれ、このたび高雄と云ふ傾城を大金にて請出され候事一天下にかくれなし、この儀いかなるゆゑぞと申されければ、留守居役答て申には、いかにもその高尾と申遊女、式部大輔請出し申候、その仔細は御恥しく候へども、主人はもと小身の伊織かたより養子に参り候、もと千石のせつ、式部幼少にて乳をもらひ申候乳母の娘、當時かの傾城奉公いたし候ゆゑ、それをうけたまはりおよび、乳兄弟とやらにて、やむを得ずして大金をもつてうけ出し申候、わけはかくのごとくに候、全く好色の沙汰にては御座なく候と、御答申けるを、左近將監も左もあるべき事と申されたり。」とある。寛政十一年八十四歳で死んだといはれる。(洞房語園、高尾考、近代公實嚴秘録)

高尾たかお 十一代高尾。傳不詳。『高尾考』に、十一代高尾を

以て寛保元年六月四日、ある貴顯に落籍せられ、廓を出る時、大門へ盛り砂をしたり、その他にもあまり目に餘る借上の沙汰があつたので、世上の物議を起し、吉原ではそれ以來この名を用ゐなかつたとあるのは、榊原高尾の事蹟を誤傳したのであらう。十一代高尾に至つて三浦屋は絶え、後、玉屋山三郎がこれを再興してその義子となり、遊女中にまた高尾を稱するものもあつたが、その名著はれずに終つたといふ。なほ歴代の高尾については、既出のほか、『高尾年代記』(柳亭種彦)があり、『北里見聞録』『塵塚談』『歴世女裝考』『信濃奇勝録』『墨水滴豆録』等にその逸話が見える。(高尾考)

高尾飛彈たかおひだま 『二四三〇一二五〇九』 歌人。本居宜長の長女。明和七年一月十二日伊勢松坂に生れた。天明六年十一月十七歳で従弟草深玄鑑に嫁し、一男一女を儲け、寛政八年二十七歳にして離別して歸り、翌九年正月、四日市の地主高尾九兵衛に再醮して二男四女を擧げた。父に學んで國學和歌を善くし、また書に長じた。嘉永二年正月四日歿、年八十。

高城入姫たかきりひめ 應神天皇の妃。仲姫皇后の御姉。額田大中彦皇子、大山守皇子、去來眞稚皇子、大原皇女、湧來田皇

龜の上の山をたづねしひとよりも空に戀ふらむ君をこそ思

尊子内親王

隆子女王たかこ 清和天皇の女御。宮に入りて女御となり、

陽成天皇の元慶元年正四位下に叙せられた。(三代實り)

莊子女王たかこ 『一五九一一一六六八』 村上天皇の女御。

中務卿代明親王の女。從四位上に叙せられ、天曆四年女御となり、麗景殿女御と稱し、具平親王、樂子内親王を生まれた。

康保四年五月天皇崩あり、落飾して尼となり、一條天皇の寛弘五年七月七十八歳で薨せられた。(二代要記、繁華物語)

隆子女王たかこ 齋宮。醍醐天皇の皇孫。章明親王の女。

圓融天皇の安和二年十一月十六日伊勢齋宮に卜定せられ、天延二年閏十月十六日退下せられた。在任六年。(日本紀略、大百

科事典)

隆子女王たかこ 村上天皇の皇子具平親王の女。藤原賴通

に嫁し、從一位に叙せられ、高倉の北政所と稱せられた。(大

日本人名辭書)

喬子女王たかこ 『二四五五一一二五〇〇』 徳川家慶(十二代將軍)の室。有栖川宮織仁親王の八女。母は家の女房尾崎敦子。寛政七年六月十四日誕生、文化六年十二月朔日家慶に嫁し、文政五年二月六日從三位に叙せられ、天保十一年正月十

女を生まれた。(日本書紀)

高倉局たかくら 藤原雅子

高倉女御たかくらの 藤原延子

崇子内親王たかこ 『一五〇八』 淳和天皇の皇女。宮人橋船子の御腹で、嘉祥元年五月薨せられた。使を遣はして喪事を監護せしめられた。(續日本紀)

高子内親王たかこ 『一五二六』 齋院。仁明天皇の皇女。宮人百濟永慶の御所生。天長十年賀茂齋院となり、承和二年四月齋院に入り、山城の空閑地及び公田若干を賜はつた。嘉祥三年三月天皇の崩により職を罷め(在任十八年)貞觀八年六月薨去せられた。廢朝三日。(續日本後紀、三代實錄)

尊子内親王たかこ 『一六二六一一六四五』 齋院。冷泉天皇の第二皇女。贈皇太后藤原懷子の御所生。康保四年内親王となり、安和元年七月一日(三歳)、賀茂齋院となられた。天延四年四月三日、御母の喪によつて退出(在任八年)し、天元三年十月二十日、御年十五を以て圓融天皇に召され、麗景殿に參候した。幾くもなく禁中が焼けたので、世に火宮と稱せられた。同四年二品に叙せられ、五年自ら髪を斷られた。寛和元年戒を受けて尼となり、その五月一日薨せられた。御年二十。(日本紀略、大鏡、小石記、本朝文粹、新院記、大日本史、撰古今集)

六日四十六歳で薨せられた。諡して淨觀院といひ、二月二十七日從二位を追贈、弘化二年六月三日更に從一位を追贈せられた。(野史、大百科事典)

高階榮子たかか 丹後局

高階河子たかか 嵯峨天皇の宮人。從四位上淨階の女。宗子内親王を生まれ、從五位上を授けられた。(文德實錄、皇極經

通)

高階貴子たかか 歌人。關白藤原道隆の室。從二位高階成

忠の女。初め圓融天皇に仕へて尙侍となり、高内侍と稱し、

從三位に叙せられた。『新古今集』に「中關白通ひそめ侍り

し比、わすれじの行末までは難けれど今日をかぎりの命とも

がな」とあり、道隆に嫁して、伊周(准大臣)、僧隆園、隆家、

定子(一條天皇の皇后)及び三女を生んだ。家學を受けて學識

あり、漢文をも善くした。道隆薨後、長徳二年四月、伊周、

隆家が罪を得て(藤原定子參照)、それぞれ太宰權帥、出雲權

守に流されることになつたときには、貴子は伊周に從つて播

磨まで行つた。「夜の鶴みやこのうちに籠められて子を戀ひ

つゝも泣き明すかな」。都に歸つた彼女は、それがために病

氣になつた。播磨に留められてゐた伊周はこれを聞いて、その秋九月鶴に京に忍び上つて瀕死の母に會つた。しかしやが

て發見されて筑紫に押送された後、彼女は遂に空しくなつた。
(大鏡、新古今集、大日本書)

孝標女

日嘗原孝標女

高田方(たかたかた) (二二六—二二三三) 徳川秀忠の二女。越前
家松平忠直に嫁し、光長を生んだ。忠直は元和九年亂心の際
により豊後日田に配流され、後その地で歿し、光長はその後
を繼いだ。寛永元年に至つて越後高田に遷された。よつて彼
女は幼年の光長とともに江戸に住み、世に高田方と呼ばれた。
部下の士が喧嘩口論などして騒だむものがあると、事いやし
くも武士道に背かない限り庇護を加へて助命の勞をとつたと
いはれる。寛文十二年歿、年七十二。天崇院と諡した。(女性
日本史)

田形内親王

田形内親王 (一三三八)

齋宮。天武天皇の皇
女。また多形。夫人大養娘の御腹で二品に叙せられ、文武天
皇の慶雲三年八月二十九日伊勢大神宮に侍し、退下の年不詳、
神龜五年三月薨せられた。使を遣はして葬事を監護せしめら
れた。(日本書紀、續日本紀)

高田女王

高田女王

萬葉の歌人。註に高安王之女也とある。
卷四に六首、卷八に一首が見える。卷四の歌はすべて今城王
に贈つたもの。(萬葉集)

かはり給ひて、今の峰殿(○道)なりかへり給ひぬれば、又こ
の姫君(○子)入内ありて、もとの中宮(○長)はまかぢで給ひ
ぬ。珍しきが参り給へはとて、なかかかうしもあながちなら
む。」とある。寛喜元年四月十八日院號を藤原院と進められ
た。四條天皇の准母となり、寛元四年四月二十日落飾、法名
を蓮華性と稱し、文永十二年二月十一日五十八歳で崩せられ
た。(女院小傳、増鏡)

高津内親王

高津内親王 (一一五〇—)

嵯峨天皇の妃。桓武天
皇の皇女。御母坂上女。業良親王、業子内親王を生まれた。
天皇踐祚の初、三品に叙せられ、妃に立たれたが、幾くもな
く廢せられ、仁明天皇の承和八年薨せられた。使を遣はして
喪事を監護せしめられた。(三代實錄、日本書紀、續日本後紀)

高鶴郎姫

高津内親王

殿中天皇の嬪。「太姫郎姫」を見よ。

高照比賣命

高照比賣命

御母は高津姫神(亦像三神の一)。「記」には大國主命(大己貴
神)が、多紀理田賣命に婚して生まれた御女に高比賣命、ま
たの名下比賣命があり、此の下照姫命と高照比賣命とは同
神であるといふ説がある。名義、照は容姿の優れたる謂、高

言清くいとみな云ひそ一日だに君しいなくば忍びあへぬも
の

高田媛

高田女王

景行天皇の妃。阿部氏本事の女。武國瀨別皇
子(伊豫國の御村別の始祖)を生まれた。(日本書紀)

鷹司院

鷹司院

藤原長子。關白家實の女。御母は修理大夫藤原季信の女。建
保六年誕生、宣陽門院の御猶子となり、嘉祿二年四月十六日
從三位を授けられ、その六月十九日入内、七月一日女御とな
り、二十九日皇后の宣下があつて中宮と稱せられた(九歳)。
偶々家實が職を罷め、前攝政道家が關白となり、その女御子
を納るゝに及び、出でて別宮に居られた。「増鏡」には、「寛
喜元年になりぬ。このほどは光明峰寺殿(○道)また關白にて
おはす。この御女(○子)女御に参り給ふ。世の中めでたく花
やかなり。これより先に、三條のおほきおとど(○公)の姫君
(○安)、まゐり給ひて后だちあり。いみじう時めき給ひしを
おしのけて、前の殿(○宮)の御女(○子)、いまだ稚くておはす
る参り給ひにき。これはいたく御おぼえもなく、三條の后
宮の淨土寺とかやに引き籠りて渡らせ給ふに、御消息のみ日
に千度といふばかりかよひなどして、世の中すさまじく思さ
れながら、さすがに后だちはありつるを、父の殿(○宮)攝録

照といひ下照といふもその意味は同じく、高照は高きより下
を照り、下照は上より下を照らす意といふ。尙ほ宣長は「古
事記傳」高比賣條において、「三代實錄」四十四に、伯耆國
正六位上天照高日女神授從五位下」とあるは此神にやといつ
てゐる。(舊事記、古事記)

高野天皇

高野天皇

贈正一位乙繼の女。遠く百濟武寧王の子純陀太子より出で、
寶龜年中改めて高野朝臣と稱した。容徳淑茂、天皇禮讃の日
聘してこれを納れ、山部親王、早良親王(崇道天皇)、能登内
親王、酒入内親王を生まれた。寶龜年中、姓を改めて高野朝
臣とたすとともに、從三位を授けられ、ついで夫人となつた。

桓武天皇(山部親王)が即位せられて、皇太夫人と尊稱し、中
宮職を置かれたが、延暦八年十二月に、皇太夫人の病革まる
や、「頃者、中宮不豫にして稍旬日を経、醫療に勤むと雖も
未だ應驗あらず。思ふに至道に歸して安穩に復せしめむ。宜
しく畿内七道の諸寺をして一七箇日、大般若經を讀誦せしめ
よ。」と勅して、御平癒を祈願せられたが、同二十八日遂に
崩じ、桓武天皇は御符を背けて正殿を避け、西廂に御し、皇
太子及び群臣を率ゐて哀を擧げ、百官及び畿内は三十日を服

期とし、諸國は三日として、並に所部の百姓を率ゐて哀を學
げしめた。また毎七日に諸寺の僧、七七の御齋には全國の國
分寺、國分尼寺の僧尼をして誦經して冥福を追修せしめ、明
年正月、天高知日之子姫尊と謚し、大枝山陵に奉葬し、更に
追尊して皇太后と稱し、十一月「中宮の周忌は來月二十八日
に當る。禮制忽ち終り、新歲須く及ぶべし。危景俄に臨むと
も彌固極の痛に切なり。元正肇めて啓くとも何ぞ維新の歡び
を受けん。興言永く悲み、自ら忍ぶこと能はざれば、賀正の
禮は宜しく停止すべし」と勅し、また十二月詔して、外祖父
高野朝臣、外祖母土師宿禰に、並に正一位を贈り、土師氏を
改めて大枝朝臣となした。後の姪和家藏呂は、桓武天皇の朝
に仕へて從三位中納言に至り、百濟玄鏡、仁貞、鏡仁等は外
戚の故を以て、延曆中詔して僧位を加へ授けられた。平安朝
期に、京の平野神社(今の官幣大社)に對して、朝廷の崇敬が
殊に厚かつたのは、それが高野皇太后の祖神を祀つたもので
あるからである。(續日本後紀、公卿補任、賢勝御尊傳)

高橋玉蕉 たかは たかよし (二四六二—二五二八) 漢詩人。名は瀧、
字は水龍、また白華、仙臺商賈の女。夙に學に努め、詩賦、
筆札を善くした。江戸に出て帷を下し、また藩侯及び夫人に
召されて經史を講じ、章服を賜はつた。後、夫人の園に就く

のはかまのりをいたし其上すみやかに名のり出候けしにげ
かくれとひきよはこれなく此旨御たむらへ御とどけ下さ
れ、川ごえ生れのまつ」とお傳自筆の書置があつた。十二年
一月三十一日斬罪に處せられ、その遺骸は解剖に附せられた
が、彼女は異狀なる情態の持主であつたといふ。時に年二十
九。東京上等裁判所の斷罪書は次のごとくである。「人を謀
殺し財を取る者、人命律謀殺條第五項に照し、斬、高橋でん。
該犯被害の死は自死にして己れの所爲にあらずと云と雖も、
第一彼れの書置及び其供狀(明治九年十一月十四日、同十一
年八月十日)及び第一分署岡田權中警部調口供、第二醫員の
診斷書、第三今宮秀太郎の中供、第四旅店大谷三四郎等の申
供、第五宍倉佐七郎申供書等を審閱するに、其他殺に係る證
狀明白と云ふべし。而して該犯の廣瀬某の落胤と云ひ、異母
の姉の復讐云々、或は姉在世の證、須藤藤次郎等云々云と雖
も、姉の生所身分調に就て、一も其證據たるべきものなけれ
ば、畢竟、名を復讐に藉り、只管賊名を掩はむ爲の遁辭と云
はざる可からず。到底此案疑情を以て被害者を欺き、屢々財
を圖るも意の如くならざるより、豫め謀り、刺刀を以て被害
し、因て財を得るものと信認し、本讓の如し。可、大審院印。
お傳が波之助を自ら毒殺して他の男へ奔つたなど(大日本人名辭

や、これに陪して仙臺に歸り、「玉蕉百絶」を梓行した。明
治元年二月二十七日歿、年六十七。(大日本人名辭書)

高橋てん たかは てん (二五一—二五三九) 上野國利根郡下牧村
の農高橋勘左衛門の女。嘉永四年正月二日生れた。母のはる
が沼田藩家老廣瀬半右衛門の種を宿したま、勘左衛門に嫁し
て生んだ子ともいふ。生後間もなく勘左衛門の兄高橋九右衛
門に買はれ、長じて波之助を婿とした。明治五年波之助とと
もに出奔して東京に出で、ついで横濱の青木かね(廣瀬半右衛
門が青木氏によつて生んだ女といふ)方に一時寄留し、次に
吉田町に家を借りて移つた。波之助は出京前より病(癩病と
いふ)に罹り、當時横濱にゐたヘボンの手當を受けたことも
あるが、その年八月十八日遂に死去した。お傳はこれを以て
かねの旦那後藤吉藏が己れを自由にせんとして毒殺したもの
と後に裁判所で申立てゝある。明治九年八月二十七日淺草藏
前の旅人宿丸竹において、お傳は後藤吉藏(日本橋、檢物町の
小道具及び呉服商)を殺し、その金を奪つたが、三日後情夫
小川市太郎とあるところを捕へられた。殺された吉藏の枕元
には「この者に五年いぜん姉をころされ、私までひだうのふ
るまひうけ候へども、せん方なく候まま今日までむねんにそ
の目をくらし只今姉(お傳)のかたきをうち候なり、今一度姉

書、大百科事典いふのは、假名垣魯文の戯作『高橋阿傳夜叉譚』
の筋をそのまゝ信じたものであつて、別に何等の確證はない。
夜叉物語はお傳刑死の年その評判を當て込んで書かれたもの
で、河竹默阿彌はこれに脚色して『繪今貝傳假名文』と題し、
新富座で上演して大入をしめた。墓は谷中墓地。(お傳供述書、
高橋阿傳夜叉譚)

高橋東岡妻 たかは とうがら 高橋作左衛門(名は至時、號、東岡)
は幕府の曆官として知られる。大阪定番の同心の家に生れ、
その後を繼いだが、夙に天文曆術の學に志し、研鑽大に力め
た。その家もとより微祿、庭内に大きな楠の木があつて、年
々その實を市に出して家計の一助としてゐたが、そのため東
岡は近隣の悪少年等の盜竊を警戒して、夜も安眠すること
が出来なかつた。妻はこれを以て研學の妨げとなし、夫の登廳
の留守に遂にこれを載り倒した。歸宅してこれを見た東岡は
大に怒つたが、妻の眞意を知るに及んで發奮し、後、學成つ
て幕府の曆官たるに至つた。然るに彼女はこれを見ずして早
く世を終つた。東岡は文化元年四十一歳にして江戸に歿し、
その子景保、父の後を受けて、書物奉行天文方兼帯となつた。
(孝子と貞女)

高橋波自采女 たかは みのり 對馬、上縣郡田村の人。その夫

の死亡後誓つて志を改めず、その父ついで死するや、麻を墓側に結んで、毎日齋食し、孝義、行人を感ぜしめたので、稱徳天皇の神護景雲二年二月五日、これを門閭に表して、祖を復し、終身その爲すところに任せられたといふ。墓は同所にある。(和国本紀、對馬人物志)

高橋皇女

春日大娘

高皇志貴婦

二四四五一二五四一

歌人。石井道

玄の女。天明五年伊勢松坂に生れた。初名とみ。幼より歌を香川景樹に學び、また樂曲及び彫刻を善くした。大阪に出て、叔父の家にあつたが、後、京都千種家の盲人鉦屋高皇清音に嫁した。清音また芝山持照門の歌人で、兼ねて古樂にも通じ、夫婦唱和し、その技を磨いた。天保十二年夫に死別したが、尙引續き千種家に仕へ、村田多勢子、大田垣蓮月、櫻木女等と親しく交り、當時歌を以て蓮月と併稱された。明治十四年五月二十八日歿、年九十七。墓は洛東山東浴寺。初め、式部と稱し、維新後今の名に改めた。著に「妾の舎集寫かたみの巖」等がある。(近世和歌史、大百科事典)

かなふべしたかきのぞみの富士のねもひと足づつにあゆみ
なす身は 式部

高場亂

二四九二一二五五一

教育家。福岡の人。野

村東の従妹、オサムと訓む。鶴井門に漢學を修め、家業を繼ぎて眼科醫となり、常に男裝、帶刀して忠家を勉めた。二十五六歳の頃、興志熱を起し、多くの青年を教育し、跌蕩不羈、繩墨逸脱の熱風を以て鳴り、その家が、郊外住吉村、俗に人參畑といふ田圃の中にあつたので、人參畑の先生で通つた。箱田六助(玄洋社長)、進藤喜平太(同)、頭山滿、宮川太郎等はその出身である。明治十年の役には、熟生擧つて西郷派のために謀り、亂子は嫌疑を以て固圀の人となつたが、變收るや、赦されて出で、後、向陽義塾(後の玄洋社)、ついで漸強義塾に教へ、その閉鎖後は醫を以て専ら餘生を送り、明治二十四年三月三十一日六十歳で歿した。墓は福岡公園十里松原の墓地にある。(人參畑の先生)

高比賣命

下照姫命(天國主命の女の別稱。西行紀)にいふ高照比賣命とも同神であらうといはれる。(國高

照比賣命) 下照姫命(古事記傳、神代卷)

高松院

二八〇一一八三六) 二條天皇の中宮。鳥羽

天皇の皇女、妹子内親王。世に乙姫宮と稱した。御母は美福門院。永治元年十一月六條殿に生れ、久壽元年八月内親王となり、保元元年三月天皇の東宮たりし時妃となり、昭陽宮に住まれた。同二年正月、三宮に准せられ、二條天皇位に即ぐ

や、平治元年二月立つて中宮となられた。この年、中納言檢非違使別當藤原信賴の亂を避けて六波羅に幸せられ、ついで八條第に遷られたが、永曆元年八月御惱によつて落飾、戒を僧正寛通に受け、法諱を實相覺と號せられた。中宮は、保元の亂に讃岐に遷られた崇徳上皇(御異母兄)を傷まれて、夙に得度の御志があつたのである。後、應保二年二月五日高松院の號を進められ、高倉天皇の安元二年六月十三日押小路殿に崩せられた。御年三十六。雲林院に奉葬。(大日本史、醍醐朝後) 高松院右衛門佐(たかまつらのみねのすけ) 歌人。高松院の女房。「新古今集」「新勅撰集」「續詞花集」等にその作がある。(新古今集) よそながらあやしとだにも思へかし戀せぬひとの袖のいろ
かは 右衛門佐

田上みち

菟舎

高宗女王

仁明天皇の宮人。從四位上阿蘇王の女。

久子内親王を生まれ、從五位上を授けられた。(皇統系圖、一代

高屋阿波良姫

開化天皇の皇后伊香色謎命の御

母。大綜麻杵命の妻。大綜麻杵命は「天孫本紀」物部氏系譜中、第五世の孫の弟に當り、輕原原宮御宇天皇(孝元)の御世、大禰として供奉し、春日率川宮御宇天皇(開化)の御世、

大臣として、御姉色謎皇后と共に大神を奉齋した。高屋阿波良姫は此命との婚によつて二兒を生んだが、第一は伊香色謎命で、初め孝元天皇の妃として彦太忍信命(武内宿禰の祖父)を、後、開化天皇の皇后として崇神天皇を生み奉つた。第二は伊香色雄命で、開化天皇の朝に大臣となり、崇神天皇の朝には、聖勅に依り、神物を班ち、天社國社を定め、物部の八十手が作る祭神の物を以て、八十萬群神を祭祀した。また、建布都大神の社を大倭國山邊郡石上邑に遷し、饒速日命の天より持參せる天雨、瑞寶を、同じく齋齋した。號けて石上神宮と稱し、伊香色謎皇后と共にこれを奉齋した。伊香色雄命は、自族では、饒速日命に次ぐ勢力を有し、「姓氏錄」物部氏系統の氏の、極めて多くが、この命を祖先と仰いでゐる。穗積朝臣、若湯坐宿禰、矢田部連、矢集連、佐爲連、葛野連、登美連、柏原連、傾神田曾根連等、左京のみにても饒速日命の裔二十八氏中に、伊香色雄命を祖とするもの十二氏を占めてゐる。物部氏の繁榮は此頃より一轉期を取つたと見ても差支へない。(天孫本紀)

竹屋守之女

日向國風土記逸文に皇祖能忍命

命、日向國於崇高茅野生れにあまくたりまして、これより藤原國關野郡竹屋村にうつり玉ひて、土人竹屋守女をめし

(71-6720)

て、其腹に二人の男子をまうけ玉ひけるとき、かの所の竹をかたなに作りて、隣緒切玉ひたりけり。其竹は今も有と云へり。」と見えてゐる。(探綴諸國風土記)

高山盈子 みかさのたま (一一二五六三) 教育家。舊藤堂藩留守居役

吉岡堅兵衛の長女。十九歳の時舊福山藩物頭高山宜直に嫁した。後、仙臺女學校の舎監を経て、學習院及び華族女學校に勤め、明治二十七年赤十字社看護婦取締となり、二十七八年戦役の功により勳七等に叙せられた。また北清事變にて勳六等に陞叙せられ、佛國より記章を贈られ、赤十字社特別社員となり、有功賞を受けた。三十六年一月二十一日丹毒症を以て赤十字社病院にて逝き、死に臨み、特に從六位に叙せられた。(大日本人名辭書)

寶皇女 ひめがら 齊明天皇

後鳥羽天皇の宮人。舞女として宮に入り、覺仁法親王を生まれた。(二代聖記、皇胤類傳)

瀧鶴妻 たきかく 瀧鶴妻は長門藩の侍醫。瀧鶴を以て鳴つた。その妻は醜婦であつたが、婚前自ら高くをり、嘗て人に語つて、鶴妻先生の如き人にあらざれば嫁せずといつた。人、その非理を嗤つたが、鶴妻はこれを奇として娶つた。果してよく家を治め、内助の功頗る高かつた。彼女は常に袖中密に

赤白二色の穂を持ち、善事を行へば白糸を巻き、悪行の時は赤糸を巻いて自行に努めたといふ。鶴妻は安永二年六十五歳で歿したが、彼女の生歿年は詳でない。(日本宮女百人傳、名女傳)

瀧津姫命 たきつひめ 多岐郡比賣命。天照大御神が素戔鳴尊と誓約し給うた時、尊の十握劍を請取つて、これを三段に折り、

天眞名井に濯いで囀んで吹き棄てられた氣息により成りました神。また、高津姫神ともいふ。宗像三女神の一で、宗像神社の邊津宮に鎮り給ふと傳へる。「舊事紀」には、大己貴神に婚して、八重事代主神及び高照光姫命を生まれたとある。(日本書紀、古事記、舊事紀)

託基内親王 たくきのみこと (一一四一一) 齋宮。天武天皇の皇女。

また、當賀、多紀。御母は宮人霞姫。一品に叙せられ、文武天皇の二年九月十日、伊勢大神宮に侍し、大寶元年退下、天平勝寶三年正月薨せられた。(日本書紀、續日本紀)

當麻麻呂妻 たごのつま 萬葉の歌人。持統天皇の六年三月、天皇の伊勢行幸に従駕せる夫を思つて詠んだ歌がある。(萬葉集)

吾背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ

田霧姫命 たぎりひめ 多紀理毘賣命。また田心姫ともいふ。天

に行はれた。春海の序には「蜻蛉紫のにははしき筆すさみにも恥ぢず、また更科十六夜のあてなる口つきにも劣らず」とある。天明二年五月十八日八十餘歳で歿し、名古屋建中寺に葬られた。或は尾張侯四世吉通の夫人九條輔子の侍女ともいひ、なほ正確なる傳を缺いてをる。(播磨子、女鑑、庚子道の記)

明日もまた見つゝをゆかん月ながらこのあかつきはなみだおちけり 武女

竹岡尼 たけおか 室の遊女。中納言源顯基に愛せられ、京都に置かれたが、一年にして棄てられ、再び室に歸つた。それから遊女の業をしなかつた。「ある時中納言のうちの人舟にのりて、西國より都さまへゆきけるを伺ひ見て、髪をきりて陸奥がみにひきつゝみて、つきもせぬうきをみるめのこひしさに尼となりても袖ぞかはかぬ、とかきて船になげいれ」(選集抄、後、廬を播磨の竹岡に結んで終つたといふ。(撰集抄、本朝烈女傳)

竹崎順子 たけざき (一二四八五―二五五六) 教育家。肥後の郷士矢島直明の三女。文政八年十月二十五日上益城郡津森村杉堂に生れた。母は鶴子といひ、賢母であつた。徳富久子(猪一郎、健次郎の母)、横井つせ子(小楠の妻、矢島楯子等は順子の妹である。天保十一年十六歳で、同國玉名郡伊倉町の

照大御神が素戔鳴尊と誓約して、尊の十握劍を請取つて、これを囀んで氣吹き給へる時に成りました神。宗像三女神の一として、宗像神社の沖津宮に祀られる。よつて一に瀧津島姫命ともいふ。大己貴神に婚して、味耜高彥根命、下照姫命を生まれた。「古事記」には「多紀理毘賣命、亦御名謂奥津島姫命、多紀理毘賣命者坐胸形之奥津宮、次市寸島比賣命者坐胸形之中津宮、次田寸津比賣命者坐胸形邊津宮」とあるが、「紀」一書には「市杵島姫命是居千遠瀛」といひ、また「瀧津島姫命亦名市杵島姫命」とあり、「記」の所傳と異なるものがある。(日本書紀、古事記)

栲幡娘 たけはた 稚足姫

栲幡千千姫 たけはた 萬幡豊秋津師比賣命

武 たけ (一二四四二) 世に白拍子武女といひ、名古屋藩における女流文學者として著聞する。淺草馬道の醫鈴木氏の女。新吉原の遊女となり、小式部と稱し、尾張侯(七世)徳川宗春に寵せられ、春の一字を賜うて春日野と改め、更に妾として阿春と呼び、名古屋に從つた。父も仕へて鈴木金左衛門といつた。享保五年の春、七年餘り住馴れた名古屋を立つて江戸に赴いた時の作に『庚子道の記』がある。此書は文化四年村田春海、橋千蔭の序を添へ清水濱臣が頭注を附して刊行し、世

たくはいたけさ

竹崎茶堂(木下犀潭の弟)に嫁した。茶堂は順子が嫁して三年目に事業に失敗して、阿蘇郡山西村字布田に半農の傍ら、村童を集めて塾をはじめた。後、玉名郡横島の兄木下氏の開墾地を經營し、明治の新政に際しては小楠の門人として熊本藩廳録事となり、致仕後明治五年郊外本山村に家塾日新堂を開き、それを九年に閉鎖、飽託郡城山村に退隱、翌十年五月十六歳で歿した。順子は資性温順、篤行の人で、その間幾多の辛苦を嘗めてよく夫を助けたといはれる。二女を生んだが、一女は天し、次女の節子に養子を迎へて、今は數人の孫もあり、彼女はその後十年を専らこれらの子女の面倒を見ることと暮らしたが、明治二十年海老名彈正の熊本來住を機會に基督教に入信し、翌年には熊本女學會の女生監督として聘せられた。時に年六十四。女學會は二十二年には熊本英學校附屬女學校となり、その十一月二日熊本女學校と改稱された。熊本における女學校の嚆矢である。二十三年十一月、海老名彈正は二つの學校(英學校、女學校)を置土産として、熊本を去り、後任校長には藏原惟郭が推された。二十八年、順子はこの校長に忌まれ、「植多おきし庭のあやめも姫百合ものちのあるじとともに榮えよ」と認めた短冊を寄宿舎の花壇に立てたまふ學校を出たため、上級生等がその後を慕つて去り、

學校はここに二分の姿となつたが、藏原が女學校から手を引くことになり、彼女は呼び返され、翌年三月九州私學校(英學校の改稱)が廢されるや、女學校は獨立して再認可を受け、明治三十一年一月、順子は七十三歳の高齡にてその校長となつた。三十七年七月病を發し、翌年三月七日八十一歳を以て逝き、校葬により城山の茶堂の墓側に埋められた。傳に『竹崎順子』(徳富健次郎)がある。(竹崎順子)

武田勝頼妻 たけだかつよりのかみ (一三二四二) 烈婦。北條氏康の女。天正五年勝頼の繼室となつた。同十年勝頼が木曾義昌を討たんとするに際し、その戦勝を祈つて武田八幡宮に奉納した自筆の願文は、女丈夫の面目躍如たるものとして知られるが、また敗戦して武田氏の運命窮るに及び、小田原に歸らんことを勸むるをきかず、「黒髪の亂れたる世ぞ果てしなき思ひに消ゆる露の玉の緒」と詠じ、勝頼とともに自刃して終つた。時に勝頼年三十八、夫人の年は明かでない。『理慶記』に「勝頼、土屋を召され、御臺所の御最期の御介錯と仰せければ、承ると申して御前には出けれども、始めて見奉るに、御年の頃二十の中と見えさせ給ひて、いろ／＼の裝束召され、容顏美麗の有様は、昔の楊貴妃、衣通姫、吉祥天女と申すとも、か程なまめいたる容はましまさじ。いづくへ劍を立てまぬら

せんと呆れはてゝ居たりしに、御自御守刀を抜かせ給ひて、御口に衞ませ給ひて、うつむきに伏し給ふ。勝頼此由御覽じて、急ぎ立寄り、御介錯をたてまつり、御死骸にいだきつき、暫は物をもの給はず。」とある。(野史、本朝武功正傳、理慶記)

武田錦子 たけだ きんこ (二五二一一―二五七三) 英學者。幕臣加藤清人の長女。夙に中村敬守の門に入つて英學を修め、明治十一年東京女子師範學校に入り、卒業後母校に教鞭を取り、十九年文部省より命ぜられてアメリカに留學し、女子師範學校及びウエスタン女子大學を出で、歸朝後永く東京女子高等師範學校に英語を講じ、正五位勳六等に叙せられた。二十九歳の時武田英一に嫁し、二子を儲けた。大正二年八月二十九日歿、年五十三。翌三年九月遺族よりその藏書(英書七百餘冊を母校に寄贈した。(大日本人名辭書、婦人界三十五年)

武田松 たけだ まつ (二二二二―二二七六) 武田信玄の女。永祿十一年八歳の時織田信忠と婚を約し、元龜三年これを絶つや(十二歳)、再醮を拒んで十八歳にして剃髮し、天正十年武田氏の滅亡後は武藏横山に通れ、元和二年四月十六日五十六歳で歿した。法諡、信證院。(日本女子立志編)

武田貢 たけだ みつぎ (二五二五―二五七九) 教育家。清岡公忠の女。武田秀雄(海軍中將)に嫁し、一女を儲けた。明治二十年東京

女子師範學校を出で、華族女學校に教鞭を取り、後、學習院教授となり、専ら英語科を擔任した。大正婦人會理事、東洋婦人會、婦人衛生會等の幹部となり、盡くすところがあつた。大正八年十一月十一日歿、年五十五。(大日本人名辭書)

高市黒人妻 たけのくろ 萬葉の歌人。歌は卷三に見える。夫も同じく歌人である。「白菅の眞野の榛原往くささ君こそ見らめ眞野の榛原」。(萬葉集)

竹野媛 たけのひめ 「日葉酢媛皇后」の項を見よ。

竹内小燦 たけのちからん 畫家。名は千賀、字は左琴。長門の人で、京都に住んだ。初め圓山應瑞に學び、美人を寫し、また好んで祕戲の圖を作つたが、後、岸翁を師としてその格を更め、よく人物、山水、龍虎を畫いた。生歿年不詳。(畫業要略)

竹御所 たけのみどころ (一一八九四) 源頼家の女。政子に養はれ、將軍頼經の室となつて妊んだが、文暦元年七月二十七日産によつて、母子ともに死んだ。(大日本人名辭書)

威仁親王妃慰子 たけのなほみ (二五二四―二五八三) 前田慶寧(金澤藩主)の四女。御母は久徳尋子。元治元年二月誕生、明治十三年十二月有栖川宮威仁親王の御息所となり、一王子二王女を生まれた。漢學を野口之布に、畫を松岡環翠に、歌道を高崎正風に受け、書は熾仁親王に學ばれた。外人につい

て英佛語を修め、明治二十二年威仁親王に從つて歐米巡遊、三十八年には勅命を受けて親王とともに再び渡歐し、ドイツ皇太子結婚式に御名代として参列せられた。明治二十九年四月熾仁親王妃董子の後を承けて東京慈惠醫院の幹事長となり、四十年七月、皇后(昭憲皇太后)の御特選によつて總裁となられた。大正二年七月親王薨去後は概ね葉山の別邸に保養、十二年六月三十日湯河原にて薨去せられた。御年六十。(大百科事典)

竹村かぎ たけむら かぎ 西川嘉義

竹本東猿 たけもと とうざる 義太夫。慶應三年大阪市西區新町に生れた。十九歳で眞打となり、後には門弟六十餘名を有し、大阪義太夫界に覇をとへた。上流社會に蟲負が多く、また、品行方正の點でも後進から仰がれてゐた。同三十七年八月十二日乳癌で死んだ。享年三十八。(大日本人辭書)

田心姫 たごり ひめ 田霧姫命

太宰春臺母 たさいしゆんたいはは 賢母。清水氏。春臺の幼時、その父は、人各々其性に從ふべしといつて、強いて子の教育を見なかつたが、母は力めて『源平盛衰記』『保元物語』『平治物語』等の書を以て、毎夜十枚を課して讀み習はせた。而して裁縫

れた。第に就きて從一位を追贈せられた。(日本紀略、日本後紀、一代要記)

多治比豐繼 たぢひゆんけい 桓武天皇の宮人。初め女孀となり、長岡岡成を生まれた。(皇胤系圖、姓氏錄)

多治比眞宗 たぢひまこと 桓武天皇の夫人。參議多治比長野の女。神護景雲三年誕生、宮に入りて葛原、佐味、賀陽、大徳の四親王、因幡、安濃の二内親王を生まれた。正三位に進み、夫人となり、弘仁十四年六月五十五歳で薨せられた。淳和天皇、詔して正二位を追贈せられた。(日本紀略、大日本史)

但馬皇女 たぢまのみこ 「一三六八」萬葉の歌人。天武天皇の皇女。夫人氷上娘の御所生で、内親王となり、三品に叙せられ、和銅元年六月薨せられた(紀、續紀)。皇女の歌は、『萬葉集』卷二に三首、卷八に一首があるが、最後の一首には「一書に云子部王作」ともある。いまその確實に皇女の作たる三首の歌の題詞をあつめて見ると、「但馬皇女、在高市皇子宮時、思穂積皇子御歌一首。秋の田の云々」「勅穂積皇子遣近江志賀山寺時、但馬皇女御作歌一首。後れみて云々」「但馬皇女、在高市皇子宮時、竊接穂積皇子。事既形而御作歌一首。人言を云々」とあり、これを第一、第三、第二の順に

の傍らこれを聞き、畢るや必ず卷中の人物の如く、名を竹帛に垂れんと欲せば、宜しく文武に志を専らにすべきことを訓した。果して春臺鴻儒を以て世に知らるゝに至つた。(大日本人辭書)

田澤稻舟 たざわ いなふね 明治初期の小説家。醫師田澤清の女。明治十一年山形縣鶴岡に生れ、上京して、縁あつて山田美妙の妻となつたが、些細なことから離別となつて歸郷し、催眠藥過量服用のため、二十九年九月、年十九で死んだ。死因につき種々取沙汰せられ、美妙の冷酷を憤つて服毒したともいはれたが、石橋思案、丸岡九華等は否定した。しかしこれによつて美妙は甚だしく非難を受けた。作家としての稻舟は、二十八年から九年にかけて、「醫學修業」「白ばら」「峰の残月」「五大堂」歿後「唯我獨尊」等を公けにしたに留まつた。(日本文藝大辭典、明治作家研究)

丹堀池子 たけほり いけこ 淳和天皇の宮人。從五位上内藏助丹堀門成の女。同子内親王を生まれた。(三代實錄)

多治比高子 たぢひたかこ 嵯峨天皇の妃。從五位下氏守の女。天皇の踐祚の初、夫人となり、一百戸に封ぜられ、弘仁元年從三位に叙せられ、六年妃となつた。同十一年從二位に進み、淳和天皇の天長三年三十九歳で薨せら

して考へれば、穂積皇子と密に婚されたことが發覺して、皇子は近江にうつされたのであるが、何故この二人の結婚が裂かれたかは明かでない。二人は異母兄弟であるから、當時としてはそのことは理由とはならない。或は二人の母系が、藤原氏と蘇我氏との對立抗争からではないかと思はれる。その歌が持統天皇朝の部にあり、皇女の薨去が和銅六年であり、穂積皇子が皇女の薨後、雪の降るその御墓を望んで、「ふる雪はあはにはふりそよなばりの猪養の岡の寒からまくに」と詠まれたことから、その戀愛は少くとも十年間餘も持續してゐたことが知られるのである。(萬葉集)

後れみて戀ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈みに標結へ吾が夫 但馬皇女

手白香皇女 たしろかのみこ 繼體天皇の皇后。仁賢天皇の第三皇女で、春日大娘皇女の御所生である。繼體天皇は磐余の玉穂に天の下を知しめした。その元年二月、大連大伴金村は、「臣聞く、前王の世を治め給ふや、維城(君)の固にあらざれば乾坤を鎮むること無く、掖庭の親にあらざれば以て其の跌尊(嗣)を繼ぐことなしと。白髮の天皇(天皇)嗣なかりしかば、臣が祖父大連室屋を遣はして諸國に舍人、膳人、軛負の三種の白髮部を置き、御名を後世に留めしめ給へり。あゝ愴

ざるべけむや。請ひまつらくは、天皇手白香皇女を納れて皇后とし、神祇伯等を遣はして神祇を敬祭り、皇子の誕生さむことを祈禱りて、庶民の望みに答へしめ給へ」と懇と奏上したので、天皇は即ち禮を備へて手白香皇女を迎へ、その三月五日立て、皇后とせられた。幾くもなく、天國排開廣庭尊（欽明天皇）を生まれた。天皇の崩後、安閑、宣化の二天皇が相ついで即位せられたが、何れも在位久しからず、かくて欽明天皇の即位に及んで、その元年十二月五日、皇太后と尊稱せられた。崩年不詳。大和國山邊郡衾田陵に奉葬した。（日本書紀、延喜式）

たそや 吉原、西田屋甚右衛門の著妓。京都から来て、全盛をうたはれてゐたが、ある夜、家に歸る途で殺されてしまつた。よつて、町中が要領のためにとて行燈を出すやうになつた。これが所謂たそや行燈の始であるといふ。（早引人物故事）

忠子内親王 ただこないしんわう 「一五六四」 光孝天皇の皇女。女御班子女王の御腹で、從四位下に叙せられ、元慶八年從三位に進み、姓を源朝臣と賜はつたが、寛平三年内親王となり、延喜四年五月七日薨せられた。（三代實錄、日本書紀、一代要記）

忠子女王 ただこ 「一五六四」 清和天皇の女御。貞觀十二年女御となり、從四位下に叙せられ、醍醐天皇の延喜四年薨

があり、冬照との合集に「稚の故夜提」がある。明治十五年十月十三日七十三歳で病歿した。（稚の故夜提、明治大正歌集解題）

橘娘 たちばなのいらつめ 天智天皇の嬪。左大臣阿倍橘麻呂の女。飛鳥内親王、新田部皇女を生まれた。（日本書紀）

橘氏子 たちばなのうぢこ 淳和天皇の女御。從三位永名の女。清和天皇の貞觀五年從四位上に進められた。（一代要記、三代實錄）

橘嘉智子 たちばなのかちこ 檀林皇后

橘田村子 たちばなのむらこ 桓武天皇の宮人。入居の女。池上内親王を生まれた。なほ、『大日本史』に説がある。（一代要記、帝王編年記）

橘常子 たちばなのつねこ 「一四四八—一四七七」 桓武天皇の宮人。兵部大輔島田麻呂の女。宮に入りて寵あり、大宅内親王を生まれ、從三位を授けられ、天皇の崩後出家して尼となつた。嵯峨天皇位に即きて、新錢百貫を賜はり、弘仁八年八月、三十歳で薨せられた。（日本書紀、類聚國史、續日本紀）

橘仲皇女 たちばなのなかみめ 宣化天皇の皇后。仁賢天皇の第五皇女。春日大娘皇后の御所生。宣化天皇のなほ皇子たる時妃となり、即位の元年に皇后に立つた。その詔に「前の正妃億計天皇の女橘仲皇女を立て、皇后とせむ」とあるのは、此の時既に薨去されてゐる前妃に贈られたのであらうといふ。四年

ぜられた。（日本書紀、三代實錄）

只野眞葛 ただのまこと 「二四二—二四八四」 仙臺藩の醫工藤平の長女。名は綾子。十六歳の時村田春海に作文の批正を乞ひ、「師なくして此の如し、後世恐るべし」と賞せられたといふ。翌年藩侯に仕へたが、後辭し、三十六歳（馬琴の書いた小傳には四十八歳）で、只野伊賀の後妻となり、夫に死別後は眞葛の姫と號し、専ら文筆に親しんだ。文化十四年十二月には諸侯の經濟の可否を評し、寵臣嬖妾の害を論じた『獨考』を著はし、文政のはじめには東奥紀行『磯つたひ』を書いた。その他『とはずがたり』『秋の七草』『筆の運び』等があり、『奥州波奈志』には「狐とり彌左衛門」「宮城野の狐」「白わし」等二十七篇の奥地の奇談怪説を蒐記してゐる。瀧澤馬琴は、「眞葛の老女は男魂ある者にて、其才もすぐれたり」といひ、井上通女、白拍子武女、檜垣姫、麗女などに伯仲すべきものかといつた。文政七年、六十二歳で終つた。（孝子と貞女、女流文學全集）

橘東世子 たちばなのとうせ 「二四七〇—二五四二」 歌人。文化三年江戸に生れた。早く橘守部に歌道を學び、後、守部の子冬照の妻となつた。舅及び夫の著述を助け、五十八歳で夫に死別し、歌學を以て將軍家定の室天璋院に仕へた。編輯に『明治歌集』

天皇崩御ありて、「大倭國身狹桃花鳥坂上陵に葬しまつる。

皇后橘皇女及び、其の孺子を是の陵に合せ葬しまつる」(紀)といふ記事の注には、「皇后の崩年、傳記載するものなし。孺子は蓋し未だ成人とならずして薨せませるか」とある。石姫皇女、小石姫皇女、倉稚綾姫皇女、上殖葉皇子(亦の名腕子、丹比公及び倭那公の先)を生まれた。『記』には三皇女のみを記し、大河内稚子媛の第二皇子に惠波王を記載してゐる。（日本書紀、古事記）

橘逸勢女 たちばなのはや 妙冲

橘房子 たちばなのふさ 「一五五三」 宇多天皇の女御。宮に入りて女御となり、從四位下に叙せられ、寛平五年、薨せられた。（一代要記）

橘船子 たちばなのふねこ 淳和天皇の宮人。從四位上淨野の女。崇子内親王を生まれた。（續日本後紀、帝王編年記）

橘御井子 たちばなのみいこ 桓武天皇の宮人。左中辨入居の女。加樂内親王、菅原内親王を生まれた。從四位下に叙せられ、仁明天皇の嘉祥二年從三位に進められた。（皇胤顯運錄、續日本後紀）

橘三千代 たちばなのみやよ 「一三九三」 橘氏の始祖。贈正一位大夫人。鎌足の子藤原不比等の後妻。縣犬養連東人の女。初め三野(美努)王家の女房となり、葛城王(後の橘諸兄)、佐爲王、

牟漏女王を生み、後、淨御原宮(天武)の末に命婦として東宮に仕へた。時に草壁太子は鸕野皇后の御腹で、皇后の御妹阿閉皇女を妃とし、皇孫珂瑠降誕の頃であり、或はその乳母であつたかといはれる。その頃は天津皇子の執政であつたが、歳を躰えて天皇崩じ、天津皇子は皇后の御姉八田皇女の腹で太子の兄なる故に諸臣の間に折合悪しく、因りて皇后の御政事となり、天津皇子は遂に死を賜はつたが、二年を経て太子もまた薨じ、皇后の即位となつたのが持統天皇で、皇孫珂瑠の七歳なるを鞠養せられて成人を待たれた。この時三千代は阿閉皇女の下に皇孫を護り、厚き眷遇を得た。京都貴族は古來皇室と親族の關係があつて、妻娘も宮中に祇候し、職務にも當る習慣であつたが、近く天武の元年に「婦女は有夫、無夫、長幼を問はず進仕を欲するは聽し、宮人に准ぜよ」、また令條に「諸臣五位以上の家より宮中に祇候する婦人は、位階あるを内命婦といひ、無きを外命婦といふ」とあり、三千代はその有夫の婦女として、縣犬養連の資格は五位以下であるが美努王家より進仕し、叙位されて内命婦となり、やがて家格を進めて縣犬養宿禰となされた。ついで美努王家にあつた時は女房衆で、妻の資格は無かつたが、今は叙位して姓戸も進み、藤原不比等と結婚した。藤原家は大臣家の一ではある

が、不比等の位はまだ五位に過ぎなかつた。結婚は遅くも持統天皇の末で、多比能娘を生んだのは文武元年を下らぬと思はれる。持統天皇は皇孫珂瑠皇太子の十五歳の元服期にとどく前年に讓位ありて皇太子は文武天皇となり、不比等は石上麻呂について中納言に任じ、始めて官廳の公卿に列した。而して、此頃までの藤原姓は、蘇我の石川、物部の石上と改姓したる如く、中臣の改姓の如くなつてゐたのを、天皇の元年、「藤原朝臣に賜はる姓は宜しく其子の不比等をして之を承けしむべし」との詔があつて鎌足の子不比等の家の専有と定まつた。蓋しこの事には三千代の働きも加はつたであらう(久米邦武)。不比等の女宮子娘(賀茂比賣の所生)は紀の竈門娘、石川の刀子娘とともに入内し、その御腹に首皇子が降誕せられ、これが藤原家光榮の基となつたが、宮子娘の入内についても三千代が上皇及び母后の間に當然斡旋したことが考へられる。「續紀」に、初めより宮子娘は夫人、他は妃の差等で入内した如く記されてゐるのは追記の文で、藤原氏は此の頃までは石川、紀の二氏に劣るとも勝る家格ではなかつた。不比等は持統天皇の初、判事で中臣大島と同じく直廣肆(五位)の位を以て天武律令の改修員に加へられたのが、その仕進の初見であり、皇子の降誕は大寶元年であるが、この年律令(大

寶律令)が成つて、不比等も大納言に進んだのである。されば、宮子娘に首皇子(後の聖武天皇)の降誕があつたことが、後の藤原氏の繁榮を約束したことは否むべくもない。これに加へて、三千代もまたこの年女子を生んだ。初め長娥子と名づけたが、これが後の光明皇后である。慶雲四年文武天皇崩じ、三千代が最初より奉仕した母后が即位(元明天皇)せられ、再び皇孫御養育の御世となり、三千代は大嘗會に供奉し、豊明の節會に、天皇より忠誠の至りと賞せられて浮杯の橋を賜はり、「橋は君子たる長上の人の好むものにて、柯は霜雪を凌いで繁茂し、桑は寒暑を経て凋まず、珠玉と共に光を競ひ、金銀に交りて逾美なり、是を以て汝の姓となし橋宿禰と賜ふ」と勅あり、これより三千代は縣犬養橋宿禰と稱することとなつた。曩には藤原姓の濫稱を正されて夫の家に光榮を全うし、今はまた橋姓を賜はつて新に自家の光榮を生じたが、これが後世まで藤橋の兩姓と皇胤の源平兩姓と全國に滿ちて繁茂を競ふ根源である。元明天皇は、治世の始めに奈良に遷都あり、外廷には老功の石上麻呂が左大臣となり、不比等は右大臣となり、大寶律令の施行された始めて、宮中府中より諸國まで、紀綱の肅正を見つゝあつた。三千代の年齢は、美努王家で葛城王等を生み東宮に仕へたことから推せば、元明天皇とほぼ

相匹すると思はれる。既に不比等の妻となつて十餘年を経過し、繼子武智麻呂、房前も壯年となり、武智麻呂は阿倍家と婚したが、房前には三千代が美努王家にて生んだ牟漏女王を娶はせ、今は二人とも從五位下に叙し、房前は和銅の頃より宮廷に仕へ、參議の資格となり、位は却て兄の上になつた。蓋し女帝の御政務には宮掖に昵近して文書の執次をなす者がなくてはならぬ、後にこれを内臣と稱し、勿論令外の官であつたが平安朝に至り藏人所が出来、新進有望の人々が選まれ、その頭は參議の候補者になつたが、その起りをなしたものが即ち房前で、繼母の三千代が表方を交渉する機關となつてゐたのである。三千代は和銅の初めより昇進し、奈良の都造營の成る頃は、食封を賜はり、資人を附せられ、家職を置かるゝ資格になり、その邸宅は、大路を挟んで、南が右大臣不比等の本邸で長子武智麻呂と同住し、北が三千代の第で、房前と同住してゐた。これがまた藤原氏に南家北家の分れた原因であり、後に南家は衰へ、三千代の北家が盛つて房前の子孫が攝關の宗家を建てるに至つたのである。不比等の長女宮子娘は前記の如く聖武天皇の御母であり、次の三千代の生んだ多比能は美努王家にて生んだ葛城王に娶せた。この葛城王が橋家の祖諸兄である。和銅六年石川麻呂は從三位に、武智麻

呂は從四位下に叙し、この年石川、紀の二妃は嬪の稱に劣され、翌七年皇孫首を皇太子に立て、天皇は氷高皇女に禪位あつて、元正天皇の即位となり、三千代の腹なる季女長娥子は首太子の妃となつた。養老元年石上麻呂薨じ、不比等は左大臣に進み、いよいよ藤原氏の天下となり、三年には皇太子十九歳となり、正月二日大極殿の朝儀に高座に侍し、武智麻呂は多治縣守と二人贊引となり、これより政治を聽かせられ、明年不比等には授刀資人三十人を附せられたが、この年病に罹つて薨じ、更に太政大臣正一位を贈られ、三千代には正三位を授けられた。これまで女官に無き例とされる。その翌五年元明上皇違和を以て三千代は入道して尼となつたが、遂に上皇は崩御となり、遺詔して火葬せしめ、房前には、汝内臣となりて内外を計會して帝業を佐けよと遺命せられた。同八年二月元正天皇讓位ありて、聖武天皇の即位となり、ついで夫人となつた光明子は、神龜四年皇子を生まれ、皇子は五十餘日にして早くも皇太子に立ち、藤原氏の第、即ち三千代の邸にて養育さるゝこととなつた。縣犬養一族は宿禰姓に進み、三千代には食封千戸を賜はつたが、期年ならずして皇太子は薨せられた。しかし、夫人光明子はその翌年遂に詔して皇后に册立せられ、臣下立後の例を開くに至つた。天平五年正月

彼女は歿した。年は七十餘と推考される。特に從一位を贈り、食封資人を收むるなからしめ、橘宿禰家はそのまま存在してゐたが、三年を経て八年に、葛城王、佐爲王兄弟は上表して、親母橘宿禰が、淨御原以來累代に力を竭した忠誠の至りを賞して賜はつた姓に繼嗣なし、願くは殘名を傳へんと請うて許され、ここにおいて葛城王は姓名を橘諸兄と改め、後、右大臣となつて大政に當つた。諸兄は聖武上皇と同年に薨じ、南家の二男仲麻呂は光明皇后の紫微内相となつた。四年を経て、天平寶字四年光明皇后崩じ、仲麻呂の計ひにて、祖父不比等の宇宙を蓋ふ功勳は朝常未だ人望に允せずとて、淡海に追封するとともに、繼室三千代に正一位大夫人を追贈せられ、正に婦人として極位に上つた。〔圖〕光明皇后 (續日本紀、中央史壇、奈良朝時代史)

橘義子 たちばな のよしこ 宇多天皇の女御。參議廣相の女で、寛平五年女御となり、同八年從四位上に叙せられ、齊中親王、齊世親王、齊邦親王、君子内親王を生まれた。(皇胤紹運録、一代要記)

立原春沙 たちばら しゅんさ 畫家。水戸の人立原杏所(天保十一年五十六歳歿)の女。名は春子、字を沙々と稱した。父及び渡邊華山に學んで、よく草花鳥蟲を畫いた。(扶桑畫人傳)

龍田比賣神 りゅうたのひめがみ 『延喜式』所載の「龍田比古龍田比賣神

社」の祭神。龍田比古、龍田比賣神は、官幣大社龍田神社の祭神天御柱神、國御柱神、またの名「級津彦、級津比賣」と同一神とする説があるが、一説には官幣大社龍田神社(本宮)の地主神ともいひ、また聖德太子法隆寺建立の際その鎮守として新に勧請したと傳へられる龍田町龍田神社(新宮)の祭神であるともいふ。(大百科事典)

達智門院 だちもんいん (一九四六—二〇〇八) 尊稱皇后。齋宮。後宇多天皇の第一皇女群子内親王(二に獎子)。御母は談天門院。弘化九年誕生、天皇の鐘愛あり、乾元元年十二月二十

六日内親王となり、徳治元年十二月伊勢齋宮に卜定、後二條天皇の崩により、同三年八月二十六日野宮より退下せられた。後醍醐天皇の元應元年三月二十九日皇后と尊稱せられ、同十一月十五日號を達智門院と進められた。同日、談天門院を喪ひ、その二十一日薨髪して法諱を眞理覺と稱し、正平三年十一月二日六十三歳で崩せられた。(後宮略傳、女院小傳)

ながづきの秋の日かずも今いくか残る木ずゑの紅葉をか見む 獎子内親王

多都比毘賣命 たつちびめのみこと 青森縣中津輕郡岩木村鎮座國幣小社岩木山神社の祭神三柱の一。社傳によれば地主神といひ、また一説には、多紀理毘賣命(宗像女神)の轉訛であらうとい

たつち一たにし

ふ。(大百科事典)

伊達満喜子 いたて まんきこ 歌人。下總關宿藩主久世大和守の女。伊豫の吉田侯伊達宮内少輔村芳に嫁した。文學を嗜み、香雲軒と號した。藩に國學が創められたのは、實に彼女の力であつた。弘化五年(二五〇八)古稀の記念として、『袖の香』(七十首)を出した。(袖の香)

田中愛 たなか あい (二四八三—二五三九) 對馬鹿島村の郷士阿比留大膳の妹、藩士田中久米輔に嫁した。元治元年十月對馬に

内訌起り、勝井五八郎一黨のため勤王の志士みな縛につき、夫久米輔は幽せられ、子貫治は死を命ぜられた。貫治が自刃する時、彼女は一絲亂れず舉動し、囚はれたる夫には密に短刀を送つて、他人の手にかかるを防がんとしたが及ばなかつた。兄の勝井黨に與するを諫めて義絶し、やがて藩論一變して勝井殺さるゝや、その肉を切り、以て父子の靈に捧げた。明治十二年七月五十七歳で歿した。龍女院に葬り、自心院清岳貞壽大姉といふ。(對馬人物志)

谷口田 たにぐち 田

谷紅藍 たにに (一二四九—二) 畫家。「谷秋香」を見よ。

谷秋香 たにかう (二四三二—二四九二) 畫家。谷文晁の妹。通稱しり。名は、薺英。字を小香と稱した。中田榮堂に嫁し、

書名があつた。その妹えいも紅藍と號し、洞齋に嫁した。ともに山水を得意とした。天保三年五月十六日六十一歳で秋香歿し、紅藍またその冬死んだ。(畫乘要略、鑿定便覽、扶桑貴人傳)

旅子女王 たびこ女王

山門縣(筑後の土蜘蛛。神功紀に、仲哀天皇の崩後、皇后は吉備臣の祖鴨別を遣して熊襲國を撃たしめ、また親ら羽白熊鷲を討ち、ついで山門縣に到り土蜘蛛田油津媛を誅された。この時、媛の兄夏羽は、軍を興してこれを援けんとしたが、既に妹が誅されたと聞いて逃れ去つた。(日本書紀)

田油津媛 たぶら 山門縣(筑後の土蜘蛛。神功紀に、仲哀天皇の崩後、皇后は吉備臣の祖鴨別を遣して熊襲國を撃たしめ、また親ら羽白熊鷲を討ち、ついで山門縣に到り土蜘蛛田油津媛を誅された。この時、媛の兄夏羽は、軍を興してこれを援けんとしたが、既に妹が誅されたと聞いて逃れ去つた。(日本書紀)

玉菊 たまきく (二三六二―二三八六) 吉原角町中萬字屋勘兵衛の家妓。容貌も氣だてもよく、廓中の評判をとり、絲竹管絃から香茶、俳諧等を嗜み、殊に江戸、河東の兩曲をよくした。享保十一年三月二十九日、二十五歳で病歿するや、倭屋虎文、松居八兵衛等はこれを哀惜し、その周忌に當つて燈籠を廓中に掲げてその靈を弔つたが、これより、吉原に燈籠を掲ぐる例が始つたといふ。(實事蹟、俳林小傳)

玉櫛媛 たまきり 『紀』神武紀に、三島溝檉耳神の女、事代主神に婚して媛踏躰五十鈴媛命(神武天皇の皇后)を生むとあり、安寧紀に、安寧天皇の御母は事代主神の少女五十鈴依媛命(綏靖天皇の皇后)とある。(參照)勢夜陀多良比賣 (日本書紀)

瓊子内親王 しんわこ 後醍醐天皇の第八皇女。贈從三位藤原爲子の御所生で、また歌をよくせられた。後二條天皇の皇女瑤子内親王及び尊良親王との贈答歌などが残されてある。「硯のふたに散りたる花を入れて櫻の扇に書きて瑤子内親王につかはしける、ひとりのみ詠むる宿にちる花を扇の風のつてにだに見よ(瓊子)、返し山吹の扇にかきて、吹き迷ふ扇の風のつてにこそいはでかひある色も見えけれ(瑤子)」(新千載集)、また「紅梅の枝につけて瑤子内親王に遣はしける、誘ひゆく風につてもとはれねばにほふかひなき宿の梅が枝(瓊子)、返し、とはでこそ見るもかひあれうき身をもよそに隔てぬ梅の香は(瑤子)」(新編古今集)。元弘の初、京都は關東の軍兵が亂れ入つて騷擾を極め、内親王は親ら落飾せられた。『新葉集』にある次の唱和はその消息を語るものである。「元弘の始つた世の中亂りがはしく侍りしに思ひわびさまなどかへけるよしきよて瓊子内親王のもとに申し遣はしける、いかで猶我も浮世をそむきなむ羨ましきはすみぞめの袖(中務卿尊良親王)、返し、君はなほ背きなはてぞとにかくに定めなき世の定めなければ(内親王)」。『因伯紀要』によれば、後醍醐天皇の隱岐遷幸の時、御年十六であつたが、これに従はんとし

て衛更のために拒まれ、米子の近村車尾に停り悲恨止まず、遂に遊行派の僧安國に就き尼となり、安養西月尼と號せられた。天皇還幸の後、復飾を勧められたが従はず、安養寺を建てて居られた。延元四年天皇崩御の誤報あるや、泣涕病を發し、八月朔日御年二十四を以て空しくなれたといふ。(新葉集、歷朝神德錄、作者部類)

瑤子内親王 しんわこ 朔平門院

玉足比賣命 たまたらしひ 『播磨風土記』讚容郡雲濃里の條に、「大神の子玉足日子、玉足比賣命、子大石命を生む。此子父の心に稱ふ。故れ有怒と曰ふ。」とある。『標註播磨風土記逸文』(敷田年治)に「稱於父心の稱は、カナフと訓むべけれど、然ては雲濃の里てふ義を失へれば」とて、ウナフと訓んでゐる。雲濃の里は『標註古風土記』(栗田寛)に「按佐用郡有二字根村」とある。(播磨風土記)

玉槻娘子 たまつき 萬葉の歌人。對馬の人、天平八年新羅に使用する船が竹敷に泊つたとき詠んだ歌二首が卷十五にある。(萬葉集)

玉柱屋姫命 たまはしら 皇大神宮の別宮伊雜宮の相殿神。天

靖天皇の皇后)とある。(參照)勢夜陀多良比賣 (日本書紀)

瓊子内親王 しんわこ 後醍醐天皇の第八皇女。贈從三位藤原爲子の御所生で、また歌をよくせられた。後二條天皇の皇女瑤子内親王及び尊良親王との贈答歌などが残されてある。「硯のふたに散りたる花を入れて櫻の扇に書きて瑤子内親王につかはしける、ひとりのみ詠むる宿にちる花を扇の風のつてにだに見よ(瓊子)、返し山吹の扇にかきて、吹き迷ふ扇の風のつてにこそいはでかひある色も見えけれ(瑤子)」(新千載集)、また「紅梅の枝につけて瑤子内親王に遣はしける、誘ひゆく風につてもとはれねばにほふかひなき宿の梅が枝(瓊子)、返し、とはでこそ見るもかひあれうき身をもよそに隔てぬ梅の香は(瑤子)」(新編古今集)。元弘の初、京都は關東の軍兵が亂れ入つて騷擾を極め、内親王は親ら落飾せられた。『新葉集』にある次の唱和はその消息を語るものである。「元弘の始つた世の中亂りがはしく侍りしに思ひわびさまなどかへけるよしきよて瓊子内親王のもとに申し遣はしける、いかで猶我も浮世をそむきなむ羨ましきはすみぞめの袖(中務卿尊良親王)、返し、君はなほ背きなはてぞとにかくに定めなき世の定めなければ(内親王)」。『因伯紀要』によれば、後醍醐天皇の隱岐遷幸の時、御年十六であつたが、これに従はんとし

日別命の女。倭姫命が皇大神供御の御贄地を覓めて志摩國巡行の際、玉柱屋姫命の裔孫伊射波止美命が此地にあつて奉迎せられた。伊雜宮は即ち此時以來、伊射波止美命が齋き祭つたもの(主神は天照大御神)で、相殿に玉柱屋姫を配祀したのは、同命の御祖神である故である。なほ、三重縣の粟島坐伊射波神社は伊射波止美命、玉柱屋姫命の二柱を祀つてゐる。(倭姫命世記)

玉日女命 たまひめ 『出雲風土記』仁多郡の條に「戀山は郡家の正南廿三里。古老傳へ云ふ。和爾、阿伊村坐神玉日女命を戀ひて上りきぬ。その時玉日女命、石を以て川を塞ぐ。戀へども得あはず。かれ戀山と云ふ。」とある。(出雲風土記)

玉移良比女命 たまのりらひ 皇大神宮末社葦立豆神社の祭神。宇治津比賣命の子。倭姫命によつて祝ひまつられた。(神祇辭典)

玉依日賣 たまよ 賀茂健角身命の女。御母は、丹波の國神野の神、伊可古夜日女。『山城風土記』に「玉依日賣、石川の瀬見の小川に川遊せず時に、丹塗の矢川上より流れ下りき。乃ち取りて床の邊に挿し置きしかば、遂に感孕みて男子を生みたまひき。(略)可茂別雷命と號す。所謂丹塗矢は、乙訓郡の社に坐す火雷神に坐す。可茂建角身と、丹波の神伊可古

皇大神宮の別宮伊雜宮の相殿神。天

夜日賣と、玉依日賣と三柱の神は、蓼倉の里の三井の社に坐す。」とある。(山城風土記)

玉依姫命

神武天皇の御母。綿津見神の御女。豊

命、三毛入野命及び神日本磐余彦尊(神武天皇)を生まれた。官幣小社籠門神社に祀られる。天照大御神・豊玉姫命(日本書紀)

玉依比賣命

『播磨風土記』云、禾郡高野社の條に「高

野社と云ふは、此野他野より高し。又玉依比賣命在り。故れ高野社と曰ふ。」とある。(播磨風土記)

田道妻

仁徳天皇の五十五年(一〇二七)、蝦夷が叛いたので、田道は勅命を受けて征討したが、伊寺の水門に戦死した。田道の従者は、田道の手纏を妻に齎した。妻悲慟し、これを抱いて縊死した。(日本書紀)

田村大嬢

大伴田村大嬢

田村比賣命

皇大神宮攝社國津御祖神社に宇治比賣命とともに祀られる神。二柱とも國生神(一名大歲神)の御子であるといふ。香川縣香川郡一宮村國幣中社田村神社の祭神田村神は、一説によれば田村比賣命であるといふ。(大百科事典)

後である。長男總司は阿部侯より三百石の俸祿を受け、次男元介は庄屋となり、「家ふたつに孫ひとりづゝ持ちて蝶鳥には疎まれがちなり、桃さくら雛見るころ年よらず」などいつて彼女は平和な日を送り、七十八歳嘉永六年『晴霞句集』を出し、慶應元年八月二十日歿した。年九十。須賀川の十念寺に葬られた。(晴霞句集、女流文藝全集)

冬枯や一段高き寺の庫
ぬきん出てさげよ若木の梅の花
多代女

熾仁親王妃董子

御母は土屋増子(土浦藩主彦直の

女)。安政二年五月十二日誕生、明治六年熾仁親王の繼妃となり、二十一年一月皇后(昭憲皇太后)の總裁せらるゝ慈惠醫院の幹事長となり、以後十年の間勤められた。これより先、親王とともに佐野常民を助けて日本赤十字社創立に盡力せられ、日清戦役起るや、皇后の坤徳を奉戴して篤志看護婦會を起して幹事長を兼ね、二十八年一月親王薨去により、翌年三月慈惠醫院幹事長を辭せられた。大正十二年二月七日薨去、御年六十九。(皇室及び皇族、大百科事典)

丹後局

後白河天皇の宮人。高階榮子。延暦寺執行澄雲の女。初め木工頭平業房に嫁して、業兼、教

爲子内親王

宇多天皇の妃。光孝天

皇の皇女。女御班子女王の御所生。元慶八年、姓源朝臣を賜はり、寛平三年、内親王となつた。宇多天皇の宮に入り、三品に叙せられて妃となり、勸子内親王を生まれた。昌泰二年三月薨せられ、廢朝三日、中納言藤原國經を遣はして、家に就きて宣制せしめ、一品を追贈せられた。(三代實錄、日本紀略、皇胤紹運錄)

手持女王

萬葉の歌人。『萬葉集』に入る三首の歌の

題詞に、河内王を豊前國鏡山に葬れる時の作とあり、河内王は、持統天皇の三年八月太宰帥となり、八年四月には淨大尉の位を贈られてあるから、ほどその時代を知ることができ。或は王の妃であつたかといふ。(萬葉集)

大君の陸魂あへや豊國の鏡の山を宮と定むる 手持女王

多代

市原氏。岩代岩瀬郡

須賀川の人、富商の家に生れ、夫を迎へて三人の子女を擧げたが、三十一歳の時夫に死別し、舍兄峯齋亭のすすめるまゝに雨考の紹介で道彦の門に入り、後、乙二に學んだ。草庵を晴霞庵といひ、四十二歳、『淺香市集』を出した。五十一歳文政六年江戸へ出て、日本橋横町に僑居し、雨塘、一蓑、護物等と交つて歸つた。奥州の多代女の名が知られたのはこの

成の二男及び三女を生んだ。その業房が、後白河法皇の寵臣であつたため、彼女もまた法皇に宮仕して寵遇せられた。治承三年、法皇の平氏抑壓の密議に預つたといふので、業房は清盛のために伊豆に流され、法皇も鳥羽殿に遷御せられたが、この時局は、「琅慶といふ僧祇候する體に裝うて左右に侍した」と『愚管抄』に見えてゐる。夫の歿後は専ら法皇に侍し、養和元年十月には觀子内親王を生み奉つた。局が法皇の寵愛を一身に集めてゐたことは、局に一目おいてこれを嫌つてゐた藤原兼實がその日記「玉葉」に記してゐる、「法皇無雙之寵女殊寵無雙、不レ異三夫人楊妃、歟」(文治三年二月十九日の條、また「追日朝務偏在、彼辱吻」(文治元年十二月二十八日)、また「近日偏彼女房之最也」(文治二年閏七月三日)等を見て知られるであらう。その權勢のさまを窺へば、元暦元年には、光明院より法皇に進めた六條坊門東洞院の地を賜はり、業房との間に儲けた第三女の婿の中納言兼光は從三位に叙せられ、文治三年には自らも從三位を授けられた。觀子内親王は、法皇最愛の姫君として、同五年御年九歳にして内親王、准三宮となり、建久二年には宣陽門院の院號宣下があり、生母の局は從二位に進められた。以後、その別業が淨土寺にあつたので、淨土寺二位とも稱せられた。淨土寺の別業

は風光明媚の地で、後に足利義政が銀閣を建てたのは、この寺の跡である。次男の教成は藤原實教の養子となり、文治四年昇殿を許され、建久二年には左近衛少將に任ぜられ、後、中納言正二位に至り、長子業兼は家を繼いで丹後守治卿となり、また從二位に至つた。局が先づ手腕を振うたのは、後鳥羽天皇踐祚に關してである。局は高倉天皇の四宮の登極に盡力して遂に成功した。その時は以仁王の王子北陸宮、法皇の重祚、八條院等の議があつたが、法皇は高倉天皇の皇子中より立てたい御考へで、二宮は一宮安徳天皇に從つて西海にあるので、三宮及び四宮について、これを神祇官と陰陽寮とで御卜を行つたところ、官、寮ともに三宮が吉であつた。ここに丹後局は、妾、四宮出遊して、儀、行幸の如く、手に松枝を執れるを夢みたりと奏したので、法皇は心を動かし、やがて二皇孫を召されたところ、三宮は五歳、四宮は四歳、三宮は法皇を見て啼いて進まないのに、四宮は法皇の膝に上つたので、法皇は是、朕が孫なり、故院の幼時によく似てゐるとて歎歎せられた。然るに源義仲は、しきりに故以仁王の功を稱して、北陸宮を望んで譲らなかつたので、再び、官、寮において、二皇子及び北陸宮について卜つたところ、四宮

最吉、三宮は吉凶半ばし、北陸宮は凶であつた。ここにおいて四宮は二年八月二十日立ちて皇太子となり、即日閑院に踐祚せられたのである。即ち後鳥羽天皇である。次に局が活躍したのは、攝政家の所領問題であつた。既に鎌倉に覇業を遂げた頼朝は、かねて平清盛の推披になつた攝政藤原基通を廢し、その意中の入兼實を以てこれに代へんことを欲したが、後白河法皇は基通を信任せられ局もこれを庇護したので、容易に實現せられなかつた。元來藤原氏の攝政關白氏長者は、名譽と經濟とを一身に集むる所から一族間に烈しい競争が代々演ぜられたのであるが、兼實も武家方の勢力に阿附してこれを得んと望んだのであるといふまでもない。かくて、遂に文治二年三月に至つて、これが實現を見たのであるが、この時兼實が希望した經濟上の攝政家の所領は基通より引繼ぎがなかつた。よつて頼朝は兼實のために攝政家の所領は兼實に兼領せしめて、基通には鳥羽天皇の皇后高陽院泰子の御領庄園五十餘所を附屬せられんことを奏請した。法皇はこれを退けられ、兼實は現在管領してゐる皇嘉門院聖子の御領を知行したらよからうとの御説があつた。この争には蜚語なども行はれ、基通が義經、行家に黨して兼實を襲ひ撃たんなどのことが傳はつて、兼實は恐れて冷泉第より九條殿に移るなど

頗る騒いだ。それはその裏にあつて丹後局等が、基通のために策動したために事件が紛糾したのである。その終局は、頼朝の妥協案に從つて、攝政家領を分割して、それぞれの家に傳へられることになつた。これが攝政家が二つに分れる初めで、基通は近衛家、兼實は九條家の祖となつたのである。蓋し近衛家は局に負ふ所大なるわけである。また局は立后のことについても頼朝に對抗した。後鳥羽天皇は踐祚せられてから九年、御年十三でまだ皇后は定らなかつた。この時、局のお生みした觀子内親王は九歳、攝政兼實の女任子は十九歳、頼朝の女大姫君は二十歳前後、乙姫君は十五歳前後であつたから、この三人は何れもその女を宮に納れようと苦心した。この間の消息を、八代國治は次の如く記してゐる。「頼朝は府中は議奏公卿十人を置き、兼實を攝政として殆ど關東方を以て統一して、意のままに政治を行ふことが出来たが、宮中には丹後局があつて勢力を振ひ、一指も觸れしめなかつたので、さすがの頼朝も頗る之に苦んで、長講堂再興の折りには、丹後局の室は特に善美を盡して追従してゐるが、局の武家に反抗する力は益々募るばかりであつた。そこで頼朝も一策を案じて、妹で一條能保の妻を、後鳥羽天皇の乳母として宮仕せしめて局との調和を謀り、やがては宮中の勢力を得よう

としたと見え、建久二年の春の初め、一條能保の歸京に委細を託した。然るにこれも頗る六ヶ敷かつたと見え、其の女を翌年になつてから、やつと入内せしめて乳母としたのである。これが大納言保子である。しかしこれも思ふやうには行かなかつたと見え、殆ど勢力がなかつた。そこで今度は是非とも其の女を後鳥羽天皇の宮に入れようと考へたものらしい。或はこの時頼朝の女子は年齡が長けてゐるからとか、或は武家主義からとやらで疑はしいとの説もあるが、政治的結婚には年齡は問題でない、武家主義も亦實は御都合主義であるから、固より論ずるまでもないことである。兼實も亦女子を入れることを熱望して居つたことは、女子を入内せしめないうちから、其の女子が宮中に入りて皇子を生んだ夢を見たことが日記にあるのでも推しられる。三人の權勢者が恰も三巴の如く宮中を望んで争つたが、丹後局は後鳥羽天皇を擁立した大功勞者であるが、其の女は天皇の叔母に當らせらるゝから、頗る不倫の行爲で、人情に於て時人の憚もあつたらうし、又自らも快よくなかつた點もあらうか。又頼朝も推舉した攝政兼實に對して少しく憚つたと見え、たうとう兼實の勝利に歸して、其の女任子が、建久元年正月を以て女御となり、ついで中宮となつた。然し猶時人の間には丹後局が、觀子内親王も

皇后たらしむる考があるやうに思はしめたと見え、其の年の冬に局が右大臣藤原兼雅の手を経て、觀子内親王に院號宣下の事を兼實より奏請して貰ひたいと頼んだ時に、兼實は一旦之を辭退したが、局の眞意を聞くに及んで、彼は夢かとばかり喜んで、日記に「余云頗可有其恐歟、且是似被妨后位之故也者、右大臣云、全不可然、彼本意只在院號云々、以御消息内々可觸遺敷云々、此事雖不可然、爲天下頗穩便之沙汰也、世上之謳歌有人事、仍人々其心不一統、尤不便之處、忽有此沙汰、誠天之助也、中宮之御運也」と書いてある。これは局が名を捨て、實を取つたものであらう。遂に兼實の奏請によりて二年六月二十五日に内親王に院號宣下があつて宣陽門院と號せられた。」建久三年三月十三日法皇は六條殿において崩ぜられ、その前日御領を處分せられて、宣陽門院には特に六條殿及びその内に建立せられたる長講堂並にその御領を讓與せられた。長講堂領は後、後深草天皇に傳領し、持明院統の財源となり、背景となつて、大覺寺統の御領と相對抗して兩統迭立を可能ならしめたほど、重要なものである。丹後局は出家し、法皇より山科御影堂領を受け、只管その菩提を弔はれた。されば宮中を中心とする宮廷派は勢ひ一時屏息するの止むなきに至り、關東方は昇天の勢を示し、頼朝は間もな

く征夷大將軍に任ぜられて政治始を行ひ、關東の職制をも改革し、兼實は頼朝と和衷協同して朝政の刷新を圖つた。これは局の悦ぶところでない上に、頼朝は法皇崩御の際置かれた播磨備前の庄園及び長講堂領の内を沒收し、教成の養父實教を罷めさへしたので、ここに局は再び活動を開始し、源通親を引いて宣陽門院の勅別當となし、通親の養女在子の後鳥羽天皇の宮中に納れ、また梶井宮承仁親王をも與黨となし、その計畫は著々奏效して、建久七年十一月、兼實の女中宮任子は宮中を出て八條院御所に行啓となり、兼實は上表を待たずして關白を罷め、前攝政基通を關白氏長者となし、兼實の弟天台座主慈圓は退けられ、承仁親王が代つて護持僧天台座主となられ、關東方の勢力は一朝にして地に落ちた。局が失敗と目すべきものは、建久七年の後白河法皇の社壇を造らんとして、果さなかつたことであらう。その後は淨土寺に餘生を靜に送り、建保四年の春薨去した。參閱 丹波局・春華門院 (玉海、源平盛衰記、長門本平家物語、愚管抄、山槐記、中央史壇)

談天門院

宮。藤原忠子。參議忠繼の女。内大臣藤原師繼に子養せられた。御母は平高輔の女、帥局。文永五年誕生、天皇の宮に入りて典侍となり、中納言典侍と稱せられた。後醍醐天皇、承

覺法親王、性圓法親王、達智門院を生まれた。永仁六年七月二十一日、從三位に叙せられ、正安三年七月二十日三宮に准ぜられた。嘉元元年九月龜山法皇の崩あり、この月出家して尼となり蓮華智と稱せられ、後醍醐天皇即位に及んで文保二年四月十二日、院號を談天門院と進められた。元應元年十一月十五日薨去、御年五十二。(女院小傳、神皇正統記、壇鏡、玉葉集)

談天門院

丹波大女娘子

萬葉の歌人。卷四に三首の作がある。「垣穂なす人言聞きてわが背子が心たゆたひ逢はぬこの頃」。(萬葉集)

丹波竹野媛

開化天皇の妃。丹波大縣主由基理の女。彦湯產隅命を生まれた。(日本書紀、古事記)

丹波局

後白河天皇の宮人。延曆寺僧仁操の女で丹波局と稱し承仁法親王(天台座主)を生まれた(皇胤紹運錄)。然るに、『天台座主記』によれば、法親王の御母は、内膳司紀孝資の女で、初め娼であつたが、召されて宮に入り、法親王を生まれたとあつて丹波局の名はない。『山槐記』には御母は娼丹波とあり、『玉海』には丹波はまた六條と號すとあり即ち丹後局高階榮子を指してゐる。八代國治は『中央史壇』に、『この

丹波局が山槐記や、玉葉や、百練抄などを綜合してみると、どうも後の丹後局榮子と同人の様である。若し同人とすると、丹後局は遊女として最初に後白河法皇に愛されて承仁親王を生み、其の後に局を法皇から近習の業房に賜はつたものではあるまいか。」と付度してゐる。參閱 丹後局 (中央史壇、大日本史)

丹波局

後鳥羽天皇の宮人。名を石と稱し、父は籬を織るのを業としたが、舞女として宮に入りて寵あり(明月記)。後、右衛門督と稱し、熙子内親王を生まれた。(皇胤紹運錄、大日本史)

丹波局

土御門天皇の宮人。法橋雲顯の女。丹波局と稱し、皇女是子を生まれた。(二代要記、皇胤紹運錄)

檀林皇后

橘嘉智子。贈太政大臣正一位清友の女。御母は贈正一位田口氏。資性寛和、風容絶異、手を伸ぶれば膝を過ぎ、髪を垂るれば地に曳くほどあつたと傳へられる。天皇がなほ親王たる時妃となり、即位の後、大同四年六月十三日夫人に進まれた。弘仁元年正良親王を生まれ、封一百戸を賜はり、從三位に叙せられ、後また尾張丹波郡の田二十四町を加へられた。弘仁六年七月七日之夜、璽路を著ることを夢みられたが、その十

三日詔を蒙つて皇后に立たれた。これより深く佛道に歸し、化導に務められ、宮闈、朝野これを稱した。嘗て天皇に次の御歌を上られた。「うつろはぬ心の深くありければこゝら散る花春にあへること」(後撰集)。嵯峨天皇は博く經史に通じ、詩文をよくし、書道に秀で、文教を奨励せられ、また、僧空海などを召して佛敎の深旨を聽問せられたが、皇后も深く學びの道に勤み、嘉祥三年右大臣氏公(御弟)に謀り、一の學舎を開設し、これを學館院と名けて橘氏の子弟に經書を誦習せしめられた。時人は漢の鄧皇后に比した。弘仁十四年天皇は淳和天皇に讓位して太上天皇となり、皇后は皇太后と稱せられた。淳和天皇は在位十年餘にして天長十年讓位、皇太子正良親王(仁明天皇)が踐祚せられて、皇后は更に太皇太后と尊稱せられ、奈良の都において、空閑地二百三十町、近江において荒田六十四町を賜はり、山城國葛野郡の嵯峨院に住せられた。承和九年七月嵯峨上皇の崩あるや、冷泉院に遷り、發願を以て嵯峨院を改めて檀林寺を創建し、比丘尼を置いて冥福を修せられた。仁明天皇はために封五百戸を賜はり、供養料となしたが、天皇もまた嘉祥三年三月崩せられ、幾くもなく太后も病を發し、御落飾の後、五月冷泉院において空しくなられた。御年六十五。遺命に従つて野邊の送りも薄く、葛野

郡深谷山に奉葬した。世に檀林皇后と稱せられる。皇后は橘諸兄の御曾孫に當り、英明なる仁明天皇の御母として世に時めき給うたので、嘗て諸兄の母橘三千代が始めて祀つたところの洛外、梅宮神社(いま宮幣中社)を橘氏一門の氏神として厚くこれを崇敬せられた。朝廷においては永く當社を重んじ、後には所謂二十二社の一に加へられた。また皇后は親ら多くの寶幡と繡文の袈裟を製せられ、これを僧慧尊につけて五臺山寺に施入せられた。慧尊は承和の初、唐に入り、登州萊州の邊を過ぎ、雁門に至り、やがて五臺山寺に登つて皇后の發願を果し奉り、後、南下して杭州に出で、靈池寺を訪ひ僧齊安に會して御旨を傳へ、弟子義空を請じて歸朝し、檀林寺に入つて皇后の冥福を祈らしめたのであるが、此の義空は實に初めて我國に禪宗を傳へた僧である。なほ『大日本史』には「世に傳ふ、后、嘗て和歌を詠じて曰く、もろこしの、山のあなたに、立つ雲は、こゝに焼く火の烟なりけりと。齊安、聞きて許可して曰く、東城深解の人、誠に婦人にして大丈夫なるものなりと云々。世に傳ふる歌確證なし。姑く附して致に傳ふ。」と見えてゐる。皇后は仁明天皇をはじめ、秀良親王、正子内親王(淳和天皇の皇后)等二皇子四皇女を庭育せられた。(大日本史、日本後紀、文德實錄、歷朝坤德錄)

あ

智恵内子

〔二四〇五—二四六七〕 狂歌師。金子通子といひ、元木綱(渡邊正雄)の妻。夫に隨つて狂歌を詠み、江戸の三内子(世話内子、ひまの内子)の隨いで、當時節松嫁々(朱樂菅江の妻)と並び稱せられた。嘗て鐵砲洲に住める時、木網の不在に訪れた客に、「鐵砲洲音に聞えしたまの客亭主の留守はねらひそれたか」と詠み、年十八になる僕の三六が國に歸るといふのに、「そろばんのたま／＼おきし三六が國へ歸るは二九の十八」の如き、人口に膾炙し、一説に、木網との結婚には席上狂歌を贈答して祝言に代へたなど傳へられる。文化四年五月十八日歿、年六十三。深川萬年町正覺寺に葬られ、法名、芳春院園譽妙榮大姉。(古今狂歌人物誌、女流文學全集)

親子内親王

〔一一五一—〕 仁明天皇の皇女。女御たり

ちえの—ちしよ

親子内親王

〔二四四七—二五〇七〕 歌人。幼稱ひさ。森了阿の女。幼より備中淺口郡六條村甘露庵密乘の法弟となり、後、備前上道郡門田村光明庵主となつた。木下幸文に歌道を學び、吉備にその名高かつた。一時、美作勝間田に住し、また江戸に遊び、天保十三年京都に出で、北山に居を構へ、蓮月尼等もついで和歌の添削を乞うたと傳へられる。晚年東寂樂寺に移り、弘化四年六月十日同所において歿した。年六十一。『東行紀行』の著がある。(東行紀行、大百科事典)

茅上娘子

〔〕 狹野茅上娘子

智鏡

〔〕 道敷大神

道敷大神。伊邪那美命をいふ。伊邪那伎命が、黄泉國からこの國へ逃げ還り給ふ時、伊邪那美命がその跡を逐つて、黄泉平坂まで到り、及き給うたので、此の名があるといふ。千は道路、シキは及ことである。(大百科事典)

知乘

〔二四四七—二五〇七〕 歌人。幼稱ひさ。森了阿の女。幼より備中淺口郡六條村甘露庵密乘の法弟となり、後、備前上道郡門田村光明庵主となつた。木下幸文に歌道を學び、吉備にその名高かつた。一時、美作勝間田に住し、また江戸に遊び、天保十三年京都に出で、北山に居を構へ、蓮月尼等もついで和歌の添削を乞うたと傳へられる。晚年東寂樂寺に移り、弘化四年六月十日同所において歿した。年六十一。『東行紀行』の著がある。(東行紀行、大百科事典)

さやかなることよひの月をみるやととふ人もなき秋のやま
里 知乘尼

茅渟娘 ちづな

遠智娘

智努女王 ちぬの

齊宮。元明天皇の御時、伊勢齋宮となられた。傳不詳。(大百科事典)

千子 ちこ

「一二三四八」 俳人。父は長崎聖堂の祭酒、向井元升、母は久米氏。去來(蕉門十哲の二)の妹である。貞享元、二年の頃、兄に伴はれて伊勢參宮をなし、「伊勢紀行」を共著した。お船手(長崎奉行御用の廻漕問屋)清水藤右衛門に嫁し、一女を生んだと傳へるが、元祿元年五月十五日若くして死んだ。その句作は多くないが、「伊勢紀行」中のものなどによつて、なほ凡器にあらざることがうかがはれる。(伊勢紀行)

乳娘 ちちのめ

孝徳天皇の妃。右大臣蘇我倉山田石川麻呂の女。大化元年七月妃となられた。(日本書紀)

千尋葛藤高知天宮姫尊 ちひろのかつらたか

藤原宮子

中和門院 ちゆうわん

「一二三三〇」 後陽成天皇の女御。近衛前子。關白太政大臣近衛前久の女。天正三年誕生、同十四年十二月太政大臣豊臣秀吉の猶子となり、入内して女御となられ、從三位に叙せられ、清子内親王、政仁親王(後水尾天皇)、好仁親王、貞子内親王、尊覺法親王を生まれた。

常に學問の道から萬の事にかけて勵まされた。土御門泰重などは、常に昭良に侍らうて學藝を勧められたが、等閑の節が多いといふので、お叱りを蒙ることもあつた。絲竹の音藝にも長じ、一節切尺八の唱歌の后手は、門院が吹出されたところから名けたものといはれてゐる。(野史、歴朝神徳錄)

中將局 ちゆうしやう

靈元天皇の宮人。安倍泰貞の女。初め小左京と稱し、薙髮して智光院と號せられた。(野史)

中將姫 ちゆうしやう

大和當麻寺の縁起に因んで知られる。横佩の大臣藤原豊成の女。傳説によれば、天平年間當麻寺に入山剃髮して念佛三昧に入り、正身の彌陀の來迎を拜まずば、再び庵を出まいと誓を立てた。ある時觀世音、彌陀佛が現はれて、姫をして五色の蓮糸を作らしめ、曼荼羅布を織らしめたが、これが極樂圖の始めであるといふ。父の豊成が、押勝の罪に坐して一時筑紫(難波の別業に到り、病と稱して赴かず、幾くもなく宥された)に左遷せられたのを悲しんで尼となつたとも、或は幼時繼母照日前の毒手にかゝり、大和の雲雀山に捨てられたのを、家人の情で命を助かり山中に暮らしてゐる中、豊成が狩に出て姫に邂逅し、それより彌陀を信じて脱塵の志を起したともいはれるが、もとより據り所あるものではない。(本朝烈女傳、大百科事典)

また、近衛信尋(三藐院信尹の養子)、一條昭良(關白内基の養子)もその御腹である。當時、朝廷の儀禮典章は漸く舊にかへり、信長の後、秀吉また王事に勤め、京都の市街を整へ、聚樂第を造營して、天皇の行幸を仰ぐ等のことがあつた。この行幸は、史上に特筆せられるものである。慶長三年秀吉が伏見城に薨すると、同八年には徳川家康が征夷大將軍に補せられ、家康は伏見城に入つて勅使を拜し、後、宮中に祇候して天恩にこたへ、天皇に白金一萬兩、政仁親王に同一千兩、新上東門院(政仁親王の妃)に同一千兩、女御前子に同一千兩、また宮女二十餘人に金若干をそれぞれ獻じた。ついで十年、家康が職を辭してその子秀忠が補せられた時も秀忠參内し、且、進獻すること、その父の例の如くであつた。十六年三月天皇は位を後水尾天皇に譲り、元和三年八月崩せられ、同六年六月二日女御は三宮に准ぜられ、同日院號の宣下があつて中和門院と號し、封三千戸を受けられた。八年に至り、南光坊天海によつて落飾、寛永七年七月三日薨せられた。御年五十六。泉涌寺に奉葬。後水尾天皇は門院の御影を留むべく畫工に命じて畫かしめ、數噴の中より、その最も善美なるものを選ばれた。門院には六皇子、六皇女があつたが、その御教育には大に意を用ゐられた。一條昭良が他家を嗣いでからも、

中納言局 ちゆうなごん

花園天皇の宮人。藤原氏。從三位頼任の女。典侍となり、別當典侍また中納言局と稱し、一皇女を生まれた。(皇朝經世錄、尊卑分脈)

中納言局 ちゆうなごん

櫻町中納言成範の女。平重衡これに通ひ、一子を儲けた。重衡、壽永三年一谷の戦に虜となり都に引かるゝや、預人土肥實平に乞うて、一夜、局を呼びて袂別し、「逢ふことも露の命も諸共に今宵ばかりや限りなるらん」と贈り、局は、「限りとて立別れなば露の身の君より先に消えぬべきかな」と和した。翌年、重衡、木津川畔に斬られ、重衡との間に生みたる五歳の男子、また蓮臺野にて失はるゝに及び、様を變へて尼となり、遂に難波の沖に身を投げて死んだ。年二十餘。(源平盛衰記、吾妻鏡)

中納言典侍 ちゆうなごん

藤原親子

中納言典侍 ちゆうなごん

藤原雅子

千代 ちよ

「一二三三三―二四三五」 俳人。素園、草風と號した。父は加賀松任の表具屋福増屋六左衛門(通稱六兵衛)、元祿十六年二月生れ、十六、七歳頃より既に俳諧を作つたと思はれる。「姫の式」(享保十一年)等によれば、金澤の俳人野角の妻紫仙女を先輩としてこれに親炙したらしい。享保六年の夏秋の際、露川支考が相前後して北越に行脚した折、二人はとも

に千代女に會してその奇才に驚き、支考は特に書を裁してこれを郷友に報じてゐる。彼女の作で初めて物に見えるのは、享保七年刊の『北國曲』に擧げられた「池の雪鴨あそべとて明てけり」の句である。露川が金澤に行つたのはこの前年の六月で、その折この句を聞き得て採録したものとするれば、五年の冬、千代女十八歳の吟となる。ついで、支考が大毫に報じた二句「行春の尾や其まに杜若」稻妻の裾をぬらすや水の上」及び『鶴坂集』（享保七年夏序）に採る「惜めども春は留らで啼く蛙」それ／＼に名乗て出る若葉哉」等が知られてゐる。この頃から、彼女の名は漸く喧傳され、稻妻の吟が『水の上』（享保九年）、『文月往來』（享保十一年）等にも採録されてゐるのを見ても、既に遠くの方まで聞えてゐたことが知られよう。享保十年には、小松の俳人宇中が「傳千代女二書」を作つて大に彼女を賞揚した。當時千代女二十三歳で、その書中に、「やゝ廿とせの春秋を経て、千代の翠に生先しるし。いまだ高砂の尾上に相生の名もあらずとかや」とあるのを信ぜればなほ未婚であるが、傳説には、享保五年四月金澤大衆免中組の足輕福岡彌八に嫁ぎ、六年七月一子彌市を生み、十一年七月夫に死別し、十二年二月彌市をも喪つたので、その年五月婚家を去つて郷里松任に歸つたといふ。しかし文獻的

には證すべきものがなく、「澁からか知らねど柿の初ちぎり」「蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら」「破る子のなくて障子の寒さかな」の吟も彼女の作とする確證はない。起きて見つ寢て見つ蚊帳の廣さかな」の句は訛傳である。未婚説をなすものもあるが（月華）、結婚したにしてもそれは極めて短期間であつたと思はれる。俳名が高くなるに従つて行脚の俳人の來訪も多く、享保十一年には魯九が來て唱和し、翌年には盧元坊も訪れてゐる。爾來美濃派の人々と最も風交多く、雜髮（十三年といふが、異説もある）後は、特に晝俳に悠遊し、金澤の珈涼女を友としたり、同郷のすゑ女に風雅を傳へたりした。晝は松村吳春に學んだ。また折々は各地に遊歴して諸好士との交を重ね、寶曆五年の頃には素園と號し、遂に十三年には既白によつて『千代尼句集』が撰せられ、明和八年更に續集『松の聲』が編まれるなど、一世の聲望を擅にした。かくて安永四年九月八日、月も見て我は此世をかしく哉」の辭世を残して終つた。年七十三（白雉が明和六年尋ねて會つた時の手紙には六十九とあり、それに從へば享年七十五）。その名聲は芭蕉に比肩するものがあるが、その實は名に比してはやゝ虚しいことを否むことは出来ない。その名聲は、最も人口に膾炙する「朝顔に釣瓶とられて貰ひ水」や、「百生や墓一

すぢの心より」等の句のごとく、俗受けのする句才に負ふものが多からう。しかし邊陲にゐて、生前既に傳説化され、歿後幾多の巷談術説を生んだ程高かつたことは俳諧史上異數のことに屬する。これほどの俳人でありながら、養子白鳥がやはり俳諧を嗜み、すゑ女が紫園と號してやゝ知られる外には彼女の門流といふものはない。（千代尼句集、松の聲、女流文藝全集）

月の出や石に出てなくきりぎりす

明月や行つても行つても餘所の空

涼しさやはだかに近き茶の木畑

蝶は夢の名残分入る花野かな

思ひ忘れ思ひ出す日ぞ春の鹿

千代

上 土佐光久

張子福子

萬葉の歌人。天平二年正月十三日、太宰

帥大伴旅人の家の梅花の宴に列つて作つた歌が見える。梅の花咲きて散りなば櫻花つぎて咲くべくなりにてあらずや」。

長昌院

阿保良方

長勝院

阿萬方

長樂門院

後二條天皇の中

ちよーちよの

宮。藤原忻子。太政大臣徳大寺公孝の女。御母は内大臣徳大寺公親の女從三位喜子。弘安六年誕生、後宇多天皇の御猶子となり、後二條天皇が位に即かれた翌年の正安四年二月從三位に叙せられ、同八月二十二日入内して女御となつた（二十歳）。翌嘉元元年九月二十四日立ちて中宮となり、芳譽があつた。公孝の家は未だかつて后妃を出したことがなかつたので、ここに至つて人皆これを榮とした。三年七月公孝薨じ、後二年を経て徳治三年八月には天皇が御惱によつて崩御せられたので、中宮は宮中を出て第に就き、閏八月出家して尼となられた。法名を眞實覺と稱し、花園天皇の延慶三年十二月十九日長樂門院の號を進められた。正平七年二月一日崩、御年七十。（増鏡、女院小傳）

直子女王

齋院。文徳天皇の皇子惟彥親王の女。宇

多天皇の寛平元年三月賀茂齋院となられた。退下の年不詳。

千代はじめ

狂歌師。南部藩士加島七

五郎の妻。秋長堂河井物築に學び、千代はじめ女、秋踊庵と號した。文政七年七月十九日江戸で歿した。享年不詳。麻布善福寺に葬り、涼池院鏡譽知月妙圓大姉といふ。（古今狂歌人物誌、狂歌人名辭書）

通陽門院

藤原嚴子。内大臣三條公忠の女。正平六年誕生、建徳二年三月後圓融天皇がなほ皇太子の時その宮に入り、上臈局と稱し、後小松天皇及び珪子内親王を生まれた。後小松天皇の即位に及び、弘和三年十一月二十七日從二位を授けられ、明徳四年四月院の崩御に遭ひ、應永二年四月九日三宮に准ぜられ、同三年七月二十四日院號を通陽門院と進められた。同十三年十二月二十七日薨去、御年五十六。『後愚昧記』には、皇女を生まれた後、院より急に召されて、服飾整はず進御が遅れてゐるのを、院がお怒りになつて傷け給うたことなどが見えてゐる。(尊卑分脈、院號定部類記、後愚昧記、大日本史、大百科事典)

塚本くの子

「二四八七―二五五六」 實業家。近江神塚本里子

崎郡川並村、塚本又右衛の女、幼名をうたといひ、弘化三年二十歳にて同村塚本權右衛門に嫁し、一女いくを生んだ。權右衛門は陶器商を創め、甲信に行商し、後、江戸小網町に支店を設け、郷里と相應して商運を開き、くの子は郷里にあつて家を治める傍ら、産地に往復し、商品仕入の任に當つたが、文久二年夫は江戸で死んだので、いくに養子定吉(通稱平次郎)を迎へ、更に日本橋伊勢町に店舗を増設し、陶器の外、紙、荒物、太物等を手廣く取引し、經濟界の恐慌に乗じて、益、店運を隆盛ならしめた。然るに、平次郎も明治八年歿し、前後して、敏慧を稱せられた支配人萬助も死んで、忽ち百憂蟄集し、危ふく破産せんとしたが、よく難件を處置して事業を繼續した。十年西南の役に銀紙貨幣の相場が均衡を失し、物價暴落により再び悲運に會した時も、自ら支店に臨み、店務を見、十七年に至り、平三郎にこれを委ぬるまで刻苦勉強した。姑に事へること厚く、姑も彼女を信重し、その死する時には彼女に抱かれ、笑を含んで嘆したといふ。晩年は佛道に歸し、道歌などを書寫して兒孫に頌つたとして、二十九年七月二十六日七十歳で歿し、近江商人の主婦を代表するものといはれた。(近江商人)

塚本里子

「二五〇三―二五八八」 教育家。近江神崎

郡南五ヶ莊村川並の人、源三の妻。天保十四年八月六日生れた。幼時より學を好み、和歌、及び手藝裁縫等にすぐれ、夙に公共慈善の志深く、郷村の風教開發に盡くした。大正八年私財を投じて淡海女子實務學校(後、高等女學校)を創立し、女子教育の普及に努め、後、これを、顧問の下田歌子に委譲し、昭和三年一月四日歿した。年八十六。(大百科事典)

撞賢木嚴之御魂天疎向津姫命

「一二二二―一二二九」 狂歌師。別號春秋庵。通稱

照大御神の荒御魂の稱。神功皇后は仲哀天皇が神教に従ひ給はずして崩御あつたのを畏み、齋宮を小山田邑に造り、親ら神主となり、武内宿禰に命じて琴を弾かしめ、中臣烏賊津使主を審神者として、千繪、高繪を琴頭、琴尾に置き、祈請して曩に天皇に誨へ給うたのは、誰神なるかと問はせ給うたところ、七日七夜にいたりて、神すなはち答へて、神風の伊勢國度逢縣、拆鈴の五十鈴宮に居る神、名は、撞賢木嚴之御魂天疎向津姫命とあつた。皇后は直に此の神を祭り、熊襲を討ち、更に新羅を攻めて功を了へられた。然るに難波を指して歸らんとする時、御船が海中を廻つて進まないのので、務古水門に還つてこれを卜はれたところ、天照大御神は再び誨へて、わが荒御魂をば、須らく御心の廣田國に居らしむべし、而して山背根子が女葉山媛をして祭らしむべしとあつたので、こ

れを廣田に鎮祭せられた。本居宣長は「撞賢木は齋賢木にて伊豆の枕詞なり。神祭る賢木は忌清むるものなる故につよくなり。伊豆は清淨き意なり。天照大御神は伊邪那岐大神の御禊し給ひて、清まり坐る時に生れ出で坐せる故に、伊豆の御靈と申すなり。天疎向津姫と申すは、この國土より天日を仰ぎ瞻奉る意の御名なり」と説いてゐる。◎天照大御神(神祇辭典、古事記傳)

調伊企儺妻

「一二二二―一二二九」 徳川家康の前妻。今川義元の養

月花永女 「一二二二―一二二九」 徳川家康の前妻。今川義元の養女、實は關口親永の女。弘治二年家康は駿府の今川氏のとこ

築山殿

「一二二二―一二二九」 徳川家康の前妻。今川義元の養

女、實は關口親永の女。弘治二年家康は駿府の今川氏のとこ

に諱字を授け、またその女を與へた。永祿五年築山殿は、婦徳修まらざる故を以て伊勢に徙されたが、信康は私にこれを迎へて岡崎に置いた。然るに築山殿と信康の妻との間よからず、ともに相悪んだ。彼女は嘗て疾を得て甲斐の醫減慶の治療を受け、いつかこれを寵し、彼によつて武田氏に通じ、遂に大事を行ひ信康を立て、信長を討たんと謀るに至つたが、信康聽かず、信康の妻これを知つて信長に報じ、事顯はれて天正七年八月信康は二股に幽され、築山殿はその二十九日、小藪において失はれた。西東院に葬り、清池院潭月秋天といふ。信康また同年九月十五日死を賜うた。『徳川實紀』に、家康は野中重政に討手を命じ、重政已むを得ず夫人を討つて濱松に立歸り報告したのに、「女のことなればはからひ方も有べきを、心をさなくも討取りしか」といつて歎息したことが見えるのは、婦徳修らずとして離別した彼女に對してなほ愛著の念を絶たなかつたことがうかがはれる。母子の滅亡は、家康が信長に對し、社稷を保たんがためにここに及んだのである。(野史)

津久井磯子 ついくい 〔二四八九―二五七〇〕 關根紋太夫の次女。上野群馬郡青梨子村に生れ、江戸の水戸藩邸に仕へ、鎖鎌をよくした。二十四歳にて前橋の産科醫津久井文讓に嫁し、

土御門女院

つちみかどの

〔昭慶門院〕

土御門藤子

つちみか

將軍家茂夫人和宮の侍女。明治元年官

軍東下の際、宮の命を受け、徳川氏救解の歎願書を携へ、東海道先鋒總督橋本實梁に倚り、徳川氏救解の上意を陳述して使命を果した。(參照) 靜寛院 (靜寛宮御事録)

土屋茅淵

つちやま

〔三枝斐子〕

綱

つ

若狭の兒守子。同國三方郡西津

村小松原角左衛門の女。刀禰茂太夫の家に仕へてゐたが、明和六年六月十一日、主家の兒を負うて遊んでゐる中、偶々狼に襲はれた。彼女は突嗟に著物の裾を以て兒を蔽ひ隠して地上に倒れ、子供は助かつたが自らは狼のために噛まれて死んだ。年十四。領主酒井氏、憐賞して碑を西徳寺に建て、「忠烈綱女之墓」と銘し、葬祭三日、その父を召して田園の租調を免じた。(野史、近世時人傳)

津野媛

つのひめ

反正天皇の皇夫人。大宅臣の祖木事の子(記に

は丸邇之許基登臣の女とある)。天皇が河内國丹比の柴籬宮に即位せらるるや、その元年八月立ちて皇夫人となり、香火姫皇女、圓皇女を生まれた。皇族にあらざして皇夫人たる初例とせられる。天皇は在位僅に五年で崩御になつた。(日本書紀、歴朝神徳錄)

産婆となり、明治三年夫に死別したが、繼子一郎を助けて家道を衰へしめず、また群馬縣産婆會長として斯道に盡くしたところも多かつた。四十三年一月一日歿、年八十二。(墓誌)

津崎矩子

つさき

〔村岡局〕

津田梅子

つじた

〔二五二四―二五八九〕

教育家。初名むめ。外國奉行方勤務津田仙の二女。元治元年十二月生れた。明治四年、北海道開拓使のアメリカ留學少女募集に應じ、吉益亮子、上田貞子、山川捨松(後の大山捨松)、永井繁子(後の瓜生男爵夫人)等とともに、岩倉大使一行に加はり渡米し、十五年歸朝するや、都下女學校に勤め、傍ら、下田歌子に國語を學び、十九年華族女學校教授となつた。二十二年在職のまま再び渡米し、二十五年歸り、三十一年東京女子高等師範學校教授を兼ね、同年三たび外遊の途につき、歸來從六位に叙せられた。三十三年職を辭して麹町一番町に女子英學塾を起し、女子教育に精勵するとともに、『英學新報』の發行等に従ひ、女子の社會的地位の向上發展に盡くした。大正八年病のため熟長を退き、以後療養に力め、なほ公的活動を續けたが、昭和四年八月十六日鎌倉に歿した。年六十六。傳に『津田梅子』(吉川利一)がある。(婦人界三十五年、大百科事典)

土御門齋院

つちみかど

〔順子内親王〕

常子内親王

つねみかど

〔二三〇二―二三六二〕

後水尾天皇の皇女。御母は新廣義門院。寛永十九年三月誕生、絳宮と稱し、内親王となつた。寛文四年十一月權大納言藤原基照に降嫁し、家照を生まれた。元祿十五年八月薨、御年六十一。無上法院淨信香海と號し、大徳寺に葬つた。(野史)

經信卿母

つねのぼき

〔源經信卿母〕

菟夫羅媛

うすらひめ

仲哀紀八年條に、天皇能襲討平のため筑紫

に行幸、崗縣主の祖熊鷹これを奉迎し、「既にして海路を導きまつりて、山鹿岬より廻りて崗浦(前)に入りませす。水門に到りて御船進くことを得ず。則ち熊鷹に問ひて曰はく、朕聞く、汝熊鷹は明き心有りて以て參來けり。何ぞ船の進かざる。熊鷹奏して曰はく、御船進くことを得ざる所以は、これ臣が罪に非ず。この浦の口に男女二神あり。男神をば大食主と曰ひ、女神を菟夫羅媛と曰ふ。必にこの神の心かたまをす。天皇則ち禱祈みたまふ。挾抄者倭國の菟田の人伊賀彦を以て祝と爲て祭らしめたまふ。則ち船進くことを得たり。」と見えてゐる。(日本書紀)

津布良比女命

つぶりらひめ

津布良比古命とともに皇大神宮末

社津布良神社の祭神。大水神の子。中世神宮よりの祭祀絶え、所在の村民が氏神として祀つたことがあるといふ。蓋し、こ

の地の主宰神である。(神祇辭典)

抓津姫命

つまつひめ

素戔鳴尊の女。兄神の五十猛命、姉神大

屋津姫命とともに、父神の命を受けて樹藝を先づ筑紫より始め、諸國に分布し、紀伊に到つて完成せられた。ツマは屋を造る料として木取つた材をいひ、即ちその神徳によつて木に縁ある名を負はれたのである。官幣中社伊太祁曾神社の境内に大屋都比賣神社、抓津姫神社があるが、これは延喜の制、名神大社に列し、月次、新嘗の幣に預つた大屋都比賣、都麻都比賣神社に外ならぬ。(古事記傳、日本書紀)

津守島子

つしまこ

待賢門院の女房。「待賢門院」の項を見よ。

婉子女王

にやわらう

〔一六三二—一六五八〕花山天皇の女御。

爲平親王の女。寛和元年宮に入つて女御となり、初め甚だ寵幸せられたが、既にして漸く疎んぜられた。女御祇子の薨後また召し見んとしたが、女御は病に託して進御しなかつた。天皇の遜位の後、藤原實資に適し、長徳四年七月二十七歳で空しくなられた。(皇胤紹運録、榮華物語、大鏡、小右記、日本紀略)

頼那美神

のらなみ

頼那藝神とともに、速秋津日子、速秋津

貫之女

のむすめ

〔古事記傳〕

紀内侍

のつらね

〔古事記傳〕

鶴久子

つるこ

〔一二五六〇〕歌人。幕臣蜂屋光世の妻。夫の

歿後、その號の鶴園により鶴氏を稱した。山田常典の門に學び、和歌をよくし、これを以て宮内省に仕へ、また、本所松井町の家にて歌道を教へた。明治三十六歌撰に擧げられる。明治三十三年十二月十一日歿、深川淨心寺に葬つた。(婦人文庫)

あしたづの千代のかげ見る池水は浪のたちるものどけかり
けり 鶴久子

て

貞閑

ていけん

〔佐香保〕

貞閑

ていけん

〔捨〕

提子内親王

ていしなわらう

〔一六六三—一七〇八〕三條天皇の皇

女。皇后藤原成子の御所生。寛弘八年内親王となり、萬壽三年關白藤原教通に降嫁せられた。長久二年二品に叙せられ、永承三年四十六歳で薨せられた。(皇胤紹運録、日本紀略、扶桑略

釣殿宮

つりどののみや

〔緩子内親王〕

鶴

つる

孝女。越前足羽郡濱里の人、長右衛門の女。傭作の老

父を助け、病母を勞はり、また嫁期の過ぐるを知らなかつたが、母は彼女の孝養を感謝して遂に世を去つた。事聞え、天明中、藩侯より米若干俵を賞與せられた。(春華文秘)

鶴賀鶴吉

つるが

〔二四一—二四八四〕

新内節の祖鶴賀若

狭椽の長女。本名こんといひ、父に續いて名手の聞えあり、その歿後二代を相續した。後、和國と改め、文政十年四月二十六日歿、年七十一。また父に隨つて狂歌を好み、父の墓碑に「巢立せし昔ぞうれし親鶴の手向に唱ふほうほ法華經」と刻した。(聲曲類纂)

鶴賀鶴吉

つるが

初代鶴吉(こん)の女。本名つち。母の生

存中、家元三代を繼承したと傳へる。生歿不詳。一説には、初代鶴吉の妹ぎんが家元三代を繼いだとも(日本文藝大辭典)いふ。(聲曲類纂)

鶴賀鶴吉

つるが

〔一二五八〇〕

鶴賀祖元の妻。三代鶴吉を

稱した。祖元は明治三十年、中絶した鶴賀派の家元を再興して六代を相續した人、彼女は夫の歿後、七代の家元となり、大正六年長男に二代鶴賀若狭椽を襲名せしめてそれを譲り、同九年十二月一日歿した。(江戸時代音楽通解)

提子内親王

ていしなわらう

〔都芳門院〕

諦子内親王

ていしなわらう

〔明義門院〕

禎子内親王

ていしなわらう

〔陽明門院〕

亭子女御

ていしの

淳和天皇の女御。永原氏。宮に入りて寵

があつた。嵯峨天皇は尙侍百濟慶命御所生の源定を淳和天皇の養子となさしめられたが、淳和天皇は女御を以てこれが母となした。諱不詳、亭子女御と稱せられた。(三代實錄)

貞心

ていしん

〔二四五八—二五三二〕

歌人。越後長岡藩士奥村氏

の女。北魚沼郡小出郷の醫師に嫁したが幾くもなく死別し、深く佛道に歸した。二十九歳のとき良寛(時に七十歳)を訪れて、その門人となつたが、兩者の間は神祕的の愛情によつて固く繋がれた。「うたやよまむ」の貞心尼の歌や、「いざさらばわれはかへらむ君はここにいやすくいねよ早あすにせむ」の良寛の歌などにその消息を解することができる。「蓮の露」(天保六年成る)は良寛の歿後、彼女の編著するところである。良寛の肖像として傳へられるものも貞心尼の畫いたものに基づく。明治五年二月十日歿、年七十五。傳に「貞心と千代尼と蓮月」(相馬御風)がある。(北越名流遺芳)

うたやよまむ手まりやつかむ野にやいでむ君がまに／＼な

して遊ばむ
適稽女郎 てきけいごらう

百濟池津媛

貞心尼

出口なを でぐちなを (二四九六―二五七八) 皇道大本教祖。丹波福知山町桐村五郎三郎の長女。天保七年十二月十六日生れ、後、綾部町字本宮の親戚出口家に養女となり、二十歳の時大工政五郎を婿とし、三男五女を生んだ。夫は酒飲家で、加へて家貧しく具さに艱苦を嘗めた。明治十八年五十歳の時夫に死別したが、二十五年より神憑り状態に入り、種々の豫言的言辭をなすに至つた。ために警察署に連行され、親族に托して幽せしめられたが、七十五日にして幽居を出づるや、綾部金光教會所に迎へられ、幾くもなく獨立して裏町の一土蔵を借りて住み、自ら信ずる良の金神を奉齋し、漸く信者をおつめて行つた。偶々三十二年丹波、南桑田郡曾我村の農上田吉松の長男喜三郎(出口王仁三郎)來り投じ、彼女が假名を以て認めつゝあつた『お筆先』を改作して、教義を整へ、鎮魂歸神の術を行ひ、名けて皇道大本と稱し、大日本修齋會を組織して、大に宣傳するや、忽ち一大宗團をなすに至つた。大正七年十一月六日歿、年八十三。五女澄子二代教主となり、その婿王仁三郎は聖師と稱して教勢擴張中、同十年教旨不敬に互るものがあつて法廷に糾弾せられたが、大赦により釋放せ

られ、昭和十年再び摘發されて、翌十一年遂に皇道大本は解散を命ぜられた。(出口直子傳、大本教の解剖)

テクル (一二二七九) 初期の基督教信者。橋本太兵衛の妻。元和五年、京都所司代板倉勝重に捕へられ、十月七日洛外に於て火刑に處せられた五十三名中の一人。その中には、彼女の夫太兵衛をはじめ、十二歳を頭に、十一、八、六、三歳の五子があり、夫とともにこれを宥め賺しつゝ、從容として五子の火焔中に死するを目撃したる後、靜に殉教を讀へて瞑目したといひ、『日本西教史』には、教會草創の際に死んだ聖女フェリシテー・シンホロスに比してある。(日本基督教史)

手兒 てこ 『新歌林良材集』所引『駿河風土記』逸文に、「するがの國の風土記に云。廬原郡不來見の濱に妻をおきてかよう神あり。其神つねに岩木の山より越て來るに、かの山にあらぶの神の道さまたぐる神有りて、さへぎりて不通過。件の神あらざる間をうかゞひてかよふ。かるがゆるに來る事かたし。女神は男神を待とて、岩木の山の此方にいたりてよるゝ待に、待得る事なければ、男神の名よびてさげぶ。よりてそこを名付て手兒のよび坂とす。てこは東俗の詞に、女をてこといふ。田子の浦も、手子の浦なり。東路のてこのよび坂こえかねて、山にかねむもやどりはなしに。東路のてこのよびさ

か越ていなば、あれは戀むな後は相ぬとも。上の二首は、かの男神の歌といへり。女神の歌にはく、岩木山ただ越えきませいほざきの、こぬしの濱に我たちまたむ云々。」とある。
(駿河風土記逸文)

豊島采女 としまのうねめ

萬葉の歌人。天平十年八月二十日右大臣

橘家の宴遊會で詠んだ「もゝしきの大宮人は今日もかも暇を無みと里に行かざらむ」橘の本に道履む八衢に物をぞ思ふ人に知られず」の二首が卷六に收められてある。前者は「櫻かざして今日も暮しつ」の歌に、後者は卷二の三方沙彌の歌、「橘のかげふむ道の八衢に物をぞ思ふ妹に逢はず」に似てある。橘の歌は、豊島采女が三方沙彌のを口吟んだのであらうと『略解』にはいつてある。(萬葉集)

手塚増子 てづかますこ

烈婦。文化十一年江

戸に生れ、宇都宮手塚藤兵衛に嫁し、操子を生んだ。和漢の學に通じ、歌文をよくした。多くの志士を庇護し、養子強介(兒島草臣)を國事に盡力せしめたが、坂下門外の事件に關し強介の下獄するや、文久二年夫の代理として江戸の法廷に出で、幕吏の訊問に應答し、退廷後、俄に發病して旅舎に歿した。年四十九。(大百科事典)

手摩乳神 てまぢのうちかみ

手名椎神。出雲國神大山津見神の子脚摩

乳神の妻神。二神、出雲の簸の川上にあつたが、八頭大蛇のために七子女を奪はれ、またまさに末女奇稻田姫を奪はれんとして、悲慟する時、素盞鳴尊これを救ひ、奇稻田姫を妃となし、須賀宮を作つて住み給うた。二神をその宮の司長となし、稻田宮主神の名を賜うた。『古事記傳』に「脚摩乳、手摩乳は、奇稻田姫命を撫愛しつる由の名にて、足撫豆知、手撫豆知のつゞまりたるなり。されば是は稻田姫命の、素盞鳴尊の御妃になり給ひて後に御親を思ひて稱へられつるなり。」とある。(古事記傳)

寺崎紫白 てらさきむらさき

紫白

照子内親王 てるこみちのぎみ (二二八五―二二二二) 後水尾天皇の皇女。東福門院の御所生。寛永二年九月誕生、二宮と稱し、同十三年十一月權大納言藤原尙嗣に降嫁、翌年内親王の宣下があつた。慶安四年五月薨去、御年二十七。光明心院寂照尊常と諡し、東福寺に葬つた。(野史)

照子女王 てるこみちのぎみ

朱雀天皇の女御。醍醐天皇

の皇子保明親王(文獻太子)の女。御母は左大臣藤原時平の女。初め正四位下を授けられ、承平七年二月女御となり、王女御と稱せられた。朱雀天皇は御年八歳を以て踐祚あり、藤原忠平攝政となつたが、時に政綱漸く弛み、地方には豪族興

起の情勢を生じた。天慶二年には平將門、藤原純友の叛を見るに至り、天皇は兵を遣はしてこれを討たしめ、幾くもなく亂は平いだだが、これよりして武士の勢力加はり、世態一變の兆は實にここに萌した。天皇は寛仁を尙び、服御常膳を減じて、下民に仁惠を垂れさせられたが、天慶九年四月村上天皇に讓位ありて朱雀院に移り、太上天皇となり、天曆六年八月三十歳を以て崩ぜられた。これより先、天曆四年には昌子内親王(冷泉天皇の皇臣)の生誕あり、女御はその五月從三位に進められ、天皇と年を同じくして薨せられた。(日本紀略、一代要記、榮華物語、歴朝神徳錄)

出羽辨

歌人。加賀守平秀信の女。上東門院彰子に仕へ、後一條天皇の乳母となつた。『呂保殿歌合日記』の著があり、作歌とともに『出羽辨家』に收められてゐる。『榮華物語』の終りの方で活躍してゐるので、契沖、土肥經平等によつて『榮華物語』下編の作者に擬せられ、『日本文學大辭典』もこれを推定してゐる。(參照 赤染衛門 (出羽辨家))

田

「一二四三九」 俳人。江戸の人谷口樓川の妻。安永三年の『かぐみ種』によれば、その頃神田柳原土手下に住み、田

出羽辨

女は眉齋と號し、夫の樓川、養子の獅子眠(鶏口)とともに一家三人點者として立つてゐる。生家、生年等不明であるが、若くて俳諧に入り、また筆をよくした。その狎を愛し、猫を愛した文によつて實子のない淋しさが窺はれる。安永の初め頃軽い中風に罹り、八年再發、その七月二十八日歿した。鶏口が一家の稿を編んだ『海山』四冊には、「筆の卷」を樓川の句集とし、『硯の卷』に彼女の句と文とを輯め、これに鶏口が書いた終焉記を添へてゐる。墓所は、淺草本願寺中善照院。(海山)

天久院

池田勝入の女。輝政の妹。備中成羽の城主(後、攝津三田)山崎家盛の妻。『藩翰譜』に、「この妻極めてみめわろく、手足さへふつつかに、力は普通の人には遙に超えたりけり。されば年頃夫婦の間睦からず、されど怨むる氣色もなし。大阪の奉行等が軍起りし時、(略中)大阪に在合ふ人々の質參らせよとありしかば、家盛は妻を參らせんとするに、妻は夫に近づきて無手と捕へ、護刀を引抜て心元に差當て、(略中)わらはつれなき人の爲に命うしなはんと覺えず、猶もわらはに參れと思し給ふならば、わらはも亦思ふ所あり、いかにやいかにと云はれて、家盛大に恐れ、宣ふ所ことわりこそ侍れ、我過ちをば免し給へ、此上は如何で參らせ侍る

べきといふ。(略中)今はかく顯して言ひ出でなん、後再びまみえ參らせんとも思はずとて、供する女二三人召具し、傳馬かりて打乗り、三河國さして兄輝政の城に下り、やがて尼になりて天久院と云ふ。」と見える。(藩翰譜)

恬子内親王

「一五六三」 齋宮。文德天皇の皇女。更衣紀靜子の御腹で、清和天皇の貞觀元年十月五日伊勢齋宮となり、三年伊勢に赴き、十八年天皇の讓位により退下、延喜三年六月薨せられた。(三代實錄、一代要記)

天樹院

忠の女。名は、千姫。母は淀君の季妹崇源院。慶長八年七月七歳にして、秀頼に嫁した。時に、秀頼十一歳、勿論、政略結婚である。「天樹院殿入興ありけれども、關東方をきつかいがりて、秀頼一度も興へ入らず」など傳へられてゐる。大坂城が陥落したのは元和元年五月六日であるが、家康は千姫の身の上を氣づかひ、麾下の者に告げて、これを救出したものは、姫を興へ、封一萬石を給するといつた。阪崎出羽守は家康の麾下に屬し、五千石を領し、容貌極めて醜惡、色黒く膚肥にして野様であつたが、勇剛衆に勝れた士であつたから、これを聞くや進んでこの大任を引受け、槍を揮つて敵を排し、炎烟を冒して城中に入り、豊臣の士赤井源左衛門を

殺して寢殿に達し、將に自刃せんとする千姫を發見して、共に城を脱出した。千姫脱出については多くの異説があつて、徳富猪一郎氏は『駿府記』『慶長見聞書』等を引いて、それが大野治長等の計ひによる秀頼母子命乞の方便であつたとし、福本日南の「千姫」も同説、『柳營婦女傳系』には、「大坂落城の時、朱三矢倉の精藏三間に五間の所を三つに仕切、兩方に秀頼公と淀殿、天樹院とを分ち置き、中の仕切に女中を籠置、此時淀殿は天樹院殿の御振袖を自ら膝下に敷居て、盾に取り給ふ心にて、少しも離さず御座す處を、刑部卿の局才覺にて、女中の内より唯今秀頼公御生害の様に、秀頼公の名を呼らせしかば、淀殿驚き周章、天樹院を思はず離し、秀頼の方へ駈入らる。其間に刑部卿の局、御側女中僅二三人計にて此場を御立退、岡山の御陣所へ遁入給ふ。」とある。江戸歸還後の千姫は、阪崎を嫌ひ、隅田川で見染めた美男の本多忠刻に嫁することになり、阪崎は劇的な憤死を遂げた。これにも種々の異説があつて、阪崎は家の子郎黨を集めて、入興の途中を擁して千姫を奪取せんと誓めくところを、幕府の内命を受けた家老の阪崎勘兵衛のために庫中に閉籠められたとも、酒井讃岐守から命ぜられて隣家の柳生但馬守が詐つて阪崎を酒席に招き、忽ちこれを捕へさせたともいふが、何れにして

も家康及び千姫を呪つて自盡したので、千姫は元和二年七月六日には本郷森川町の美濃守邸に入つたが、三年にして忠刻とも死別した。秀忠は千姫の家老吉田修理介に命じて、その三番町の邸に館を建てしめ、賄料一萬石を給した。人呼んでこれを吉田御殿といつた。ここを通つて呼び込まれた多くの男が再び外へ出たものはなかつたなどいふ傳説は、何も確實な史料があるのではない。寛文六年二月二日、享年七十歳で終つたといふが、これらも確證はない。(柳齋婦女傳系、異説日本史)

天璋院 てんしやういん 「二四九六一二五四三」 徳川家定の繼室。初名、敬姫。後、篤姫といつた。島津齊彬の養女、實は薩藩の支族安藝守島津忠剛の女。天保七年十二月十九日生れた(陽曆八年一月二十六日)。安政元年更に近衛忠熙の養女となり、三年十一月十一日千代田城に入興、家定三人目の夫人となつた。時に年二十一。『徳川慶喜公傳』には、「松平薩摩守(○齊)は、養女篤姫を更に近衛右大臣の養女とし、之を將軍に配せんとして力を盡せるが、其幕府と結婚の目的の一つは、夫人をして親しく將軍家に説かしめ、内より援引して、公(○慶)を西城に入れんとするにありといへり」とあり、これはその他の文獻にも見えてゐて、多分事實であらう。然るに同五年

七月六日には早くも家定薨じ、この結婚は何等の實を結ぶことなくして終つた。かくて家定の後は、紀藩より家茂が入つて繼ぎ、夫人は九月一日落飾して天璋院と稱し、十一月從三位に叙せられた。家茂には和宮の降嫁があつて、お仲のよからぬことなども傳へられたが、大奥では天璋院つきの女中は二百六十人、和宮つきは二百八十人からあつて、それらが自然一橋黨と紀州黨に分れて、軋轢してゐたのである。『海舟餘波』に次の文がある。「和宮と天璋院とは初め大層仲が悪かつた。會ひなざる迄はネー、お附のせみだよ。初め和宮が入らした時に御土産の包み紙に、天璋院えとあつたさうな。いくら上様でも、徳川家に入らしては姑だ、書すての法はないといつて、お附が不平を言つたさうな。夫であつちでもすればこつちでもすると云ふやうに競つて、それはひどかつたよ。だが、後に私の家に御一處に入らした時に、配膳が出てから兩方でお上りなさらん、大變だと言つて女が来て困るから、どうしたと言ふと、兩方でお給仕をしやうとして睨みあひだと言ふのさ、夫で私が出て行つて、「あなた方はどう云ふものです」と云ふと互に「私がお給仕をします筈です、夫にあなたから爲さらうと爲さいますから」と言ふのさ。私は笑ふてネーなんです、そんな事ですか、夫れなら良いことがありま

すと言つてネー、お櫃を二つ出させて、一つ宛側に置いて、サ一天璋院様のは和宮様が爲さいまし、和宮様のは天璋院様が爲さいまし、之で喧嘩はあるまいと言つて、大笑になつたネー、安芳は惻口ものですと言つて大笑になつたよ、夫から歸りには一ツ馬車で歸られたが、其後は大變な仲よしさ、何事でも互に相談で萬事一つだつたよ。しかし海舟はまた「天璋院殿の人となりは、貞婦といはうか、烈婦と申さうか、實に類稀なる御方なりき」といつてゐる。家茂が慶應二年七月長州再征の半ばに死んで、慶喜は十五代の將軍を相續したが、時運は既に徳川氏に利せず、明治元年四月には江戸城を明渡すこととなつて、天璋院は家定の生母本壽院とともに一橋邸に移居した。それからは從三位の位階も剝かれ、當主家達の教育に専念、節儉して徳川家の維持に苦心したといふ。その後位記も復せられ、明治十六年十一月中風に冒され、二十日千駄ヶ谷の邸に薨じた。十二月五日東叡山溫恭院の塋域に葬つた。(中央史壇、叢誌、郷土婦人の輝)

田捨 たすけ 〇捨

傳通院 でんつういん 「二二八八一二二六二〇」 徳川家康の母。名は大。荊屋城主水野忠政の女。天文十年徳川廣忠に嫁し、翌十一年十二月二十六日、家康を三河岡崎城に生んだ。然るに、廣忠

は駿河の今川氏に款を通じて社稷を保つてゐたが、十二年水野忠政歿し、その子信元が尾張の織田氏に附くや、今川氏を憚つて水野氏と婚を斷つた。廣忠の家人阿部、金田等が彼女を送つて荊屋と岡崎の知行境に到つた時、夫人は信元は短氣の人なれば荊屋に行く時は汝等みな殺さるべしといひ、これを歸らしめた。果して荊屋よりはこれを討取らんとして來つたが、既に阿部等は林中に入つて難を避け、永く夫人の分別を徳としたといふ(續尾三善行録)。大は後、久松俊勝に再嫁して三男四女を生んだ。男は康元、康俊、定勝で、長女は松平忠正に、次は松平康長に、次は松平家清に嫁し、四女は天した。永祿三年五月、家康は阿古耶館(俊勝の菜邑)に入り、夫人及び俊勝を見、三男子を約して昆弟とし、悉く族を贈つて松平氏を名乗らしめた。天正十二年家康、秀吉のために定勝を入れんとするや、「彼が兄源三郎(○康) 嚮に駿に質たり、武田氏の爲めに奪はれ、深雪を凌いで脱歸す。足指皆墮ち支體不具世に交るを得ず。今復た彼の兒を上國に遣る吾忍びざる所也。」(野史) と歎き、家康は代つて秀康を遣つて止んだ。慶長七年八月二十九日伏見に薨じた。年七十五。傳通院譽光岳智香と謚し、江戸小石川宗慶寺に葬り、更に寺號を傳通院と號した。後、從一位を追贈せられた。(野史、將軍外戚傳)

丹墀池子の御所生。貞觀二年閏十月薨せられた。廢朝三日であつた。(三代實錄、一件要記)

唐人お吉 たうじん おまきち 「二五〇一―二五五〇」 洋妾。本名、齋藤きち。天保十二年十一月十日伊豆下田坂下町、市兵衛の二女として生れた。幼時より母の實家遠藤與一の家で育てられ、七歳弘仁四年六月、下田新田町の村山せんの養女となつた。せんは十二歳の時孤兒となり、本所の御舟奉行向井將監邸へ子守として傭はれ、二十餘年の奉公の後、若干の養老金を得て生れ故郷に歸り、附近の女子供に讀み書き、琴三味線を教へてゐた。お吉は才があつて、その肉聲が美しかったといふ。安政元年十四歳にして自儘つとめの藝者となり、忽ち下田の人氣を集めた。三年七月米國總領事ハリスが來朝して、柿崎村玉泉寺に入るや、翌四年五月お吉は町奉行等の斡旋により、その侍妾となつた。ハリスと同行した通譯ヒュースケンにはお福といふのが選ばれた。お吉の仕度金二十五兩、年手當金百二十兩で、お福は仕度金二十兩、年手當金九十兩であつた。時にハリス五十三歳、お吉十七歳。お吉等は駕籠に乗つて、下田から通つた。それが評判となつて、ラシャメン／＼と騒がれたので、一週間後には駕籠をやめて、日暮れに來て朝早く歸り、日中にはゐないことにしたといふ。二人の休息所は

と

洞院太后 たういん 〇班子女王

登華殿尙侍 とうくわでん 〇藤原登子

藤式部 とうしきぶ 〇紫式部

賜子内親王 たうしんねい また賜子にも作る。後二條天皇の第

四皇女。宮人平氏(參議信輔の女)の御腹で、天皇は早く崩御になつた。『新後拾遺集』に、「後二條院御歌どもの奥に、我が身世にならむ後は哀れとも誰かいはまの水莖の跡とあそばしたるを見て」と題詞があつて、「今は世に我より外はあはれとも誰水莖の跡を忍ばむ」と内親王の追懷の歌を載せてゐる。(參閱 瓊子内親王 (皇胤紹運録、新後拾遺集))

風ふけば眞野の入江による波ををばなにかけてつゆぞみだるゝ

賜子内親王

統子内親王 とうしんねい 〇上西門院

同子内親王 どうしんねい 「一五二〇」 淳和天皇の皇女。宮人

清左衛門といふ家であつた。お吉は他郷に煩勞と病氣とに悩むハリスを心から看護した。ハリスを殊に喜ばしたのは牛乳であつた。お吉は馬込の懇意な百姓を妙薬を鍊ると欺いて、これをハリスに與へた。前に明鳥のお吉とか、新内お吉とかいはれて嬌名が高かつた彼女は、いよいよ人の口の端に上つて、後には唐人お吉と綽名があつた。聞くに堪へないやうな悪口雑言をきくことも珍しくはなかつた。そのためか、お吉は漸く酒量を深め、酒の力を借りてそれらの鬱憤をはらすために、常識外の事も敢てするやうになつた。六年六月、ハリスは公使となつて上京し、麻布の善福寺を公使館とし、その九月には下田の領事館を閉鎖した。その後のお吉は、莫大の恩金を貰つて、放縱な生活を送り、文久二年二十二歳の時再び藝者に返り、後には下田を去つて横濱に行つた。そこで幼馴染の大工鶴松といふのに邂逅し、横濱元町に世帯を持ち、明治四年相携へて下田に歸つた。然るに、同九年三十六歳の時また家出し、三島の藝者となつた。鶴松(當時又五郎)は後妻を貰つたが、間もなく頓死した。十五年には下田大工町に安直樓を開いたが、下田始めての妓樓といふので非常に繁昌した。しかしこの頃より酒亂が募つて、十九年には安直樓も破産し、翌二十年の正月、大雪の夜に俄に半身不隨に陥つた

が、二十三年三月二十三日、遂にその身を稻生澤川に投じて死んだ。年五十。遺骸は、下田廣岡町寶福寺の無縁墓に埋められたが、後、お吉研究家村松春水氏等によつて改葬が行はれ、五輪塔が立てられた。ハリスは文久元年十一月病を以て賜暇を乞ひ、歸國後はニューヨークに隠栖して風月自適の晩年を送つた。お吉は明治十三年甥勘藏が横濱で客死した時、その遺骨を神奈川本覺寺で供養した際、恰も三回忌に當るハリスのためにも、塔婆をたてて懇に供養したといふ。(異説日本史)

十市皇女 じゆしひめみこ 「一三三八」 弘文天皇の妃。天武天皇の

皇女。額田王の御所生。容姿秀麗であつた。弘文天皇は、天智天皇と同じく、近江の大津宮に世を知しめしたが、壬申の役に遽に崩御せられ、在位が極めて短かつたので、立后の儀もなかつた。御腹には葛野皇子がある。壬申の亂は、天智天皇の崩後に起つた皇統上の争亂である。初め天智天皇は、大友皇子(弘文天皇)の文武の才を愛して、これを皇太子とせんとの意志があつたが、皇弟大海人皇子はすでに壯年で衆望があつたので、皇太弟とせられた。天皇大漸に及び、後事を大海人皇子に託するや、皇子は天皇の意を察して、俄に請うて東宮を辭し剃髪して吉野に入られたので、天皇は大友皇子を